
紅御伽草子

上条 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅御伽草子

【Nコード】

N7331Y

【作者名】

上条 蓮

【あらすじ】

悠久の都、計都。

妖と人との争いは絶えて久しいが、「月蝕みの期」を迎えた都には魔物が頻繁に姿を現すようになっていた。

そんな時、都を護る陰陽師の娘——緋雨は、妖の住まう山奥である男に出逢った。

※同名の小説を別サイトでも公開中です。こちらは一部改訂版となります。

序章

はらり、はらり。

生命としての役目を終えようとする薄紅の舞姬たちが、名残を惜しむかのごとく思い思いに宙を舞う。そのささやかな演舞場には、ただ一人の観客が静かに座していた。

時折、舞姬たちが戯れに触れていく漆黒の長い髪は、柔らかな陽光のもと絹糸のように艶めいている。その黒髪に彩られた肌は日に焼けることを知らず、身を包む紅の装束が一層その白さを際立たせた。時を刻むのを忘れたように微動だにしないその横顔は、まだ少女の域を出切れずにいる。だが、冴え冴えしいその雰囲気は朝露に濡れた野花の蕾に似て、どこか凛と大人びて美しい。

少女緋雨^{ひめ}は、伏せていた目蓋を薄く開いた。僅かにのぞいた黒曜の瞳が色鮮やかな世界を映し出す。

無心という泉に身を浸すにはその光景はいささか魅惑的過ぎるようだ。

そう察した緋雨は唇にほんの僅かな弧を描くと、あえて身を委ねることにした。そしてゆっくりとした動作で眼下に両の手を伸ばす。夕風の名を冠する愛刀が、その無機質な感触と共にしっくりと手に馴染むのを確認して、視界の端に舞姬たちの姿を捉えた。

刹那。空を斬る鋭い音を奏で、銀色の軌跡が一閃する。

はらり、はらり。

その残像が消えると、また何事もなかったかのように、舞姬たちは演舞する。だが、地に堕ちる間際にその身を二つに分かたれて、優美なる薄紅の舞姬たちは生涯最後の舞を終えた。途端にただの花弁でしかなくなったそれらに喝采はなく、代わりに薄刃の刀が鞘に納まる小さな金属音が、せめてもの弔いのように静かに鳴った。

手にしたばかりの刀を再び元の位置に戻しかけ、緋雨はふと清涼な大気に混じる僅かな違和感を感じ取り、その手を止める。そして、すぐさま立ち上がると左手に刀を握りなおし駆け出した。その後姿を見送るように、緋雨の肩から滑り落ちた一枚の花弁がひらりと舞い散った。

紅のくれない一門。

都を護る陰陽おんみょうごけ伍家の一つであるその屋敷は、都の最南端に位置する。手入れの行き届いた庭園には、心待ちにした季節の到来に、花々が爛漫と咲き誇っていた。誰もが気付かぬうちに歩みを止め見入ってしまいうような光景だが、長い髪を風になびかせ走る緋雨にはまったく無意味なようだ。緋雨は庭園を突っ切るようにして走り抜けると、屋敷の正面門から程近い厩へと駆け込んだ。干草を食み身を休めていた名馬たちが、突然の闖入者にいつせいに首を上げる。そして最奥に繋がれた一頭の青毛の馬が、主の到来に首を振って小さく嘶いた。

「出るぞ黒紅くろべに」

緋雨は声をかけながら、前足で地面を掻く愛馬の綱を手早く外した。そのままひらりと背に跨ると、軽く首を撫でて手綱を取り、わき腹を強く蹴る。前足を振り上げてひとしきり大きく嘶いた黒紅は、一瞬で厩から飛び出した。

嘶きに静寂を破られて、それまで欠伸をかみ殺していた門番たちは何事かと顔を見合わせる。だが、その答えが出るよりも早く地を叩く馬蹄の響きと共に青毛の馬が姿を現す。

「開門！」

突然のことで面食らって動けずにいる門番たちに、馬上から緋雨の鋭い一喝がとんだ。猛然とこちらに向かってくる緋雨の姿に、門番たちはやっと状況を理解し持ち場へと走る。屋敷を守る頑強な門を開閉するにはそれなりの人数と労力が必要だ。身をもってそれ知っている門番たちは、観音開きの門から巨大な門を数人がかりで片側だけ外した。そして出来得る限りの迅速さで、重い門を押し開く。同時に、全く勢いを殺すことなく馬体がすりぬけていった。

「襲撃だ、都に出る」

門番とすれ違い様に低く声を発し、緋雨はまた強く黒紅のわき腹を蹴る。無事の帰還を願う門番の声は、一段と速度を上げたその後姿に届くことはなかった。

都でも指折りの駿馬である黒紅の背で緋雨は意識を集中させた。そうすることで、先ほど感じ取った僅かな違和感の正体が想像と違わないと確信する。屋敷から離れるにつれ大気中に混じるその匂いは格段に強くなっていく。馴染みのある、だが決して慣れる事もない、鉄にも似た血の匂い。風に乗って流れてくるその源を瞬時に判断した緋雨は左半身にぐっと力を入れ、疾走する黒紅の手綱を強く引いて旋回した。

都の南西へと伸びる大路に入りしばし進むと、急激に景色が一変した。

ふだんは穏やかな川にも似た人々の流れが、今は恐怖という豪雨に煽られ、濁流となつて一気に押し寄せる。怒号と悲鳴が入り混じる中、人々は我先にとその場から遠ざかろうとしていた。そんな中を逆流していく緋雨は、黒紅の蹄が人々を蹴らぬよう最大限の注意

を払った。

――と。

視界の先に一人の幼子の姿が映った。この混乱ではぐれたのだろうか、母親の姿を探して泣きじゃくっている。だが、頼りない足取りで歩き回る幼子は、すぐに逃げ去っていく人々に突き飛ばされて蹴鞠のようにその場に転がった。

「坊やつ！」

痛みに幼子が精一杯の大きな泣き声をあげると、母親と思わしき女が幼子に駆け寄って抱きしめる。だが、ようやく見つけた我が子の姿に安堵した母親の表情は、次の瞬間には凍り付いていた。小さな我が子の肩越しに、近づいてくる異形の存在。母親は恐怖に息を詰まらせた。

緋雨は左手に両の手綱を寄せた。そして空いた右手を腰へ伸ばし一気に抜刀する。涼しげな音を奏でる銀色の刃を右手に引っさげ、緋雨は鎧あぶみに力を入れて立ち上がった。揺れる馬体から振り落とされぬように両足の均衡を保ちながら膝を低く落とす。母親が覆い隠すように幼子の体を掻き抱く。そのか細い背に異形の存在が飛び掛るより、ほんの一呼吸分早く緋雨は動いた。

折り曲げた膝が伸び上がる反動を使い跳躍する。身軽になった黒紅が通り過ぎるのを眼下に、緋雨は最も高い位置で刀を両の手に握りなおした。自らの肉体が地に着く事を欲し、その力に引かれる刹那、渾身の力で刀を降り下ろす。斬撃が生む瞬間的な風に髪をなぶられながら、衝撃を最小限に留める低い姿勢で着地した。

母親が恐る恐る顔を上げる。ほんの数瞬前まで恐怖の対象であったその場所に、今は緋雨の姿がある。

「……あつ」

状況を把握するまでに数秒を要し、母親は思わず声を漏らした。その声で肩越しに緋雨が振り返る。

「緋雨様！ 助けていただいて——」

「礼はいい」

上ずった感謝を短い言葉で制し、緋雨は視線を戻した。

「それよりも早く逃げないと、また同じ目にあう」

緋雨は前方へと刀を構えなおす。まっすぐに伸びた刃先には、その鋭さを覆い隠さぬ程度の付着物があつた。どす黒く既に固まりつつあつたが、どこか粘着質なぬらりとした質感。先ほど刀を振るった際についたものだった。

「最下級の魔物風情だが、この程度で奴らは死なない」

その刃の先に、異形の存在——魔物の姿があつた。

見た目は犬のようだが、赤黒い肢体は子牛ほどの大きさで、その頭部から一対の角が生えている。刀に斬り飛ばされた衝撃から立ち直ったその魔物は標的を緋雨に変え、怒りに満ちた目でこちらを睨んでいた。

「行け、早く！」

魔物が咆哮と同時に地を蹴った。それを鋭い双眸に焼き付けながら緋雨は最後の警告をする。無言でうなずいた母親が幼子を抱き上

げて逃げていく。その気配を感じ取って、緋雨は身を低く落とし後方へ刀を滑らせた。放たれた矢のように魔物が迫って来る。鋭い牙と爪が、赤黒い肢体の中で異様なほど白く凶暴に光った。

まともに受ければ生きた人間など一瞬でただの肉塊と化すのであろう。

どこか他人事のように考えながら、緋雨は魔物と交錯する刹那、大きく前方へと踏み込んだ。

「急々如律令」
きゅうきゆうによりつりよう

振り切った刀を引き戻しながら、緋雨は静かに声を発した。背後で四肢を裂かれた魔物が苦悶のうめきと共に地に堕ちる。

「焼き払え、火炎輪」
かえんりん

素早く印を切り紡がれる言葉。与えられた激痛にのたうつ魔物の体が突如燃え上がり、そして炎と共に掻き消える。一瞬の灼熱を背に感じながら緋雨は立ち上がった。振り向けば灰燼と化した魔物が地面へと降り積もっている。緋雨は刀を一振りして鞘に納めると、虚空へ声をあげた。

「東雲！」
しののめ

声と同時に赤い光が収束し、すぐさま人型となって緋雨の傍らに降り立つ。紅い髪 of 青年——緋雨の式神である東雲は、微動だにせずその長身から主の姿を見下ろした。

「大路から民が逃げ切るまで、この付近の魔物の足を止めろ。その後は全て討伐し私の元に戻れ」

緋雨は手短に命令だけを伝える。東雲は一切表情を動かすことなく、長く尖った耳からその言葉を聞いていた。

「ただし、あまり派手な火は使うな。ここは民家が多い」

「承知した」

東雲は低く返事をして姿を消した。異界の鬼族特有の俊足を見送って、緋雨は軽く口笛を鳴らす。その音に反応し、どこにいたのであろうか、この混乱の中で無傷の黒紅が駆け寄ってくる。

「行こう。蘇芳^{すおう}のことだ、きっともう暴れているぞ」

愛馬に笑いかけると、緋雨は再びその背に跨って駆け出した。

南西の大路を抜けると、そこは開けた場所になっている。元は市を開いたり、祭りを行うための場所だが、今はその主役たる民の姿はなかった。代わりに十数体の赤黒い魔物が群れを成し、しきりに何かに向かって飛び掛っていく。だが、そのことごとくが跳ね返され、または炎に焼かれ、苦々しい低い唸りをあげる。

魔物たちの中央に一人の姿があった。

高く結い上げた赤みを帯びた黒髪が、動くたびに風を切って揺れる。多数の魔物に取り囲まれてなお、その青年の口元には余裕が見て取れた。紅の衣の裾を翻し、二本の刀で魔物たちをあしらっているその姿は、まるで燕が舞うかのごとく軽やかだ。

「早いな」

不意に青年の後ろで数体の魔物が炎に包まれて消滅した。入れ替

わるように魔物とは異なる気配がその場に現れる。青年——蘇芳は、背中合わせに立つ見慣れた存在に笑いかけた。

「屋敷にいたからな。それに朱雀を長い間一人で戦わせては、副官として面目が立たない」

風に弄ばれる髪を押さえながら、緋雨が皮肉めいた笑みをもらす。朱雀とは紅の一門の筆頭である蘇芳の称号だ。

「そうだったな」

蘇芳は朱雀の証である真紅の陰陽眼を細め、喉の奥で小さく笑った。

「では、手早く片付けるとするか。こいつらの相手をして過ごすには、今日の陽気はもったいない」

言い終わる頃には蘇芳の表情から笑みが消えていた。刀を一本鞘に納め、その手を真っ直ぐに伸ばす。その動作の意味を察した緋雨は地を蹴った。大きく弧を描いて一閃した刀が、魔物を数体まとめて斬り飛ばす。次いで緋雨は体を反転させ魔物の群れに飛び込んだ。足止め程度の強さで、一体、二体と斬り倒し、最後の一体を蹴る勢いで再び蘇芳の背後へと戻った。緋雨の着地を見計らったように、蘇芳の声が響く。

「急々如律令。爆ぜよ、煉獄焰陣」

蘇芳と緋雨を中心に、膨れ上がった紅蓮の炎が勢いよく地を舐める。炎は成す術無く飲み込まれた魔物たちの断末魔の悲鳴さえ焼き尽くした。それが収まると、あたりは静まり返った。

「その様子だと、民は無事逃げられたようだな」

騒乱が一通りの収束を迎えると、蘇芳はいつのまにかこの場に存在している東雲に目をやった。魔物が現れた時に、緋雨が民を護るように命令することは珍しくない。東雲は蘇芳の声に無感動な視線だけを返して、主である緋雨の傍らに寄り添った。式神にも色々な性格があるが、ことさらこの東雲は堅物なのだ。とくに気を悪くすることも無く、蘇芳は刀を納めた。

「よくやった。戻れ東雲」

緋雨が言うと東雲は返事を発することなく、また赤い光となって今度は虚空へと消えた。

「それにしても……」

東雲の姿が見えなくなると、緋雨は刀の汚れを衣の裾で拭ってから鞘へと収め嘆息した。

「いくら月蝕^{つきはみ}みの期とはいえ、最近やたらと襲撃が多いな」

「ああ。もしかしたら結界が弱まっているのかもしれない」

緋雨の言葉に、蘇芳は体の重心を傾けて腕を組んだ。

「私はこのまま宮廷に赴いて皆と話すでしょう。お前はどうする緋雨？」

「そうだな……大路の様子を見てから屋敷に戻る」

怪我人も出ているしな、と付け加えて緋雨は蘇芳を振り仰いだ。
互いに了承の意を得ると、二人はそれぞれの目的地へと向かった。
後に残された魔物たちの残骸は、一陣の風に吹かれ蒼穹へと霧散
していく。そして舞い戻った平穏が再び都を支配した。

第一話 計都の陰陽師達

天の機嫌が余程良くない限り、完全な姿を見せることを拒む靈峰羅喉。その眼下に広がる広大な平地に、巨大な正方形が鎮座していた。

古より続く人間達の中心地計都。

几帳面に分けられた等間隔の区画には、一つ一つに人々の生活が見て取れた。大河から分かれた支流のような小路を辿り、石畳で舗装された大路を遡れば、その源流は全て同じ場所へと到達する。

宮廷は、それ自体が縮小した一つの都であるかのごとく存在していた。

「――なるほどな」

その小さな都の一角に三人の姿があった。貴族達の舟遊びの場として設けられた池にかかる朱塗りの橋。背を預けようとしたその欄干が、自らの長身を支えられるほどの高さは無いと気付いたその一人は、

行き場をなくした片手を腰にあてる。

「結界が弱まって……ありえない話じゃ無いか」

茶褐色の短髪を揺らし、その人物は眉を寄せた。白衣の合間からのぞく、がっしりした腕は大樹の幹を髣髴とさせる。白銀の陰陽眼を思案の色に染める男の名は月白。白の一門の白虎だ。

「でも、そんなこと今まであったかしら？」

反論と言うほどではないが、いくらかの不満の色を交えもう一人

が声をあげる。無意識なのか、それとも癖なのか、華奢な指先が髪を払う。肩口で切りそろえた濃紺の直毛が、衣擦れにも似た音をたてた。湖水のような青みを帯びた碧の陰陽眼。青の一門の青龍で名を青藍せいらんと言う。

「今は月蝕みの期だ。それも、今までに類を見ない規模のな」

不協和音を奏でる月白と青藍の声をまとめるように、蘇芳は交互に視線を交える。

「だからこそ、なにがあっても不思議ではない」

大した力を持たないはずの最下級の魔物が、群れを成して結界に守られた都に現れる。少なくとも自分が生きてきたこの二十数年の間に、そんな経験はなかったはずだ。先ほど緋雨と共に一掃した魔物たちを思い出して、蘇芳は言う。

「……それで、被害は？」

蘇芳にそんなつもりはなかったが、言いくるめられたような形になった青藍は不機嫌そうに切れ長の目を伏せた。

「犠牲者は数名程度だ。怪我人は出ているが大した人数ではない。緋雨の対応が早かった」

蘇芳は騒ぎが起こった時すぐ付近にいたが、緋雨はさほど時間をかけずに適切な処置をしてその場に現れた。幾度と無く戦いの場を共にしてきた右腕のような存在に、蘇芳から自然と微笑が生まれる。

「相変わらず有能だな、お嬢は」

本人はやめろと言い続けて随分になるその呼称で、月白はこの場にいない少女の顔を思い浮かべた。

「そう遠くないうちに、我々を超えるかもしれませんね彼女は」

すると、新たな声が反応を返してくる。

「藤黄様」
とうおう

誰にも気取られること無くこの場に現れた存在に、蘇芳と青藍は頭を下げた。

「副官の座に留めておくには少々惜しい」

藤黄と呼ばれたその男は、琥珀色の陰陽眼を細めて柔和な笑みを見せる。

藤黄自身も黄のおう一門の筆頭であったが、彼の持つ黄龍の称号は陰陽伍家の全てを束ねる特別なものだった。幼少のころより付き合っている月白だけは、相変わらず気楽な様子で会釈程度に留まっている。

藤黄が優雅な動きで自らの烏帽子の高さに手をかざすと、蘇芳と青藍は視線を上げた。

「さて」

三人の顔を一度見渡してから、藤黄は一步步を進めた。

「陰と陽、相反する二気によって森羅万象は成り立っている……」

唐突に藤黄は言葉を紡ぎ始めた。

「月は陰、太陽は陽。太陽の力が強まれば陽の気も強まる。逆に陰の気は弱められ月は蝕まれる」

まるで歌を詠むように、藤黄の言葉は続く。

「故に陽に属する異界の魔物たちは、月蝕みの期に活性化する。そして計都の結界は、本来二つの気が均衡を保っているからこそ機能していると言えるでしょう」

慣れない者からすれば藤黄の物言いは、複雑に絡み合った糸のようを感じるかもしれない。

だが、解くうちにそれが一繋ぎの長い糸であったことに自然と気付く。遠回りのように見えるその言葉は、最終的には意外なほど不純物を含まず、聞き終えた者に無理なく浸透する。都中の叡智を集めたとしても、同じ真似ができる者は恐らくいないだろう。

「……では、そもそも結界自体が全く役に立っていないと言うことですか？」

ほぼ確信を得たように、自然と青藍の口から言葉が滑り落ちる。陰陽の道を歩む者なら一番初めに学ぶべき理をあえて藤黄が語ったのは、最も単純かつそれ故に見落とされていた事実気付かせるためであった。

「全く、と言ってしまうえば少々語弊はありますが、限りなくそれに近い状態ですね」

藤黄は苦味を含ませた嘆息をして、肩を落とした。

「最良なのは現状に合わせて結界を張りなおすことですが――」

「まさか屋敷ごと建て直せなんて無茶は言わないよな？」

そもそも結界は東西南北と中央に陰陽伍家の屋敷を配置した、都の構造自体と密接に関係している。それぞれの一門が司る、木、火、土、金、水の五行が互いに干渉しあうことで、その力を発揮しているのだ。だが、それがほとんど機能していないというのならば、根本的な所から解決することになる。

月白はその労力を想像して、揶揄するように大袈裟に顔をしかめて見せた。

「さすがにそれでは結界が完成するよりも早く、計都自体がなくなるでしょうね」

当然本気でそんなことを考えていないのはお互い様だが、藤黄はますます苦笑を深めて律儀に首を振った。だが、すぐにその表情から柔らかさは溶け去り、

氷のような怜悯さが覆う。

「今、^{からすば}烏羽に過去の記録を調べさせている所ですが、いずれにせよ計都が無防備な状態であることは確かです」

一転して口出しを拒む雰囲気を纏った藤黄は、先ほどと同じように再度三人の顔を見渡した。

「早いうちに手は打ちます……が、それまでの間、今まで以上に警戒を怠らないよう心得なさい」

「御意」

即座に一礼する三人の声音が異口同音に重なった。

敷き詰められた砂利の上を、一對の草履が滑るように踏みしめていく。小粒の石を跳ね上げるどころか、物音一つたてずに歩むその人物の足跡を辿るのであれば、余程地に顔を近づける必要があるだろう。

意識していたわけではないが、いつの間にか師のそれと似てしまったことに気付き彼は足を止めた。

花の香を含んだ微風が、緩く一つに束ねた黒髪を揺らす。その僅かな振動でさえ致命傷になりかねない古い書物を手にした彼は、衣の袖でそつと覆い隠した。

――と。

「烏羽」

不意に今から探しに行こうとしていた声に呼び止められ、烏羽は紫紺の陰陽眼をそちらに向けた。

宮廷の敷地内にある黄の一門の屋敷。帝の正殿と屋敷を隔てる広い池の対岸に藤黄の姿がある。烏羽はやはり音をたてることなく歩を速めた。

「申し訳ありません、時間をかけ過ぎてしまいました」

藤黄の元にたどり着いた烏羽は、深く一礼して手の中の書物を差し出した。

「いいえ。あの蔵はもう随分長いこと手付かずでしたから、大変だったでしょう」

書物を受け取った藤黄は、至極繊細な手つきで紙面を捲る。扱いを間違えればたちまちただの塵へと成り下がってしまうほどに、それは齢を重ねていた。

「なるほど……良いものを見つけてくれましたね」

変色した紙に僅かな存在を主張する擦れた墨の痕跡を辿り、藤黄は満足そうに目を離れた。

姉が黄の一門の一人に嫁いだことが縁となり、幼少期から藤黄を師と仰ぐ烏羽は、黒の一門の玄武の座にある。五人からなる陰陽伍家の筆頭の中では最も年若い、彼が司る水の如き冷静さが常にそれを感じさせずにいた。

「また、都に魔物が現れたそうですね」

今来た道に戻るように歩き出した藤黄に合わせ、烏羽はやや左後ろに続く。

藤黄に指示された書物を探すため、早朝から黄の一門の屋敷で蔵に籠っていたが、そこから一步外に出れば屋敷の者達が噂しているのが耳に入ってきた。

「ええ。先ほどあちらで蘇芳たちが話していましたね」

藤黄は一刻ほど前に三人の姿があった方角へ目をやった。

「具体的な策が見つかるまでは警戒を怠らないよう彼らには伝えましたが、思いのほか早く片付きそうです」

朱塗りの橋が架かる中島には既に彼らの姿はなかったが、烏羽は導かれるように視線を移し、そしてまた藤黄の背へと静かな目を向ける。

「……と、言いますと？」

「結界の歪みを正す……とでも言いましょうか。均衡の崩れた陰の気を調節するための法が存在するようです」

数歩先行していた藤黄は烏羽の疑問の声音に歩を止めると、手にした書物の一つを示した。なるほど烏羽が手渡した際、偶然その部分に目を留めたのだろう。良い物を見つけたという言葉の真意に触れて、烏羽は普段あまり見せない喜悦の色をその瞳に灯した。

「また随分と、古びた書物だな」

藤黄と烏羽が正殿に程近い庭園へ足を踏み入れると、不意にそんな声が降ってきた。

新緑から滴る雫が水面に波紋を広げるように、その言葉は涼やかに鼓膜を震わせる。優しげな中にもどこか威厳を感じさせる声音の持ち主は一人しかない。

「皇后様」

二人はたつぷりと時間をかけ身を折ると、視線を上げる。皇后紫苑は、穏やかな微笑をたたえて渡殿から二人を見下ろしていた。

結い上げられた黒髪で精巧な細工を施した簪が、その見た目に恥じぬ楽の音を奏でる。間もなく四十の齢に届こうと言うのに、一切の衰えを感じさせない気品溢れる美貌が、彼女の纏う鮮やかな紫の衣に彩られ、早咲きの菖蒲を思わせた。

「つい先程まで我が屋敷に眠っていたものです」

「ほう」

紫苑は高欄に手をかけると藤黄の持つ書物を興味深そうに覗き込んだが、その位置からはよく見えなかったらしく、わざわざ手近な階から地に降りて来る。烏羽が内心驚きながら紫苑に場を譲ると、彼女はごく自然にそこへと滑り込んできた。だが、藤黄が広げた紙面を少し眺めると急に身を引いてしまう。

「……わらわには読めぬな」

記された内容から、陰陽の書物であると悟ったのであろう。紫苑は落胆の意を表するように肩を落とした。予想通りの反応にこみ上げる笑みをあえて隠さず、藤黄は書物を閉じる。

「皇后様はどちらへ？」

「なに、書き物の合間のただの散歩だ」

「お一人でですか？」

紫苑に声をかけられた時点で気付いていたが、彼女は供を一人も連れずにいた。

「今日は陽気が良いからな、女官達にも暇をくれてやった」

藤黄があたかも今それに気付いたかのように言うと、紫苑は悪戯がばれた童女の顔でくすりと笑った。

つまり、強引に女官たちを振り切って一人で羽を伸ばしに来たのだろう。紫苑の側近として仕えてからもう二十年以上になるが、こういった部分は昔から変わらない。

「花でも愛でようと出てきたのだが、何せここの庭は広すぎてな」

きっとまた白髪を増やすことになるであろう女官達に、藤黄が密かに同情の意を表していると、紫苑はわざとらしく大きな溜息をつく。その先にある言葉を汲み取った藤黄は、手にした書物を烏羽に手渡した。

「それでしたら、北のつつじがちょうど見頃です。お供いたしましょう」

藤黄が自由になった右手でその方角を示す。

「うむ。ではすまぬが烏羽、ちと藤黄を借りるぞ」

書物を受け取った時点で、そうなる事を予期していた烏羽は、振り向いた紫苑に黙したまま一礼した。

宮廷の一番北側の庭園は満開のつつじに埋め尽くされていた。卓越した庭師の腕によって整えられた赤と白の二色が歩む者を和ませる。

元から人気の少ない庭園ではあるが、今は二人だけがその場を独占していた。珍しく饒舌に語る紫苑と、微笑みながらそれに耳を傾ける藤黄。懐かしい思い出話とはとめどなく続いていたが、足元の小路を半ば程まで歩むと不意に紫苑が足を止めた。

「帝弟派の動きが少々目立つようになって参りました」
（ていいていは）

どこからか聞こえてくる雲雀のさえずりが、途切れた会話の間を埋める。それを遮らない程でありながらはつきりと、藤黄の言葉は紫苑に届いた。

「……わかっておる」

それまでとは異なり感情の読めない低い声音で答えると、紫苑は空を振り仰いだ。まだ高い位置にある日の光が穏やかに降り注ぐ。紫苑は思案するようにしばし瞳を伏せてから、藤黄へと向き直った。

「帝は臣下などより、寵姫（ちゆうき）の機嫌が余程気になると見える。内大臣までもが帝弟派の密談に加わったなどと公然と噂されるのだからな」

「残念ながら、噂ではございません」

抑揚のない紫苑の言葉に合わせ、藤黄もまた淡々と事実を告げる。すると紫苑は、そうであろうかと自嘲するように小さく息を吐き出した。

「艶珠は若く美しい。帝はあの娘に狂ってしまわれた」

紫苑はどこか遠くを見やるように視線を泳がせた。その先にあるものが悲哀や憤りの情なのか、それともただの風景なのかを藤黄に読み取することはできない。

艶珠は二年程前、帝の側室として迎えられた娘である。

計都一と謳われる絶世の美貌に帝はすぐさま夢中になったが、それ以降、昼も夜もない寵愛ぶりで政はおろそかになった。失望した臣下たちは、一人、また一人と帝弟廉栄の元に集まり、いつしか帝弟派と現帝派の二勢力によって分断された宮廷は荒れ果てている。

「もはやあのお方の耳には誰の言葉も届かぬ。謀反が起こるのも時間の問題かもしれないと、女官達が怯えておるのだよ」

嘆くその言葉と対称的に、雲雀たちが歓び歌う。それを皮肉とするのは過剰な自意識であったが、紫苑はたっぷりとその歌を耳に刻んでからぼつりと呟いた。

「わららには、どうすることもできぬ」

これほどに弱々しい言葉を聞いたのは一体どれくらいぶりであろうかと、再び向き直った紫苑に見つめられ藤黄は自問した。そして答えは存外に簡単であることに気づく。紫苑が弱音を吐いたのは、おそらく初めてのことであろう。

「誰が敵になるとも分からない状況です。あまり一人では出歩かれぬようお気をつけください」

返す言葉が見つからず、やや長い間の後藤黄が口にしたのはひどく冷静なものだった。その言葉に含まれた少々の嫌味を目ざとく嗅

ぎ別けた紫苑は、小さく噴出した。

「藤黄よ、お前は一体誰の味方なのだ？」

毒気を抜かれたその問いの答えは、風に揺れるつつじたちだけが聞いていた。

第二話 宵の妖

「馬鹿者！ そんな動き辛い格好をしていられるかつ！」

紅の一門の屋敷中に大絶叫がこだまする。宮廷から屋敷に戻ってきたばかりの蘇芳は、なんとなくこの後の展開を想像して額に手を当てた。

「……なんだ？」

蘇芳について屋敷を訪れていた月白は、わけがわからず声がした方に目をやった。

「今また魔物の襲撃でもあったらどうしてくれる！ そんな物、どこぞの姫君にでもくれてやれ！」

「いけません緋雨様！ もう子供ではないのですからそのような――」

「うるさい！」

再び、悲鳴にも近い緋雨の大声が響き、その後を追うように今度は女中らしい年老いた女の声がした。だが、その声を振り切るように緋雨が一喝し、同時にやかましく渡殿を駆ける足音が近づいてくる。程なくして、啞然とする蘇芳と月白の前に緋雨が姿を現した。戦いの場でも滅多に息を切らさない緋雨が髪を振り乱し、まるでとてつもない恐怖から逃げてきたかのように肩で息をしている。当たって欲しくなかった自らの想像を内心で罵倒して、蘇芳は冗談ではなく頭痛を感じた。

「よう、お嬢。どうしたんだ？」

「その呼び方は止める月白。いくつだと思ってる」

挨拶代わりに気楽に手を上げた月白に、まだ息の整わない緋雨は即座に噛み付いた。

「どうもこうも――」

「緋雨様！ どこにいらっしゃるんですか！？」

言葉の途中で聞こえてきた老女中の声に、緋雨はまるで死に直面したかのように怯えて顔を引きつらせる。

そして、意を決したように手にした草履を渡殿の下に投げ落とすと、その後を追うように自らもひらりと飛び降り、着地と同時に一体どうやったのか草履を履き終えてすぐさま走り去ってしまう。

「緋雨様っ！」

その姿が見えなくなった直後、鬼の形相で老女中が今まで緋雨のいた場所に現れた。その手に何やら長大な装束を抱えて、恐らく緋雨と同じ距離を走って来たはずであろうその老女中は、息一つ切らさずちゃんと背筋を伸ばしている。

なるほど確かにこれは恐ろしいと、状況をよくわかっていないながらも、月白は緋雨の恐怖の対象がこの老女中であることだけは把握した。

「……何の騒ぎだ？」

痛む頭から手を離し、蘇芳はわかりきった返答を聞くためだけに老女中へ目をやった。

「蘇芳様、これは失礼いたしました。大した事ではないのですが、緋雨様に宴用の御衣装合わせをお願いしたところ、ひどく嫌がられました」

どこか棘のある老女中の言葉に、蘇芳はまたかと盛大に嘆息した。蘇芳の副官として戦いの場に身を投じてきた緋雨は、動きやすさから常に男物の装束を好んで着ている。それ故に宴用の衣装など、もっともらしく動きにくい格好を毛嫌いしているのだ。確か元服の儀の衣装を作った時も似たような騒ぎに直面した記憶があったなど、何やらしゃべり続けている老女中の愚痴を聞き流して、蘇芳は思った。

「わかった。緋雨には私から言うておこう……」

遠くから馬の嘶きが聞こえてくる。

渦中の人物が逃亡に成功したであろう事を悟ると、蘇芳は面倒くさそうに老女中に手を振った。そうでもしなければ、日が暮れるまで解放してもらえそうにないからだ。

人と妖が頻繁に争っていた時代から、羅喉は妖たちの聖域がある山として恐れられてきた。

今ではその聖域に踏み込まぬ限り人が襲われることはほとんどなくなっただが、それでも麓の山道を除いて足を踏み入れる者は少ない。だからこそ誰にも邪魔されず一人になりたい時にはうってつけなの

だ。

緋雨は黒紅の背から降りると、いつものように鼻先を撫でて放してやる。すると黒紅は少し歩いてから好みの野草を食み始めた。山の中腹よりやや麓に寄ったこの場所は、途中に険しい岩場も無く馬に乗っていてもあまり苦勞せず登ってこれる。そして何より緋雨がこの場所を気に入っている理由があった。

草を踏みしめる自らの足音に紛れ別の音が聞こえてくる。

その源へと歩を進め身を屈めると、そこには細い清流があった。やがて大河の一部となる遙かな峰から流れ出た雪解け水は、僅かな飛沫と音さえなければ存在を気付かれないほど透明に澄んでいる。

緋雨は椀のように重ねた手を浸すと、掬い上げた清流の一部分を口元へ運んだ。手のひらから伝い落ちる冷たさが、心地よく喉を潤していく。

ささやかな贅沢を満喫した緋雨は表情をほころばせ、そのままごろりと横になった。

やや西に傾き始めてはいるが、まだ高い位置にある太陽から真っ直ぐな光がのびている。梢の形に切り取られたそれは、眩しさを感じさせず緋雨の元に降り注いだ。見上げる空はどこまでも青く、その曇り一つ無い舞台で一羽の鷹が己の雄姿を見せ付けるように優雅に舞っている。微かに聞こえてくるその鳴き声は、時折木々をざわめかせる風に紛れ、どこへともなく消えていく。

それらを全身で感じながら、緋雨はいつしか目を閉じていた。

浅い眠りの淵から緋雨を呼び戻したのは、急激に温度を下げた風だった。眠りについた時と同じように空は広がっていたが、その色は大分赤みを帯びている。肌寒さに衣の上から無意識に体をさすっ

て、緋雨は身を起こした。

思いのほか長い時間寝入ってしまったことに気付く、緋雨は内心
歯噛みする。まだ夜には早い、それでも麓まで下るまでに日暮れ
は遠からず訪れるだろう。その頃になれば獣も活動を始めることは
考えるまでも無くわかつていた。

「黒紅？」

無用な争いを避けるためにはいち早くこの場を立ち去ることが得
策だったが、緋雨は黒紅の姿が見えないことに気付く。これほど遅
くなることは初めてだが、今まで緋雨が眠ってしまったても、放した
黒紅が遠くへ行くことは無かった。

「黒紅、帰るぞ！」

緋雨は歩きながら口調を強める。だがその声は木々のざわめきの
中に虚しく吸い込まれていった。

（困ったやつだ……）

途方にくれかけて、緋雨は胸中で一人ごちる。

さすがに一人で歩いて麓まで戻るなど正気の沙汰ではない。自分
の迂闊さが招いた結果とはいえさすがに苛立ちを覚えながら、緋雨
は屈みこんで黒紅の痕跡を探した。するとほどなくして、転々と続
く蹄の跡があることに気付く。言うまでもなく愛馬のそれだが、続
いているのは麓とは反対側、つまり峰へと続く登り道である。緋雨
は大きく嘆息すると、その痕跡を辿って歩を進めた。

流れる清流を遡るようにして、緋雨は山道を登っていた。
進むにつれ、岩肌が増えるため黒紅の痕跡を辿るのは難しくなっ

ていく。だが、声をあげて探すのは危険を伴った。峰へ近づくと言うことは、すなわち妖の聖域にも近づいていることを示している。

焦りが無いわけではなかったが、地道に進むしかないと自らに言い聞かせて、緋雨は一步一步確実に地を踏みしめてく。

そして、ふと気付けば急激に視界が開けた。

眼前には風に揺られ黄金色に波打つ野が広がっている。その正体は茜色の陽光に照らされた、見渡す限り一面の山吹の花だった。手付かずの自然だけが成せる天然の奇跡に、緋雨は一瞬踏み入れる事をためらったが、僅かにその先へと続いていた黒紅の痕跡を辿るために前へと踏み出した。

無数の山吹の花を掻き分ける緋雨の足元で、その影が徐々に長く伸びていく。

日暮れはその身を捉えようと確実に間近に迫っていた。踏み入れからほどなくして、身の丈の半分ほどある花々は黒紅の痕跡を葬り、今は半ば勘だけで動く事を余儀なくされている。それならばもっと確実な方法を探せばいいのだが、心とは裏腹に何故か足は前へと踏み出す事を止めようとしない。

やがて黄金色の野が終わりを告げると、そこからは緩やかな上り坂になっていた。

見えない糸に引かれるようにして、緋雨は歩み続ける。気付けばいつのまにか見失っていた清流が、その幅を狭めて再び足元に姿を現していた。幾重にも重ねた絹糸のような繊細な流れは、小高い丘へと続いている。その源へと辿りついた緋雨は、飛び込んできた光景に息を呑んだ。

丘一面を包み込むようにその枝を広げた桜の大本が、静かに佇んでいる。

樹齢千年は軽く超えているであろうその大樹が身を震わすたび、薄紅の吹雪が幕を引くようにその姿を覆い隠す。この世の夢幻を前

にして、緋雨はしばし立ち尽くした。

どれほどそうしていたのであろうか、ふと視線を感じた緋雨は絶えず降り注ぐ花卉の奥を見つめた。

羅喉の影に身を隠そうとする陽の光は、それでもまだ夜になることを拒んでいる。だが、大樹の幹に寄りかかるようにして既に宵は訪れていた。

たった今現れたのか、それとも最初から存在していたのかはわからない。

漆黒のように艶やかでありながら、青みがかかるようにも見える不思議な長い髪は夜の色をしていた。

薄紅の幕間から見据える瞳は、月光によってその色を変える夜空のように、絶えず変化を繰り返している。紫黒から瑠璃へ、瑠璃から紺青へと僅かな間でさえ一つの色に留まることを嫌うそれをあえて表現するとすれば、宵色と呼ぶしかない。

闇色の衣を身に纏うその男は、あまりにも美しい姿で、夜を具現化したように佇んでいる。

緋雨は自らの黒曜と男の宵色が交錯する間、魅入られたように動くことができなかった。だが、男の瞳が細められ、その唇が緩やかにつり上がった刹那、緋雨は呪縛から解放されて我に返る。

男は微笑んでいた。

人の踏み入れぬ羅喉の山奥で出逢った、浮世離れた美しい男。それはつまり人ならざる者、妖である事に他ならない。

そう察した緋雨は、即座に刀へと手を伸ばした。

「やめておけ」

「……っ！」

だが、抜刀までのほんの瞬きの間さえ許さず、夜風にも似た低い声が囁いた。その声の主、夜色の妖の気配をすぐ近くに感じて、緋雨は小さく息を詰まらせる。

その妖は背後に存在していた。僅かにでも身じろげば肩が触れる距離に鼓動が煩く暴れだす。

「急々如律令……」

それが恐怖と言う感情なのか判断するよりも早く、緋雨の本能が言葉を紡ぎだした。

「ほう——」

感嘆ともつかぬ声をあげた妖を無視し、緋雨は急ぎ印を切った右手を背後へ突き出した。

「舞え！ 閃光紅燕」
せんこうべにつばめ

その指先で、無数の火の粉が舞い上がる。至近距離で吹き荒れる灼熱を吸い込まぬよう、緋雨は衣の袖で口元を覆う。数瞬の後、火の粉は妖を焼き尽くす確かな手応えを与え、微かな熱の余韻を残して消え去った。

——だが。

「陰陽師か。なるほど、中々良い腕をしている」

再び、声は背後から聞こえた。

今度こそ、緋雨の背筋を雷鳴のような戦慄が駆け抜ける。凍りつく冷ややかな手で心の臓を掴まれる様に、体内の温度は急激に低下

した。

「だが、それでは俺は殺せん」

振り向いた視線の先には、まるで何事も無かったかのように飄々とした態度の妖がいる。

（今のは幻影か……）

いつからその術中に陥っていたのかは知る由も無いが、先ほど感じた手応えは妖自身ではなかった。今、目の前で挑発ともとれる笑みを浮かべているのが、この妖の本体なのであろう。その事実、緋雨は我知らず拳を握り締めた。

ぴんと張り詰めた琴糸のような静寂が、緋雨と妖の間を繋ぐ。

「そう身構えるな。別に俺はお前と争う気はない」

だがそれを爪弾いたのは、存外に穏やかな妖の声だった。

「……何？」

その予想外の反応に、思わず緋雨の口から言葉が零れる。真意が見えずにますます警戒の色を強める緋雨の表情に、妖は苦笑した。

「そのままの意味だ。俺にはお前を殺す理由も無い」

「妖が人を殺すのに理由を求めると？」

緋雨の喉は緊張で乾ききっていた。もしかしたら気付かぬ間にその声は擦れているのかもしれない。

「お前達人間が妖をどう解釈しているのかは知らんが、少なくともここは聖域ではないし、まして俺一人しかない」

「だから……何だと？」

「いい加減に、その殺気をしまえと言っている」

緋雨は先ほどから少ない言葉を交わしつつも、左手を刀に添えたまま臨戦態勢を崩そうとしない。

「やれやれ、お前の主は余程強情と見える」

まるで手負いの獣のようだと一人小さく噴出して、妖は振り返った方向に声を発した。すると桜の大樹の後ろから、黒紅が姿を現した。

「お前もそう思わないか、黒紅？」

黒紅はゆっくり歩んでいくと、まるで主の緋雨にするように、伸ばされた妖の掌に鼻先をこすりつけた。

馬は頭の良い動物で、時に人間よりも鋭く相手の本性を見抜く。

黒紅は特にその能力に長けていたが、それ故気性が荒く余程気に入った相手でもなければ近寄らせる事さえ許さないのだ。だが、その黒紅が今妖にしているのは間違いなく愛情表現の一つだった。

「さて、どうする？ 俺はお前と争う気は無いと言っている。だが、お前が攻撃を仕掛けるなら、もしかしたら気が変わるかもしれん」

妖は黒紅の頬を撫でながら、視線を緋雨に返してきた。

「ただし、今のお前が本気で俺に挑んだとして……結果はわかって
いるだろう？ 気の強さは認めるが、それだけでは無駄に命を削る
ばかりだ」

「くっ……」

どこか諭すように、だが反論を許さない声音で妖は言う。

緋雨は先ほど幻影を焼いた瞬間を思い出し、強く唇を噛んだ。悔
しいが、妖の言葉は紛れも無い事実だった。

「……そうだ、それで良い」

ならば最も賢明な方法は何なのか。それを選択せずに無謀に挑む
ほど、緋雨は幼くなかった。精神を落ち着かせるように長く息を吐
いて、刀から左手を離し、完全に妖へと向き直る。

「俺は眞守^{まがみ}、山狗の一族だ。娘、お前の名は？」

その様子に満足したのか妖——眞守は、微笑んで何の前触れも無
く名を告げてくる。その突飛な言動に緋雨は一瞬面食らったが、す
ぐさま怪訝さを前面に押し出した。

「ふざけるな。妖に名乗る名など——」

「ほう。緋雨と言うのか」

「なっ……！」

まるでそう言うのを分かっていたかのように、皆まで言わぬうち

から眞守は緋雨の名を言い当てて見せる。そういえば確か眞守は最初から黒紅の名も知っていた。

「……黒紅、お前っ！」

冷静になって考えてみれば理由は簡単だった。妖は独自の方法で動物とも対話ができる。つまり、黒紅自身が眞守に主の名を告げたのだろう。そう納得した緋雨は非難がましい目で、眞守にじゃれつく愛馬を睨みつけた。

「そう怒るな。こいつらは言葉が話せない分、正直なんだ」

言いながら優しく目を細めた眞守は、促すように黒紅の背をひと撫でする。すると黒紅は眞守の手を離れ、緋雨の元へ歩み寄ってきた。

数刻ぶりに戻った愛馬は、特に変わった様子も無く緋雨に寄り添う。主の許可を得ずその名を妖に告げた事に対して、全く悪気を感じていないのだろう。だからといって何かが減るといった事でもないが、緋雨はやり場の無い小さな腹立たしさを飲み込んで、黒紅の背に跨った。

「もう行くのか？」

緋雨が立ち去ろうとしている事に気付いたのだろう。眞守は歩を進めて近づいて来た。

「元より長居するつもりは無かった。黒紅が見つかったのだから、これ以上ここに留まる意味が無い」

馬上から見下ろす形になったが、それでも眞守がかなりの長身で

あることに緋雨は気づいた。

近くで見るほどに、妖しいまでの美しさは色濃くなっていくが、その体躯は決して華奢と言うわけではない。おそらく、妖の中でもかなりの高位に身を置く存在なのだろう、眞守の立ち居振る舞いはどこか堂々としたものを感じさせた。

もつとも、そんな妖がなぜ聖域でもないこんな場所に一人でいたのかは解せないが。

「では緋雨、またここに来い。次はもう少しゆっくり話してみたい」

「戯言を。妖と馴れ合うつもりは無い」

そんな事を考えていた緋雨は、また突拍子も無い眞守の言葉に眉を跳ね上げ、即座に斬り捨てた。だが、眞守はその反応も見越していたのだろうか、全く気を悪くした様子も無く、小さく肩を揺らして笑う。

よく分からん奴だと内心毒づいて、緋雨は跨った両足を強く黒紅の腹に押し付けた。名残惜しそうに眞守の姿を目で追いながら、黒紅がゆっくりと歩み出す。そして、緋雨によって半ば強引に前方へと意識を集中させられた後は、もう振り返る事も無くその姿は遠くになっていった。

「いずれ……また逢う事になるさ」

夜の帳が降り始めた丘の上で、眞守は一人微笑んだ。

月光が照らす舞台で、さながら一人芝居のように朗々と響き渡った言の葉を、緋雨は知る由も無い。

第三話 禍の足音

「……酷いな」

他に誰一人として声を発する者がいないのは、それ以外にこの光景を評する言葉が存在しないからではないだろうか。

蘇芳は胸中で呟きながら、袖で顔の半分を覆う。そうすることで鼻腔を強く刺激する臭いが、腹の内容物を勝手に押し上げようとする動きを多少なりと緩和できた。

髪に白いものが混じり始めた初老の男が――正確には男の上半分が眼下に転がっている。目の前の民家の住人であったと判断できたのは、男の下半分がその戸口にあるからだった。引き裂かれた断面から零れ落ちた赤黒い臓物の破片が、足跡のように点々と飛び散っている。

その近くには幼子が転がっていた。恐らくこの家の子供だろうが、首から上が無いため息子か娘かの判断は難しい。民家の中に入れば置き去りにされたそれを見つける事もできるかもしれないが、もはやわかった所で何の意味も成さないだろう。

羅喉の山道を北へ抜けた山間の小さな村。萌える新緑に抱かれたその村は、瑞々しい大気を塗りつぶす濃厚な死臭に満たされていた。話はある程度聞いていたが、予想以上の惨状に思考が効率よく機能しているとは言い難い。

「どう思う？」

その結果、蘇芳は隣に立つ緋雨に問いかけた。緋雨もまた、蘇芳と同じように口元を覆っていたが、明らかに顔色は芳しくない。死に対して免疫はあるはずだが、それでもこの状況は苦痛なのだろう。

「……魔物の仕業とは一概に言えないな」

既に腐り始めた物言わぬ眼下の死体で、白くぬらぬらとした無数の何かが不気味に蠢いている。死臭に誘われた無数の蠅が飛び交っている以上、それが何かを確かめる気も起きず、緋雨は体内の酸素を搾り出すように言葉を紡いだ。

「やはりそう思うか」

蘇芳は眉を寄せた。事の発端は三日前に遡る。

日が落ちて間もなく、紅の一門の屋敷を一人の男が訪れた。酷く錯乱状態にあったその男はこの村の住人で、朝まで計都に商いに来ていたのだという。そして村に戻ると、村人達が何者かに惨殺されており、慌てて計都に戻ってきたのだそうだ。

そのため、蘇芳と緋雨をはじめとした紅の一門の陰陽師達が、半日ほどかけて村にやって来たのだった。

「蘇芳様、緋雨様」

蘇芳が記憶の糸を繋ぎ合わせていると、震える声がその名を呼んだ。緋雨と共に振り返れば、まだ少年と言えるほど年若い門下生が、地に膝を着けて二人を見上げていた。

「どうだ？」

蘇芳は口元から手を離した。臭いは既に嗅覚を麻痺させたようで、遮る物が無くなってもあまり変化は訪れない。

「……やはり全ての家の者が死んでおります」

「皆、同じような死に方か？」

「はい……どれもただ引き裂かれたような惨い死に様で――」

淡々とした蘇芳の言葉に自分が見てきた光景を思い出したのか、門下生は急に言葉を詰まらせ激しくむせながら嘔吐した。

「もっ……申し訳ありません！ 御見苦しいところを……」

慌てて口元を拭いながら、門下生は地に頭を着ける。一門の筆頭と、その副官の前で粗相をしてしまった事に表情は青ざめていた。

「いや、気にするな。辛い仕事をさせてすまなかったな」

だが蘇芳は特に気にする様子も無く言う。恐らく自分も今の立場に無ければ、この門下生と同じ事になっていたかもしれない。これ以上引き止めるのは気の毒だと感じた蘇芳は、門下生に皆を集めるように言って下がらせた。

「……焼くのか？」

よろよろと立ち去っていく門下生を見送りながら、緋雨は蘇芳を振り仰いだ。

「ああ。これ以上雨風に晒してはこの者たちも浮かばれないだろう。墓を作ってやればいいが……さすがにこの人数ではな」

「そうだな……弔ってやらなければ」

苦渋の選択をする蘇芳に、緋雨は瞳を伏せて同調の意を示した。

「妖だと思うか？」

村で略式の弔いを終らせた後、門下生達に後の事を任せた蘇芳と緋雨は報告のため先に帰途へ着いていた。

緋雨は黒紅の前足辺りに漂わせていた視線を上げ、彼の愛馬はくほう白鳳の背に揺られる蘇芳を見やった。緋雨の黒紅とは対照的な月毛の馬体が白く輝くように目に眩しい。

「わからない。ただ、魔物にしては、あまりにも形跡が無さ過ぎる」

蘇芳は頭上から枝垂れかかる藤の花々を器用によけて、肩越しに緋雨へ視線を送ってきた。

「もっとも、妖共にとって今は時期が悪いはずだ。決め付けるには時期焦燥かもしれないな」

「そうだな。しかし――」

言いかけて、緋雨は小さな痛みを覚えて言葉を切った。反射的に引いた手綱によって黒紅は足を止める。見上げれば緋雨の黒髪が一房、藤の花に捕らえられていた。蘇芳のように上手く避けた気になっ
っていたが、どうやらその行動は思いの他難易度を伴うらしい。

緋雨は簪かんざしの様に揺れる薄紫の花から、絡んだ髪を丁寧に外す。すると、いとも簡単に自らの肩へ滑り落ちた髪をどこか恨みがましく見つめて、再び歩を進めようと両の手で手綱を取った。だが、不

意に感じた気配に、鋭く細めた瞳が背後を射抜く。

「緋雨？」

不自然に開いた距離に気付いて、少し先で蘇芳が立ち止まった。

「どうしかしたか？」

「いや……なんでもない」

道の悪い山道には何者の姿も無かったが、緋雨は覚えのある気配を牽制するように、やや長くそこを睨みつけてから蘇芳に追いついた。

「今回の件といい、都の結界といい……悪い事ばかりが起こるから、少し嫌な予感がしたただけだ」

「……そうか」

少し訝るような表情を浮かべながらも詮索する事はせず、蘇芳は山道を進み始めた。続く緋雨は、蘇芳に気付かれぬようちらりと背後を盗み見る。だがやはりその先には、二頭の蹄の跡が点々と続いているだけだった。

「やれやれ、気付かれたか」

木漏れ日の差す昼の山道に、まだ早い宵の色が凝縮したように姿

を現す。

眞守は喉の奥でくつくつと低く笑いながら、青毛の馬とその主の幻影を追って目を細めた。

「気付かれたのではなく、気付かせたのでしょうか？」

「……巳聖しせいか」

眞守がその名を呼ぶと、鈍色の髪 of 妖が木々の影から具現化するように、どこからとも無く姿を現した。あまり感情の色を読ませない薄墨の双眸が眞守に向けられている。

「なにを遊んでいるんですか、眞守」

「まあ、そう言うな。ちゃんと収穫はあった」

深い淵で水が揺れるように、いつも抑揚の乏しい巳聖の言葉から真意を探るのは中々骨が折れる。だがそれがわからないほど短い付き合いではない眞守は、多少なりと非難の意を感じ取って肩をすくめた。

「陰陽師共の言葉を借りるなら、あの村の死体に喰われた形跡が全く無かったのは確かだ」

眞守は口の端から笑みを消すと、若葉の生い茂る幹にもたれかかった。

「巳聖、お前の方はどうだった？」

「一族の末端の者が数名……北の沢で死んでいるのを見つけました」

「ふむ……」

無感動な巳聖の言葉に眉を寄せた眞守は、少しの間やりどころを考えて視線を彷徨わせた。

「月蝕みか……嫌な時期に入ったな」

結局遠回りをした眞守の視線は、柳の木を思わせるしなやかな肢体の同胞へと戻ってきた。

「^{おうちきょう}邑夾様には何と言うおつもりです？」

「一つ、確かめたい事がある。邑夾に伝えるのはその後でもいいだろう……それより」

眞守はふと視線をそらすと、いつの間にか暗くなり始めた空を仰いだ。鉛色の肥大化した雲が、のそのそと這いずるように天を埋めていく。体にまとわりつく不快な風が、眞守と巳聖の髪を弱く弄んだ。

「帰るぞ。雨が来る」

遙か遠くで怠惰な雲の流れを引き裂く青白い閃光が、轟音を轟かせている。

徐々に近づいてくるその音は、まるで禍々しい何かを予兆させる足音のようであった。

第四話 見えざりし魔

村から戻った蘇芳と緋雨が黄の一門の屋敷を訪れるころには、すっかり日が暮れていた。途中急な雨をしのいだせいだ。離れにある藤黄の執務部屋に通された二人は、部屋の主と向き合うように座している。

「あまり芳しい話ではありませんね」

蘇芳から簡潔にまとめられた報告を聞いた藤黄は文台の書物から目を離すと、長くしなやかな指先を渾天儀こんてんぎへ伸ばした。天の動きを司る輪が、指先の動きに合わせてからからと音をたてて回る。

その行動に特に意味があったわけではないが、偶然創り出してしまった凶兆を示す星々の並びに小さく嘆息し、藤黄は興味を無くした様にそこから手を離れた。

「元来、魔物が人を襲うのはその肉や魂を喰らって己の力とするため。ですが、村の者達にはその痕跡がほとんどありませんでした」

蘇芳は両の手を重ねた膝から視線を上げ藤黄を見据える。

「ただ、今は月蝕みの期。力を弱めているはずの妖の仕業だとすれば少々疑問を感じます」

「そうですね。確かに的を射てはいますが……」

藤黄は静かに立ち上がると、外界と部屋を仕切る御簾みすを開いた。入り込んだ夜風が、部屋の中に漂う薫物たきものの香りをふわりとかき混ぜる。

「十六夜の乱から二百年あまり……沈黙を守ってきた妖達が再び動き出したと言うのなら、憂慮すべき事態です」

「それは重々承知しております」

「ふむ……。緋雨、あなたの見立ては如何です？」

藤黄の言葉と共に、蘇芳の視線も緋雨へ向かう。発言を許された緋雨は、少しの間思慮する素振りを見せた。

「正直に申しますと、まだどちらとも言えません。ただ、悪戯に騒げば民を不安にさせるばかりかと……」

「なるほど、それも一理ある」

藤黄は微笑んで頷くと、再び文台の前に腰を下ろした。

「よろしい。事の次第がはっきりするまで、村の件は陰陽伍家の中に留めておきます。くれぐれも口外しないようにと一門の者に伝えなさい」

緋雨は了承の意を込めて黙したまま頭を下げる。

「それと、明日から各一門交代で夜番をなさい。指揮は蘇芳、あなたに一任します」

「御意」

蘇芳もまた、同様に一礼したのだった。

幾重にも塗り重ねた薄墨の空に、琥珀の月が朧に輪郭を滲ませていた。そこから滴り落ちた無数の雫は星となって柔らかく瞬いている。羽衣のような雲はその光を遮るほどではなく、雨の匂いは無い。あれから十日が経ち、二度目の夜番となった緋雨は夜の都に立っている。蘇芳を始めとした他の陰陽師達も各所に散らばっているが、近くにその気配は感じられない。

緋雨は立ち止まり、目を伏せて背を反らす。

藤黄が編み出した結界強化法が功を奏し、魔物による都の襲撃は頻度を大きく落としていたが、それはあくまで下級の魔物の話でしかない。真に警戒すべき強い力を持った魔物は、確実に結界を破って入り込んで来るのだ。頬に夜気がひんやりと触れる。緋雨はその感触を少しの間楽しむと、表情を引き締めて歩き出した。

夜番を始めてすでに二刻程と言ったところだろうか。懷に夜を迎え入れた計都はこの上なく静やかで、石畳を擦る草履や己の衣擦れの音ですら、木霊のように延々と響いていくように感じられる。だが、夜の都を支配する静寂の正体は二つあるのだ。一つは、真の平穩。そしてもう一つは、災いの予兆。

そして今宵は恐らく後者であろうと、緋雨はどこかで感じていた。確証があるわけではないが、陰陽師として生きてきた独自の勘と言えるかもしれない。それほどに、都は異質な沈黙の中にあった。

——その時。

まるで緋雨の思考を読み取ったかのように、女の悲鳴が夜闇を切り裂いた。

(近い……！)

夜風にその余韻を残す悲鳴の源は然程遠くないようだ。その場所に目星をつけた緋雨はすぐさま駆け出した。石畳の大路を滑るように走り、細い路地へと駆け込む。弱い月光に照らし出された民家が密集して両側に並んでいた。その戸が一つだけ開いている。

緋雨は慎重に地を踏みしめながら、その民家へと足を運んだ。そして戸口に落ちている何かに気付き身を屈める。それが何の変哲も無い若い女物の衣である事はすぐにわかったが、問題はその光景が異様だった事だ。

民家と外を跨ぐように落ちているそれは、まるで地面に倒れた持ち主だけが衣を残して消えてしまったかのように、帯や皺までもが生々しいほどの人型を残していた。緋雨は腰を低く落としたまま、開いた戸口から民家の中へ踏み入れる。すぐ目の前に、今度は男物の衣がやはり同じように人型を残して落ちていた。夫婦だったのだろうか、男物の衣も女物の衣の後を追うようにその袖口が外へと伸びている。触れた指先に僅かな温もりを残す感触が、まだ持ち主が消えて間もない事を語っていた。

間違いなく、魔物に喰われた者の痕跡だった。

(厄介だな)

緋雨は苦い表情を浮かべながら胸中で一人ごちる。

衣だけが無傷で残っていると言う事は、肉ではなく魂を喰われたと言う事だ。少なくとも下級の魔物に出来る芸当ではない。無意識下にすぐ拔刀できる位置に手を添えて、緋雨は再び暗い路地へと戻った。

夜目は利く方ではあるが、どこかに潜んでいるであろう魔物には到底及ばない。一步踏み出すたびに全身の感覚器官を極限まで高めながら、ゆっくりと路地を進んでいく。程なくして、路地の終わり

が見えてきた。その先は先程とはまた別の大路へと繋がっている。

だが、後数歩でその場所へたどり着くと言う間際、全身の毛を逆撫でされるような鋭い悪寒が緋雨を襲った。

反射的に振り返った緋雨の額を冷たい一筋の汗が伝う。視線の先には相変わらず音の無い路地が続いていたが、一瞬でざわめき始めた鼓動が気のせいではない事を顕著に伝えていた。確実に何かが近くに存在している。だが、それと対峙するにはこの狭い路地はあまりにも不利だった。そう感じた緋雨は小さく息を吐いて、とりあえず目の前の大路へ出ようと前へ向き直った。

――刹那。

「っ……!?!」

緋雨の意に反して、その身が大きく左に傾く。そして抵抗する間も無く強い力で闇の中へ引きずり込まれた。

状況を判断するまでに数秒を要し、緋雨が見上げるとそこには夜闇よりも濃い宵色があった。大人一人がやっと入れるかと言う民家と民家の間。その狭い空間に密接して向き合っていたのは見覚えのある存在だった。

「真……っ」

呼ぼうとした名の主は、素早く緋雨の口を手で塞いだ。

「声を出すな、気付かれる」

抗議の視線を向ける緋雨を低い声で制し、真守は顎の先でどこかを示した。不覚にも真守の腕に抱かれるような状態では自由に動く事すらできず、緋雨は息苦しさに眉を寄せながらそちらに目をやる。

そこは緋雨が歩いていた路地だった。だが、特に何の異変も無いように見える。

「よく見てみる、影の中だ」

緋雨の思考を察したか、眞守が囁いた。緋雨は目を凝らして黒々とした影の中を覗き込む。すると、その中を素早く移動する何かの姿を捉えた。

少しの間見ていると、動きを止めたそれはようやく全体像を明らかにする。猫ほどの大きさの鼠に似た魔物は、異様に長い尾をちょろちょろと動かしながら、二つに裂けた耳をそばだてている。近くにいる眞守と緋雨の気配を感じているのかもしれない。

すると眞守は緋雨には理解し得ない言葉で何かを呟く。恐らく妖術を使ったのだろう、途端に魔物は二人の気配を見失ったようにその場から立ち去ってしまった。

「影の中を移動する魔物……？」

緋雨は魔物が消えた場所をしばらくの間呆けたように見つめていた。いつのまにか眞守の手から解放された口が無意識に言葉を紡ぐ。そしてその自分自身の声に、はっと我に返り怒りをあらわにした。

「お前っ！ 何故こんな場所にいる!？」

「随分だな、助けてやっただろう？」

眞守は緋雨の横をすり抜けると、路地に立った。自分の腕の中に小鳥のように大人しく収まっていた姿と、思い出したように怒り出す今の緋雨の対比が余程おかしいのか、眞守はこらえきれずに笑い出す。

緋雨は今宵の月明かりが弱かった事に心底感謝した。そうでなければ屈辱に紅潮した頬を、この憎たらしい妖に見られていた事だろう。

「相変わらずだな。まあ、そう牙を剥くな、何も害は与えていない。それに目的があって来たんだ」

「目的だと？」

「ああ」

緋雨が訝しげな顔を見ると、眞守は何かを感じ取るように虚空へと身を反らせた。

「なるほど。月蝕みの期で肥大化した魔物の瘴気とは毒だな。我ら妖の本能を煽る」

眞守は目線を戻すと、わざとらしく獰猛な目つきで緋雨を見つめた。だが、緋雨が身構える素振りを見せると、すぐさま笑みの形に口元を歪ませる。

「ではやはり、北の村はお前達の仕業か？」

「恐らくな。やったのは俺の一族の者だ。だが、奴らも死んだ」

「……死んだ？」

「言っただろう？ 毒だと」

眞守は体の重心を傾けながら言う。

「あいつらは、昼間は人型も保てないような一族の末端だった。魔物の瘴気で暴走した時に近くにあった村を襲ったらしい」

最終的に自我を失い、同士討ちに至ったのだろうと真守は締めくくる。まさか当の妖自身から、事の真相を聞く羽目になるとは思ってもいなかった。緋雨は次の言葉が思い浮かばずしばし沈黙する。

「月蝕みが近づけば似たような事は増えるだろうな。だが、抑える方法は然程難しくは無さそうだ」

「……出来るのか？」

「それは――」

妖の暴走を止める方法。思わず食いついてしまった緋雨だが、真守は言葉を中断して突如片腕を突き出した。直後、その掌が勢いよく飛んできた炎の塊を粉碎する。

「朱雀か……。乱暴な挨拶だな」

掌に残った火の粉を握りつぶしながら真守は炎の飛んできた方向、大路へと目を向ける。月明かりを背に立っていたのは真紅の瞳を静かな怒りに染めた青年だった。

「蘇芳！」

女の悲鳴を聞きつけて駆けつけてきたのだろう。蘇芳はほんの僅かに息を切らしていたが、すぐに整えて二本の刀を構えた。

「下がれ、緋雨」

緋雨は咄嗟に一步後ずさる。その間に、蘇芳は一瞬で眞守との距離を詰めていた。

絶え間なく繰り出される蘇芳の斬撃は、時折炎の術を伴って苛烈に眞守を攻め続ける。それらを紙一重でかわしているような眞守だったが、どうやらまだまだ余裕があるらしく、その表情には笑みが見て取れる。無論、蘇芳とて本来の力の半分も出していないのはすぐにわかった。この狭い路地でそんな事をすれば、たちまち辺りは炎に包まれてしまう。

互いに十二分の余力を残ながらも緊迫した攻防を前に、緋雨は手出しする事もできずただその様子を見守っていた。

「まったく、紅の一門とやらは気が短くてかなわんな」

「ふざけるな妖が。都に現れておいてただで帰れると思っているのか？」

急所を狙う二刀を受け流した眞守が軽口を叩くと、蘇芳はその顔をめがけて術を放つ。だがその動きを読んでいた眞守は僅かに身をそらして炎を避けると、後ろへ跳んで距離をとった。眞守は先ほどから避けるばかりで一向に攻撃を仕掛けてこない。その事が蘇芳の神経を逆撫でし、苛立ちを募らせていた。

蘇芳は一度体勢を立て直すと、地を蹴って跳躍した。鋭い切っ先が上空から眞守を捉える。

「そう熱くなるな」

だが眞守も然る者、迫る刃を敢えてぎりぎりのところでかわし、蘇芳を煽る言葉を吐きつつ反対側へ逃れる。

「若いな。それでは見えるものも、見えなからう？」

「貴様っ……！」

再び距離をおいた眞守は振り向いて目を細めた。だが、その言葉の真意は弄ばれる事に痺れを切らした蘇芳には届かない。

蘇芳の影の中で何かが蠢くのと、緋雨が声をあげたのはほぼ同時だった。

「目を伏せろ、蘇芳！」

「何！？」

蘇芳の影から飛び出した魔物が、その頬を浅く薙ぎ一筋の血が流れた。その直後、緋雨の術が完成する。

「急々如律令。照らせ、炎熱光！」
えんねつこう

膨れ上がった強烈な閃光が、瞬間的に辺りを照らし出す。

「っく！」

間近で強い光を受けた蘇芳は、咄嗟に衣の袖で視界をかばった。そのすぐ側で、甲高い鳴き声が響き渡る。目を焼かれた魔物が、苦悶の呻きを漏らしながら足元でたたき回っていた。

緋雨は魔物の視界が戻らぬ内に、その喉元へ刀を突き立てた。吹き出した黒い体液が粘着質にどろりと顔にこびりつく。慣れたその感触に眉一つ動かさず、緋雨は声を発した。

「急々如律令。焼き払え、火炎輪」
かえんりん

吹き上がる炎の赤さが銀の刃を鮮やかに染め上げ、地に縫い止められた魔物が断末魔の悲鳴をあげる。魔物の体を焼き尽くし、消えた炎の余韻が刃から熱を発していた。

とりあえず他に魔物の気配は無さそうだ。一先ずの終息に、緋雨は短く息を吐いて蘇芳に近づいた。

「すまない、大丈夫か？」

やはりあの至近距離では防ぎきれなかったのだろう、蘇芳はまだ目元を押さえていた。

「ああ……。私の方こそすまなかった。それより、あの妖はどうした……？」

「もう、姿を暗ました」

「……そうか」

蘇芳は嘆息すると、その場に膝を着いた。緋雨は屈みこんで蘇芳を覗き込んだが、目元から離れた手がそれを制する。

「大事無い、心配するな」

蘇芳は柔らかく笑むと、その手で地面を押して立ち上がった。

「ところで、あの妖を知っているのか？」

「知っていると言うわけでもないが……」

緋雨は思わず言葉を詰まらせた。決して強い口調ではないが、こういう時の蘇芳は煙に巻く事を許してくれない。緋雨は仕方なく、掻い摘んで今までのことを話した。

「……なるほど」

時折眉を寄せてはいたが、蘇芳は途中で言葉を挟むことなく最後まで緋雨の話を聞き終えた。

「魔物の瘴気。確かに我々には感じられないものだ……」

蘇芳は咎めるような視線を緋雨に向ける。

「だが、妖と馴れ合うのは頂けないな。しかもあれは……恐らく長の血統の者だぞ」

「わかっている、別にそんなつもりはないさ」

緋雨は叱られた子供のように大袈裟に肩を落とすと、素早く姿を消した眞守を追うように遠くへ目をやった。先程対峙した時に、蘇芳は眞守の底知れない力を感じたのだろう。緋雨自身、どこも無くその事には気付いていた。

（本当に、厄介な事になってきたな……）

いつのまにか薄衣を纏った月が南の高い空から見下ろしている。

緋雨の深い嘆息は夜風に吸い込まれて消えていった。

第五話 交錯の宴

雨色の数珠球で誇らしげに着飾った薄瑠璃の紫陽花たちが、宮廷から漏れる賑やかな声にあわせ囁きあうように揺れている。梅雨の貴重な幕間は、日没前から始まった宴に色を添えていた。

計都一の楽士達が奏でる雅な楽の音に包まれ、贅を尽くした料理と最上級の美酒が振舞われるその場所には皇族を始め、政の中心を担う大臣達、名のある大貴族達、そして陰陽伍家と、そうそうたる顔ぶれが招かれていた。

帝の寵姫の懷妊。すなわち世継となり得る御子の命を宿した艶珠を祝う宴は、まことしやかな盛り上がりを見せていた。

だが、それが上辺だけのものである事に気付かないのは、余程政局に疎い愚か者か、天下の楽天家だけだろう。

日々勢力を強めていく帝弟派に危機感を覚えていた現帝派からすれば、これは天が与えた思いもよらぬ好機であり、逆に現帝の失脚を狙う帝弟派からすれば厭わしい事この上ない。

華やかな宴という薄幕にはとても覆いつくせぬ謀略や打算に塗れた喧騒は、たとえ両の手で塞ごうと耳に忍び込んでくるのではないだろうか。

一門の筆頭として最低限の礼節を早々と済ませ、既に精も根も尽き果てたといった様子で蘇芳は人知れず嘆息した。人の欲は時折、魔物や妖より余程たちの悪い負の力を運んでくる。蘇芳は正直そういう類のものが大嫌いだったが、立場上それを表に出すわけにも行かないのだ。

胸中で一人毒づきながら、蘇芳は宮廷女官が運んできた杯を一息に飲み干した。甘く芳醇な香りが口腔に広がる。いっそ酔ってしまえば少しはこの憂鬱な宴を楽しむことも出来るだろうが、この程度では軽い酩酊さえ期待出来ない。

空になった杯を置き再び嘆息すると蘇芳はどこへともなく歩きだしたが、ほどなくして見知った顔を見つけ立ち止まった。

柱に寄り添うように手を触れて、鮮やかな青の正装に身を包んだ青藍が佇んでいる。どこか不自然な様子の彼女は、蘇芳に気付く様子も無くどこかを見つめている。その視線の行方にはやはり正装した月白と、見た事のない女が共にいた。手の込んだ刺繍の施された見事な衣から身分の高さが伺えるその女は、親しげに月白と言葉を交わしている。もっとも、蘇芳の位置から会話の内容を聞き取る事は出来そうに無いが。

少しの間様子を見てみると、女は月白に一礼してその場から去っていった。それと同時に柱の陰に身を隠した青藍は、今初めて蘇芳に気付き気まずそうに視線を反らした。

「よう、蘇芳……と、青藍もいたか」

そこへ、当の月白が二人の元へ歩んできた。上手くやり過ごすつもりでいたのだろう青藍は、非難の意を込めて蘇芳を一睨みすると嘆息する。

「あの女性は？」

「ああ、彼女は――」

「先帝の妹君の血筋の方よ」

蘇芳が聞くと、青藍が先に答えをさらった。思わず目を丸くする月白に、青藍は冷たい視線を向けた。

「鴻鈴様こうりんと言ったかしら？」

「……ああ。そうだ」

「そう、早く身を固めることね。私はこれで失礼するわ」

月白がまいったと言う様子で後ろ頭を掻くと、青藍は矢継ぎ早に言葉を並べさっさと行ってしまった。残された月白は、啞然としている蘇芳と目が合って苦笑しながら肩を落とした。

「二人そろって立ち聞きとは、人が悪いな」

「すまない。そんなつもりじゃなかったんだが……」

「冗談だ。別になんとも思っちゃいないさ。じきに知れる事だしな」
律儀に謝罪する蘇芳にからからと笑うと、月白は外に出ようと促した。

「結婚するのか？」

宴の間から離れ適当な階に腰を下ろした蘇芳は、共に杯を酌み交わす月白に聞いた。先ほどの青藍の言葉から、なんとなく状況を察したのだろう。

「まあ、そうなるだろうな」

月白はまるで水を飲むように酒をあおると、杯を置き後ろに手を付いた。

「なるほど。青藍の様子も納得できる」

蘇芳は突き放すような青藍の姿を思い出して苦笑すると、杯を置いて立てた膝に腕を休める。

蘇芳は、かつて月白と青藍が恋仲であった事を知る数少ない一人であった。青藍が筆頭の称号を継承するよりも前の話だが、中睦まじい二人の姿は今でも思い出す事ができる。

「昔の話だ」

蘇芳の考えを察したように、月白は言う。

「あの頃は俺も……あいつも若かったんだよ」

月白は自嘲するように言うと、蘇芳へ視線を向けた。

「俺たち陰陽伍家の筆頭は、掟で皇族と結婚することが定められてる……それはあいつ自身理解してるだろうよ」

「ああ」

いつからか、青藍は月白に対して刺々しい態度で接するようになっていた。おそらくそれが彼女の割り切り方なのだろうと蘇芳は思う。

「蘇芳、好きな女はいるか？」

月白は不意に立ち上がると、窮屈な正装の襟元を緩めながら蘇芳を見下ろした。

「……いや」

唐突な問いに、蘇芳はしばし間をおいてから首を横に振った。

「そうか、ならそのままでいろ。誰も傷つけずに済む……まあ、俺が言うのもおかしい話だが」

すっかり衣を着崩した月白は、再び腰を下ろすと杯を手にとった。

「だが皮肉なもんだ。白虎だ朱雀だともてはやされてる俺達自身が、惚れた相手と一生添い遂げるなんてごく当たり前の事も出来ないんだからな」

独り言のように呟くと、月白は杯に映った月の姿ごと酒を飲み干す。

「そうだな……」

普段快活な月白にしてはめずらしく、その言葉にははつきりとした嘆きが含まれていた。蘇芳はただ短く同意を示す。その表情を僅かに曇らせたのが月の影なのか、それとも別の何かなのかは、蘇芳自身よくわかっていなかった。

睡蓮の眠る水面に月影が踊り、遙かな天上から舞い降りた星々のように無数の螢火が淡く瞬いている。一つ二つと数える側から闇に消えていく光は、空蟬うつせみに生きる者の儚さ憂いているようにも感じら

れた。

螢火の数を追う指先を止めて、緋雨は橋の欄干にもたれかかった。きつい帯に圧迫された胸元から、押し出すように長い息を吐く。そして水面に映る見慣れない自分の姿を改めて見つめ、うなだれるようにもう一度息を吐いた。

宮廷での正式な宴である以上まさか軽装で出席するわけにも行かず、嫌々ながらも身に纏っているのは少し前に緋雨が最も苦手とする老女中が選んだあの長大な装束だった。

一門を象徴する紅の生地に華美ではないものの品のある刺繍が施されているそれは、完全に足元を覆い地に引きずるような形になっている。あまりにも着慣れないものだから歩く事すらままならず、この場所に避難してくるまでに一体何度地に転がりそうになった事だろう。

数える事も馬鹿らしいと首を振ると、めずらしく結い上げた髪の上で煩わしい飾りたちがしゃらしゃらと音を立てた。宴の間からだいぶ離れた庭園の池に、賑やかな喧騒は木々のざわめきほどにも届かない。緋雨にはそれがこの上なく心地よかった。

――と。

見下ろす水面に不意に別の影が差す。

「皇后様！」

「久しいな緋雨。ああ、そうかしこまらずとも良い。楽にしておれ」

夜闇の中にあってなお輝かんばかりのその姿に緋雨が慌てて身を正すと、紫苑は笑いながらそれを制した。

「ほう、ここは螢が良く見えるな。邪魔しても構わぬか？」

「勿論でございます」

緋雨が場所を空けると、紫苑はその横に並ぶように欄干に身を寄せた。

「お一人でいらっしゃったのですか？」

「うむ。おそらくそなたと同じ理由でな」

紫苑は水面の蜚に目を憩わせながら、穏やかに笑った。

緋雨と同じ理由。つまり宴が面倒くさくなって逃げ出してきたと言う事だ。相変わらず奔放な性格の紫苑に、緋雨もつられて笑みをこぼす。

「ところで緋雨、しばし見ぬうちに随分と大人びたな」

「そうでしょうか？」

紫苑は薄化粧の施された緋雨の顔を見つめて言ったが、当の本人は全く解せないと言った様子で眉を寄せている。その様子に紫苑の悪戯心が小さく鎌首をもたげた。

「恋でもしておるのか？」

まるで好奇心旺盛な子供のように小首をかしげた紫苑の問いは、緋雨を困惑させるには十分だった。予想だにしないそれは、なんと返事を返していいものか。

「……ご冗談を」

結局緋雨は十分な間の後、もっとも無難な言葉を選んだ。

その間の百面相が面白かったのだろうか、紫苑は抑えきれずに喉の奥で小さく笑う。からかわれた事に気付いた緋雨は、ほんの少しだけ頬を紅潮させた。

「私には恋と言うものが、よくわかりません」

「そうであろうな……」

男達に混じって過酷な戦いの日々を送っている緋雨を知っている紫苑は苦笑する。それが決して嘲りの意味ではない事は、緋雨にも伝わっていた。

「皇后様は、恋をされた事があるのですか？」

「わらわか？ ふむ、どうであろう……」

普段ならば絶対にしないであろう疑問を口にしたのは、この場に紫苑と自分以外に人がいないからだろうか。緋雨は思案するように虚空をさまよう紫苑の視線を追いながら思った。

「恋を知った頃には、わらわは帝に嫁ぐ事が決まっておったからな」

「あ……」

緋雨は思わず声を漏らし、自分の発言を呪った。いくら二人きりとはいえ、皇后を相手に今の問いは踏み込みすぎであろうと。

「どうした？ 別に気にせずとも良いぞ。わらわから聞いたのだからな」

だが、紫苑はまるで気にする様子も無く微笑んだ。

「女子^{おなじ}として生まれた以上、思うままにならぬ事など遠の昔に知っておる」

毅然と語る紫苑からは、どんなこともしなやかに受け止める竹のように、凜とした力強さが感じられた。

「それを不遇だとは思わぬよ。だが……」

紫苑はそこで言葉を切ると瞳を伏せ、ぽつりと呟いた。

「子を成せぬ後に何の意味があるのだろうか……」

それはほとんど自問自答のような小さな声音だったが、その重みに緋雨は言葉を失った。

紫苑が帝に嫁いだのはもう二十年以上前の事だが、二人の間に子はない。紫苑は一度は身籠ったが、その時病魔に襲われたせいで宿っていた命を失い、そのまま子を成せぬ体になってしまったのだ。

その代わりに側室として迎えられた艶珠は二年と言う短い間に帝の子を宿したが、今日宮廷を分断する大きな要因となっている。その元凶を辿った紫苑が、自責の念を感じないはずがないのだ。

「すまぬ、今のは無しだ」

重くなった空気を嫌ったか、紫苑は大げさに首を振って笑う。緋雨はなんとも言えぬ表情で頷いたが、その視界の向こうから近づいてくる小さな二つの人影に目をとめた。

「どうしたのだ？　こんなところまで」

それに気付いた紫苑がそちらを向くと、暗がりから瓜二つな子供が姿を現した。双子の燐玉りんぎょくと燕玉えんぎょくである。

「皇后さま、緋雨さま、こんばんわ」

双子の姉、燐玉が舌足らずな挨拶をすると、弟の燕玉がその後に続いた。

「黄の君おうのきみを見ませんでしたか？」

「藤黄か？　はて、今日は見ておらぬな」

紫苑は双子に視線を合わせるように腰を屈める。

黄の君とは、幼いながら藤黄の小姓を勤める双子特有の呼び方だ。燐玉と燕玉は、黄の一門に嫁いだ烏羽の姉の子であり、その従姉弟にあたる。常に二人で動き回る愛らしい姿は宮廷でも人気があり、主人である藤黄も非常に可愛がっていた。

「藤黄様なら、西の離れにいらっしゃたぞ」

「西の離れ……？」

緋雨はこの場所に向かう途中、藤黄と挨拶を交わしたのを思い出した。だが、それを聞いた双子は顔を見合わせて見る見るうちに表情を曇らせた。

「どうした？」

「西の離れは途中にお化けの木があるのです……」

「お化けの木？」

緋雨が何のことかと思わず眉を寄せると、紫苑が何かに思い当たったようだ。

「ああ。あの大柳のことだな」

「……なるほど」

緋雨はようやく納得した。西の離れには古い柳の大木がある。昼間はそうでもないが、夜ともなれば風に揺れる柳の枝が双子に独特の恐怖を与えるのかもしれない。

「怖いのなら、わらわが共に行っても良いぞ？」

紫苑が言うと、双子は互いに顔を見合わせた。おそらく無言のうち二人で相談しているのだろう。

「やっぱり、二人だけで大丈夫です。ありがとうございます、皇后さま」

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫です！」

紫苑が念を押すように覗き込むと、双子はきっぱりと返事をした。もしかしたら大柳の恐怖より、紫苑の手を煩わせたと後で藤黄に叱られるほうが怖いかもしれない。なんとなくそれを察して、紫苑

は双子の頭に頭に手を置いた。

「そうか、頼もしいな。では氣をつけて行くのだぞ」

「はい！」

元氣良く頷いた双子の頭を撫でて紫苑が立ち上がると、双子は互いの手をとって強く繋いだ。

「それではお二人とも、失礼いたします」

そしてぺこりと頭を下げて、暗がりに向かって歩き出した。心なしかその足取りが頼りなく見えるが、それがなんとも微笑ましい。

「やはり、子供とは良いものだな」

紫苑はしばらくその後姿を見つめていたが、不意に言葉を漏らした。寂しげなその声音に対し、緋雨はいつまでも返す言葉を見つめる事ができなかった。

最たる賑わいを見せる宴の間。その中央に設えられた御座に帝、じんえい仁栄がこの上なく上機嫌に座している。そしてその傍らには世にも美しい娘の姿があった。

その肌は永劫に溶けぬ万年雪の如く白く輝き、濡羽の黒髪が艶やかに縁取る。黒瑠璃の瞳は美酒の味に僅かに潤み、白磁の頬がほんのりと朱が帯びていた。三日月のように弧を描く紅をさした唇は例えようも無く艶やかで、牡丹色の最上級の衣でさえその美貌を包む

には役不足のようだ。

娘の名は艶珠。此度の祝宴のまさしく主役であった。

「仁栄様、お願いが御座います」

帝に寄り添いその杯に絶えず酒を注いでいた艶珠は、鈴の音のよ
うな声音で言った。

「どうしたのだ？ 改まって。お前の望みなら余が何でも叶えてや
ろうぞ」

「まあ、そのようなお言葉をいただけるなんて艶珠は果報者でござ
います。ですがそれはまたの機会に……」

艶珠は謙遜の素振りを見せると、帝の耳元に顔を寄せる。

「今宵は私のためにこのような盛大な宴を開いていただいたのです
が、実はその……申し訳ないのですが先に下がらせて頂けませんで
しょうか？」

「何？ 具合でも悪いのか？」

帝は吐息混じりに甘く響く艶珠の声に浸っていたが、急に真顔に
なってその顔を覗き込んだ。

「いえ、そういうわけでは御座いませんわ。ですがあまりに賑やか
過ぎて、この子が驚いてしまうのではないかと不安なのです」

艶珠は言いながら衣の上から自らの腹部を優しく撫でた。

「ふむ、それもそうだな。よかろう、先に下がって休むが良い。余も後で様子を見に参ろう」

それを見た帝は、快く艶珠の暇乞いを聞き入れた。

「ありがとうございます。でも本当に大丈夫ですわ。仁栄様はどうぞごゆるりと」

艶珠は極上の笑顔で言うと、控えていた女官に付き添われそそくさと宴の間を後にした。

「お前達はここまでで良いわ」

艶珠は自室の付近まで来ると、急に立ち止まって付き添いの女官達に言った。

「艶珠様、ですが――」

「良いと言っているでしょう？ 今宵は少し賑やか過ぎて疲れてしまったの。お願いだから少しくらい一人にさせてちょうだい」

女官達は互いに顔を見合わせ困惑したが、艶珠に強く言われては引き下がるしかない。

「……かしこまりました。では私共は此方で失礼させていただきます。どうぞごゆっくりお休みくださいませ」

「ええ、ありがとう。お前達もたまには早くお休みなさいな」

揃って頭を下げた女官達に一声かけると、艶珠はそのまま自室へと向かって歩き出し、渡殿の角を曲がったところで立ち止まった。そして柱の影に身を隠すと女官達が去っていくのをそっと盗み見る。彼女達の姿が完全に見えなくなってしまうと、艶珠は辺りの様子を慎重に伺ってから、自室とは違う方へ歩を進めた。

余闇に紛れて歩む視界には、なんとも不気味な大柳の枝が揺れている。目的の場所に行き着くには必ず通らなければならない場所だが、やはり何度見ても慣れる事は無さそうだ。だがその先に待っているものを思い浮かべれば、自然と足は速まった。

「艶珠で御座います」

西の離れはあまり使われる事がないせいとか、手入れの行き届いた宮廷の敷地内にしてはめずらしく他に比べれば荒んでいるように思える。だからこそ人目を忍んだ逢瀬にはうってつけなのだろうと、はやる気持ちの端で感じながら艶珠は御簾を開いてその間に足を踏み入れた。

大した広さのないその間には先客がいた。

ちようど影になった顔は見えないが、男のようであった。だが艶珠はわざわざ確認するまでもなくその男の元へ歩み寄ると、すぐさま腕の中へ飛び込んだ。

「ああ……お逢いしとう御座いました」

艶珠は男の胸に顔を押し当てて、感極まったように言う。

「私もだ、愛しい艶珠。いつもこのような場所でしか逢えずすまぬな」

「いいえ。どのような場所でも貴方様に一目でもお逢い出来るのなら艶珠は幸せて御座います」

「可愛いことを」

男が微笑みながら優しく髪を梳くと、艶珠は身を預けた。

「帝の子を、身籠ったそうだな」

「はい……」

だが、男が言うと艶珠は急に泣きそうな表情で見上げた。

「ですが……例えこの身に帝の子を宿しても、艶珠の心は貴方様の物。艶珠が愛しているのは誓って貴方様だけ御座います！」

艶珠は縋り付くように、男の胸にその身を寄せた。

「どうか……どうか信じて下さいませ」

「大丈夫だ。わかっている」

いつのまにか涙色の雫に濡れた頬を拭い、男は震える艶珠を抱き寄せて唇を重ねた。

「何も案ずる事はない」

恍惚とした表情で口付けの余韻を堪能する艶珠の耳元で、男は低く甘く囁いた。

「私に任せておけ、
いずれ全てが上手くいく」

第六話 翡翠の泉

苔色の風が額に伝った一筋の汗を冷やし、心地よい余韻を残していく。引き絞った弦が腕に微弱な振動を与えてくるが、鈍く光を放つ鏃は微動だにしない。その切っ先よりも鋭く研ぎ澄まされた緋雨の双眸は、遙か前方の茂みが蠢くのを見逃さなかった。

刹那。

解き放たれた矢が緑樹の中に吸い込まれていく。次いでどさりと何かが崩れ落ちる音がした。

「やっぱり緋雨にはまだ敵わないな」

眠るように地に伏した若い牡鹿の前に、少年が感嘆の声をあげる。一寸の狂いもなく心の臓を貫かれたそれは、ほんの僅かな苦しみも感じることなく絶命したのであろう。

少年鳳明ほうめいはやや興奮した面持ちで射手を見上げた。

「ご謙遜を。鳳明様など先程あのような大鹿を射止めたではありませんか」

緋雨は苦笑しながら黒紅の背を降りたが、十になったばかりのあどけない瞳は一種の憧れにも似た光を宿していた。

夏の盛りにはやや早い、緑萌える羅喉。

普段は恐れて人があまり踏み入らないその場所は、裏を返せば獲物の豊富な絶好の狩場と言える。だからこそ日の長い夏季だけはその恩恵に預かりたいと願う者は意外に多い。

だが、結局のところ危険な事には変わりはなく、実際に狩りを楽しめるのは妖に対抗する手段を確保できる者――すなわち、陰陽師を

護衛としてつけられるような立場の者だけなのだ。

帝の甥にあたる鳳明の護衛兼狩りの相手として、緋雨がこの場に
いるのはそのためだった。

「よし、今度はもっと奥を探すぞ。付いて来い！」

勢いついた鳳明は、矢筒の中身を確認すると白の狩装束を翻して
自分の馬に飛び乗った。そして控えている数名の従者を呼び寄せる。

「それはいけません、鳳明様」

「なぜだ……？」

だが緋雨がその行く手を遮るように立つと、鳳明は怪訝な顔を
した。

「これより先は妖の聖域に近すぎます」

緋雨が言うと、鳳明は笑った。

「少しくらい大丈夫だ。そのためにお前がいるのだろう？」

「私の役目は第一に鳳明様の御身を御護りする事。いくら昼間と言
えど危険で御座います」

「この先には大狐が出ると言う噂だ。それを仕留めたい」

「それこそ正に妖で御座います。どうか御留まりください」

問答を繰り返すうちに、鳳明は徐々にいらついてきた。冷静に宥

めようとする緋雨になおも食い下がる鳳明は、もはや駄々をこねる子供そのものだ。

「僕の命令が聞けないのか！」

鳳明はついに伝家の宝刀を抜いた。もはやこっちの物だと言わんばかりに鼻を鳴らして背を反す。

「玲姫様れいぎより仰せつかっておりますので」

だが緋雨はあっさりとその刃を弾き返した。鳳明の顔が見る見る曇っていく。

「母上が……？」

「はい」

緋雨は頷きながら、鳳明に気付かれぬよう口元を歪めた。

鳳明の母、すなわち帝の妹である玲姫は、計中でも皇后に次ぐ位を持っている。政にこそ関わっていないが、その存在はまだ幼い鳳明には十分に畏怖すべき対象なのだ。

「さあ、そろそろ戻りましょう」

すっかりうなだれてしまった鳳明に緋雨は言う。

「……わかった。だけど、少し休みたい。それくらいはいいだろう？」

つい先ほど見せた覇気はどこへ行ったのだろうか、いつそ不憫な

ほどに落胆した鳳明の姿に緋雨は苦笑しながら頷いた。

狩場から離れた一行は、山道より少し奥まった溪流で休憩をとることにした。強い日差しは容赦なく降り注いでいたが、この時期でも適度な冷たさを失わない水の流れが付近の温度を快適に保っていた。馬を降りた鳳明やその従者達も、木陰に座って各々身を休めている。

溪流の側に立った緋雨は一呼吸つくと、水で喉を潤した。その冷たさに体から汗が一瞬でひいていく。だが、その格別の味を再び堪能しようとした緋雨の耳に、黒紅の異常な嘶きが飛び込んできた。

何事かと振り返ると、黒紅が前足を振り上げて暴れている。

「黒紅っ、待て！」

なんとなく嫌な予感がしてすぐさま走り寄ったが、僅かに間に合わず興奮した黒紅は突然走り出した。黒紅の俊足は主の緋雨が最も良く知っている。既に遠くなったその後姿に小さく舌打ちし、さらに足元に見つけたそれに顔をしかめた。

とぐろを巻いた大きな蛇が、威嚇するように鎌首をもたげている。黒紅が驚いて逃げた原因はこれだった。山中であれば蛇など珍しくないが、溪流のすぐ側、すなわち岩場となれば話は別だ。

「あははっ！ 上手くいったぞ！」

緋雨が明らかな悪意を感じていると、その背中に鳳明の笑い声が届いた。振り返ればいつの間にか馬に跨った鳳明と従者達が、緋雨を見下ろしている。間違いなくこの蛇は彼らの仕業だろう。一体いつの間に用意したのか。

「鳳明様、これは少々悪戯が過ぎます」

緋雨は頭痛を感じる頭を無視して、静かだが強い口調で鳳明を諫めた。

「そんな顔したって別に怖くないぞ！　いくら緋雨だって黒紅がいなければ僕達に追いついて来れないだろ？」

だが鳳明は先ほどの仕返しだと言わんばかりに、勝ち誇ったように言う。つまりまだ噂の大狐を諦めていないのだ。

「お止めください、危険です」

「だったら早く黒紅を見つけて追いかけて来ればいいじゃないか」

「鳳明様っ！」

「僕が大狐を仕留めるのとどっちが早いか勝負だ！」

精一杯の呼びかけも虚しく、いつそ清々しいほど無邪気な邪気を込めた笑顔を見せて、緋雨を除いた鳳明達一行は走り去ってしまった。

（まったく……主も主なら、従者も従者だっ！）

何故自ら危険に陥ろうとする鳳明を誰も止めようとしなのか。一人その場に取り残された緋雨は胸中で毒づいたが、すぐにそれが責任転嫁でしかないと冷静に判断した。さすがに予期は出来なか

ったが完全に鳳明にしてやられたのだ、途方に暮れている暇などない。

「鳳明様、さすがに奥に進みすぎたのでは……」

明らかに様子の変わり始めた風景に、従者の一人が不安そうに言う。

「大丈夫だ」

だが、そんな事は気にもかけず、鳳明は意気揚々と馬を進める。

いつの間にか蟬時雨は止み、鳥の声さえ聞こえなくなっていた。足元に湧き出した泉を小さく跳ね上げる蹄の音がやけに大きく感じられる。

柔らかい地面と背の高い木々はびっしりと苔に覆われ、注ぎ込む木漏れ日が泉に反射してこの場所を翡翠色に染め上げていた。まとわりつく不気味なほど冷えた空気が、暑さなど遠に忘れたはずの肌に脂汗を滲ませる。

従者達は鳳明の後ろを進みながら、顔を見合わせて互いの不吉な予感を共有した。禍々しいその感覚は、じわりじわりと確実に忍び寄ってきている。ただ一人、恐れを知らぬ若虎の如く先を行く鳳明だけが全く気付いていないようだ。従者達は今更ながら、鳳明を止めず緋雨を振り切った自分達の行いを心底後悔しはじめていた。

——と。

「この辺りだ」

鳳明は馬を止めると、従者達に目をやった。

「馬から降りろ。噂どおりならこの辺りに出るはずだ」

言いながら、鳳明は深さを増した泉の中に降りる。その水かさは背丈の低い鳳明の腰ほどまであった。

「鳳明様、緋雨の元に戻りましょう。何かとてつもなく嫌な予感がいたします……」

「今さら何を怖がってるんだ！」

「しかし……」

「ここまで来たんだ、僕は一人でも行くぞ！」

渋る従者達を一喝した鳳明は、本当に一人で進み始めた。従者達はまた顔を見合わせたが、諦めて馬から下りると鳳明に続いた。

「ほら見ろ、やっぱりいたぞ」

ほどなくして、目当ての獲物を見つけた鳳明は立ち止まった。その視線の先には、普通のものよりも二周り以上大きな狐の姿がある。

「僕の獲物だぞ。お前達手を出すな」

「鳳明様、やはり止めた方が……」

従者の最後の忠告は、もはや眼前の獲物に釘付けになった鳳明の耳に届いていなかった。堪え切れぬ笑みをかみ殺した鳳明は、伸ばした手で矢筒から矢を取り出すと弓を構えた。獲物は動く気配を見せない。

獲った。

確信した鳳明が今まさに矢を放たんと言うその瞬間、不意に足元の泉で水音が上がる。鳳明は思わず手を止めた。

水音をたてたのは従者の一人だった。否、従者の一人の一部分と言ったほうが正しい。一度泉の底に沈んだ従者の首が、澄んだ水を赤黒く染めながら浮かんで来る。ぷかりと水面に浮き出たその表情は、酷く歪に歪んでいた。

反射的に鳳明は振り向いた。

その目の前に、首から上を無くした従者が所在無げに佇んでいる。だが、間もなくその体は、お辞儀をするように鳳明に向かって倒れこんできた。引き千切られた首の断面から溢れた血が、泉の水と共に鳳明の身に降りかかる。

さらりと冷たい水の感触と、どろりとまだ生温かい血の感触。その絶妙な差異は、幼い体をつま先から頭部まで一瞬で戦慄させた。堰を切ったかのように忘れていた恐怖と悲鳴があふれ出す。

「うつ……うわあああつ！」

絶叫が、翡翠の泉にこだました。

蛇に驚いて逃げた黒紅は、あの後さほど時間を置かずに自ら戻ってきた。緋雨はすぐさま鳳明達の後を追ったが、追跡は難航を極めた。なにせある程度羅喉に慣れた緋雨ですら立ち入った事のない山

奥なのだ、闇雲に動き回って自分が迷っては世話がない。

——そこへ。

微かな悲鳴が風に乗って運ばれてきた。

（この声……！）

鳳明の声に間違い無い。緋雨を出し抜いた彼自身の悲鳴が、その居場所を知らせるとは何と言う皮肉だろう。だが、そんな事はどうでもよかった。緋雨は即座に馬首を返すと、悲鳴の源へ向け道無き道をひた走った。

（間に合えっ………！）

第七話 緑樹の攻防

「……っひいいいっ！」

首を無くした仲間の姿に、四人になった従者の一人が女のように裏返った悲鳴をあげて後ずさる。それに呼応するように残りの従者達は我先にと逃げ出した。

「おっ……お前達っ！ 僕を置いて行くな！」

置き去りにされかけた鳳明は慌ててその後を追うが、薄情な従者達は誰一人足を止めることなく、後方へ残した馬の元へ殺到する。

だが、異様な気配に怯えた馬達は逸早く走り去り、逃げる手立てを失った従者達は思わず立ち止まった。

直後。

「ぎゃああああっ！」

突如従者の一人が絶叫した。見ればその右肩から下が消失し、勢い良く噴出した鮮血が雨のように降り注いでいる。そして鳳明達は、赤い液体を撒き散らしながら崩れ落ちる従者の向こう側に、その存在を見とめた。

今しがた引き千切ったばかりの従者の右腕を啜えて、大狐が佇んでいる。その背後から一匹、また一匹と現れた狐達に、鳳明達はいつの間にか取り囲まれていた。鋭い殺気が、輪の中の彼らに突き刺さる。

「愚かな人間共め、翡翠の泉に踏み入って生きて帰れると思うなよ」

血の滴る腕を振り落として、大狐は唸るように声を発した。同時に、狐達が一斉に身構える。

「妖狐だ……」

絶望に苛まれた震える声で、誰かがぼつりと漏らした。

緋雨は疾走する黒紅の背で抜刀し、行く手を遮る細枝や蔓を払いのけるように切り捨てる。その耳に、鳳明ではない誰かの声が届いた。血の匂いが風に乗って漂ってくる。

近い。

また一つ邪魔な枝を切り落とし、黒紅の脇腹に蹴り入れた。その馬蹄が水音をあげると同時に、緋雨の視界が開ける。

その目は、無数の妖狐の中で動く白い人影を見逃さなかった。鳳明だ。ただ一人小柄な幼い体が幸いし、飛び掛る妖狐の爪をなんとかかわしている。

だが、それも長くは続かなかった。泉の深みに足を取られた鳳明は、派手な水飛沫をあげて転げる。その絶好の機を、妖狐達が見逃すわけは無かった。立ち上がった鳳明から悲鳴がほとぼしる。一匹の妖狐が眼前に迫り、今にも飛び掛らんと身を低くしていた。

（いけないっ……！）

乱入者を狙う妖狐を蹴散らしながら黒紅が突き進む。鳳明の元まで後僅か。だが今から術を放っても間に合わない。

「鳳明様っ！」

妖狐が跳躍するその場所へ、急ぎ刀を納めた緋雨は身を投げ出した。鳳明の首を狙った妖狐の爪が、飛び込んできた緋雨の右腕を捉える。

「ぐうつ……！」

噛み締めた緋雨の唇から低い呻きが漏れた。衣を裂き、皮膚を破った爪が肉を抉る。骨を掠めるその感触に全身の肌が粟立ち、灼熱のような激痛が駆け巡った。緋雨は構わず鳳明の体を包み込むように庇いながら、再び泉へと押し倒した。その軌跡に血花が散り、水飛沫が上がった。

一瞬泉へ沈んだ緋雨は鳳明の手を引いて即座に立ち上がり、刀へと手を伸ばす。

「痛っっ！」

だが引き裂かれるような痛みがその動きを阻んだ。咄嗟に左手で押さえた傷口から流れ出す多量の血が、既に緋雨の白い指先まで赤く染めている。

「緋雨、腕がっ……！」

その光景に鳳明が声をあげたが、緋雨は傷口から手を離し左手で無理やり抜刀する。振り返る勢いを利用した斬撃は、隙を突いて飛び掛ってきた妖狐の鼻先を掠めただけだった。妖狐はすぐさま体勢を立て直し、再び身構える。緋雨は歯噛みすると、鳳明を背中のほうへ庇いながら刀を持ったまま印を切った。

「急々如律令！ 駆けよ、爆炎烈波^{ばくえんれつぱ}！」

渦巻く炎が空中で妖狐の動きを止める。だが泉へ落ちた妖狐はその水で炎を掻き消し、後ろへ跳んで一声鳴いて見せた。

「くそっ……！」

緋雨は毒づいた。

水の気に満ちたこの場所は、緋雨にとって最も分が悪い。加えて利き腕の怪我で刀はまともに振るえず、体中を這い回る悪夢のような激痛が徐々に集中力を奪っていく。そして何より、護らなければならぬ鳳明の存在。この状況では、そう長く持ちそうに無い。

「鳳明様、走れますか？」

やや警戒気味に取り囲む妖狐たちを掲げた刀で牽制しながら、緋雨は背後の鳳明に囁いた。

「うん……だけど、緋雨……」

鳳明は繋いだ緋雨の手から伝い落ちてくる血に、不安そうに見上げてきた。だが緋雨は痛みを押し殺して笑って見せる。

「この程度、ただのかすり傷で御座います。それより目をお閉じください。私が合図したら走ります」

「わかった」

鳳明が頷きながら目を閉じると、緋雨は印を切った。

「急々如律令。照らせ、炎熱光！」
えんねつこう

緋雨を中心に強烈な閃光が迸った。目を焼かれた妖狐たちの包囲網に僅かな隙が生まれる。

「行きます！」

その場所へ、緋雨と鳳明は全力で走った。足場の悪さは災いしたが、それでも妖狐達の視界が戻るまでに二人は黒紅の元へなんとかたどり着く事ができた。鳳明は緋雨に手を借りて黒紅の背によじ登る。

その時。

ぞくり、と緋雨は戦慄した。

何かとてつもない気配が不意に現れたのだ。反射的に振り向いた緋雨の額に、冷たい汗が流れた。好転しかけた状況が、また悪いほうへ確実に傾き始めている。そう気付いた緋雨は一瞬迷ったが、すぐにそれを断ち切って声を発した。

「東雲！」

赤い光が収束し、虚空から東雲が姿を現す。泉に降り立った紅蓮の式神は、常に無を宿すその瞳を苦しげに歪めた。炎の化身と言っても過言でない東雲にとって、この場所は存在しているだけで苦痛なのだ。

「鳳明様を計都までお連れしろ」

無論、呼び出した緋雨は十分にそれを理解している。この場で戦えなど、愚かな命令をする気は更々無い。

「緋雨？」

その命令の意図をつかめず、鳳明が不安そうに見下ろしてきた。

「鳳明様、これより先は東雲が御護りいたします」

「お前はどするんだ？」

「私はここで妖の足を止めます」

「なっ……！　僕だけ逃げろって言うのか！？　馬鹿言うなっ！」

鳳明が一瞬呆けたように目を丸くして、次の瞬間には激昂した。

「ご心配なさらず、東雲は風のように身軽です。共に乗っても黒紅は鳳明様お一人の重さしか感じません」

だが緋雨は淡々と告げると鳳明から目を背けた。

「そうじゃないっ！　緋雨っお前も——」

「何をしている東雲！　早く行けっ！」

あまりにも冷たい物言いに鳳明は悲鳴のように声をあげたが、緋雨の一喝がそれを阻んだ。

「……承知した」

東雲は黒紅の背に跨ると暴れる鳳明を押さえつけ、黒紅の耳に何かを囁いた。妖と同じように式神もまた、動物と心を通わせる事ができる。そして、大きく嘶いた黒紅は弾かれたように駆け出した。

最後まで名を呼び続ける鳳明の声が、余韻だけを残して消えてい

く。遠ざかっていくその気配を感じながら、緋雨は袖口の衣を噛んで引き裂くと、素早く傷口に巻きつけた。一応は止血のつもりだが、申し訳程度の役にたっているかすら怪しいものだ。巻いた先からそれは溢れる血に湿ってくる。

自嘲して笑うと、緋雨は振り向いた。その先には随分前に視界を取り戻したはずの妖狐達の姿がある。彼らが何故襲って来ないか理由はわかっていた。待っているのだ、おそらくは先ほど感じた気配の主を。だからこそ、鳳明を逃がす余裕があったのだ。

「ほう。私の気配を感じて小僧だけ逃がしたのか」

そしてそれは唐突に姿を現した。

群れを成していた妖狐達が、その存在に場を空ける。自らのために作られた道をゆったりと踏みしめて姿を現したのは白銀に輝く巨大な妖狐だった。

百年生きた妖狐はその尾が割れてさらに力を増すと言う。それならばこの九尾の妖狐は少なくとも九百年以上の齢を重ねているのだろう。間違いなく、妖狐達を統べるこの聖域の主だ。

対峙しているだけでそのとてつもない威圧感に押し潰されそうになる。下手をすれば立ってられないほどだった。

「なるほど、手負いか……」

九尾の妖狐は緋雨の腕を見やると、不意に足を止める。するとその体は瞬く間に縮んで人型をとった。

「足の遅い獲物をじわりじわりと追い詰めて狩るのもまた一興」

髪先从衣まで全身に白銀を纏った男の姿は、冴えた月光のよ

うに伶俐で美しい。目が合っただけで凍てつくような冷たい双眸が、
寧猛に緋雨を捉えた。

「楽に死ねると思うなよ、小娘」

残酷でいてどこか甘美にすら聞こえる低い声が響く。

絶体絶命とはこう言う事だろうか。緋雨はどこか他人事のように
思った。元から勝算など無いのだ。それでも何故か、緋雨の口元には
僅かな笑みが浮かんでいた。

羅喉に狩りに出ていたはずの鳳明が一人で戻ってきたというその
知らせは、普段静寂に包まれた宮廷を俄かに浮き足立たせた。帝への
定例の謁見を終え月白と共に帰途に着こうとしていた蘇芳は、その
知らせを耳にするとすぐさまその場所へ走った。

宮廷の正門前には既に侍従や女官の入り混じる人垣が来ている。
彼らの視線の先には青毛の馬——黒紅にまたがった鳳明の姿があった。
どうやら鳳明は気を失っているらしく、ぐったりと馬首にうな
だれている。だが、黒紅が異様に興奮して暴れまわっているため、
周りの者は迂闊に近づく事ができないのだ。

「鳳明様！」

蘇芳は木偶でくのぼうの坊のような人々の間に割って入ると、振り上げられ
る黒紅の前足を避けてその手綱を取る。そのまま二、三言声をかけ
ればようやく落ち着いた黒紅が一度大きく体を震わせて大人しくな

った。

「う……」

今の振動で気付いたのか鳳明が小さく身じろいだ。

「鳳明様、ご無事ですか？」

「蘇……芳……？」

うつすらと開いた視界に蘇芳の姿が映る。自分の体を支えるその存在に安心し、再び目を閉じようとした鳳明はそこではっと我に返ったように身を起こした。

「蘇芳！ どうしよう……っ僕のせいで……！」

「落ちていてください、鳳明様。一体何があったのですか？」

突然泣き出して取り乱す鳳明に面食らったが、蘇芳は出来うる限り発する声の調子を落とす。

「ぼ、僕が悪いんだ……緋雨が止めたのに妖の聖域に入ったんだ……そしたら妖狐達に襲われて……」

「それで……他の者は？ 従者や緋雨はどうなったのです？」

しゃくりあげながら途切れ途切れに発せられる鳳明の声に、蘇芳の顔色がさっと変わった。

「従者達はみんな死んでしまった……緋雨が僕を助けてくれたんだ」

「お一人でここまで……？」

蘇芳はもどかしさに詰め寄りたくなる気持ちを必死で抑えていた。下手をすれば鳳明の肩を揺さぶってしまいそうだ。

「緋雨の式神がずっと護ってくれてたんだ。だけど……途中で消えてしまって……そこからはもう覚えてない……」

最後のほうは嗚咽交じりでほとんど言葉になっていなかった。だが聞き取れたところでもはや蘇芳にとって無意味だった。

鳳明が一人で黒紅に乗っているのを見た時点で感じていた嫌な予感は、確実なものになりつつあった。

本来式神とは主の霊力を対価に具現化し、その力を発揮する。鳳明を護っていた東雲が突如姿を消したと言うのは、主――すなわち緋雨の身に召喚を保ってられないほどの何かが起こったと言う事だ。

蘇芳は泣きじゃくる鳳明を黒紅から抱き下ろし、今さら近づいてきた侍従の男に預ける。すると、自らの手にべつとりと嫌な感触が残った。眼前にかざした掌は想像と変わらず血に汚れている。去って行く鳳明は特に怪我など負っていないようだが、その狩装束もまた血染めとっていいほどになっていた。

思考の途中で、無意識に蘇芳は駆け出していた。

「おい、蘇芳！」

その様子に、今まで静観していた月白は慌てて蘇芳の腕を掴み立ち止まらせた。

「気持ちわかるが落ち着け。まさか一人で行く気じゃ——」

「その手を離せ、月白」

「っ！」

振り向いた蘇芳の双眸に射抜かれて、月白の全身が一瞬で粟立った。

真紅の瞳が冷たい炎のように燃えている。静かだが、とてつもない激情がその中に宿っていた。これが自分のような人間でなければ、目が合っただけで射殺されていたのではないかとすら思ってしまう。蘇芳がこんなにも感情をあらわにするのは初めてのことだ。

「蘇芳、お前……」

その気迫に、月白は思わず手を離した。声が震えているのが自分でもわかる。もはや、そのまま厩の方角へ走り去る蘇芳を止める事などできなかった。

走る。ただ走る。いや、走っていると言うよりただ力の限り体をひきずっているに過ぎない。

鉛のようになった体は想像以上に言う事を聞かず、もう何度目に

なるだろうか緋雨はその場に転がった。右腕の感覚は既に麻痺して痛みはさほど気にならないが、止血代わりの衣は随分前から役に立っておらず、未だ流れ出す血が止まる様子は無い。

致死量の失血と言う経験は無いが、おそらくこれ以上続けば命は無いだろう。あるいはとつくにその域に達しているのかもしれない。動き回っているはずなのに一向に暑くならず、むしろ自らが流す汗に寒気を覚える程体が冷え切っていた。

「っち……!」

気を抜けば遠のきそうになる意識を無理やり保って立ち上がった緋雨は、僅かに感じた風に再び身を投げ出した。反転する視界を鋭利な水の刃が難いで行く。頬に一筋の赤い跡を残したそれは、先にある木を貫いて穴を空ける。僅かにでも反応が遅れていれば、そうになっていたのは自分自身だ。

「どうした、逃げぬのか？」

霧散した水の刃が飛来した方向から冷たい声が響く。苦々しく緋雨が目をやれば、白銀の男がさも楽しそうに歩いてきた。

楽に死ねると思うな。

男の姿になった九尾の妖狐は確かにそう言った。

翡翠の泉を離れてどれくらいになるのかは見当も付かない。だが、男はその間大した攻撃はしてこなかった。逃げれば追い、止まれば痛みを与えてまた追い立てる。あくまでも獲物である緋雨が諦めるのを待っているかのように、その執拗な追跡はいつそ蛇のようだ。

(なぶり殺しと言うわけか……)

絶対優位の狩りを一方的に楽しむ捕食者の顔。緋雨は美しい青年

の顔に浮かぶ酷薄な冷笑をそう例えると、地に手を着いて立ち上がり、木に寄りかかりながら何とか印を切る。

「急々如律令……覆え、妨煙霧^{ぼうえんむ}」

緋雨と男の間を煙幕が覆う。

「無駄な事を」

その向こう側に消える妖狐は鼻を鳴らして嘲笑した。だが、相変わらず攻撃は仕掛けてこない。

緋雨はさらに重くなった体を引きずった。煙で身を隠そうと鼻の利く妖狐には無意味であり、何より流した血の跡がわかり易く自分の位置を知らせてしまう。それでも術を放ったのは、単純に妖狐に背を向ける事への僅かな抵抗でしかない。

——と。

「つく……!?!」

なんとも情けないと、自嘲した直後に体が傾いた。気付かずに踏みしめた脆い土が崩れ、崖下へと誘う。普段ならば絶対にありえない不注意だった。

（しまった……!）

そんな些細な集中力さえ保てない自らの体と精神に毒づきながら、緋雨は奈落へ落ちるような気分で崖を転げ落ちた。

「かはっ……！」

何度か途中の茂みにぶつかったことが幸いし減速したが、それでも地に叩きつけられた緋雨の衝撃は軽いものではなかった。気道がつまり激しく咽る。その視界がぐらりと揺れた。

(……まずいな)

荒く息をつきながら緋雨は思った。遠のく意識もそうであるが、何より完全に現在地を見失ってしまった。

(死ぬのか……私は……?)

朦朧とする意識に、意味の無い自問自答。崖から落ちた衝撃で体中に出来た打撲が忘れていた痛覚を取り戻す。

いっそこで倒れてしまったほうが楽なのではないか。

そんな馬鹿げた考えすら浮かんだが、緋雨はふとある音を耳にした。涼しげな、小さく流れる水の音。かすむ視界の先に清流がある。それは、既視感を覚える光景だ。

(そうかここは……)

目の前の風景には見覚えがある。緋雨は自分が今何処にいるのか気付きなんとか体を起こしたが、その足に弾かれたような衝撃が走った。

「っあああ……！」

自分でも信じられないほど高い悲鳴があがった。受身も取れずに地面に叩きつけられた緋雨は、口内に入った砂利に顔をしかめてそ

れを吐き出す。左足を貫通した新たな傷口から血が流れ出していた。

「無様なものだ。そろそろ終わりか？」

地に伏したまま振り向けば、急激に霞んでいく視界の先でいつの間にか現れた男が笑う。

「……殺せ」

ただ一言、緋雨は言う。もはや立ち上がることも出来そうに無い。

「ほう、死を恐れぬか。小娘にしては中々の度胸だ」

弱く笑んだ緋雨に男は感嘆とも取れる言葉を漏らす。その指先が真っ直ぐに緋雨へと伸ばされた。男の背後で鋭く研ぎ澄まされた水の刃が無数にこちらを向いている。それらが解き放たれば一瞬で終るだろう。そう悟って、緋雨は目を閉じた。

――だが。

「騒がしいな。これではおちおち昼寝も出来ん」

不意にその場に似合わぬ呑気な声が割って入る。妖狐とは対照的な闇色を纏った男が佇んでいた。

「真守……」

その名を白銀の男が呼んだ。水の刃はいつの間にか消えていた。

「何の騒ぎだ？ 伽羅衣^{からぎぬ}」

眞守はどこか不遜な笑みを浮かべ、伽羅衣という名の妖狐へ問いかける。

「なに、我が聖域に踏み込んだ愚かな獲物を狩りに来ただけのことよ」

その声音に伽羅衣はぴくりと眉を跳ね上げたが、口元を吊り上げて言った。

「ほう。それで、その獲物とやらは仕留めたのか？」

「いいや、まだお前の後ろにいる」

「俺の後ろ？」

伽羅衣が顎の先で示すと、眞守はまるで今初めてその存在に気付いたとでも言うように、倒れている緋雨に目をやった。

なにが起きているのかよくわかっていないのか、その瞳は大きく見開かれている。眞守は一瞬だけ交錯した視線をさらりと流して再び伽羅衣を見やった。

「そんな者はいないようだが？」

「その小娘の事だ！」

馬鹿にされていると思ったのか、伽羅衣は苛立って緋雨を指差した。

「ああ、なるほど。こいつはお前の獲物だったのか」

すると眞守は再びちらりと後ろを振り向いて、わざとらしく頷いて見せた。

「そうだ。わかったらさっさと――」

「だが残念だったな。こいつはもう俺の獲物だ。俺がもらう」

「何だとっ!?!」

早くこちらに渡せと言いかけた伽羅衣は眞守のふざけた言葉に啞然とし、すぐに怒りをあらわにした。

「戯言を。その小娘は我が追ってきた獲物だ!」

「確かに元はお前の獲物だったかもしれん。だが、あの崖から下は俺の領域だ。そこで見つけたなら俺の獲物だろう?」

「屁理屈を! 我を愚弄するのかっ!?!」

「愚弄?」

激昂する伽羅衣を眞守は冷めた目で見つめた。

「我ら妖は互いの領域に関して不可侵のはずだ。お前のように無駄に長く生きていると、そんな事も忘れるのか?」

「貴様、我がいつまでも下手に出ていると思うなよ……っ!」

慇懃無礼な眞守の言葉に、伽羅衣は眉間に深く皺を刻んだ。怒りに握った拳が小刻みに震えている。

「だったらどうだと言うんだ。得意の水芸でも見せてくれるのか？」

嘲笑を浮かべた眞守の挑発は、伽羅衣の神経を見事に逆撫でした。

「思い上がった山狗の若造めが！　そもそもたかが数百年生きた程度の貴様風情が、おうぎょう邑夾の後釜というのも気に喰わんのだっ！」

怒りに燃えた伽羅衣が吼え、その背後に渦巻く水流が現れる。

「その忌々しい口、二度と利けぬようにしてくれる！」

水流が巨大な槍となって宙を駆け、その凶暴な刃は途中の岩をも砕き眞守へと殺到する。だが眞守は避ける事すらせず手をかざしただけだった。襲い掛かった水の槍は、その手に触れる寸前で勢いを失いただの水となって地に落ちる。

「お前の力では俺には勝てん。そんな事も忘れたのか？　哀れだな狐。歳はとりたくないものだ」

「貴様っ……！　許さんっ！」

哀れむような眞守の視線がまた伽羅衣の怒りを燃え立たせる。先ほどより多くの水の刃をまとして、今度は伽羅衣自身も眞守に向かって突進する。

「失せろっ！」

だが眞守の怒号が、その動きを止めた。

地面が波打ち、大気が悲鳴を上げる。迫る地割れを咄嗟に避けようとした伽羅衣の体は、見えない波動に捕らわれて血飛沫を上げた。

「ぐあぁっ！」

悲鳴をあげて地に叩きつけられた伽羅衣は、本来の九尾の妖狐へと姿を変えた。今の一撃で、人型を保ってられないほどの傷を負ったのだ。

「貴様……この屈辱忘れぬぞ……っ！」

よろめいて立ち上がった伽羅衣は激しい憎悪を向けたが、眞守に睨まれ文字通り尻尾を巻いて逃げ去った。

（あいつ、やはり強い……）

朧げな視界で、緋雨はその光景を見ていた。最初に出会った時から眞守の底知れない力を感じていたが、伽羅衣を雑魚のようにあしらうそれはあまりにも圧倒的過ぎた。

「やれやれ。派手にやられたものだな」

そんな事を思っていると当の本人が、血と泥にまみれてぼろ布のようになっただけを見下ろした。まるで何事も無かったかのように、眞守は穏やかに笑っている。

「生きているか？」

見ればわかるだろう。

たわけた問いにそう言ってやりたかったが叶わず、緋雨はそこで意識を手放した。

第八話 秘する心

鈴の音に似た虫の声が夜気をゆったりと振るわせる。絶え間ないその響きにぼんやりと耳を傾けていた蘇芳は、体重を預けた高欄が微かに軋んだのに気付いてふと視線を上げた。思いの他明るい月光に細められた瞳は、いつのまにか少し前の出来事を映し始めていた。

「緋雨ーっ！」

緑林に叫びが響き渡る。長く尾を引く木霊が弱まると、ひぐらしの鳴き声がその後を引き継いでいった。夏の長い日に追いつこうと、夕暮れが近づいてくる。そのゆっくりとした足取りでさえ今の蘇芳には絶望的な速さに思えた。

羅喉に入って早や数刻。休み無く動き回っているせいで全身が汗にじっとり湿っていた。だが、その不快感よりも過ぎて行く時間のほうが余程蘇芳を苛立たせている。

山道に近い溪流で見つけた鳳明達のものと思われる足跡を辿るのはそれほど苦勞せず、妖狐に襲われたという話から彼らが踏み入ったのが翡翠の泉と呼ばれる聖域だというのはすぐに見当が付いた。事実、陽炎かげろうの術を使って様子を伺った翡翠の泉には、惨殺された従者達の死体が転がっていた。だが、その中に緋雨の姿は無かったのだ。つまり生きている可能性はある。

額に流れる汗を乱暴に拭って、蘇芳は天を振り仰いだ。その脳裏に、鳳明の衣を染めた紅が思い出される。恐らくあれは緋雨の血だろう。

「緋雨、どこにいる……？」

仮に生きていたとしてもあの出血量から考えて無事とはいい難い。募る焦燥に思わず言葉が漏れた。

――と。

蘇芳は自分の頬を掠めた葉の感触に、手綱を引いて白鳳の足を止めた。触れた指先に僅かに何かが付着する。粘着質なそれは、やや黒く変色を始めた血だった。蘇芳は目を丸くすると、すぐさま地に降りて周囲の様子を伺った。すると、木々の葉にまだ乾ききらぬ血の跡が点々と続いているのが分かる。

緋雨だ。何の根拠も無く、蘇芳は確信する。

そして蜘蛛の糸を辿るように血痕を追っていくと、ある地点で足を止めた。脆い土が僅かに崩れて小さな音をたてる。手綱を引いて白鳳を下がらせると、蘇芳は慎重に崖から下を覗き込んだ。その眼下には茂みが広がっており、この位置からでは様子を伺えない。

（迂回するしかないな……）

崖はそれほど急というわけでもなかったが、それでもこのまま下るのは不可能だろう。気分的には構わず駆け下りたいほどだったが、蘇芳は再び白鳳の背に跨ると崖下へ下る場所を探した。

獣道からやや強引に崖下へ降りた蘇芳は、先ほど見下ろした場所で再び血痕を見つけた。だがそれはすぐ近くの清流の手前であったりと途切れている。

（……どうということだ？）

この場所で緋雨が力尽きたのなら、死体があるはずだ。最悪それを獣が喰らったとしても残骸くらいは残っていても不思議ではない。血痕の前に屈んだ蘇芳は眉を寄せたが、立ち上がって辺りを見回す。その視線は不自然な地の裂け目で止まった。真新しいそれは、あき

らかに何かの意図を持って生じたように思える。蘇芳は清流へと視線を戻した。流れを下れば麓へと、遡れば峰へと道は続く。

「行こう。こっちだ」

地を裂く様な真似が出来るとすれば、その相手の居場所は考えるまでも無い。迷うことなく蘇芳は清流を遡る道を選び、白鳳の手綱を引いて促した。

その後、清流を遡った小高い丘の上、瑞々しい葉を茂らせた桜の大樹の下で緋雨を見つけた。大樹にもたれている緋雨に意識は無く元々白い肌は蒼白だったが、幸いな事に呼吸だけはしっかりしていた。

その体を白鳳に乗せて、共に屋敷へと戻ってから丸一日が過ぎようとしている。まどろむような回想を止め、高欄から身を引いた蘇芳は部屋の中へ入った。

飾り気の無い必要最低限の調度しか置かれていないため、屋敷の中でも広い部類にあたる部屋はなおさらそれを誇張して見える。唯一女子らしい漆塗りの手鏡は、無造作に伏せられたまま部屋の隅に追いやられていた。それらがこの部屋の主の性格を見事にあらわしているようで、蘇芳は苦笑しながら奥に設えられた床の前に膝を着く。

床の上では蘇芳の苦笑などいざ知らず、緋雨が眠っている。ゆっくりと規則正しく上下する胸から安定した呼吸が見て取れたが、あとげない寝顔が何よりの安堵を蘇芳にもたらした。いつも以上に幼く見えるその表情に、蘇芳が優しく目を細めていると、不意に緋雨

が目を覚ました。

「気付いたか」

現状を把握しようと宙を彷徨う視線が、その声に導かれて蘇芳へと向く。

「……蘇芳？」

見慣れた姿に緋雨はまだ焦点の合わない瞳を一度瞬いた。

「蘇芳！ 鳳明様は——っう……！」

そして急に身を起こした反動の痛みで言葉を詰まらせる。

「馬鹿者。命に別状は無くても、そんなにすぐ動いて良い傷じゃないぞ。安心しろ、鳳明様は無事だ」

蘇芳はぐらりと揺れる上半身を素早く抱きかかえるように両腕で支えながら、宮廷に戻った時の鳳明とその姿を重ねて気付かれぬように小さく噴出した。そのままなるべく振動を与えないように床に寝かせてやると、緋雨は苦しげに息を吐いた。

「途中から東雲を呼び出し続ける余裕が無かったんだ……無事なら良かった」

「怪我也されていないそうだ。さっきお前に会いたいと言ってらっしゃると使いの者が来たが、丁重に断っておいた」

緋雨が目を覚ましたら謝っておいて欲しいと言付けされたことを

告げると、緋雨は苦笑した。

「あのお方のやんちゃが少しでも直るなら、これくらいの代償は安いものだ」

「そう言ってやれば良い」

緋雨の精一杯の皮肉に蘇芳は人の悪い笑みを浮かべたが、当の本人はまさかと顔を横に振って笑った。

「……蘇芳が私を連れて来てくれたのか？」

「ああ」

「そうか。手を煩わせてすまない……」

「いや。実際お前はよく頑張ってくれたよ。しばらくゆっくり休むと良い」

蘇芳の脳裏に自分の幻影を通して見た無惨な従者達の姿が浮かぶ。一歩間違えれば、鳳明や緋雨自身もそうになっていたのだ。

「しばらくって……どれくらいだ？」

蘇芳の言葉に何か不穏なものを感じたか、緋雨は眉を寄せながら言った。

「医者が言うには出血量は多かったが、骨も筋も無事らしい。全身の打撲も含めて一月もすれば元通りに動けるそうだ」

「一月っ!？」

せいぜい十日程度を予想していた緋雨は悲鳴をあげた。思いの他重症だった事よりも、ここぞとばかりに口うるさい老女中の小言を、療養の間ずっと聞く羽目になる事のほうが余程衝撃だった。

「そう言えば……」

拷問だと呻く緋雨を見るうちに、蘇芳はふと思い出した。

「羽衣草^{はしろもやう}が止血薬になるとよく知っていたな」

「羽衣草？」

緋雨は何のことだと言わんばかりに目を丸くした。

「腕と足の傷に羽衣草で適切な止血がしてあったそうだ。そうじゃなかったら羅喉から戻るまでに失血で死んでいてもおかしくないと言われたぞ？」

その様子に、蘇芳は屋敷に戻った後、医者から言われた言葉をそのまま伝えた。

「……蘇芳が見つけた時、私はどこにいたんだ？」

「覚えてないのか？ 丘の桜の大樹の下だ」

「桜の大樹……」

清流の近くで伽羅衣に追い詰められたところまでは覚えているの

だが、その後果たして移動できたのだろうか。その答えはすぐに出た。

「まさか、あいつが……？」

「緋雨？」

記憶の中に浮かんだ朧げな夜色の姿に、緋雨は無意識に呟いた。すると蘇芳は不思議そうにその顔を覗き込んだ。思わず緋雨ははつとする。

「いや……すまない、よく覚えてないみたいだ……」

「……そうか」

慌てて取り繕うようなその様子に何かを感じたが、蘇芳がそれ以上追求する事はなかった。緋雨の目蓋が本人の意志に反して閉じようとしている。多量の血を失い、疲労と痛みに蝕まれた体は僅かな会話でもとてつもない気力を使うのだろう。

「起こして悪かったな。とりあえず今は休め」

「すまな——」

すまないと言い終えるよりも早く、緋雨は眠りの淵へと落ちて行った。

再び寝息をたて始めたその体に、蘇芳はしっかりと布団をかけ直してやる。その時、指先が緋雨の頬を掠めた。反射的に手を引きかけた蘇芳は、少しの間の後誘われるように再びそっと手をやった。

少女特有のしつとりとやわらかな感触が掌を通して伝わってくる。

これ以上に無いほど優しく頬を撫でるうち、親指の先が寝息をたてる薄紅の唇に触れた。ぷっくりと形のいいそれを躊躇いがちにそつと辿ると、緋雨が僅かに身じろいだ。

蘇芳ははっとして手を離す。

だが緋雨は気付く様子も無く眠ったままだ。その無邪気な表情に、蘇芳は触れていた自らの手を見つめてきゅつと握ると目を伏せて首を振った。そのまま立ち上がり、床の上の御簾みすを下ろして部屋から出る。

去ろうとするその背中を照らした月は雲に身を隠そうとしていたが、隠し切れない光がとめどなくあふれ出す。見上げて、蘇芳は自嘲した。

まるで自分のようだ。

視線をそらし、もう一度部屋を見やった。下ろした御簾のせいで、緋雨の姿は隠れている。そうしたのは自分だが、何故か妙に安堵した息を吐くと、蘇芳はもう振り返らずにその場を後にした。

第九話 久遠桜の追憶

「はっ！」

鍛えられた刃が強い日差しを跳ね返し、粘り気のある銀光を放つ。気迫の声と共に緋雨は上段から大きく斬りかかった。

「遅いっ！」

蘇芳の叱責と共に対象を失った刀が虚しく宙を斬る。僅かな残像だけを残した蘇芳を目で追う緋雨は、鋭い風を感じて前方に転がる。直後、脇から蘇芳の横薙ぎが来た。

天地が逆転した視界で数本の黒髪が舞う。素早く立ち上がる勢いで突き上げた刀が、体を反転させた蘇芳のそれと交錯した。

きん、と澄んだ音が鳴り、鏗り合いの体勢で絡み合った刀がぎりぎりと言をたてる。力は数秒の間拮抗していたが、徐々に緋雨の腕が下がり始め、踏みしめた土が抉れていく。至近距離で睨みあう蘇芳と緋雨。色違いの瞳は互いに一步も引く気配を見せない。無言の応酬が続くこと数秒。

上から下へとかかる力に逆らわず緋雨は滑らせるように刀を引き、その動きに合わせ自身も真横に跳ぶ。だが蘇芳も然る者、倒れこむ流れに逆らわず身を低く踏み止まり、後ろ手に刀を振り上げる。

そこに打ち付けられた緋雨の刀を力任せに振り払って体勢を立て直し、距離をおいた。

互いに相手を正面に見据え威圧しあう。息が整うと蘇芳と緋雨は同時に動いた。

一瞬で互いの間合いに入り込んだ二人の刀がぶつかり合う。二合、三号と、打ち合い、どちらからともなく距離をとっては、踏み込ん

でまた打ち合った。二匹の胡蝶が舞うかの如く、瞬く間に体勢と立ち位置をめまぐるしく変化させていく。

だが、激しい攻防が二十合を超えると、徐々に緋雨が押され始めた。蘇芳の苛烈な斬撃が緋雨を襲う。じりじりと後退する緋雨はいつの間にか防戦一方になっていた。

その機を逃す蘇芳ではない。より激しさを増した烈火のように、猛攻が続く。

そして、ついに緋雨の手から刀が飛ばされた。同時に首元へ突きつけられる冷たい感触。皮一枚斬らない程度の小さな痛み目をやれば、真紅の瞳が鋭く細められていた。

「……まいった」

明確な敗北を悟って緋雨が言う。すると蘇芳は即座に刀を引いて鞘へと納めた。

「しばらく動いていないと体が鈍るな……」

飛ばされた勢いで地面に突き立った愛刀を引き抜き、緋雨は右腕を上下させた。

鳳明の一件で負傷してから約一月。

医者と言いつけを死守した例の老女中の嚴重な監視が功を奏し、緋雨の怪我は見事なまでの回復を見せた。蘇芳との手合わせが出来たのもそのおかげなのだが、当人は随分と不満のようだ。

「今の時点でそれくらい動ければ十分だろう」

「いや。蘇芳、もう一戦だ」

「駄目だ」

納得いかないと言わんばかりの緋雨に、蘇芳は首を横に振った。

「治りたてで暴れすぎると傷が開く」

「大丈夫だ」

「駄目と言ったら駄目だ」

珍しく駄々っ子のような姿に、蘇芳は苦笑する。

「どうしても言うのなら付き合ってもないが、次は木刀だな」

「……そんなもの、遊びにもなるものか」

蘇芳の出した打開策はお気に召さなかったようで、緋雨は憮然とした。

通常、紅の一門に属するものは剣術の稽古に木刀を用いる。だが、蘇芳と緋雨だけは例外だった。たとえ稽古であったとしても真剣を使い、だからこそ一瞬でも気を抜けば命を落とす事になる。

その緊張感を常に持ち続ける事が、極限まで精神を統一し己を高める事に繋がるのだ。実際、稽古の間に負傷した事など数え切れないが、それ故剣術において二人は他の追隨を許さなかった。

「わかった、今日はここまでにしよう」

仕方なく諦める事にして、緋雨は肩を落とした。

（まさか、またここに来る事になるとはな……）

以前は黄色い花に埋め尽くされていた背の高い草原を抜け、その先に続く緩やかな坂を登ると緋雨は思った。

久しぶりに黒紅の背に揺られ訪れた羅喉は今まさに夏の盛りを迎えていたが、うるさい程の蝉時雨はいつの間にか遠くなり、静かに流れる水音と風にそよぐ大樹のざわめきだけがその場を支配している。

桜の大樹は、相変わらず威風堂々と佇んでいた。薄紅の花の代わりに瑞々しい青葉を茂らせた枝が巨大な木陰を作っているせいで、丘全体の気温が随分と低い。

「珍しい客だな」

緋雨が大樹の幹に近づくと、頭上からそんな声が降ってきた。

「妖とは馴れ合わないんじゃないのか？」

見上げれば、高い枝に腰掛けた眞守がこちらを見下ろしている。

「……礼を言いに来たんだ」

「礼？ さて、何のことやら」

緋雨が言うと、眞守は揶揄するようにわざととぼけて見せた。

「一月前、妖狐から庇ってくれただろう」

「ああ、伽羅衣からぎぬのことか」

わかりきった答えを聞くと、眞守はそんな事かと笑いながら腰掛けていた枝から身を躍らせる。

「別に庇ったわけじゃない。妖狐一族と俺達は昔から色々あるからな。ちよつと脅かしてやっただけだ」

かなりの高さであつたにも関わらず、眞守は音も無く緋雨の横に着地した。

「だが、私をここまで運んで手当てをしてくれたのは……お前だろう？」

「羽衣草を探してきたのはあそこにいる巳聖だ。礼ならあいつに言うといい」

笑いながら眞守に示された方向に目をやると、大樹から少し離れた位置にいつのまにか鈍色の妖が現れていた。あえて気配を消していたのだろうが、全く存在に気付かなかった事に緋雨は少し驚いたようだ。

「……眞守に言われたから探してきただけの事だ」

巳聖はつまらなそうに一言だけ言うと、薄墨の瞳をふいと反らしてどこかへと姿を消した。そのそっけない態度にどうしたものかと緋雨が視線を戻せば、眞守が噴出した。

「なら別に誰にも礼などいらん」

なにがそんなに可笑しいのか、眞守は必死で笑いをこらえるように喉を震わしている。

どうもこいつといると調子が狂う。

緋雨は心の底で密かに思ったが、不思議と怒りはわいてこない。

「なぜ、人間が使う薬草を知っていたんだ？」

そのためか、自然と考えていた疑問が声になった。

「昔、とある奴から教わったんだ」

「とある奴？」

「今日は質問ばかりだな」

間髪をいれない問いに眞守は苦笑する。だが不意に空を見上げたその瞳はどこか寂しげな光をたたえていた。それはいつもどこか飄々とした眞守が初めて見せる表情だった。

「……俺が今より少し若かった頃、ある娘がいた。名は桜花^{おうか}。人間の娘だ」

遙か蒼穹の彼方から遠い記憶の糸を手繰り寄せるように、眞守はゆっくりと語り始めた。

第十話 眞守と桜花

心地よい陽気の下、桜の大樹に抱かれた小高い丘の上で一頭の馬が若草を食んでいた。その傍らにせつせと葉草を摘む若い娘の姿がある。娘は白い指先をふと止めると顔を上げた。

大樹の枝が風に揺れ、若葉たちのさざめきがその存在を告げる。ほどなくして娘の黒い瞳は、まだ早い宵の色を映した。

「……ここで何をしている？」

静かだが強い威圧感を含んだ低い響きがその場の大気を震わせる。自らの瞳に映る男の正体を察すれば誰もが恐怖に表情を引きつらせるところだが、娘はむしろ穏やかに微笑んだ。

「何をしていると聞いている」

ただ純粹に優しい光を宿す瞳を向けられて、男――妖である眞守はもう一度問うた。

「葉草を少し頂いているのです。ここには良質なものが多いと教えてもらいましたので」

「教えられただと？」

「この山の鳥や獣たち、それに草木がこの場所を教えてくれたのです」

娘の声音は一点の曇りも無く澄み切っている。まるで邪気のないその様子は、表情には出さずとも思わず眞守の方が気圧されてしま

う程だ。

眞守は改めて娘を見つめた。

長い黒髪を簡素な髪留めで束ね、うっすらと色づいた頬は採れたての白桃のように瑞々しい。まだ少女の幼さを色濃く残したその顔^{かんばせ}や体つきは色香とは程遠いが、不思議と惹きつけられるものがあつた。庭師によって丁寧^{ていねい}に育てられた大輪の牡丹と言うよりは、自然に育まれ健康的に咲いた野の花。相変わらず優しい眼差しを向ける娘を、胸中で眞守はそう例えた。

「奴らの言葉が理解できるのなら何故来た？」

言いながら、眞守はゆっくりと歩を進める。その声音に疑念を感じている様子は無い。眞守たち妖がそうであるように、人間の中にも自然の言葉を解する者は確かに存在する。ただ、その数は極端に少ないが。

「薬草の事はよくわからんが、少なくともここには俺が……妖がいる事はわかっていたはずだろう？」

眞守は娘に近づくとその長身から彼女を見下ろした。対称的に見上げる形になった娘は不思議そうに目を丸くすると、童女のようにちよこんと小首をかしげる。

「ええ。あなたがよくこの場所にいらっしゃるのは知っていましたよ」

それがどうかしたのですか。
声^{こゑ}にこそしなかったが、娘の表情からはそんな言葉が読み取れた。どうも話が噛み合っていない。

「お前……俺が怖くないのか？」

目線を合わせるように眞守は膝を折った。すると娘の双眸が稀有な色合いを見せる眞守のそれと絡み合う。

「怖い？ 何故です？」

「普通の人間は妖に遭ったら怖がるものじゃないのか？」

「確かにそうかもしれませんが、でも……あなたは違うのでしょうか？」

「……何？」

聞いたつもりが逆に問い返されて、眞守は眉を寄せた。娘はくすりと微笑むと眞守の答えを待たずまた言葉を続ける。

「あなたは優しい妖だって……ほら、あの桜の木が教えてくれたんです」

娘は導くように視線を動かした。それに答えるように桜の大樹が身を震わせる。微風になびく黒髪を手で押さえながら、娘はまた眞守に向き直った。

「大した自身だな。もし違ったらどうするつもりだ？」

「それならあなたは、最初から私を殺そうとしたでしょう？」

娘はそれまでとは異なり少し悪戯めいた笑みを浮かべた。疑問の形ではあったが否定される可能性は考えていない。そんな口調だ。

多くの人間が眞守に向けてきた怯えや嫌悪の片鱗すら、その娘は感じさせなかった。

これにはさすがに毒気を抜かれたのか、眞守は瞬きを一つすると、くつくと低い笑いを漏らした。聖域でこそ無いが、この時代に妖の領域に入り込んでおいて中々度胸の据わった娘である。

「変わった奴だな……。俺は眞守。お前の名は？」

ひとしきり笑った後、眞守は問うた。

「桜花と申します」

変わり者具合では眞守も誰かに言える立場ではないが、娘――桜花はそんなことには触れず名を告げた。

「桜花……か。葉桜の丘には似合わぬ名前だな」

つい一月ほど前にすっかり花を散らしてしまった桜の大樹を皮肉って眞守が言くと、桜花は綻ぶようにくすくすと笑う。

穏やかな初夏の昼下がり、こうして山狗の妖と人間の娘は出会いを果たしたのだった。

計都の貴族の屋敷で薬師の手伝いをしていと言う桜花は、月に数度、眞守と出会った場所を訪れるようになった。眞守はとくにそれを咎める事も無く、むしろ桜花が訪れれば他愛も無い会話を交わし、時には薬草を詰むのを手伝ったりした。

どこか妖らしからぬ自由奔放な真守と、人間でありながら自然と言葉を交わす事の出来る桜花。

本来相容れない存在であった二人が互いに強く惹かれ合ったのは、その特異さ故だろうか。蟬時雨の夏を通り過ぎ木々がその葉を落とす頃、真守と桜花の間には特別な感情が芽生えていた。

「それは何に使うんだ？」

いつものよう桜花の傍に寝そべりながら、真守は彼女が詰んでいく薬草を視線で示した。

「羽衣草は傷薬の元になるのですよ」

桜花は摘んだばかりの羽衣草を真守によく見えるよう手の中にくるくると回した。

「それに、ほら。葉がぎざぎざしているでしょう？　これはこのままでも止血剤の代わりになるんです」

「ほう……なるほどな。だからいつもその草だけは多量に詰んでいくのか」

真守は何かを悟ったように言った。すると、桜花は少し寂しそうに笑う。

「ええ。すぐ足りなくなりますから……」

小ぶりの花をつけた羽衣草をそっと籠に入れて、桜花は肩を落とした。傷薬の需要が絶えないのは、妖との戦いでそれだけ血を流す者が多いからだ。今、桜花がこうしている間にも、どこかで人と妖

は殺し合っている。この場の平穏のほうがむしろ異質なのだ。

「眞守——」

「妖と人間が争わなくなる方法は無いのか……と聞きたいんだろう？」

「……はい」

「難しいだろうな」

皆まで聞かずとも、その表情から桜花の考えは眞守に伝わってしまっただろう。

「妖と人間の争いは太古から続いている。それこそ俺が生まれるよりもずっとずっと前からだ」

眞守は身を起こすと、膝を立ててそこに体重を預けた。

「争いの原因が何だったか知っているか？」

「詳しくは……。ただ、妖の聖域にある何かだとは聞いたことがあります」

「俺達が一族ごとに護る聖域には、それぞれ特別な効能を持つ泉がある。噂を聞いて人間共はそれを欲したんだ」

眞守はあまり起伏の無い声音で淡々と言葉を紡いだ。

「最初は小競り合い程度だったが、犠牲が出るたびに火種は大きく

なった。そして結局、互いに相手を滅ぼそうとするようになった」

「……私達人間の欲が、長年の争いを生んだのですね」

「それはどうだろうな。原因を作ったのは間違いなく人間の方だが、妖も妖でそれに便乗して本能のままに殺してゐるに過ぎない。本来は何の関係もない奴まで殺す必要は無いからな」

何とも言えない面持ちで話を聞いていた桜花とは対称的に、眞守はまるで遠い世界の話をするようにふっと笑ってその瞳を伏せた。

「だが、今となってはもうそんな事誰も覚えてない。ただ妖は人間を憎み、人間もまた妖を憎む。それを疑問に思う奴の方が珍しい」

夜色の髪を風に遊ばせながら、眞守はそう締めくくるとまたごろりと横になった。冬が近いため空が高い。冷たく冴えた青に、掠れた雲が尾を引いている。その視界にふと影が差した。

「誰もが眞守のように優しければ争わずに済むのに……」

眞守の顔を覗き込むように桜花が言った。

「優しい……か。俺にそんな事を言ったのはお前くらいだが」

眞守は苦笑した。

「初めて会った時も同じ事言ったの覚えてるか？」

「はい」

確かに言いましたねと、桜花は笑った。すると眞守は少し人の悪い笑みを浮かべる。

「本当は久遠桜の奴、俺の事お前になんて伝えたんだ？」

「……え？」

何のことかわからず、桜花は首をかしげた。相変わらずその仕草が幼い。

「あの樹は間違っても俺の事を、優しい妖なんて言わないはずだ。本当は別の言い方をされたんだろう？」

「ああ……そう言う事ですね」

桜花はようやく眞守の意図を理解したようだ。

「人を殺さない妖……そう聞きました」

そして初めてこの場所を訪れた時、久遠の名を冠する桜の大樹が教えてくれた言葉をそのままに伝えた。

「やっぱりな。そんな気がした」

「気を悪くしたなら、ごめんなさい……」

「なんで謝る」

眞守は笑いながら桜花の体を抱き寄せた。黒い瞳が近くにある。まるでこの世の穢れを知らずに育ったかの

ように、無垢な光が宿っていた。あるいは全ての穢れを受け入れて、許し、浄化してしまうのではないか。そう感じてしまうほどに桜花の瞳はどこまでも澄み渡っていた。

「……さっきの言葉、そのままお前に返そう」

「どういう意味です？」

真守の胸に抱かれながら、桜花は怪訝な顔をした。

「そのままの意味だ」

それが妙に愛しくて、真守は桜花の唇に自らのそれを重ねた。

皆が桜花のように優しくければ争いなど起こらない。

真守の言葉の真意を知る事も無く、桜花は彼に身を任せたのだっ
た。

「戦いを拒む臆病者……。俺が他の妖共から何と呼ばれているか知
ったら、あいつはどう思うのだろうか」

夜風となった星々の吐息に紛れ、真守の声が草野を共に撫でて行

く。濃紺の夜闇にすら塗りつぶす事の出来ない宵色の妖は、昼間の桜花の言葉を思い出して自嘲するように笑んでいた。

「俺を愚かだと思うか？」

「……俺にはなんとも言い難いですね」

向かいに佇んだ巳聖は弱く輝く今宵の弧月のようにただ静かに言った。

「妖として生まれたからと言って、人間と争わなければならない義理は無い。あなたが昔からそう考えているのは知っています。それが次期長の考えなら俺が口出しする事じゃないでしょう」

捉え方によっては突き放したような物言いが巳聖の常だが、乳兄弟として幼少の頃から共にある眞守がそれを不快に思った事はない。そのせいか、極稀に彼の口調に現れる変化に対して眞守は敏感だった。

「口出しする気は無い……が、思ってる事はあるそうだな」

「別にあまり変わらないですよ。ただ強いて言うなら眞守、あなたは少し俺を誤解しています」

そういう時に眞守の方から促してやれば、巳聖は大抵その正体を明かすのだ。そして今日も例外ではなかったが、そこには微々たるものだが何か熱のようなものが込められていた。

「俺の役目はあなたを護る事です。それが俺の存在意義であり、それ以上も無ければそれ以下も無い。だから仮にあなたが他の妖の言

うように真に愚かであろうと、俺にしてみればどうでも良い事なんですよ」

「お前さえその気になれば、俺を打倒して次の長になることも出来るのか？」

「俺は長の器じゃないですよ、何より興味が無い……それとも、死にたくでもなりましたか？ 眞守」

巳聖はそこで双眸を細めた。射るような視線を不意に向けられて眞守が大きく目を見開く。

「……馬鹿を言うな」

「冗談ですよ」

だがそれは一瞬の事だった。眞守が鼻で笑うと同時に、巳聖もまた彼にしては非常に珍しく目に見えてはつきりと笑みを浮かべていた。

年が明け三月もすれば、深雪に閉ざされていた羅喉もようやくその道を開き始める。白銀の雪は清らかな水へと姿を変え、冷たい大地に染み渡り、眠っていた生命を呼び起こして行く。段々と暖かみを増す大気に追い立てられた冬鳥達は何処かの空へと去り、一年ぶ

りに舞い戻った鶯の声がそこかしこで聞こえるようになっていた。

「だいぶ蕾がついていますね」

久方ぶりに訪れた久遠桜の丘にも春の足音が近づいてきている。

桜花は少し背伸びをして大樹の枝に触れた。

「後半月もすれば咲きそうだな」

桜花よりも大分背の高い眞守は、悠々と枝を引き寄せるとつつと蕾の一つを撫でた。自らが最も美しく咲き誇る刹那を知っているかのように、まだその時では無いと蕾は硬く身を閉ざしていたが、ほんの僅かなふくらみが指先に感じられる。

「……ああそうか。お前はまだ見たことが無いんだったな」

眞守はふと思い出したように蕾から手を引く。桜花と出会った頃は久遠桜は新緑に彩られていた。考えてみればあれからもう一年近く経つのだ。

「満開も良いが、久遠桜は散り始めが最も美しい」

「それは……さぞかし綺麗なのでしょうね」

まだ見ぬその光景に思いを馳せる桜花はうっとりとして久遠桜を見上げています。

「ああ。この世のものとは思えない光景だ。丘全体が薄紅に染まるのは羅喉でもこの丘だけだろうな」

「……見に来ても良いですか？」

「聞くまでも無いだろう」

期待に満ち溢れた桜花の瞳に見上げられて、眞守はおどけたように肩を落とした。

「見に来い。そうすれば俺の特等席に連れて行ってやる」

「眞守の特等席ですか？」

「ああ。あそこからの眺めは格別だ……だから、どんなものかは今は楽しみに取っておけ」

「……はい」

言葉を先取りされて桜花は少し残念そうに笑ったが、背後から眞守の腕がまわされるとその温もりを感じるように瞳を閉じた。夜露に似た眞守の香りに包まれ、感じる彼の鼓動が自分のそれと溶け合って行く。穏やかな時間はゆっくりと流れていった。

いつのまにか水面をたゆたうようなまどろみの中にいた眞守が目を覚めたのは、すっかり日が傾いてからの事だった。

「……完全に寝過ぎたな」

まだ夢見心地の桜花を抱えながら、眞守は茜色に染まった空を見上げた。いつもの桜花ならばもうとくに羅喉を下りて帰途につい

ている時間だ。

「桜花、起きているか？ そろそろ帰らねばまずいだろう」

「ええ……そうですね……」

「……おい」

どうやらまだ寝ぼけているらしく、眞守に軽く体を揺すられても桜花はとろんとした瞳を向けるだけだった。これではとても帰れたものではない。ましてこの時間になれば夜行性の獣達や他の妖たちもそろそろ活動し始めるのだ。

どうしたものか。

腕の中の桜花に目を落として、眞守は思った。眞守の心配をよそに、再び寝息をたて始めた桜花はひどく幸せそうな顔をしている。無理に起こすのは忍びない。そう考えた眞守が導き出したのは結局最も簡単で確実な解決策だった。

「……ん」

覚えのある揺れを感じて桜花はうつすらと目を開いた。その視界に見慣れた愛馬の後ろ頭が映る。ぼんやりと覚醒していく意識は、自然と自分の体を後ろからしっかりと支えている存在へと向かった。

「起きたか」

桜花を抱くように馬の前に乗せているため、耳元で眞守の声がした。

「ごめんなさい……寝てしまっていたんですね」

「いや、寝過ぎしたのは俺も同じだ。気にするな」

状況を把握して、しゅんとなった桜花に眞守は笑いかける。

「それにお前が起きたならちようどいい。ここからは少しとぼそう」

眞守は桜花の乗ってきた馬で羅喉を下っている最中だったが、彼女の意識が無いためあまり速度は出さずにいた。だが、おあつらえ向きに比較的緩やかな坂にさしかかったのだ。

「上手くいけば暗くなる前に麓に出れる。しっかりつかまっておけよ？」

「はい」

眞守が念押しすると、桜花はにこりと笑って馬首につかまった。心なしか眞守の腕にも力が入り、背中越しにその体温が伝わってくる。眞守が脇腹に蹴りいれると、二人を乗せた馬は滑るように斜面を駆け出した。

「この辺りで大丈夫だろう」

視界を遮る木々がまばらになり始めると、眞守は手綱を引いて馬の足を止めた。期待以上に距離を稼いだおかげで、まだ橙色の残光が弱く辺りを照らしているうちに目的の場所へとたどり着けたのだ。この場所をあと少し進めば完全に羅喉を抜ける事ができ、その先の道は計都へと繋がっている。ここまで来れば獣や妖に遭遇する心配

もまづなかった。

「気をつけて行けよ」

馬から下りた眞守は、馬上に残した桜花を見上げた。

「ありがとう、眞守。次は桜が咲く頃に……」

桜花はそつと眞守の頬に触れると微笑んだ。沈み行く夕日に柔らかく溶けるその表情は、桜花の内面を表しているようだ。

「ああ。待っている」

暖かい何かに包み込まれるような余韻を残して桜花の手が離れると、眞守は去っていく彼女の姿が見えなくなるまでその場を動かなかった。

そうして桜花が去ってから、眞守はふと近くに人間の気配を感じ、その方向へ目をやった。無論、桜花の気配ではないが、羅喉でも人里に近いこの付近に、人間の気配を感じてもそれほど不思議ではない。

眞守がほんの少しの間気配の行方を探っていると、それはだんだんと遠ざかって行き、やがて何処かへと消え去った。恐らく羅喉から出たのだろう。とくに敵意を向けられている様子は無かったため、眞守は久遠桜へと踵を返した。

「まだ三分咲きと言ったところですか……」

それから十日ほどして再び久遠桜を訪れた桜花は、ところどころ綻び始めた薄紅の花を前に肩を落とした。

「どうやら今年は見れそうに無いですね」

残念そうに嘆息した桜花はいつものように薬草を摘むため腰を下ろす。まだ満開には程遠いが、それでも次に桜花が訪れるまで久遠桜は待つてはくれないだろう。その頃にはきつと散り切ってしまうているはずだ。

「そんなに気を落とすな。今年が駄目でもまた来年もあるだろう」

見るからに落胆する桜花が妙に可笑しくて、眞守は笑いながら彼女の傍らに寄り添った。

「また来れば良いさ」

「それまで……」

「ん？」

桜花は手を止めて眞守と視線を合わせる。

「それまで、眞守は私を待っていてくれますか？」

「どうした？ いきなり」

この一年で少し大人びたその表情が、ほんの僅かに不安の色を浮かべていた。

「また一年後も、眞守は私と一緒にいてくれるのですか？」

初めて見るその姿に眞守は一瞬戸惑ったが、澄んだ黒い瞳を見るうちにそれは消えていた。

「なんだ、そんな事を心配していたのか」

「そんな事って――」

馬鹿にされたのかと思い小さく頬を膨らませた桜花の言葉は、突然抱きしめられた眞守の腕の中で途絶えた。

「馬鹿め。俺をいくつだと思っている？ 一年など瞬きの間だ」

眞守は桜花の髪を撫でながら、その体をより強く抱きしめた。

「一年でも十年でも、一緒にいてやる」

「本当に……？」

「ああ」

珍しく随分と疑り深い今日の桜花に苦笑すると、少し身を離して正面から彼女を見据えた。

「一体どうした？　何かあったか？」

「……夢を……見るんです。ここ最近ずっと」

「どんな夢だ？」

「よく覚えていないんです。ただとても悲しい夢で……いつも途中で目が覚めるんです」

いつの間にか、桜花の双眸から涙が伝っていた。その声が、体が、何かに怯えるように微かに震えている。

「……大丈夫だ」

眞守は両の手で桜花の頬を包み込むようにすると、得体の知れない不安に駆られる彼女を落ち着かせるようにゆっくりと言葉を紡いだ。

「お前が望む限り、俺はお前の傍にいる。そしてもし、お前が望まなくなっても、俺はいつまでもここでお前を待とう」

桜花の涙をやさしく拭って、眞守は彼女の額と自分の額を合わせた。

「心の底から発した言葉は言霊となって力が宿る。だから桜花、俺を信じろ。何も心配しなくていい」

誓うように瞳を伏せた眞守に、桜花の瞳からまた一筋の涙が溢れた。

「愛しています、眞守。あなたに出会えて良かった」

まるで別れの言葉だ。

今度は逆に桜花に抱きしめられて、眞守は思った。

そして次に体を離れたとき桜花から先ほどの不安は消え去り、そこにあったのは出会った頃のようにただ純粹な光を宿す黒い双眸だった。唯一つ違ったのは、何かは分からないが、桜花自身が悟った何かがあったという事だけだ。

その何かを理解するより前に、突然現れた複数の気配に眞守が気付くのと、不意に桜花の体が硬直するようにしなったのはほぼ同時だった。

「桜花……？」

ゆっくりと背後へと倒れていこうとする桜花の体を反射的に抱きとめて、険しくなりかけていた眞守の表情はすぐに別のものへと変わった。桜花の背に、一本の矢が深々と突き刺さっている。そしてその根元に触れた眞守は、生温かい嫌な感触が掌から伝わってくるのを感じた。眞守に抱きとめられた桜花は、苦しげに息をしながら眞守を見上げた。だが瞳の焦点は既に虚ろで、その口端からは赤い雫が滴っている。何とか言葉を紡ぐとする桜花の声は、もはや掠れすぎて音になっていない。それでも必死で何かを伝えようと、弱く唇が震えていた。

――だが。

再び桜花の体がしなった。同時に、眞守の頬に真紅の飛沫が降りかかる。眞守は目を見開いた。その宵色の瞳が映したのは力の抜けていく桜花の胸を背後から貫いた鏃^{やじり}だった。か細い桜花の体には不似合いな鋼が、彼女の血に塗れて鈍く光っている。

眞守は腕の中で完全に力を失った桜花を見下ろした。微動だにしないその体から流れ出した多量の血が、眞守の衣を汚し、地面や草を染めていく。

「桜花っ!!」

眞守は力の限り叫び、一度だけ大きく乱暴に桜花の体を揺さぶった。だが、揺さぶられるままにうなだれた桜花が反応する事はなかった。二本目の矢は確実に心の臓を貫いている。もはや彼女の絶命は明確だった。

「なんだ、仕留めたのは娘の方だけか」

そこへ、酷く尊大な声が響いた。

眞守が顔を上げると、いつの間にか見渡すだけで二十人ほどはいると思われる人間達が、取り囲むように半円状の包囲網を作っていた。その全員が矢をつがえた弓を手に行っている。声を発したのは包囲網の中央でひとり馬に乗っている男だ。その身なりと態度から、それなりに身分のある貴族だと伺える。

「何をしに来た、人間共……」

眞守は低く押し殺した声を発しながら、その男を睨みつけた。

「何をだど？ 妖よ、お前を殺しに来たに決まっているであろう」

「ほう……？ 俺を殺しに来たのか。だがそれなら何故、桜花を殺した？ こいつは人間だ」

眞守の言葉を聞いた馬上の男は一瞬あっけにとられたような顔を

したが、すぐに耳障りな笑い声をあげた。

「聞いたか？ 妖が何故殺したかなど、笑わせてくれるではないか！」

男の嘲笑は他の人間達に瞬く間に伝染し、大音量となって眞守の鼓膜を震わせた。だが、眞守は眉一つ動かすことなく彼らを見つめていた。

「我が屋敷の者がお前とその娘が親しげに話していたのを見ていたのだ。人間でありながら妖と通じるなど、万死に値する！ だから殺したまでの事よ」

「……ほう」

通り過ぎる風のように男の言葉を聞き流しながら、眞守は桜花の体をそつと横たえると静かに立ち上がった。

「それで、言い残す事はそれだけか？ 人間よ」

その言葉に呼応するように、丘全体が大きく脈打った。

風も無いのに草木が揺れ、びりびりと殺気立った大気が人間達に纏わりつく。全身が総毛立つような怒りを感じて、人間達は一様に息を呑み、その矢面に立たされた馬上の男は先ほどまでの威勢はどこへ行ったのか、恐怖のあまり落馬してがちがちと歯を鳴らした。

生きている彼らの姿を眞守の瞳が映していたのは、その後ほんの僅かな時だった。

血の海に沈んだ二十四人分の屍が、十六夜の青い光に照らされてぬらぬらと気味の悪い光を放つ。

誰かが証言しなければ元が人間であったと言う事実すら疑わしいほどに、際限なく細切れにされた肉塊は異常に白く目立つ骨片やずたずたになった臓物と絡み合って醜悪な姿と臭いを晒していた。

この汚らわしい物体が腐敗して土に還り、やがてこの丘の一部になるのかと思うと怖気が走るほどの嫌悪を感じる。

多量の返り血を浴びたせいで重く不快に湿った衣のまま、久遠桜の幹にもたれかかった眞守はぼんやりとそんな事を考えていた。その腕には桜花の亡骸が抱かれている。彼女を死に追いやった二本の矢は眞守の手で抜き取ってあった。

もう何度も触れた白い頬は冷たく、以前のような優しい温もりは感じられない。閉じられたままの目蓋が開く事は無く、あの澄んだ瞳が眞守の姿を映す事もない。

愛した人間の娘はもういない。

そう気付いたとき、眞守は自分の目頭が熱いを感じた。思わず触れた指先が雫に濡れる。その正体が涙だと知って、眞守は無意識のうちに物言わぬ桜花の亡骸に語りかけていた。

「知っていたか……？ 妖でも泣く事は出来るらしい」

伝い落ちた雫が、桜花の頬に小さな水溜りをつくる。

決して安らかな死ではなかったはずだが、それでも桜花の表情は穏やかで眠っているようにすら見える。それがほんの少し前に自分の腕の中で見せたあどけない寝顔と重なって、眞守の心を激しく揺さぶった。

溢れる嗚咽は声にならない叫びになり、やがて咆哮へと変わった。

鳥や獣、草木や大地までもが動きを止め、その悲痛な響きは静寂の中をどこまでも駆けていく。その夜、久遠桜の丘を震わす眞守の慟哭が止む事はなかった。

「今思えば、あの時桜花は自分の死を予期していたのだろうか」

そう締め括った眞守は、手繰り寄せた記憶の糸を再び空へと解き放って視線を移した。

「……あれから二百と七回、この久遠桜が咲いて散っていくのを俺はずっと見てきた」

細められた瞳が映すのは、全てを見てきたその存在だ。この丘に根を下ろし悠久の時を刻んできた大樹は、何事かを語ることは無く佇んでいる。

まるで御伽草子を聞く幼子のように、ただ眞守の綴る言葉に聞き入っていた緋雨はいつの間にかその語り手がすぐ傍にすることに気付いた。眞守の手がゆっくりと伸びてくる。緋雨は思わず後ずさったが、すぐにその背は大樹の幹に遮られ逃げ場をなくす。

「そして、お前に出会った」

眞守の指先が緋雨の頬に触れた。普段なら簡単に振り切れるはず

だが、今の緋雨は眞守の宵色に捕らえられ、目を反らす事すら出来ない。至近距離にいる眞守の唇が言の葉を紡ぐためのほんの僅かな時間が、永遠にも等しいほど長く感じられた。

「緋雨。お前は俺が愛した娘の生まれ変わりだ」

その言葉に緋雨の心がざわめいた。眞守を映す黒曜の双眸は大きく見開かれ、薄く開いた唇から半ばうわ言のように言葉が漏れる。

「私が……桜花の生まれ変わり……？」

「そうだ」

頬に触れていた眞守の手がゆっくりと滑り、緋雨の黒髪を優しく撫でる。

「俺はここでずっと、お前を待っていた……」

さらさらとした絹糸のような感触を楽しみながら、眞守は低く囁く。

（生まれ変わり……？ 眞守が愛した娘の……？）

反芻するように緋雨は心の中で眞守の言葉を繰り返す。瞬きすら出来ずに乾いていく視界の中、ゆっくりと眞守の顔が近づいてきた。その吐息がすぐ傍に感じられる。緋雨は流れに逆らわず、まるで眠りに落ちる時のように自然に瞳を閉じていく。

だが、唇と唇が重なる刹那、緋雨ははっとして反射的に眞守の体を押し退けた。

「違うっ！ そんなわけは……っ！」

「違わない。俺達妖は魂の形を見分けられる。たとえどれだけ時が経とうと、どんなに姿が変わろうと、お前の魂の形を俺は覚えてい
る」

一体自分は今、何をしようとしたのか。

無意識だろうが頬を紅潮させている緋雨の表情からそんな言葉を
読み取って、眞守は笑った。

「……っ、もし、そうだとしても……どうしろと言うんだ？ 私に
お前を受け入れろと！？」

眞守の横をすり抜けた緋雨は、必死な様子で声を張り上げる。そ
れとは対称的に、眞守は冷静に言った。

「緋雨、お前は俺が嫌いかな？」

ひどく優しい声音。ぞくりとするほどに低く甘い響きに引き寄せ
られた緋雨の瞳は、再び眞守に捕らえられた。

「俺はお前が愛しい。お前は俺が嫌いかな？」

もう一度、同じ問いが緋雨を揺さぶった。見えない糸に絡め取ら
れたように、体が動かない。

この妖の目を見てはいけない。

危険とは違う何かを感じて、鼓動が騒ぎたてる。暴れる心臓が胸
から飛び出すのではないか。そんな馬鹿げた妄想が脳裏をよぎった
緋雨は、そこで限界を感じ悲鳴に近い声をあげた。

「お前は妖で、私は……紅の一門の陰陽師、お前達を狩る存在だっ
！だから――」

「だから何だと……？」

途中で語尾をさらわれた緋雨は言葉を詰まらせた。

「俺とお前は敵同士。だから受け入れられない……か？」

恐らくその先にあったであろう言葉を代わりに眞守が続ける。

「……そうだ」

一呼吸おいたことで少し冷静さを取り戻した緋雨は、小さく息を吐いてようやく眞守から目を離す事ができた。

「それはお前の答えか？」

「何？」

「それはお前の、緋雨という一人の人間としての答えか？　と聞いたんだ」

「どういう意味だ……？」

不意に投げかけられた謎かけのような問いに、わけがわからず緋雨は眉を寄せた。その様子に眞守はふっと笑う。

「人間だ、敵だと……お前はそれを理由に逃げているに過ぎない。陰陽師の娘として生まれたから、命令のままに戦い、命令のままに

生き、そして死ぬ……か？ おまえ自身はどこにいる？」

噛み砕かれた言葉は今度は真っ直ぐに緋雨へと届いた。だがそれは緋雨を激昂させるには十分すぎる毒を含んでいた。

「……っ、お前に何がわかるっ!？」

今にも抜刀しかねない剣幕で緋雨は声を荒げた。

「私は私の意志で今まで生きてきたんだ！ いきなり現れたお前などに、わかってたまるものかっ!！」

その存在意義ですら揺るがすような真守の言葉に、緋雨の肩が戦慄している。だが、そこに僅かに含まれている動揺を、真守はあえて執拗に追い立てた。

「ああ、わからん。何故お前達は自ら鳥籠に留まろうとする？ 鳥籠の外の自由な世界を何故怖がる？」

「怖がってなどいない！ 私がすべき事をしているだけだっ!！」

真守の言葉を掻き消すように、緋雨は絶叫した。

「……幼いな」

髪を振り乱し荒く息をつくその姿に、真守は意図して冷たくしていた表情をふっと緩めた。

「わかった。ならばよく考えて見ると良い。俺はいくらでも待とう」

「待ったところで何も変わるものかつ!!」

緋雨は眞守を睨みつけながら噛み付くように言い捨てると、すぐさま黒紅に飛び乗って逃げるようにして久遠桜を後にした。

遠ざかっていく馬蹄の音がいつもより慌しい。それが彼女の心情を表しているようで、眞守は一人苦笑を漏らした。

「眞守」

そこへ、今まで姿を消していた巳聖が見計らったかのように現れた。おそらく緋雨とのやり取りもどこかで聞いていたのだろうが、巳聖がそんな事に興味をそえられることはまず有り得ない。何か必要があつて再びこの場所へ戻ってきたのだろう。眞守は口の端から笑みを消して表情を切り替えると、影の様に控える巳聖が言わんとする言葉を掬い上げた。

「ああ、気付いていたさ」

「この丘から少し下った辺りです。恐らく朱雀の陽炎の術かと」

眞守はその方向へと意識を向けた。目からではなく、研ぎ澄まされた感覚が随分前から感知していた存在を追う。

「……もう去ったようだな」

「追いますか？」

「いや、やめておけ」

首を横に振った真守は、巳聖には悟られぬよう一人の青年の姿を思い浮かべる。一度だけ合間見えたその青年は、真紅の瞳に確かな焰を灯していた。

真守は心の中で一人ごちた。

（その焰が焼き尽くすのは、果たして誰であろうな……）

第十一話 朱夏の謀り

皇后紫苑はただ立ち尽くしていた。

女性として計都最高の位に恥じぬ豪華な設えのこの場所は、二十年以上前に嫁いだその日から彼女のものとなった部屋だ。一人が生活するにはいささか過剰な調度品も数多くあるが、長い付き合いのそれらは違和感を感じる事も無く存在していた。

では、今眼下にあるこの見慣れない物体は何であろう。紫苑は自問した。

無造作に乱れて床に散らばっている水に濡れたように妖しく艶めく黒髪。その合間から見える見開かれたままの眼球は、出来の悪い鋼のように濁った光をただ無機質に反射している。薄く開かれた唇から滴った紅だけが、生気の抜け落ちた不自然なほど白い肌に唯一の色をさしていた。

紫苑は、一步踏み出した。その足元で小さくぴちやりと音がする。じわりじわりと這い上がってくる妙な感触に目を落とせば、白い下沓^{うず}が汚れている。そこで紫苑は自らが血の海に佇んでいる事に気付いた。

これは何だ。紫苑は再び自問すると、もう一度それに目を向けた。計都一と謳われた世にも美しい帝の寵姫——艶珠の亡骸に。

——と、その時。

「失礼いたします、皇后様」

聞き慣れない声に驚くほど緩慢な動作で振り返れば、一人の女官が部屋の入り口に膝を着いていた。

「……何用だ？」

短く、紫苑は問う。

「恐れ入ります、艶珠様がこちらにいらっしやっていないかと……」

まだ少女のような女官は深く頭を下げたまま言った。

「何故、わらわに聞く？」

「あ……その……宮廷中を探しているのですが、どこにもお姿が無いもので……」

どことなく紫苑の不興を買ったような気がして、女官はさらに平伏する。

「ふむ……」

だが、紫苑にそんなつもりは無く、むしろどうでもいいとばかりに目を伏せた。

「あの……皇后様……？」

いつまでも返事が返って来ない紫苑に、女官が恐る恐る顔を上げる。

「っひ……！？」

そしてこの時初めて、彼女は正面から紫苑の姿と、その足元にある物を見た。すなわち探していた彼女自身の主の変わり果てた姿を。

小さく息を呑んだ女官の唇から、宮廷中に響き渡る甲高い悲鳴がほとばしるまで僅か数秒であった。

つまり、おそらく自分は何らかの罠に嵌められたのだ。

女官の金切り声に導かれ近づいてくる多数の足音を聞きながら、急激に冴えていく思考の中で紫苑はひどく冷静にそう結論付けた。

帝の側室——つまり艶珠の殺害。

宮廷始まって以来の大事件は、まさしく青天の霹靂の如く瞬く間に計都中を駆けめぐった。その大罪の容疑をかけられた人物がいればその場で処刑されてもおかしくない程の事態だが、当人が皇后ともなれば話は別である。

七日間をかけて厳粛に執り行われた艶珠の葬儀が終ると、その間ずっと自室に軟禁状態にあった紫苑は審問のために宮廷中の重鎮達が集まった謁見の間へと引き出された。

「わらわは何も知らぬ」

変わり映えのしない左大臣の詰問に、紫苑はもう幾度と無く口にした短い返答をした。

「しかし皇后様、艶珠様は貴方様の部屋で亡くなっておられたのですぞ？　これをどう説明なさ——」

「くどい、何度も言うておろう！」

左大臣の言葉をぴしゃりと打って紫苑の一喝が響き渡る。常に穏

やかな雰囲気をもとう紫苑と言えど、さすがにその表情には明確な怒りが伺えた。

「部屋に亡骸があったから、わらわが犯人だとは笑止！ そのような浅知恵でよくぞ今まで役目を果たしてこれたものだ」

「ですから……」

言葉を詰まらせた左大臣は、きつと睨みをきかせてくる紫苑と目が合って嘆息する。審問が始まってから随分経つが、その間に一体何度同じやり取りを繰り返したのだろうか。

「……もう良い」

老齡の左大臣がその顔に疲労を浮かべ始めたその時、今の今まで一言も発することなく審問を聞いていた帝が割って入った。

「余はもう聞き飽きた。このような茶番は無用だ」

帝はすつと立ち上がるとどこへとも無く声を発した。

「誰ぞ、余に刀を持って参れ」

その言葉に重鎮達が一斉にざわめいた。

「じ……仁栄様！ 何をおっしゃるのです！？」

「何を驚く必要がある。余の艶珠と子を殺めた大逆犯が目の前にいるのだぞ？」

先ほどまで紫苑を責め立てていた左大臣は、唐突な主君の言葉に泡を食ったようになる。だが当の帝はさも当たり前のように言い放つと視線を紫苑に向けた。

「……何のおつもりか？」

冷めたようにも見える帝の眼光には、ただならぬ憎悪が込められている。それを一身に受けた紫苑は怯える素振りなど見せずに立ち上がると、堂々とした足取りで一歩進み出て真っ向から帝と睨み合った。

「お前自身が最もよく知っておろう？ お前は艶珠に嫉妬したのだ」

「嫉妬？」

「そうだ。艶珠が男子を産めばいずれ余の跡を継ぐ事になる。そうなれば皇后としての立場が危うくなる……お前はそう思ったのだ。だから姑息な手を用いて艶珠を殺したのであろう？」

「それは……本心で言っておられるのか？」

毅然とした態度で佇んでいた紫苑の声音がひとときわ低くなる。

「わらわの話を聞いておられなかったのか、帝よ！？ わらわは――」

「黙れっ！――」

急に荒げられた紫苑の声を、雷の如く帝が打ち据える。その雷鳴は未だにざわついていた謁見の間を一瞬で沈黙へと叩き落した。

「そのような言葉で言い逃れが出来ると思っているのか!？」

帝は怒声と共に懷から取り出した何かを乱暴に広げると、この場のすべての人間に見せ付けるように高々と掲げて見せた。

「皆の者見よ! これは艶珠が握っていた文だ。この朱印にはお前達も見覚えがあるう?」

再び謁見の間中がざわめいた。

帝が掲げた文は艶珠に皇后の私室に来るよう促す内容だったが、その文末に刻印されているのは皇后だけが持つ特殊な朱印なのだ。当然計都に二つとして存在するはずは無く、その刻印が成されているのであれば紛れも無く皇后の書いた書面と言う事になる。決定的とも言えるその証拠に、今まで紫苑の無罪を疑わずに庇護に回っていた者たちからも、驚愕と非難の視線が注がれた。

「……それで、わらわをどうされるおつもりか?」

「決まっておろう。余がお前のような大逆犯を生かしておくと思つておるのか?」

突き刺さる冷たい視線の矢面に立たされながらも、紫苑は凜とした態度を崩さず帝と睨みあっていた。

「何をしている!？ 余は刀を持てと言つたはずだ!!」

帝は反抗的な紫苑の視線に苛立ちを覚え当り散らすように声をあげる。だが、さすがに帝の命令に軽々しく従う者はいなかった。誰もが俯いて目を反らしているその状況にとうとう帝は痺れを切らし、

自ら部屋の隅まで歩いていくと、壁に立てかけられた飾り刀を手に取り迷うことなく鞘から引き抜いた。

鋭く凜猛な金属音が静まり返った謁見の間に不気味なほど響き渡る。帝は鞘をその場に投げ捨てると、抜き身の刀を手にしたまま紫苑の元へ歩み始めた。その何のためらいもない帝の動作を目にしながらも、紫苑は動かない。このまま行けばほどなく紫苑は処刑されるだろう。誰もがそう思った時だった。

「お待ちください！」

重鎮達の中から飛び出した一人が、帝の進路を塞いだ。

「藤黄！」

思わぬ闖入者に紫苑と帝の声が重なった。

「何のつもりだ藤黄！？」

「ご無礼をお許しください、仁様。ですが、どうか私のお話を聞きください」

床に額をつけるほどに低頭した藤黄に、容赦の無い帝の叱声が降って来る。だが、藤黄は臆することなく言葉を続けた。

「恐れながら申し上げます、此度の一件が宮廷を混乱に貶めようとする謀である可能性は捨て切れません。皇后様を今この場でお手打ちなさるのはあまりにも時期焦燥でございます」

「黙れ！ お前も文の朱印を見たであろう！ あれが紫苑が犯人である事の動かぬ証拠ではないか！」

「確かに、文の刻印は皇后様の朱印に酷似しているとお見受けいたしました。ですが、万一にも偽物という事も有り得ます。どうか怒りを治め今一度お考えください。あの皇后様が、本当に大逆などを犯されるとお思いですか？」

帝が手にした刀は怒りに震え、今にも藤黄に振り下ろされてもおかしくは無い。

その緊迫した状況に謁見の間の空気は凍りつき、見守る重鎮達は息苦しささえ感じていた。

「……藤黄よ、お前は何もわかっておらぬ。その女はな、遥か前から余に対して……いや、計都に対して大逆を犯しておるのだぞ？」

思わず藤黄は帝を振り仰いだ。だが帝の視線は藤黄に一瞥もくれる事も無くその背後に佇む紫苑に向けられている。

「余の正室でありながら、世継も生まず二十年以上も皇后の座にのさばり続けておる……それ自体が既に大逆だと思わぬか？」

「それは――」

「もうよい、止めよ藤黄」

あまりにも惨い帝の言葉に反発しようとした藤黄の声は、他ならぬ紫苑によって遮られた。帝の逆鱗に触れようとしていた藤黄に向けられていた視線が、一斉にその背後へと注がれる。

「帝……わが夫よ。確かにその罪をわらわは認めざるを得まいな」

「ほう？ 思いの他潔いではないか。ではそこを動くな今余が――」

「何を勘違いしている！ わらわに近寄るな愚か者！」

藤黄を押し退け歩を進めようとした帝に、紫苑の一喝がとんだ。その鋭さに帝は一瞬怯んで目を丸くしたが、すぐさまその表情にふつふつと怒りが沸いてくる。

「今何と――」

「わらわは子を成せぬまま皇后の座に居座り続けた。その大逆は認めよう。だが、艶珠を殺めてなどおらぬ！」

「それをどう証明しようと言うのか！？」

「何と言われようとこの身は潔白！ 見るが良い、わらわのこの命をもってそれを証明してくれよう！」

そこで紫苑は自らの髪を纏め上げる見事な簪かんざしを引き抜いた。豊かな黒髪が翼のように広がり宙に舞う。逆手に持った鋭い簪の先端が紫苑自身の手でその白い喉元に突きつけられた。

その刹那、藤黄と目が合った紫苑は、すまないなどでも言うように、ふっと柔らかい笑みを一瞬だけ浮かべていた。

「お止めくだ――」

紫苑の意図を察し、反射的に立ち上がって手を伸ばした藤黄の目の前で、血煙が上がった。生ぬるい飛沫が、藤黄の顔と衣を汚す。ただ事の成り行きを見守っていたに過ぎない重鎮達の中に、一斉に

驚愕とも怒りともつかぬどよめきが起こった。

「皇后様っ！！」

喉を掻っ切って崩れ落ちる紫苑の体を抱きとめ、藤黄は力の限り叫んだ。

「誰か！ 医者と薬師をっ！！」

首の急所を突いた紫苑の傷が致命傷である事は明らかだった。だが藤黄は必死に血を流し続けるその傷口を押さえ続けている。

「っ……不愉快だっ！ 誰か早くあれを片付けぬかっ！！」

思いもよらぬ紫苑の行動に唾然としていた帝は、我に返るなりやりどころのない怒りをぶつけるようにわめき散らした。

「仁栄様……あなたという方はっ……！！」

その言い様に、紫苑を抱きかかえたままの藤黄が減多に見せぬ憤怒の色をその顔に浮かばせた。凍れる怒りに背筋を舐められ、帝は一步後ずさると藤黄に向かって刀を突きつけた。

「なんだその目は！ 貴様も余に逆らうと言うのなら――」

「そこまでにされよ、兄上」

不意に響いた朗々たる声音に、すべての視線が一点に集まった。

「廉栄……！！」
れんえい

武装した数十人の私兵を従え謁見の間の入り口に佇む帝弟廉栄の姿に、帝は苦々しく表情を歪める。対称的に冷笑を浮かべた廉栄がさっと手を翳すと、私兵達はすべての退路を断つように速やかに移動した。

「静まれ。誰も動かぬよう」

眼前に突きつけられた刃に老齢の文官たちが悲鳴をあげると、廉栄はそれを冷たく制した。

「無礼なっ！ 何のつもりだ廉栄！？」

「ふむ……。寵姫に溺れ、政を蔑ろにしておきながら何のつもりとは。我が兄ながら貴方はやはり自覚が足りないようだ」

「何だっ！？」

「皆も見えていたであろう。我が兄が引き起こしたこの愛憎に塗れた醜態の結末を。計都の歴史に残る恥ずべき一幕を！」

怒りと屈辱にわなわなと震える帝を追い詰めるように、廉栄の口上は続く。

「私は兄を信じ、今日まで黙ってきた。だが最早限界だ！」

廉栄は芝居がかった仕草でぴたりと帝を指差すと高々と宣言した。

「私は帝弟廉栄の名の元に、我が兄仁栄の退位を要求する！」

その瞬間、廉栄の私兵達からは歓喜の雄たけびがあがる。

「ふ……ふざけるなっ！ 廉栄よ、貴様余に取って代わって帝の座に着くつもりか!?」

「左様。話が早くて助かりますな兄上」

激昂する帝を鼻で笑って、廉栄は慇懃無礼に言ってみせた。怒りが頂点に達した帝は、抜き身の刀を引っさげ廉栄に近づこうとしたが、すかさずその進路を数人の私兵が塞ぐ。

「そこを退け無礼者共めっ！ 余を誰だと思っている!？」

「残念ながらその者達は私の命令にしか従わないのですよ。退かしたければ力ずくで通られれば良い……まあもつとも、色事にかまけて体力を使い果たした兄上の腕には少々荷が重過ぎますかな」

「おのれっ、言わせておけばっ……!」

最上級の侮辱を与えられた帝は、我を忘れて私兵達に刀を振り上げた。だが、廉栄の言葉通りあまりにもあっけなく攻撃を防がれた帝は、すぐさま床に叩きつけられ押さえ込まれた。計都最高位の男は、自らが地に伏すなどという屈辱を考えた事もなかったのである。う、もはや怒りすらどこかへと忘れ、呆然となって廉栄を見上げている。

「哀れな我が兄上がそれ以上無様な姿を晒す前にお連れしろ」

蔑みの言葉とともに廉栄が一瞥すると、私兵達は帝を引き摺って何処かへと去っていった。

「さて……」

その場から帝の姿が消えると、廉栄は悠然と謁見の間を見渡した。たった今、目前で繰り広げられた帝弟廉栄による謀反に、誰もが口をつぐみただ成り行きを見守っている。

「異議のある者があれば前へ出よ。話は聞くぞ？」

「し……新帝廉栄様、万歳！」

廉栄がゆっくりとした足取りで歩を進めると、突然どこからか歓声があがった。すると、それにつられたように次々と歓声があがり、やがてそれは謁見の間を揺らすほどの大歓声となる。

兼ねてより帝弟派であった者はもとより、現帝派だった者たちも、もはや仁栄に付こうと言う者はいなかった。見事に大多数の臣下の心を掌握した廉栄は、この瞬間兄を打倒して新たな帝となった。

自分を称える歓声に満面の笑みを浮かべた廉栄は、この時初めて気付いたかのように、ふと眼下を見下ろした。この歓喜の渦の中で、唯一異色な藤黄と、その腕に抱えられた血塗れの紫苑の姿を。

「……その者も、犠牲者の一人であろう。余はその尊い命を忘れぬぞ」

一人称が帝のそれになった廉栄の言葉に確かな嘲りが込められていた事を、この時藤黄はしっかりと気付いていた。一瞥だけして通り過ぎていく廉栄の背に、この上なく冷たいその視線が突きつけられているなど、本人を含め熱狂する謁見の間の重鎮達は誰一人として気付く事はなかった。

第十二話 黎明の羽音

「絡め取れ、縛戒木賊！」
ばっかいとくさ

青藍の声で地中から突如伸び上がった無数の茎が網目のように複雑に絡み合い、土煙をあげる蹄の持ち主を足止めする。

「駆けよ、爆炎烈波！」
ばくえんれつぱ

伸ばされた緋雨の指先から放たれた渦巻く炎が、青藍の包围網ごと捕らわれた二体の妖猪を焼き尽くす。その直後、背後から飛び掛ってきたもう一体を振り向き様に刀で一閃、弾き飛ばされたその体は放たれた青藍の矢によって絶命した。

「つたく、きりが無いわね」

「まったくだ」

毒づきながらもすかさずもう次の矢を番えている青藍に軽く礼の視線を返し、緋雨は刀を振るって滴る妖の血を払い落とした。

「こうも連日だとさすがに参るな」

大柄な猩々しょうじょう（猿のような妖）と組み合っていた月白は、足で相手の足元を払った。

「おらあっ！」

よろめいた猩々の頭上に月白の身の丈ほどある大太刀が振りかざ

された。その豪快な一撃は、妖一の怪力を誇る猩々を真つ二つに叩き切り、盛大に吹き上がる血煙が月白の衣を染める。

「まあ、雑魚ばかりだが――」

「貫け、えいひょうすいじん鋭氷水刃」

「おわっ!？」

返り血を拭って笑いかけた月白は、鋭い風音に反射的に身を反らす。

「おいおい。殺す気が、烏羽!」

その鼻先を矢の如き勢いで通過した水の刃が四体の妖狐をまとめて串刺しにするのを見て、月白は苦笑交じりの抗議をした。

「無駄口が多いからだ」

対して烏羽は悪びれる様子も無くしれっと言い返すと、手にした長槍を素早く逆手に持ち替え背後に突き出した。不意打ちを狙っていた猩々が苦悶の呻きをあげる。硬い肉と筋を貫く感触を背中越しに感じた烏羽は、無表情のまま長槍を引き抜き、返す刃でその首を跳ね飛ばした。降りかかる返り血が既に血で汚れた烏羽の黒衣をなおさら重く湿らせていく。

「なかなかやるな」

華奢な外見からは想像もつかないその光景に、月白は小さく口笛を吹きながら腕を突き出した。

「封ぜよ、水晶壁！」

月白の足元から白銀の閃光が走り、地を駆ける山狗に触れた瞬間その身を巨大な水晶の中に封じ込めた。

「打ち壊せ、金剛堅錐！」
こんこうけんすい

間を空けずに放たれた第二の術に、地中から突き出した光輝く円錐状の柱が、山狗の肢体ごと水晶の壁を粉碎する。

「だが、まだ俺の方が上だな」

月白が齒を見せてにっと笑って見せると、きらきらと輝く水晶の破片を払いながら、烏羽は興味無さそうに目をそらした。まあ、あっちには負けるけどな、と胸中で一人ごちた月白は大太刀の腹でぽんぽんと気楽に肩を叩きながら、最も派手な戦いぶりを見せる男へと目をやった。

炎を灯された二刀の軌跡が空中に赤く輝く長い尾を引いていく。降りかかる火の粉すら時折激しく巻き起こる火炎で焼き尽くしてなお、蘇芳の剣舞は激しさを増すばかりだ。鬼神の如きその戦いの美しさは人ならざる者をも魅了するのであるうか、闇に輝く篝火に惹かれて自ら身を焦がす夏虫のように、この場の妖の数多くが群れを成して蘇芳へと挑んでいく。

また一つ妖の命を焼き尽くす大きな火柱が上がった。僅かな間に十数体はあった妖のほとんどが消えている。

手出し無用。そう判断した月白が目を反らすと、不意にどこかで一羽の鴉が鳴いた。

否、一羽ではない。

「何!？」

ほぼ同時に異変に気付いた全員が、一斉に空を見上げた。そこにあるのは先ほどまでと同じ薄雲を引き伸ばしたような空ではない。百は余裕で超えているであろう漆黒の鴉の大群が、暗雲のようにその場を覆いつくしていた。

「っ、鴉天狗か!？」

異常事態に気付き、一旦取り囲む妖たちを蹴散らした蘇芳はそのうちの一体を蹴る勢いで月白の背後に跳躍した。

「その通りだ」

答えは予想外の場所から降ってきた。色違いの五つの双眸が声の主を捉える。

「真守っ!？」

漆黒の瞳を見開きながら、緋雨は民家の屋根で夜色の髪を風に遊ばせる妖の名を呼んだ。その背後には巳聖が影のように控えている。真守は目を細め口端を笑みの形に吊り上げる事で緋雨に応え、空を覆う漆黒の群れに叫んだ。

「やれ、六翔^{りくしやう}!」

叫びに呼応するように、宙を舞う一羽が一際高く鳴いた。すると、他の鴉も次々と声をあげ、その口ばしから何かを落としていく。正

体不明の落下物に緋雨を含む全員が身構えた。

「っ痛！ ……って、何よこれ！？」

だが、青藍の声で皆が我に返り、落下物を改めて見やる。

「木の実……？」

「いや、水だ」

月白がつま先で足元に転がった小さな殻を蹴ると、蘇芳は頬を拭いながら言った。何の意図かは分からないが、鴉達が木の実の殻に入れた水を、雨のように降らせている。

「鴉天狗……黎明^{れいめい}の泉か！」

腕で顔を庇いながら鴉達の奇行を見守っていた烏羽が、何かに思い当たったように声をあげた。

「左様」

また新しい声がそれに応えた。一羽の鴉が群れを抜け、眞守達と反対側の屋根へと飛来する。そこに降り立つと同時に、鴉は黒い翼を持つ人の形へと姿を変えた。

「我が黎明の泉にかかれば魔物どもの瘴気なぞ恐れるに足らぬわ」

恐らく眞守が六翔と呼んだ少年の姿をした鴉天狗は、その容姿に見合わぬ堂々とした様子で、動きを止めた眼下の妖たちに金色の瞳を向けた。

「早くせい眞守。わしらの役目は終ったぞ」

もったいぶるような態度で悠然と佇んでいた眞守に六翬が非難めいた視線を向ける。すると眞守は返事をする代わりに、咆哮をあげた。狼の遠吠えにも似た高い咆哮は瞬く間に形を変え、聞き取れないほどの領域に達すると波動となって木霊する。

「くっ！」

びりびりと体を震わすその波動に、妖たちは尾を後ろ足の間に挟みこんで後ずさり、緋雨達は思わず耳を塞ぐ。

「目は覚めたか？ 馬鹿者共」

波動が止んだ後の静寂に眞守の声が響き渡る。怯えた様子を見せていた山狗の一匹がその姿を見上げた。

「……ま、眞守様！？」

それを皮切りに、先ほどまでの獰猛さを一切捨てて、妖狐や狸々、残っていた全ての妖たちが何が起こっていたのかわからないとも言いうように、驚きの声をあげた。

「話は後だ。羅喉へ引き上げ——」

「待て！」

状況が把握できない妖たちに眞守が言いかけると、それを遮って蘇芳が眞守の居る場所へと跳躍した。だが眞守は動かず、代わりに

ずっと巳聖が前面に進み出て蘇芳を牽制する。

「今日は逃がさん」

「相変わらず血気盛んなことだな朱雀よ。だが、止めておけ。今はお前と争う気は無い」

蘇芳の真紅の瞳は割って入った巳聖を通過して眞守を睨みつけた。だが。

「蘇芳！」

突如蘇芳の足元が崩れ落ちる。緋雨は思わず声をあげたが、蘇芳は後方へ跳んで別の屋根に着地した。同時に、眞守と巳聖の姿が歪み、次いで緋雨たちの足元がぐらりと揺れ土煙が舞い上がる。

「邪魔したな」

衣の袖で目を庇う緋雨は、土煙の向こうで眞守がそう笑ったのを見た。

煙る視界が穏やかさを取り戻すと、そこには眞守を始め、空を覆っていた鴉天狗やそのほかの妖たちの姿すら残っていなかった。

「地脈渡りってどこか……。参ったな、藤黄と同じような事をしやがる」

文字通り消え去った眞守達に、月白は苦笑しながら大太刀を鞘に収めた。蘇芳は忌々しそうにぎりっと齒を鳴らし、大きく嘆息して

同じように刀を納める。烏羽と青藍も終息を察し、それぞれの武器を収めた。

「あいつ……」

ただ一人緋雨だけが、眞守の佇んでいた場所を見つめている。抑える方法は然程難しくは無さそうだ。

以前眞守が計都に現れた夜、魔物の瘴気に狂わされた妖の暴走を止める方法をそう言っていた事を思い出す。半信半疑でしかなかったその言葉が真実であったと、この時緋雨は確信したのだった。

新帝が即位してから二月、計都は混乱の極みにあった。だがそれは政局的なものでは無い。

先帝派の武官達は当初新帝と争う姿勢を見せていたが、それもほんの僅かな間だけであった。まるで全てが最初から必然であったかのように、あの突然の謀反劇の後、宮廷は先帝仁栄の頃より遥かに落ち着いている。

計都の混乱の元凶は他にあった。

この二月の間に、羅喉の付近にある村が既に三つ姿を消している。そこは以前、緋雨達が訪れた北部の村と全く同じ状態で、村人全てが何者かに惨殺されていた。そしてその犯人が、妖であるという事は今や誰もが知るところとなっている。

夏が終わり月蝕みが近付くにつれ、さらに肥大化した魔物の瘴気が数多くの妖を狂わせているのだ。そしてその狂気の牙は、とうとう計都まで達する事となった。

連日羅喉から押し寄せる妖たち。

幸いな事に妖術を使うほど高位の妖は混じっていないが、それでも数が尋常ではない。緋雨達も連日連戦で計都の守護に奔走しているが、犠牲者は増える一方で一向に終息する気配を見せなかった。

「……今何とおっしゃいました？」

もはや一刻の猶予も許さない事態を前に、陰陽伍家の筆頭達は宮廷に集まっていた。その場所で、全くもって誰も想像していなかった藤黄の言葉に、青藍は思わず声をあげた。

「羅喉の妖を一匹残らず殲滅せよ……と、帝からの勅命が下ったと言ったのです」

「殲滅戦？ 本気で言ってるのか？ 藤黄」

「ここで冗談を言う理由がどこにあるのです」

月白の言葉にかぶりを振ると、藤黄は自分の動きを一挙一動見逃さないとでも言うような一同を逆に見回して立ち上がった。

「知っての通り、計都の被害はこれまでに類を見ないほどに甚大です。もはやこうなっては結果も意味を成しません。この妖にも魔物にも無防備な状態で、ただ襲撃を待っただけの今を帝は憂いておられるのです」

「やられる前にやれてか？ 確かに筋は通ってるが、まさか賛成したわけじゃないだ——」

「いいえ、月白。今回の件に関しては私も帝の意見に賛成です」

「なっ……!？」

「座りなさい、月白」

予想に反した返答に、思わず月白は立ち上がって表情を陰しくしたが、睨みつけた相手は子供をたしなめるかのように言った。

「……座りなさい」

もう一度、今度は有無を言わさない雰囲気をもとって藤黄が言うと、月白は何か言いたそうに拳を握りながらもどかっと乱暴に腰を下ろした。

「我々計都の人間と羅喉の妖が最も激しく争った十六夜の乱から二百年。その間、確かに計都は歴史上最も平穏だったでしょう。ですが、それが本当の平穏とあなた方は言えますか？」

反論を許さない静かだが強い口調で藤黄は言葉を続ける。

「此度の月蝕みは過去最大。知ってのとおりそれによって魔物の力が強まり結果的に妖が凶暴化して都を襲いました。ですが裏を返せばそれほど妖の力が弱まっているという事。これは、長年の争いに決着をつける好機なのですよ」

「だが――」

「月白」

再び口を挟もうとする月白に、ひどく温度の低い藤黄の視線が向けられた。

「弁えなさい。言ったはずですが、これは帝の勅命だと」

「く……」

「……それで、具体的にはいつから行動を？」

隣に座した月白が言葉を詰まらせまた拳を強く握ったのと対称的に、蘇芳は淡々とした様子で問うた。

「帝からは陰陽伍家の人員のほか、宮廷の兵も動員せよと言われて
います。そちらの準備におよそ十日ほど。あとは状況次第ですが、
準備が整い次第と言ったところですね」

「御意」

左頬の辺りに月白の強い視線を感じたが、蘇芳はあえて無視して
低頭した。

「他に意見のある者は？」

最後にもう一度だけ藤黄が聞いたが、結局それ以上の声が上がる
事はなかった。

「何を考えてんだ藤黄の奴っ！」

人目もはばからず叫んだ月白の声は、随分離れたところを歩いていた女中の足を思わず止めてしまうほどであった。

「……落ち着け、月白」

「これが、落ち着いていられるか!!」

紅の一門の屋敷中に響き渡るような怒声を何度も繰り返されてはたまらないと言う蘇芳の願いはあっけなく打ち碎かれ、月白は先ほどよりもさらに大きく絶叫した。

「仕方ないだろう、帝の勅命とあっては」

「そこが問題なんだよ！」

だんっと、月白の拳が叩きつけられた衝撃で大きく揺れた木から、赤く色づき始めた葉がはらと落ちてくる。それを鬱陶しそうに振り払いながら、月白はまだ興奮しているかのように再び吼えた。

「皇后様が亡くなってから、あいつは変わった。まるで帝の腰巾着だ！」

「声が大きい。さすがに口が過ぎるぞ月白」

蘇芳は鋭く目を細めさっと辺りを見回したが、幸いな事に人の気配は無い。

「……悪い」

月白は自分自身を落ち着かせるように大きく息を吐いた。

「だが、よりにもよっていきなり妖の殲滅だなんて誰が納得するんだ。俺は反対だ。烏羽はともかく青藍だって納得はしちゃいないはずだ」

「私だって納得しているわけではないさ。だが、ここで愚痴をもらして何になる？」

「それはそうだが……」

「陰陽伍家の役目は計都の守護だ。現状の脅威である妖を一掃するというのなら従わざるを得ないだろう」

「それが大義名分でしかなくて、帝の目的が別にあったとしても……か？」

「……ああ」

揶揄するように片眉を跳ね上げた月白が言わんとしていることを察して、蘇芳は嘆息した。

「……根源の泉のことを言いたいのだろうか？」

「不老不死をもたらすと言われる妖の長の聖域……実兄を踏みつけて計都の実権を握った野心家が次に考えそうな事だ」

月白は吐き捨てるように言うと、苛立ちをごまかすように後ろ頭

をがりがりと掻いた。

「そんな事のために計都の人間を危険に晒すっていうのか？ 殲滅戦ともなれば、こっちも無事というわけにはいかないんだぞ」

「それはあくまで憶測に過ぎない」

蘇芳は目を伏せて首を横に振った。

「帝の真意がどうであれ、私達がやるべきことは決まっている。ならば、その中でこちら側の犠牲を最小限におさめるまでだ」

「……随分と言うようになったな」

十も年の違う相手に丸め込まれたような気がして、月白は自分自身が少ないたたまれなくなった。蘇芳はそうだなと苦笑する。

「割り切らなければならない事もある。とくに私達はな……」

第十三話 熾火の盃

伸ばした足先から伝わる感触が、自分の体温と同化する。冷たさを求め無意識に返した体は僅かな間それを得るが、しばらくすればまた自分の温もりが奪っていく。そんな事を繰り返す間に一体どれくらいの時を無駄に過ごしたのだろうか、また一つ寝返りを打って緋雨は額に手をやった。

実りと紅葉の季節を迎えた計都の夜は寝苦しい暑さとは程遠く、むしろ薄い夜着一枚ではそろそろ肌寒く感じられるほどだ。寝付けないのは気候のせいでは無い。岩場から溢れ出す湧き水のように止め処ない思考が、眠りを妨げているのだ。

数日前、蘇芳伝いに突然知るところとなった妖の殲滅戦。新帝の勅命である事と、何より今の計都の状況を見れば驚きこそしただろうが、反意を抱く事など微塵も無かったはずだ。少なくとも今まででは。

緋雨は嘆息して、目を閉じた。その閉ざされた視界に蘇芳から話を聞いた直後、藤黄の元へ赴いた自分の姿が思い浮かんだ。

妖の暴走は止められる。だから殲滅などする必要は無い。

陰陽伍家を統べる長に向かってそう言い切ったことに自分自身が一番驚いたが、藤黄の返答はあまりにも予想通りであった。これは帝の勅命であり、逆らう事は許されないと。

（一体どうしたんだ、私は……？）

ごろりと、再び寝返りを打って右の腕に頬を寄せ自問する。あの日以来、真守の言葉が幾度と無く頭の中で繰り返された。

おまえ自身はどこにいる、と。

まるで呪詛のようなそれは、思いの他深く緋雨自身を蝕んでいる

らしい。何故だろうか。答えはわかっていた。否定できなかったからだ、あの時眞守に言われた全てを。

だが、それを認めることはしなかった。

私は私の意志で今まで生きてきた。

あの宵色の妖に投げつけた言葉は、半ば自分自身に言い聞かせたものだ。そうでなければ、何かが崩れてしまう。そんな思いがふと脳裏をよぎり、緋雨は身を起こした。

馬鹿げている、あまりにも。

一人首を横に振ってその思いを強制的に振り落とすと、緋雨は手近な衣を手にして立ち上がった。これ以上、眠れぬ体で床につくのは危険な気がした。

黄金色に輝く望月は少し西へと傾き始めていたが、まだ夜明けに遠い紺碧の夜空を煌々と照らしている。

なるほど、名月の宴に相応しく美しい夜だが、喧騒と儀礼に追われてたった今屋敷に戻った蘇芳にとって、そのことに気付いたのは宴自体が終った後とはなんと言う皮肉だろうか。

蘇芳は橋の欄干に身を預け、衣の前を少しだけはだけて目を伏せる。池の中島に植えられたすすきが夜風に揺れてさらさらと音をたてている。酒に火照った体には水辺の夜風はこの上なく心地良い。夜虫すら眠りにつく深い夜の中では、遠くで木の葉が水面に小さな波紋をつくる音ですら聞き取れてしまいそうだ。

「まだ起きていたのか？」

だから聞きなれた足音が近づいてくると、蘇芳は相手確かめる

までも無く伏せていた目を開いた。

「寝付けないだけだ」

夜着の上に簡単に衣を羽織っただけの緋雨は、先客に驚く様子も無く蘇芳の隣へ歩み寄った。

「宴はもう終ったのか？」

「ああ。今戻ってきたばかりだ」

名月の宴は毎年この時期に宮廷で行われるが、特にかしこまった場ではない。立场上、各一門の筆頭は顔を出さなければならなかったが、蘇芳の副官である緋雨は一度も出席した事はなかった。

「眠れないくらいならお前も来れば良かったな」

「あの拷問のような格好をしてか？ 余計に眠れなくなりそうだな」
胸元を締め上げられるような衣装を思い出して緋雨は顔をしかめた。

「まだ馬で一日中走り回ってる方がましだ」

「そういう所は子供の頃から変わらないな」

大袈裟な緋雨の様子に、蘇芳は声をたてて笑った。

「お前の父君に連れられて初めて私に会いに来た時は男児かと思っただぞ」

「……その方が楽でよかった」

面倒な格好をせずに済むと、緋雨は肩を落とした。

「あれから九……いや、もう十年か」

蘇芳は昔に思いを馳せるように、目を細めた。

蘇芳は一門の直系の長子だが、緋雨は分家の出身だ。幼い頃から次期朱雀として申し分の無い突出した才を見せていた蘇芳の元に、緋雨がついたのは彼女がまだ七つの頃だった。分家に恐ろしく腕の立つ子供がいるとは聞いてはいたが、何よりもその幼さに見合わぬ瞳に宿した意志の強さに驚かされたのを覚えている。

「私の後ろを付いてまわっていた幼子が、今や私の副官か。時が経つのは早いものだな」

「随分しみじみと言うんだな」

「少し懐かしくなっただけだ」

蘇芳と緋雨は互いに笑い合うと、懐かしい思い出話に浸った。

剣術の稽古で体中に傷を作った事、宴から逃げ出して狩りに出て、先代の朱雀から二人そろって怒られた事、蘇芳が朱雀を継承した時の事、緋雨が元服し蘇芳の副官になった事。

血の繋がりは無いが兄妹のように共に過ごしてきた時間は、まるで昨日の事のように鮮やかに蘇り、気付けば半刻ほどが経っていたが、話題が思い出話から刻一刻と近づく妖の殲滅戦へと移ると、ふと会話が途切れた。

「……藤黄様に、盾突いたらしいな」

「知っていたのか？」

「烏羽から聞いた」

蘇芳の言葉が沈黙を埋めたが、緋雨は押し黙ってしまった。しばらく忘れていた思考が、また緋雨の脳裏を支配する。そのせいか、緋雨はあまりにも素直な言葉を唇にのせた。

「蘇芳。戦う事を疑問に思った事はあるか？」

「どうした？ いきなり」

「答えてくれ」

蘇芳は目を丸くしたが、見つめる緋雨は煙に巻くことを許さないほど真剣だ。

「……無い」

蘇芳は最も簡潔に言葉を返した。

「それがどれだけ無益な戦いであったとしてもか？」

「ああ、そうだ」

「何故、そう思える？」

「それが私だからだ」

まくしたてるような問いを繰り返す緋雨に、蘇芳はその部分だけ強調して言った。

「無益であろうと無かろうと、私のすべき事は昔から一つだ。それを疑問に思ってしまうというのだ。私に何を言わせたい？」

「それは……」

緋雨は言葉を詰まらせた。蘇芳は怒っているわけではないが、向けられた視線には諫めるようなものが含まれている。

「……それに、万に一つ思った事があったとしても、それは口に出してならない事だ、緋雨」

「だが――」

「納得しろとは言わない、お前にも考えがあるのだろう。だがそれは心の内に留めておけ。外に出してはならない」

緋雨の反論を遮って、蘇芳は強く言った。

「その考えはあまりにも危険だ。いつか身を滅ぼす事になる。私の言っている事は解るだろう？」

「……そうだな」

いったい蘇芳のどんな言葉を期待していたというのだろう。

自問した緋雨は、すぐにその答えを見つけた。

「忘れて欲しい。少し……考えすぎた」

小さく謝罪の言葉を口にして、緋雨は空を見上げた。

柔らかい光がその横顔を照らす。

月光のまぶしさに瞳は半ば伏せられ、薄く開かれた唇から憂いを帯びた吐息が漏れる。その姿は普段男勝りに馬を駆り、刀を振り回す緋雨とはあまりにもかけ離れて脆く儂げで、そしてどきりとするほどに艶めいて見えた。

「眞守……と言ったかあの妖は。お前にそんな顔をさせるのはあいつなのか？」

初めて見る緋雨の姿に、思わず本音が零れ落ちる。蘇芳は強く緋雨の腕を引いた。鏡のような水面で、二つの影が重なる。蘇芳は引き寄せた緋雨の唇に口付けていた。

今までに無い程近くに、蘇芳の顔がある。

触れ合った唇から、柔らかい感触が伝わってきた。緋雨は大きく目を見開いたまま金縛りのように動けずにいたが、やがて蘇芳の唇は離れ、その腕の中に包み込まれた。

「幼い頃からお前を見てきた。共に育ち、共に戦い、背中を預け、お前と一番長くいたのは私のはずだ」

「蘇芳……？」

蘇芳の温もりに抱かれて、鼓動が煩くなる。何が起こっているのか理解できずに緋雨は僅かに身じろいだだが、強く頭を掻き抱かれて

その動きを止めた。

「私は紅の一門の筆頭、いずれ皇族の姫を娶らなければならない。ただ唯一、心から愛しい娘を手に入れることは永遠にかなわぬ。そんなのはわかりきっていた。だから必死で、この気持ちを押し殺してきたというのに……」

熱に浮かされたような蘇芳の独白が、緋雨の心を掻きまわして行く。肩越しにある蘇芳の表情はわからない。

だが、息苦しいほどに強く抱き締めた腕が緩み、代わりにそっと頬が両の手に包み込まれると、苦悶にも似たその表情がようやく目に入った。

「それなのに何故、妖などにお前の心を奪われる？」

苦しげに歪んだ真紅の瞳が、覗き込んでくる。

「蘇芳……酔って……いるのか？」

未だに状況を理解し得ない頭が、まともに機能していない。緋雨が何とか紡ぎだしたのは、あまりにも気の利かない言葉だった。すると蘇芳は一つ瞬きし、ふっと笑った。

「さあ、どうだろうな。だが……それも良い。全て酒のせいにしてしまおうか？」

その言葉が、蘇芳が正気である事の何よりの証明だった。蘇芳が酒に酔ったことなど今までに一度も無い。

「愛している、緋雨」

不意に耳元で囁かれた言葉に、緋雨の鼓動が一際高く鳴った。

何かを言おうとした緋雨の視界を再び近づいた蘇芳が覆う。二度目の口付けは先ほどとは異なり、優しさよりも強引さが勝っていた。反射的に抵抗をする緋雨の体を押さえつけて、熱っぽく乱暴な口付けが繰り返される。酸素を求め喘ぐ唇から入り込んだ強く甘い酒の香りが、頭の芯を蕩けさせてしまいそうだ。

これほどまでの蘇芳の激情を、緋雨は知らない。

それが他ならぬ自分自身に向けられているのだと気付いて、緋雨はきつく目を瞑った。もう、このままどうにでもなってしまうといい。抗う事を諦め徐々に力が抜けていく緋雨の体を、より強く蘇芳が抱き締めた。だが、不意に真守の言葉がよぎった。

俺はお前が愛しい。

そう確かに言ったあのひどく優しい妖の声が、その美しい姿が、鮮明に思い浮かんだ。

「……っ、やめろ蘇芳っ！！」

刹那、緋雨は渾身の力で腕を振り上げていた。

ぱんっという高い音が、夜の静寂を打つ。乱れた呼吸のまま見上げれば、赤く腫れた左頬に手をやった蘇芳が佇んでいた。どうやら反射的に随分と強く叩いてしまったらしい。

「……どうか……している」

驚いたような、だがひどく傷ついた悲しげな瞳から目を反らし、緋雨はその場から立ち去ろうと踵を返した。

「待て」

「っ！」

だが、その腕を強く掴まれて緋雨は立ち止まる。

「……これだけは言っておく。お前は紅の一門の陰陽師、妖を狩る存在だ……それだけは忘れるな」

触れた瞬間にびくりと怯えた表情を見せた緋雨から手を離して、蘇芳は言った。

「……わかっている」

「ならいい……」

頷いた蘇芳は最後に小さく、すまなかったと付け加えた。恐らく聞こえていたはずだが、緋雨はもう蘇芳と目を合わすことなく走り去ってしまった。

その後姿が見えなくなるまで、蘇芳しばらくそちらを見つめていた。

そして、もはや足音も聞こえなくなってしまうと、きつく握り締めた拳を力任せに欄干に叩きつけた。木造りの柱が小さく悲鳴をあげる。鈍い痛みを目をやれば、拳の表面にうっすらと血が滲んでいた。その光景が我ながらやけに滑稽で、蘇芳はこらえきれない笑いを吐き出しながら、ずるずるとその場に屈みこんだ。痛む拳を開いて両目を覆う。そして乾いた笑いの奥から込み上げて来た言葉を、吐き捨てるように口にした。

「愚か者め……」

それは果たして誰に向けた罵倒であろうか。

その答えは蘇芳自身もわからなかった。

同じ頃、やはり宴から戻ったばかりの烏羽は黒の一門の屋敷を自室に向かって歩いていった。他の四家とは異なり、屋敷自体が水上に建てられているため長い渡殿を歩かねばならなかったが、それを不便と思った事は一度も無い。清浄な水の氣に満ちた空間を歩くのは、むしろ自分自身が浄化されていくようで心地良いのだ。

――と。

行く手から歩いてくる男を見とめて、烏羽は足を止めた。その姿には見覚えがあった。たしか新帝の側近の一人だ。こんな時間に何の用かは分からないが、烏羽は簡単な会釈だけをしてその男とすれ違った。

形式だけの挨拶を交わし、烏羽は再び歩を進めようとしたが、ふと何かの違和感を覚えて後ろを振り返った。反対側へ歩いていく男は、気付く事も無く遠ざかっていく。

烏羽の鋭い視線の先では、水面に映った望月だけがゆらゆらとたゆたっていた。

第十四話 憂迷の対価 [前編]

「――ひとまず二百ほど用意したのですが……」

少年は、ふと顔を上げた。手にした書の文面を伝えていた相手から一向に反応が無い事を不思議に思ったからだ。だが、当の本人である緋雨はそんな事に気づく様子も無く、何処かへと視線を漂わせていた。

「主よ」

困ったような少年の視線を受けて、東雲が低い声を発した。

「あ……ああ、すまない真赭^{まそは}。護符の話だったか？」

隣に佇んだ式神に名を呼ばれて、緋雨は我に返ると少年――真赭に目をやった。

「はい。ここに二百用意いたしました」

どこからかは分からないが、どうやら自分の話は聞き流されていたらしい。数いる門下生の中でもとりわけ秀でた才を持つ真赭は、そう悟ったものの嫌な顔一つせず答えた。

「これで足りそうですでしょうか？」

「いや……念のために、あと五十はあったほうがいい」

「かしこまりました。では、屋敷中から集めて参ります」

「頼む」

真緒が一礼して駆けて行くのを見送ると、緋雨はざっと辺りを見回した。

いつのまにか意識を飛ばしていたため気付かなかったが、屋敷中がいつになく慌しい。女中達は渡殿を忙しく走り回り、門下生や侍従たちは蔵から引っ張り出した槍や矢の束を引っ切り無しに運んでくる。

似たような光景は恐らく都中で繰り広げられている事であろう。

三日後に迫った妖の殲滅戦に向けて、計都全体が着々と準備を整えつつあった。

「まるで二百年前の再来だな」

東雲が呟くと、緋雨は少し驚いたようにその長身を見上げた。この寡黙な式神が自ら言葉を発することなど滅多に無い。

「十六夜の乱か。そうか、お前の前の主も参戦していたんだったな。どんな奴だった？」

「勇敢だが、自分を省みない男だった。仲間を逃がすために自ら血路を開いて命を落とした……少し、お前に似ている」

「馬鹿を言うな……」

緋雨は一瞬眉を寄せたが苦笑すると、死ぬつもりなど無いと明確な意思表示をするように首を横に振った。

「東雲、実際のところどう思っている？ 計都こゝに残される事が不満

か？」

「主の命令だ、我に異論は無い」

感情の色を見せない東雲の表情に代わり、その紅の髪が色鮮やかに風に揺れている。

殲滅戦では妖の本拠地である羅喉に直接乗り込むため、陰陽伍家を始めたほとんどの戦力が計都を空ける事になる。だが、その状態で万が一魔物が計都を襲った場合惨事は免れない。そのため各一門の筆頭やそれに近い陰陽師達が使役する式神と、少数の精鋭を守護部隊として計都に留める事になったのだ。

「だが主よ、気をつけろ」

「何だいきなり？」

「人間の身では感じられぬか。では言おう。この都、何かがおかしい」

「……どういう意味だ？」

これほどまで東雲が言葉を発するのは初めてだった。猫の様に細くなった東雲の瞳孔が、鋭く緋雨を見下ろしている。

「真に恐ろしいのは妖では無いかも知れぬ」

その光景を、更なる高みから一羽の鴉が見下ろしていた。数多ある屋敷の樹木に身を隠した漆黒の鳥は、緋雨と東雲の会話が途切れるのを見計らったように上空へと舞い上がり、瞬く間に彼方へと消えていった。

「……そうか。ご苦労じゃったな」

六翺が労いの言葉をかけると、右肩にとまっていた腹心の鴉天狗は一声鳴いて飛び去っていった。

「やはり計都の陰陽師どもは羅喉らくこうに攻め込んで来る気でおるようじやの」

「だろうな」

振り仰いで言えば頭上から眞守の声が降って来る。舞い落ちる枯葉に視界を遮られる事を嫌ったか、六翺は羽ばたいて眞守の腰掛ける枝へ飛び乗った。

「お主、まるで他人事だのう」

少年の姿をした妖は、久遠桜の上で寝そべる眞守に呆れたように金色の瞳を細めた。

「ある程度予想はしていたからな」

眞守は頭の後ろで組んでいた両腕を伸ばすと、もたれていた幹から身を離れた。

「それで、どんな様子だ？」

「まるで戦じゃ。ほとんどの陰陽師どもが準備をしておる。まあ、式神どもはおいて来るようじゃがな」

「そこは大して重要じゃないな。異界の鬼族が本来の力を出せば脅威だが恐らくそれは無理だ。どれほど有能な陰陽師だとしても自分の寿命を縮める羽目になるからな」

「うむ。じゃが、そうなることやはり厄介なのは例の筆頭どもか」

「ああ。単独ならそれ程でもないが、五人揃われるとさすがに面倒だ。特に黄龍……今は藤黄とかいう奴か。あいつは一筋縄じゃいかんだろうな」

眞守は頬を掠めていった枯葉を器用に掴み取ると指先で弄んだ。

「それで、どうするつもりじゃ眞守。まさかこのまま高みの見物とも行くまい？ 最も妖狐一族あたりなら放っておいても先に攻め込んで行きそうなものじゃが」

「翡翠の泉は羅喉で最も浅い位置にあるからな。まあ、いずれにせよおうきよう邑夾の指示を仰がねばなるまい」

眞守は枯葉を再び宙に放つと、枝から飛び降りて今まで自分がいた場所を見上げた。

「そういうわけで六翔、根源の泉に全ての一族の長を集めろ」

なんとなく嫌な予感がしていた六翔は、予想通りの眞守の言葉に眉を跳ね上げた。

「何と人使いの荒い奴よ……。わしの方が数百歳年上じゃと言うのに」

六翔はぶつぶつと言いながら盛大に嘆息したが、枝から身を躍らせて人型から本来の姿に戻るとそのまま飛び去って行った。

「已聖」

「ここに」

頼んだぞと言わんばかりに口端を吊り上げて六翔を見送ると、眞守は振り返った。久遠桜の背後から、鈍色の妖が姿を現す。その場にいると知ってはいても、相変わらず気配を消す巧みさは敵わないと思ってしまう。

「お前も来い。羅喉の長に会いに行く」

陰陽伍家を象徴する五獣の姿が、天つ風になびく旗の中で今にも咆哮をあげんと猛っている。その牙は一体どこへ向けられようとしているのだろうか。

頭上を舞う旗の音に耳を傾けながら緋雨は思った。

羅喉の妖を殲滅すべく最初の出陣を前に揃えられた者の数はおよそ千。陰陽伍家の筆頭を中心にその門下生、宮廷の武官、そして一般兵からなる殲滅部隊が、宮廷正面門前の広場に整然と並んでいた。そこに藤黄が姿を現すと、一同は一斉に地に膝を着いた。ゆったりとした正装に身を包んだ藤黄の姿は、どこか神々しいまでの威厳を感じさせる。ざわついていた広場が一瞬で静謐へと姿を変えた。

「紅の一門が筆頭、朱雀。前へ」

「は！」

他の筆頭達と共に最前列にあった蘇芳が立ち上がる。背に纏った紅の羽織が、風の中でその称号である朱雀のように翼を広げた。蘇芳は藤黄の前に歩み出ると、深く一礼して膝を着いた。

「面を上げよ」

形式に則った出陣式であるため、藤黄の口調も普段とは異なり厳しい。低い位置から見上げる蘇芳の額に、藤黄の指先がすっと触れた。

「黄龍の名において朱雀へ帝の勅命を伝える。部隊を率いて羅喉の妖を殲滅せよ」

「御意！」

蘇芳が胸の前で袖を合わせ再び身を折ると、一同がそれに従った。蘇芳は十分な間の後、一礼して立ち上がると部隊へと踵を返し声を張り上げた。

「皆の者備えよ。羅喉へ出陣する！」

殲滅部隊の大多数を占める男達の声が広場の大気を震わせ、皆が一斉に動き始めた。地響きのような大勢の足音の中で、緋雨はほんの僅かな間瞳を伏せてから愛馬の元へ向かう。

「緋雨」

だが、すぐに踏み留まる事になった。白鳳の手綱を引いて、蘇芳がこちらに歩んで来る。

「……戦えるな？」

その表情がいつになく険しく感じられて緋雨は少し身構えたが、数歩分離れた位置で立ち止まった蘇芳はただ一言問うただけだった。

「ああ……大丈夫だ」

その短い問いに込められた真意を悟り、緋雨もやはり短い返答をした。すると蘇芳はそうかと頷き、その場で白鳳に跨った。

「お前には殿しんがりを任せる。遅れをとるな」

「わかった」

緋雨は頷きながらも馬上の蘇芳と目を合わせない。白鳳が嘶きその蹄が地を蹴った。緋雨は巻き起こった風に煽られた長い髪を大きく頭を振って払うと歩き出した。

「すまない、待たせたな」

広場の端に立つ真赭から手綱を取ると、緋雨は黒紅の背に跨った。高揚した場の空気に苛立っているのか、その尾が落ち着き無く揺れている。

「御武運を」

愛馬の首をそつと撫でる緋雨に弓一式を手渡しながら、真赭は遠慮がちに言う。

「ああ」

素早く弓と矢筒を背負うと、緋雨は手綱を強く引いて黒紅の脇腹に蹴り入れた。

「留守の間、計都を頼む」

「お任せください」

真赭は黒紅の進路を邪魔せぬよう一步退いて一礼する。その直後、漆黒の馬体が疾風の如く正面門の向こうへと消えて行った。

「解せぬ！」

怒声が背の高いぶなの木々を揺らす。

「人間どもが攻め入ってくるのを黙って待っているのか!？」

白い顔を額から切り裂く傷の痛みが苛立ちを募らせ、伽羅衣は鼻に皺を寄せた。

「落ち着かぬか伽羅衣。 邑夾は何もそういう意味で言ったのでは――」

「黙れ。鴉の浅知恵など聞いておらぬわ！」

「何じゃと!？」

むっとした六翔は今にも掴みかからんばかりの剣幕で伽羅衣を睨みつけたが、眞守が肩に手を置いて踏み留まらせる。六翔は不満そうな表情を見せたものの、翼をばさりと反してに荒く息を吐いた。

やれやれと眞守は人知れず肩を落とした。

共に羅喉に生きる妖同士と言えどその関係は一枚岩では無い。友好な関係にある一族もいれば敵対する一族もいるのだ。ちょうど六翔の鴉天狗一族と伽羅衣の妖狐一族のように。もっとも妖狐一族が目^{じぶんたち}の敵にしているとすれば、その最たるところは山狗一族^{じぶんたち}なのだが、と眞守は内心苦笑した。

「履違えるな伽羅衣よ」

この期に及んでまとまりの悪い妖一族の長達の前に、漆黒の巨体が進み出た。

数千年の齡を重ねたその肢体はどの長達よりも大きく、ただ佇んでいるだけで全てのものが動きを止めるほどに強烈な威圧感を漂わせている。この世の理を全て映してきたかのように、深淵なる光を瞳に宿すこの妖の名は邑夾。山狗一族の長であり、全ての妖の頂点に君臨する羅喉の長である。

羅喉の最奥部にある根源の泉から滅多に出る事の無い邑夾が、少し離れたぶな林まで姿を現したのは、迫りつつある人間たちの進撃に対処するためであった。

「私は何もせずにいるとは言っておらぬ。機を見計らえと言ったのだ。陰陽師と言えど所詮は人間、羅喉に入ってしまったら地の利は我らにある。よもや二百年前の屈辱を忘れたわけではなからう」

「忘れなどするものか……！」

ぎりつと齒を鳴らした伽羅衣は、冷たい双眸を激しい憎惡に燃え立たせた。

「だがそれならばなおの事、奢り高ぶった人間どもに我らの力を思い知らせてやるべきではないか……！」

「こちらから討って出てどうすると言うのだ？ 奴らに利を与えるだけであらう」

「そんなもの力で捻じ伏せれば良いだけの事。まさか邑夾、貴様怖気づいたわけではあるまいな？」

伽羅衣の暴言に、今まで黙っていた他の長達が一斉に非難の声をあげた。

「黙れ、臆病者どもめ！ 貴様らも所詮死が怖いだけであろう？
ならば尻尾を巻いて見ておるが良いわ！」

伽羅衣はありあまる憤怒を声にして一同を罵倒すると、まるで表情を変えない邑夾を睨みをつけた。

「せいぜい聖域の中で震えておるが良い。我ら妖狐は誇り高き一族。死など恐れぬわ！」

「待たぬか伽羅衣！」

「良い、行かせてやれ」

そう吐き捨てて一人踵を返した伽羅衣に六翔は声を荒げたが、他ならぬ邑夾がそれを制した。

「他に話がある者がいれば聞こう」

ぶな林から伽羅衣の姿が消えてしまうと、邑夾は残った妖達を促した。誰からも返答は無いが、代わりにそれぞれから本来の姿の咆哮があがる。

「では真守以外は立ち去るが良い」

それはつまり、異論無し之意であった。

「伽羅衣の加勢をしろと言いたいんだろう？」

人氣の無くなったぶな林は冷たく澄んだ氣に満ちていた。

ただし林とは言っても眞守が氣樂に寄りかかった一本ですら、樹齡數百年の巨木である。背中越しに伝わってくるひんやりとした質感は、苔生す樹皮の内側に脈打つ水の流れを感じさせた。

「分っているなら話は早い」

「あの高慢な狐が俺に大人しく手助けさせると思うか？」

「思わぬ」

「だろうな」

邑夾の即答に眞守は鼻を鳴らした。羅喉で最も力ある妖を前にしながらも、眞守の態度は普段と全く変わらない。どこか不遜な笑みを浮かべながら、組んだ腕の中で指先を遊ばせている。

「だが、放っておけば妖狐一族は間違いないで滅びる。それは避けねばならぬだろう」

「そうして翡翠の泉は枯れて、羅喉全体の力が弱まる……か。人間を殺すより聖域を死守する事が重要だと何故氣付かない？ 護る者がいなくなればいずれ全てが同じ道を辿る羽目になるだろう。そうすれば俺達妖は滅びるしかないな」

「それは私とて承知の上だ。だが、伽羅衣の言う事も一理ある。いずれ、人間どもと決着は着けねばならぬ」

「二百年の沈黙を経て……か？」

眞守は急にその表情から笑みの色を隠すと、自分のそれと良く似た宵色の双眸を見据えた。

「……ぬるい考えは変わらずのようだな眞守。我が息子よ」

「たかだか数百年生きただけの若造だ。そうすぐに変わりはしないさ」

眞守はいったったか伽羅衣に言われた言葉に精一杯の皮肉を込める。だが邑夾は僅かに目を細めただけだ。

「俺の生き方は俺の物だ。誰にも指図はさせん」

「勝手気ままに生きるのは構わぬが、たまには役目を果たしてもらおう」

眞守が承知の意を表して片手を挙げると、邑夾は背を向けて混沌の泉へと歩み出した。

「眞守よ。一つお前に言っておく事がある」

「何だ？」

樹皮から背を離し、邑夾とは逆方向へ進みかけていた眞守は立ち止まった。

「あの小娘に入れ込むのは止めておけ」

眞守の眉がぴくりと跳ね上がった。

「……それは、あいつが陰陽師だからか？」

「いや。人間だからだ」

「ほう。では忠告として聞いておこう……」

眞守は肩越しに振り返った。視線の先に、邑夾の後姿がある。

「だが、どうするかは俺が決める」

眞守は高らかに言い放った。

第十四話 憂迷の対価 [後編]

濃淡様々な紅と黄が、吹き抜ける一陣の色無き風を極彩色に染めてゆく。間もなくその役目を終え、地へと堕ち行く運命を知る木の葉達はこの上なく艶やかだ。

色付く羅喉の麓に並んだ殲滅部隊は、一心に睨みをきかせていた。その視線の先で同じく殲滅部隊を見据える妖狐達の数およそ五百。数だけで言えば殲滅部隊が圧倒しているが、これは人間同士の戦ではない。

二百年の間を空けたとはいえ、妖も馬鹿では無いのだ。遥か昔から争い続けてきた以上、彼らもまた人間がどのように戦いを挑むかを知っている。だからこそ、ただの獣のように真っ向から突っ込んでくるような真似はしない。

「青藍」

蒼穹を支配する太陽が最も高い位置に昇ったのを見計らって、蘇芳は声をあげた。

「弓兵前へ」

青藍は頷く代わりに馬から降りると、弓を手にして前方へと進み出た。それに付き従うように、弓兵達が最前列へと移動する。

「構え」

自らも矢を番えながら青藍は鏃やじりの先に妖狐達を見据えた。もちろんこちらの動きは見えているはずだが、彼らは動かない。引き絞ら

れた弦のように一瞬、張り詰めた静寂が訪れる。

「放てっ！」

青藍の声が響き、風を切り裂いて矢が上方へと放たれた。無数の矢が空を覆う暗雲となり、豪雨へと変化して妖狐達に降り注ぐ。その洗礼を全身に受けた妖狐が一匹また一匹と地に倒れ伏すが、妖術によって宙に築かれた水壁が、大多数の矢を明後日の方向に弾き飛ばしていた。

無論、この程度で全滅するくらいならとつくの昔に人間が勝利を収めている。蘇芳は特に驚く事も無く次の指令を出す。

青藍と弓兵達は後方へと下がり、入れ替わりに月白の率いる先陣が進み出た。同時に、前方で妖狐達が身を低く構えを見せる。そして一匹が高く鳴いた。

「先陣、突撃する！ つづけえーっ！」

それを合図に、月白が大太刀を振り上げると、天を突く雄叫びが上がった。真っ先に走り出す月白の背に続き、兵達が突撃を開始する。巻き上げられた土煙が治まる頃には、既に激突は始まっていた。

「うらあっ！」

群れに最初に斬り込んだ月白は、走る勢いをそのままに飛び掛る妖狐を一閃した。二つに断たれた体から血飛沫が上がるのも待たず、すぐさま次の獲物へと狙いを定める。

斬り、突き、薙ぎ払い、時には大太刀の柄で殴り飛ばして月白は大いに暴れまわった。その猛る虎の如き雄姿は戦いに不慣れな若い兵達を奮い立たせ、妖狐の鋭い爪を恐れずに先陣は順調に敵数を減

らしていく。

だが、その快進撃を阻む第二陣は突然現れた。

敵を追い立てる月白の先陣の中で不意に兵達がばたと倒れ始める。倒れた兵の体には無数の穴が開き、そこから流れ出た血が大地を汚していく。

「来やがったな……。備えろ、歩兵は陰陽師から離れるな！」

敵の変化に気付いた月白は、妖狐の体当たりを後方へ跳んでかわし声を張り上げた。

「急々如律令。突き立てよ、白壁鉾！」
はくへきこう

大地から生まれた白亜の壁が、その滑らかな表面で空中からの飛来物を遮蔽する。高位の妖が使う水の刃だ。月白の命令に従い少数に分かれて集まった兵達は、陰陽師の造り出す防護壁に身を隠した。

「左翼隊、右翼隊、突撃せよ！」

高位の妖の参戦によって徐々に崩れ始めた戦況を見極めて、蘇芳の指令が第二陣を送り出す。

「尾の数が多い者は妖術を使うわ。歩兵は深追いせずに陰陽師に任せなさい」

「九尾の妖狐には決して手を出すな。見つけたらすぐに筆頭に知らせろ」

弓から薙刀に持ち替えた青藍が声をあげ、長槍を携えた烏羽が同

調する。ほぼ同時に二つの隊が動き出した。

左翼隊を率いて青藍が走る。

その前方に立ち塞がった三尾の妖狐が一つ鳴くと、巨大な水柱が立て続けに地から噴出した。それら全てが絡み合うように一つになり、鋭い奔流となって押し寄せる。

「急々如律令」

青藍は悲鳴をあげる兵達を手で制し、薙刀を後方へと引いて身を低くした。

「切り裂け、碧雲招雷！」
へきうんしょうらい

術を解き放つと同時に青藍は地を蹴った。迸る雷光が、迫る奔流と衝突し両断する。その間を一瞬で駆け抜けた青藍は薙刀を一閃、反応の遅れた妖狐の尾を一本切り落として着地し、すぐさま体勢を立て直して次の術を放つ。

「急々如律令。狂い咲け、百花繚乱！」
ひやつかりようらん

無数の花卉が妖狐の頭上で舞い散り、その全てが薄刃となって一斉に襲い掛かった。薄紅の花卉に、鮮やかな血飛沫が彩りを添える。

「はあっ！」

体中を切り裂かれた妖狐が何とか立ち上がろうとするのを青藍は許さない。高く跳躍し、手にした薙刀を正確に首筋へと突き立てた。

びくりと震えた妖狐から刃を引き抜けば、多量の血が噴出し濃紺の直毛を湿らせる。

「続きなさい！」

多量の水でずぶ濡れになった兵達は、下がりかけた士気を一気に盛り返し闘とぎの声をあげた。

「急々如律令。吹き荒べ、薄氷六花」
はくひょうりつか

刹那に巻き起こった吹雪が急所を狙う水の矢を凍てつかせ、一瞬の後に粉碎した。降り注ぐ氷の破片を身に受けながら、烏羽は長槍を大きく振り回しながら旋回する。その動きが闇雲ではない事は、動くたびにその刃先に咲く血花が証明していた。長槍の間合いに存在していた仲間が一通り倒れてしまうと、妖狐達は怯んだように動きが止まる。烏羽は一度大きく長槍を振って、その刃先から滴る血を払い落とす。そして冷淡な紫紺の瞳で一匹の妖狐を捉えた。

「急々如律令。破り去れ、水爆呪」
すいばくじま

刹那。

その妖狐の足元から膨れ上がった水球が破裂し、水飛沫が無数の針となって付近に飛び散る。原形をとどめず一斉に散った妖狐達の体が血溜まりに沈む。それを踏み越えて、烏羽は次なる敵へと疾走した。

「おうおう、派手に暴れてやがるな」

自ら造り上げた防護壁の影から戦場を見渡して、月白は呆れたように声を漏らした。

いたる所で雷撃の閃光が走り、花卉が舞い、水飛沫が弾け、氷の雨が降り注ぐ。いくら妖の力が弱まっているとはいえ、この圧倒振りはいささか予想外だ。

「そろそろ本陣が動く。行くぞっ！　うかうかしてると見せ場を全部奪われる」

月白の先陣が再び乱戦のさなかに飛び出していった頃、蘇芳はまさにその時に向け動いていた。白鳳の背から降り、後方をほんの僅かに振り返る。

「殿は命令あるまで待機せよ」

馬上の緋雨は頷いたが、その動作は紅の羽織をばさりと脱ぎ捨てた蘇芳の視界には恐らく入らなかった。今さらながら、緋雨は何故蘇芳が殿を任せたのか理解する。

隊列の最後尾に位置し、退却時は敵の追撃を食い止める事が本来の殿の勤めである。

言い換えれば、参戦するのは退却時の短い間だけなのだ。普段であれば、蘇芳も主力の一人である緋雨をこの任に就ける事はしない

だろう。おそらく出陣前に交わした会話の中で迷いを見抜かれてしまったのだ。だから戦闘から遠ざけた、そんな所だろう。手綱を握る緋雨の拳が震えた。

「備えよ」

蘇芳は二本の愛刀を引き抜き、隊列の最前面へ歩を進めた。傾き始めた陽の光を背に感じる。

「本陣、突撃。一匹たりとも逃すな！」

地響きを伴って、蘇芳と最大数の兵達が怒濤の如く動き出した。

「急々如律令、荒れ狂え、焰焦紅蓮^{えんしょうくれん}！」

蘇芳の放つ火焰で本陣は一気に戦の中央へと躍り出て、他の隊と合流しさらに前線を押し上げる。総力戦が始まったが、殲滅部隊の勢いに押され妖狐達は徐々に後退していく。

だが、さらなる追撃を命じようとした蘇芳の耳に、悲鳴にも近い兵の声が届いた。

「き……九尾狐だっ！」

恐怖と動揺がさざ波のように広がった。白銀の巨体が数人の兵を踏みつけて進み出る。

「怯むな、撤退など許さぬ！ 人間どもの血でこの大地を染めてくれようぞ」

低く唸るように伽羅衣は言葉を発する。その四肢と大地の間で兵が苦悶の呻きをあげたが、それは文字通り踏み潰された。跳ね上がる血飛沫と肉片に、伽羅衣を取り巻いていた兵達が後ずさる。すかさずそこに飛び込んだ伽羅衣は前足を大きく一閃する。動く事すらままならず鋭い爪に薙ぎ払われた者達の体が、小さな部品となって宙を舞う。

「我が一族の誇りを見せよ！」

ほんの一瞬で全軍を恐怖の底へ叩き落とし伽羅衣が吠える。その姿が、尾を巻いていた他の妖狐達の本能を呼び起こし、消えかけた殺戮への執念を駆り立てた。

妖狐一族の長の出現で形勢が逆転する。防戦と後退から再び攻めの姿勢へ転じた妖狐達は、逆風の中を突き進むかのごとく激しい逆襲に打って出た。

大幅に数を減らしていた下位の妖狐が一丸となって突進し、まとまっていた殲滅部隊の一回を蹴散らした。散り散りになって兵達が後退を始めると、その背に無数の水針が容赦なく飛来する。その無慈悲さは兵の体がずたずたになってなお、撃ち抜かれ続け宙に留まっているほどだ。

「全軍背走し後退、隊列を整えよ！」

危うく総崩れになりかけた所で、蘇芳の声が響き渡る。動乱の中でも掻き消されぬそれは、各自防御の術で応戦していた筆頭たちにも届いた。異口同音の伝令が、ばらばらになった兵達を呼び戻し、ほどなくして鳥が翼を広げたような陣形が出来上がる。その中央へと妖狐達の群れが突入してくると蘇芳は声を張り上げた。

「今だ、両翼を閉じよ！」

翼の中央へと誘い込まれた妖狐達を、ようやく落ち着きを取り戻した兵達が包囲する。

「敵の数は我らより少ない。一人で戦うな、まとまって各個撃破を狙え！」

もはや退路は無しと悟った妖狐達が死力を尽くして暴れ始め、戦は最終局面へと突入した。

「小僧が、余計な真似を……！」

再び劣勢に立たされた戦況に、伽羅衣は怒りを携え蘇芳へと突進した。

「急々如律令。駆けよ、爆炎烈波^{ばくえんれつぱ}！」

「馬鹿め、そのような焚き火が我に効くと思うなっ！」

蘇芳の放った炎の渦を前足で軽く叩き落して、伽羅衣は嘲笑った。

「我は翡翠の泉の伽羅衣。水を統べる我に火を出すだけが取柄の小僧が挑むなど笑止！」

「言ってくれるな」

術が防がれる事など最初から分り切っていた蘇芳は、自身も笑うと二刀を鞘へと納め、代わりに背負った大太刀を引き抜いた。代々

筆頭へと受け継がれる紅の一門の宝刀、紅時雨^{べにしぐれ}が磨きぬかれた刀身に伽羅衣を映し出す。

「まさかその玩具で我を倒すと?」

「馬鹿を言うな。紅時雨は巨岩さえ紙の如く斬り裂くが、生憎これだけでお前を倒せるとは思っていないさ」

「とち狂ったか、小僧。ならばどうする?」

「狂ってなどいない」

伽羅衣はもはや嘲笑すら零れぬ最大級の嘲りを贈ったが、蘇芳は首を横に振った。

「ただ、朱雀として戦うまでだ」

その双眸——真紅の陰陽眼が燃え立つように輝き始める。

「我ら筆頭が何故その称号で呼ばれるか知っているか?」

「何……っ!?!」

伽羅衣に初めて動揺が走った。

「封解^{ふうかい}」

五芒星の印を斬る蘇芳の周囲が急激に温度を上げ、陽炎が立ち昇る。

「奥義、炎帝飛翔」
えんていひしやう

刹那、蘇芳を中心に噴き上がった巨大な火柱が天を焦がし、付近にいた妖狐を一瞬で蒸発させる。次いで紅蓮に染まった上空に現れた燃え盛る朱雀が、大きく啼いて飛来する。そしてかざされた蘇芳の腕へ飛び込んだ。二度目の爆風が吹き荒れ、神鳥の焰を全身に纏った蘇芳は、紅時雨を握る右腕をすっと伸ばして強く笑んだ。

「火侮水。かぶすい強い火焰は水の相剋あいこくをも覆す。火を出すだけが取柄かどうか、試してみると良い」

焰に照らされ紅蓮に輝く切っ先が、憤怒した伽羅衣に向けられた。

「小生意気な小僧めっ！ その首落としてくれる！！」

「来い！」

巨大な水流を従えて跳躍した伽羅衣と、蘇芳が真っ向から激突した。

熱風の余波は、遠く離れた緋雨の元まで届いた。火を怖がらぬよう訓練された黒紅ですら驚いて前足を振り上げる。緋雨は手綱を引いて愛馬を落ち着かせると、改めて伽羅衣と対峙する蘇芳を見やった。

陰陽眼から解き放たれた朱雀と一体化した今の蘇芳は、途方も無い力を秘めているはずだ。焰に包まれ佇む姿が、古の書物に記されたそれを思い起こさせる。

「これが……本来の筆頭の力……」

これだけ距離があっても感じる力の片鱗に、恐怖すら覚える。恐らく勝負は一瞬で決まるだろう。

火焰と濁流が衝突する。

燃え盛る勢いは水の流れを圧倒した。衝突部分からたちどころに激しい水煙があがる。そして轟音が響いた。舞い上がる水と土の煙が濃霧のように蘇芳と伽羅衣の姿を覆い隠す。その僅かな間、戦場は完全に沈黙した。

晴れ渡った視界には、横たわる白銀の巨体と紅蓮を纏った蘇芳の立ち姿。歓声があがった。

「敵は崩れた。総力を挙げよ！」

すかさず、烏羽が煽りをかける。

「勝機は我らにある！」

うず高く積み重なった妖狐の死骸の上から青藍の声が続く。

「この機を逃すな！ かかれーっ！っ！」

伽羅衣が敗れたのを見て狼狽する妖狐の残党に、月白の隊が押し寄せる。

この瞬間、勝敗は決したかのように見えた。

——その時、突如長い遠吠えが戦場に木霊した。

「ぜ、前方に敵襲っ！」

「山狗だ！」

誰かの叫びに、殲滅部隊は動きを止める。新手は、妖狐達のさらに後ろに現れた。ざっと見渡しただけでも黒や灰、褐色の山狗達の数は三百ほど。それらを従えて中央には夜色の男が佇んでいる。

「逃げる者は追わなくていい。無駄な戦いはするな、行け！」

牙を剥きだして山狗たちが咆哮をあげ、一斉に駆け出した。

「またあいつか……っ！」

再び混乱へと引き戻された戦況に、蘇芳はぎりつと奥歯を噛み締めた。

「邑夾め……いらぬ気をまわしおったな……」

騒乱に掻き消されそうになりながらも足元からあがった声に、蘇芳は視線を移した。瀕死の重傷を負った伽羅衣は、地に伏したまま蘇芳を見上げる。その双眸にはもう戦意が無い。

「止めを刺せ小僧……山狗の若造に情けをかけられ恥辱を舐めるくらいなら、この命貴様にくれてやる……」

さすがに千年近く生きていただけあって、その覚悟は堂々たるも

のだ。蘇芳は敬意を表し、紅時雨を伽羅衣の首に突きつけた。
だが、蘇芳はすぐさま跳び退いた。伽羅衣と蘇芳の間で土塊が噴
き上げる。

「それは困る」

土煙を払って現れた眞守は、忌々しそうに睨みつける蘇芳を見下
ろした。

「また会ったな朱雀。悪いがこいつは連れて帰らせてもらう」

「ふざけるな……！ これは我ら一族の戦い、今さら現れておいて
大口を叩くな」

蘇芳よりも早く非難の声は伽羅衣からあがった。

「羅喉の主の命令だ、文句は邑夾に言え。それにお前が死ねば残っ
た一族はただの獣に成り下がって駆逐されるだけだぞ？」

眞守は振り返って口端を吊り上げた。

「人間どもに一矢でも報いてやりたいなら、生き延びろ。妖狐の長
がこのままじゃ犬死だ」

「……貴様らと一緒にするな」

犬死という言葉が癪に障ったか伽羅衣は吐き捨てたが、再び瞳が
鋭さを取り戻していた。

「後で我に寝首を掻かれて吠え面をかくなよ、若造」

「安心しろ。吠えるのは慣れている」

軽口を叩く眞守を一睨みしたものの、力を振り絞って立ち上がった伽羅衣の肢体から血が滴り落ちる。

「妖狐一族よ撤退する。山狗どもの背後に下がれ！」

「させるか！」

眞守に牽制されていた蘇芳はそこで纏う炎熱を解き放った。咄嗟に受け止めた眞守が、衝撃を殺しきれずに大地を削って後退する。今まで散々苦汁を舐めさせられたせいも、蘇芳の瞳は怒りに燃え盛っていた。

「……なるほど、これまでとはわけが違ふようだ」

一撃で力の片鱗を垣間見た眞守は、珍しく真顔になる。

「巳聖、伽羅衣を援護して下がれ！」

眞守の叫びに駆けつけた鈍色の山狗が前足で地を抉ると、大地が鳴動した。巳聖を中心に巨大な地割れが走り、巻き込まれそうになった人間達が悲鳴をあげて逃げ惑う。その裂け目は深く、跳び越えるのは容易ではない。対岸へと切り離された伽羅衣と巳聖を確認して、眞守は改めて蘇芳を見やった。

近くに立っているだけでその焰がちりちりと皮膚を焼く。先ほどの攻撃を受け止めた右腕にはしる確実な痛みに、眞守は目を細めた。

「その焰……純粹に勝機を逃した怒りだけでは無いな。余程俺が憎

いと見える」

「黙れ！」

心の奥を見透かされ、蘇芳は大きく腕を振るった。太刀筋はそのまま烈火となって真守に襲い掛かる。

「凶星か。仕方ない、たまには相手になろう」

振り払われ散り遊ぶ火の粉の中に蘇芳が飛び込む。その奥で真守は笑った。

追う者、逃がす者、逃げる者。山狗一族の乱入で戦場は混沌を極めた。だが緋雨の視線はその大多数よりも、ある一点に固定されている。

焰を巻き上げ激しい攻防を繰り返している蘇芳と真守。妖狐達を逃がす事を優先させているためか、真守がやや押されている。だが蘇芳も今の状態を維持し続けるには、消耗が激しくなってきたいるのが

見て取れた。

制約のある真守が倒されるのが先か、蘇芳が力尽きるのが先か。

今までそうする事を意図的に拒んできた真守が自ら戦っているのだ、いずれにせよ長引けば双方共に無事では済まない。

緋雨はほとんど無意識に黒紅の腹を蹴っていた。

「緋雨様！？」

控えていた殿の兵達は困惑する。殿が動くのは退却時のみのはず

だが、それを率いる緋雨が突如単騎突入を開始した。

「退却だ、鎬矢かぶらやを放て！」

つまり今がその時なのだろう。緋雨の行動を退却命令と勘違いした兵達は一斉に鎬矢を放った。

天高く舞う矢から鳥の鳴き声に似た鎬の音がいくつも響き渡った。

「退却命令？　どういうことよ！？」

上空を振り仰ぎ、青藍は叫ぶ。誰もそんな命令はしていないはずだ。

「あいつ、何をしている？」

鳥羽が騎乗したまま駆け抜ける緋雨の姿を捉える。原因はおそらくそれだろう。

「馬鹿野郎！　戻れ、戻れっ！」

だが兵達は退却の命令に最も重きを置くのが常だ。それが間違いであると月白が止めに入ったが時既に遅し、戦場を放棄した兵達が一斉に退却を始めた。もはやそれを止める事はできない。

自分が引き起こした大失態に、緋雨が気付いたのは戦場の半ばほどまで来てからだった。進行方向から逆走して来る兵士達の姿が、それを知らしめる。

「馬鹿者っ！　誰が退却しろなどと言った！？」

緋雨は思わず手綱を引いて戻るか進むか一瞬迷いを見せたが、蘇芳の鋭い叱声がとんできた。はっとしてそちらを見やれば、眞守と戦う蘇芳の姿がある。

「かまわんだろう、どうせそろそろ頃合だ」

「貴様……っ！」

一瞬注意の反れた蘇芳にありったけの土煙が覆いかぶさる。その隙に乗じて巳聖の造った地割れを跳び越えた眞守は、対岸の地に手を着いた。大地が大きく波打ち、裂け目は崩れ落ちながら一気に広がる。

間一髪で転落を免れた蘇芳は、眼前に出現した崖のような巨大な裂け目に舌打ちした。

もはや翼でもなければ向こう側に渡ることは不可能だ。唯一幸いだったのは退却を始めたせいで対岸に兵士達を取り残されなかった事だけだろう。またもや目と鼻の先で眞守に逃げられ、蘇芳は口惜しさのあまり紅時雨を乱暴に地に突き立てた。その刀身が夕映えの空を反射して茜色の光を放つ。

こうして最初の殲滅戦は、勝利目前にして敵の逃亡を許すという予想外の結果で幕を閉じた。

「自分が何をしたか分っているのか！？」

殲滅戦から屋敷に戻った蘇芳は、当然緋雨を激しく問い詰めた。緋雨は黙って叱声を受けたが、その拳は握られ唇は強く噛み締められている。

「何のために私が殿の任に就けたと思っているんだ！」

「……すまない。だが――」

「言うな！」

蘇芳は緋雨の背後の壁を殴り付けた。緋雨は身を竦ませる。あの望月の夜以来、蘇芳とこれほど近くで接する事が無かったからだ。

「……もう良い。夕風を渡せ」

「な……」

「早く渡せ！」

壁から手を引いた蘇芳は、有無を言わせない剣幕だ。緋雨は目を見開いたが、大人しく腰の愛刀を外して手渡した。蘇芳の使う二刀と兄弟刀である夕風は、副官となった時に授かったものだ。

それを手放すという事はすなわち――。

「副官の任を解く」

やはりそうかと、緋雨は俯いて苦笑する。そして膝を着いて深く身を折った。

「今までご苦労であつた……」

蘇芳はひざまづいた緋雨の頭をくしゃりと撫でて背を向けた。

「謹慎を言い渡す。許可あるまで屋敷から出ることを禁じる」

「……御意」

蘇芳が立ち去っても緋雨は随分と長い間その場に留まっていた。
やがて立ち上がり振り仰いだ空から弱い光が降り注ぐ。

夕影に沈む緋雨は、今にも泣き出しそうな顔をしていた。

第十五話 焦熱の刃

何処からか微かに届く雁の音に見上げれば、遙か高空に連なる姿があった。白の風花が舞う季節を求め一足先に渡って来たのである。

白鳳の背に揺られながら、蘇芳はそつと左頬に触れた。

もはや腫れも痛みも残ってはいないが、そこを打った愛しい者の姿が今も目に焼きついて、また別の場所にちくりと新たな痛みを残す。

行く水が帰らぬように、一度溢れ出た想いもまた胸の奥に再び留め置く事は出来ない。もしもあの時、堰を切った激情を抑える事が出来ていたのなら、今もまだあの娘は自分の隣で無垢に笑ってくれるのだろうか。

愚かだとはわかっていてもそうであって欲しいと願い、背の高い枯野が終るまで蘇芳は泡沫の夢を見ていた。

地に降りると、緩やかな登り坂を見上げた。その先にある場所を訪れるのは三度目だ。一度目は緋雨の痕跡を追って、二度目は陽炎の術の幻影を通して、そして今は自らの意志で。

「ここにいろ」

愛馬の鼻先を一撫でした蘇芳は、その左手に紅時雨を握り歩を進めた。

朽ち行く葉の桜木は丘の上に静かに佇んでいる。

幹の下まで歩み寄ると、その背後からすっと人影が現れた。だがそれは蘇芳の意図した相手ではない。薄墨色の目をした妖が、無表情にこちらを見つめていた。確か巳聖という名だったはずだ。

「立ち去れ」

鈍色の髪をなびかせて巳聖が言う。

「お前に用は無い」

「ならばなおの事、眞守が戻る前に立ち去るがいい。その殺気を置いてな」

「……ほう」

蘇芳はざらついた樹皮に触れた手を引いて、少し驚いたように巳聖へと向き直った。

「私が何のつもりでここに来たのか、分っているような口ぶりだな」

巳聖は答えない。ただその双眸を僅かに細め、音も鳴く後方に跳ぶ。

「なるほど、さすがにあいつの傍にいるだけはある」

自らの抜き打ちを難無くかわした相手に蘇芳は賞賛を贈った。

「眞守はどこだ？ 答えろ」

「断る」

「そうか。では仕方が無い」

蘇芳は左手の鞘を手放すと、すつと右腕を伸ばした。

「お前を餌にさせてもらう」

抜き身の紅時雨を突きつけられても巳聖は表情を動かさず、静かに身構えた。その指先から伸びた鋭い獣の爪が、主に似つかわしくない獰猛さを見せる。

刹那。

ぱしつと音を立て朽葉が一枚宙を舞う。背後に現れた気配に、蘇芳は振り向き様に一閃する。だがすでに相手はそこにいない。頭上からの風斬り音に素早く数歩下って身を反らす。爪が鼻先をかすめ巳聖が着地した。

間を空けずに蘇芳は下段から斬り上げる。着地直後の不安定な体勢を狙われ巳聖は僅かによりめくが、地に手を着いて身軽に跳躍、そのまま二度三度と跳んで距離をおく。

だがその白い顔に残された紅い一筋にぴくりと眉を跳ね上げた。無表情の中にほんの微かに現れた確かな焦り。蘇芳はそれを見逃さなかった。

当ても無くただ過ごす日々の中では、時の流れはひどく緩慢だ。戦いから身を遠ざける事がこれ程まで己の存在を希薄にさせるとは、緋雨自身も思っていなかった。

無意識に伸ばした腰に愛刀の柄は無く、より一層の虚しさを感じさせる。戦う事が自分の存在意義だと思っていたからこそ、それを取り除けば何も残らない。

緋雨は虚ろな瞳のままふらりと外に出た。

春は色鮮やかな庭園も、今は散り残った花々が僅かに揺れているだけだ。過ぎ行く季節の物寂しさなど気付けば感じた事すら無かったと自嘲する。

緋雨はそのまま屋敷の一番北側まで足を運んだ。

朱塗りの柱が並ぶ厳かな建物がひっそりと佇んでいる。歴代の筆頭が眠る紅の一門の霊廟だ。訪れるのは恐らく先代――蘇芳の父親の葬儀の時以来だろう。

特に何かを意識する事も無く、緋雨はそっと足を踏み入れた。

独特の冷えた空気が身を包む。整然と筆頭達の名が書き綴られた石造りの両壁の間を歩み、最奥の祭壇を見上げた。金色に輝く朱雀像が、今にも動き出しそうに翼を広げている。紅玉を嵌め込んだ両の目が、蘇芳の陰陽眼を思い出させた。

そして緋雨はふとあることに気付く。

「紅時雨が……無い？」

宝刀が祀られているはずの朱雀像の下には、刀台だけが残されている。殲滅戦の時に蘇芳が使っていたのは知っていたが、その後一度戻しているはずだ。紅時雨を扱えるのは朱雀だけだが、それでもそう頻繁に持ち出して良い物では無い。戦や儀式以外だとすれば或いは――。

「特別な相手と戦う時……」

言うが早いか緋雨は踵を返し霊廟を飛び出した。

数ある聖域の中でも最も重要な役割を果たす根源の泉は、邑夾に近しい極限られた血統の者でなければ、その入り口であるぶな林より先に踏み入る事を許されていない。

その数少ない一人である眞守は蒼玉のような深い蒼色に身を浸す邑夾と言葉を交わしていたが、ふと何かを感じ取って言葉を切る。

「……血の匂いだ」

「我が一族の血が流されておる」

この場所には常に霞がかかっているため表情は分からないが、邑夾の声から険しさが感じられた。

「眞守よ」

「何だ？」

すぐに踵を返した背中を邑夾が呼び止める。眞守は苛立たしげに眉を寄せながらも振り返った。

「恐らくお前は選ばねばならぬぞ。あの人間の小娘か、山狗一族としての血かをな」

「……………！」

眞守は邑夾を一睨みするとすぐに走り出す。その後姿を見送って、邑夾は泉から上がった。

「……優しさだけでは何も出来ぬ。結局己も周りも傷つけるのだと
いい加減に気付かぬか、愚か者め」

巨体から滴り落ちた水滴が静謐に幾重にも木霊する。邑夾はゆっ
くりと柔らかい土に踏み出した。

「蘇芳様なら朝早くお出掛けになられましたよ」

目に入った相手に片っ端から声をかけ、五人目の女中の言葉が緋
雨を確信へと導いた。間違いなく、蘇芳は眞守との決着をつけるた
めに羅喉に向かったのだろう。

緋雨は何の説明も無く女中を置き去りにすると、すぐさま厩へ走
り黒紅を引き出した。だがその行く手は硬く閉ざされた門と、門番
達に阻まれる。

「門を開けろ」

「申し訳御座いません。緋雨様を通してはならないと蘇芳様から仰
せつかっております」

「緊急の用件だ。事情を説明している暇が無い」

「どうかお戻りください」

低頭した門番に、緋雨は小さく舌を打った。謹慎中の身には当然の反応だが、今は問答している時間など無い。

「……ならば押し通るまでだ」

「は……？」

「後で咎めを受けたらそう言ってやれ。お前達に非は無い」

緋雨は意味が分らず間抜け顔の門番に懽然と言った。

「あいつらを退かしてやらなければ火傷では済まないぞ」

「あの……緋雨さ——」

「警告はしたからな」

腕を伸ばした緋雨を見て、門番は青ざめて声をあげた。

「ぜ……全員そこを退け——っ！」

「急々如律令。駆けよ、爆炎烈波！」
ばくえんれつぱ

蜘蛛の子を散らすように門番達が離れるのを見計らって、緋雨は印を切り術を解き放った。爆炎が正面門に大穴を空ける。

「借りるぞ」

緋雨は呆けている目の前の門番の腰から素早く刀を掠め取ると、ひらりと黒紅に飛び乗って鞘で尻を思い切り叩いた。大きく嘶いた

黒紅が燃え盛る門に突進し、大穴を跳び越える。門番達は緋雨の大胆な行動に、腰を抜かして見ていただけしか出来なかった。

朽ちて乾いた草葉を踏み荒らし二つの影が躍る。

巳聖が最初に見せた焦りという小さな傷口は、今や蘇芳の猛攻によって押し広げられ致命傷へと変化しつつあった。雨あられと絶え間なく降り注ぐ斬撃に囚われすぎれば、火炎に身を焼かれ、体勢を崩せば間髪いれずに刃が襲う。歴然たる力の差は、俊敏な山狗の血をもつてしても埋める事は出来そうに無い。

「急々如律令。舞え、閃光紅燕」
せんこうべにつばめ

「があっ……!!」

至近距離で吹き荒れた火の粉をまともに吸い込んだ巳聖は、喉を押さえて激しく咽返った。動きを止めたその身に蘇芳の刃が容赦無く迫る。

「……ぐっ」

間一髪で急所への一撃を免れた巳聖は、苦々しく表情を歪めながら自分の右肩に目をやる。久遠桜の幹に縫い止めるようにして貫かれたその場所から、紅い液体が滴っていた。

「もう少し骨があるかと思えば、そんなものか」

喉を焼かれ苦しげな息を吐く巳聖を一瞥して、蘇芳は言い捨てた。

「……殺したければ殺すがいい。だが、お前に……眞守は倒せない」

「何故そう言い切れる？」

蘇芳が握る紅時雨の柄に力を込めれば、巳聖の身が微かに震える。

「何故……？ 自分の力を過信した者の言葉だな……」

巳聖は苦悶の端で小さく笑う。そして突如大きく身を捻った。

「なっ……！？」

無理矢理身を伏せた巳聖によって、紅時雨に貫かれた右肩を支点に瞬間的な力が加わった。肉と骨が引き千切られる嫌な音と共に血が噴き上がる。

「その愚問が何よりの答えだっ！」

自ら右腕を切り落とした巳聖は、驚愕している蘇芳に飛び掛った。

「っちい……っ！」

反応の遅れた蘇芳は咄嗟に身を引いたが、交錯の刹那に左脇腹に灼熱を感じた。それでも巳聖の右腕に残されたままの紅時雨を引き戻すことを忘れない。渾身の力で振り下ろされた太刀筋は、擦れ違った巳聖の背中に真っ直ぐ吸い込まれる。

「ぐ……あっ！」

一瞬硬直するように身を反らせ、巳聖は前のめりに倒れこんだ。
力の抜けた身を足先で転がせば、ごろりと仰向けになった巳聖の背
と右肩から血溜りが広がっていく。

「……やってくれるな」

空気の漏れるような呼吸を繰り返す巳聖の喉に紅時雨を突きつけ
ながら、蘇芳は自分の左脇腹に手を触れた。ぬるりとした感触に顔
をしかめる。まだ疼くような小さな痛みだが、じきに集中力を奪う
ことになるだろう。

「聞くがいい朱雀……お前は自分の弱さを知らない。それに気づか
ぬ限り、永久に眞守に勝つことは出来ない」

「死に掛けのお前がそれを言うのか？」

「何とでも言え。元より俺はお前に勝てるとは思っていない……そ
の傷を与えられただけで十分だ」

虫の息ながらも巳聖が笑った。蘇芳は無言のまま紅時雨を振り上
げかけたが、現れた気配に気づいて手を止めた。

「ようやくご登場か」

「……そこで何をしている、朱雀」

どれほど急いで来たのだろうか、蘇芳の視線の先で眞守は肩で息
をしていた。

「お前を待っていた」

「……俺をおびき出すために巳聖を使ったのか」

「そうだ」

眞守は蘇芳の足元に倒れている巳聖を見やった。弱い光を宿した薄墨色の瞳とほんの僅かに目が合う。

「ならばもう良いだろう。そいつを解放しろ」

「出来ない相談だな」

「やめろ……っ！」

眞守が叫んだのと、紅時雨の刃先が巳聖の喉へと消えるのはほぼ同時だった。

「巳聖っ!!」

血飛沫の視界の中、巳聖の瞳から光が消えて行く。その一瞬がひどくゆっくりに思えたが、蘇芳が冷淡に刃を引き抜く様子が眞守を現へと引き戻す。

「何故……俺を怒らせる……」

眞守は握った拳を震わせた。その瞳は近しい同胞を失った悲しみと怒りが入り混じり複雑な色を見せる。

「お前に本気になってもらわねば困るからだ」

紅時雨を引き戻しながら蘇芳は眞守に向き直った。

「お前の存在がある限り、前に進むことは出来ない。私も……そして緋雨もな」

「……そういう事か」

眞守を取り巻く大気が様子を変えた。風が止み、草木が動きを止めると、耳鳴りがするほどの静寂が濃厚な怒りを伴って押し寄せる。

「お前はもう少し利口な奴かと思っていたが……どうやら俺の見込み違いだったようだな」

夜色の髪が眞守の怒りに呼応し逆立つようにふわりと浮き上がり、両の手に刃のような長い爪が現れた。その姿は今まで数度合間見えた眞守とは異なり、ただ陰しく荒々しい。

「今さら冗談では済まさんぞ、朱雀っ！」

眞守が吼えた。それだけで大地が悲鳴をあげる。

「当たり前だ」

びりびりと伝わってくる痛みにも似た眞守の怒りの中で、蘇芳はその双眸に焰を灯した。

次々と突き出す大地の槍の中を蘇芳が走る。

紙一重でかわすその手足には小さな傷が増えていくが、朱雀の焰

を纏った蘇芳にとって何の障害にもなっていないようだ。駆け抜けた先に立つ眞守に向け紅時雨を一薙ぎする。だが、太刀筋だけが虚しく空を斬り、蘇芳は身を低く地を蹴った。髪紐を掠めた眞守の爪に、赤みを帯びた蘇芳の髪が風になびいて広がる。かまわず立ち上がった蘇芳は右足を軸に素早く反転、振るった刃が弧を描く。

着地と同時に身を捻った眞守がそれをかわすが足元がぐらついた。すかさず懷へと飛び込んだ蘇芳は烈火と共に斬り上げ、追い討ちをかけようとしたが踏み止まり、そのまま後方へと下がる。直後、今まで蘇芳がいた場所に土塊と共に巨大な円錐が突き出した。

蘇芳は左腕から、眞守は右の脇腹から、距離を置いて睨み合った二人は、それぞれ違う場所から血を滴らせる。高揚した気が痛みを忘れさせているが、巳聖との戦いで先に負傷した蘇芳は少々の分の悪さに眉を寄せた。

だがそれを気にしている場合ではない。

申し合わせたかのように二人は動いた。眞守の爪を紅時雨の腹で弾き返し、蘇芳は隙あらば焰を放つ。その度に眞守が跳び退き、土煙を上げて大地から刃が生まれる。

息苦しいほどに熱を帯びた大気と荒れる大地の中心で、蘇芳と眞守は真っ向から組み合った。触れ合った刃と爪がぎりぎりと言をたててせめぎ合い、色違いの双眸は互いに射殺そうとするかのように鋭い光で威圧しあう。

その時、不意に留められ続ける事に耐え切れなくなった熱が爆発する。同時にその爆風に乗った二人は一瞬距離をおいてすぐさま交錯、ともに相打ちとなって地に叩きつけられた。

「……ぐうっ！」

蘇芳は紅時雨を支えに身を起こしかけて動きを止めた。切り裂か

れた背に焼け付くような激痛が迸る。

「が……はっ！」

地に手を着いた眞守は前屈みになって咳き込んだ。触れた胸から血が溢れ出し思わず顔をしかめた。

互いに受けた傷は浅い物ではない。もはやこれ以上長く戦うことは不可能だ。そう悟った二人はどちらからとも無く立ち上がった。

「悪いがそろそろ終わりにさせてもらおう」

「奇遇だな。俺も同意見だ」

蘇芳が紅時雨を握り直し、眞守は腕を引いて身構える。先に動いたのは蘇芳だった。最大級の火焰が、眞守の元へ殺到する。だが眞守は眼前に迫る炎熱の奔流を避けようとはしなかった。

緋雨が今ほど黒紅の脚を遅いと思ったことは無い。だが例え風を切る矢の如き速さを与えられたとしても、同じことを思っただろう。山道を全力で駆ける事は馬にとって大きな負担となる。分かっているにしても緋雨はさらなる速さを求め愛馬を急いだ。

「すまない黒紅」

脇腹に入る蹴りに黒紅が喘ぐような嘶きをあげる。計都から休み無く走り続けているせいで、限界が近いのだろう。だが、主の心情を察しているのか地を踏みつける馬蹄は一段と力強さを増していく。その時、轟音が響いた。弾かれたように目をやれば、向かう先の空が紅蓮に染まっている。

嫌な予感が逸る心を追い立て鼓動を急きたてた。祈るような気持ちでに先を急ぐ緋雨の目に、見慣れた月毛の馬が映る。蘇芳の愛馬、白鳳だ。

だが、ここに来て突如疾走する黒紅の体が崩れ落ちた。投げ出された緋雨は地に叩きつけられて息を詰まらせる。

「っ……黒紅」

痛みをこらえ緋雨は横倒しになった愛馬へと駆け寄った。やはり無理をさせすぎたのだろう、黒紅は弱く嘶いて脚を動かすが、立ち上がることが出来ない。

「悪い……ここで待て、すぐ戻る！」

足掻く黒紅の首を撫で、後ろ髪を引かれながらも緋雨は全力で走った。

近づくほどに激しく鼓膜を震わせていた戦いの音が突然止んだ。坂を駆け上がる緋雨は腹の底が冷えるような感覚を覚える。踏み出す足に激痛がはしり、ほとんどまともに出来ていない呼吸のせいで喉の奥に鉄の味がした。それら全てを意識の外にかなぐり捨てて、とにかく緋雨は走った。登りきった先で視界が開ける。

だが、ほとんど倒れこむような勢いで丘に上がった緋雨は、飛び込んできたその光景に我が目を疑った。

「……腕を……犠牲にしたか……」

重なるように佇んだ眞守に、蘇芳は目を見開いていた。

「已聖の痛みに比べれば大したことは無い……」

そう言う眞守の首元にちらりと目をやれば、焼け爛れ血を流す指先が、紅時雨の切っ先を受け止めている。最後の激突の瞬間、眞守は焰を避けることよりも蘇芳の隙をつくことを優先したのだ。その結果が今の状況だった。

「してやられたわけだ……」

蘇芳は血の滴る唇を歪めて弱く笑った。指先から力が抜け、突きつけていた紅時雨が地に落ちる。その刃を流れ出した多量の血が染めて行く。腹を貫き通した眞守の爪もまた同じように紅く染まっていた。

「お前の負けだ朱雀。自らの焰で身を焼いた……それがお前の敗因だ」

眞守は蘇芳の体から爪を引き抜いた。途端に支えを失った蘇芳の体が崩れ地に膝を着く。

「蘇芳っ!!」

そこへ、今しがた現れた緋雨が駆け寄ってくる。眞守は蘇芳の返り血に濡れた身を引いて場を譲った。

「蘇芳！　しっかりしろ！」

「……何をしに来た……謹慎はどうしたのだ、馬鹿者……」

「咎めなら後でいくらでも受ける……っ！」

緋雨は蘇芳を抱き起こし、素早くその衣を裂くと傷口に巻きつける。

「それまで……私の身がもてばいいがな……」

傷を締め上げる痛み小さく呻きながら、蘇芳は霞みかけた視界に緋雨の姿を映した。

「馬鹿言うなっ！」

緋雨はその皮肉に声を荒げると、蘇芳の腕を自分の肩にまわし少々強引に立ち上がった。元から体格が違う上に、自力で立ち上がることの出来ない今の蘇芳はひどく重く感じられる。

「すぐ屋敷に連れて帰る。だからそれまで辛抱してくれ」

すまない、と耳元で蘇芳の微かな声が聞こえた。

弱弱しいその声に緋雨は唇を噛み、渾身の力で一步踏み出した。その視界の端にふと、眞守の姿が映る。巳聖の亡骸の傍に佇む妖は緋雨の視線に気付いて顔を上げた。常に違う色合いを見せる宵色の瞳も、今は最たる深淵に沈んでいる。

この場で何があったかなど、今さら想像するまでも無い。一言も発することなくすぐに反らされた眞守の瞳が全てを語っていた。

緋雨は勝手にこみ上げてくる様々な言葉を飲み込んで、今はただ前へと進んだ。

「私の言った意味がわかっただろう」

丘から緋雨達の姿が消えるのを見計らったように、邑夾は静かにその場に現れた。

「所詮、妖と人間は相容れぬ仲。お前がどれほど否定しようと、その事実を変えられぬのだ」

眞守は何も答えなかったが、邑夾はうち捨てられたままの巳聖の片腕を咥え、その亡骸の傍にそっと置いた。

そしてまだ泉の水で湿ったままの前足で触れると、たちどころに傷跡が癒えて行く。巳聖の亡骸が穏やかな姿になったのを見届けると、邑夾は足をどけ空に向かって長く咆哮した。

盛り上がった柔らかな土が巳聖の亡骸を覆い隠し、風に散った久遠桜の葉が弔い花の代わりにそっと舞い下りた。

「俺の力は何のためにあるんだ？ 誰かの命を奪うためか……？」

「我らは妖を統べる一族。その力は羅喉に生きる者を育て、護り、導くためのものだ……人間のために使うものではない」

眞守は黙したまま膝を着き、空を振り仰いだ。亡き同胞の魂を送り出すには相応しい雲ひとつ無い蒼穹が広がっていた。

「俺は……」

空に放たれた眞守の言の葉は、一陣の風がそつとさらっていった。

第十六話 暁の散華

「付き人……?」

木陰で身を憩わせていた蘇芳は、流した汗を拭いながら顔を上げた。

「侍従なら間に合っている。これ以上は必要ない」

「ああ、お待ちを」

若干十四歳の少年は二回り近く歳の離れた男を簡単にあしらうと、稽古に戻るために身を起こしたが、引き止められて面倒くさそうに振り返った。

「子供ではないか」

男の傍らにある存在に、蘇芳は大きく嘆息した。何のことは無い、蘇芳よりもさらに幼い子供——しかも女子が佇んでいる。

「……側女へちまにも興味は無い」

「残念ながらこれはそういう類でも御座いません」

男は明らかに怪訝な表情の蘇芳に苦笑すると、その場に屈んで女子の手を引いた。

「名を緋雨、私の娘に御座います」

「娘？ ああ、それではこの子供が例の……」

分家の主の娘と聞いて、蘇芳は何度か小耳に挟んだ噂を思い出した。曰く、分家に恐ろしく腕の立つ子供がいると。

「それで、これを私にどうしろと？」

「まだ七つになったばかりですが、術は元より、剣の腕は目を見張るものが御座います。どうぞ蘇芳様の稽古のお相手に」

「それ程の価値があると？」

「恐れながら、お試しいただければお分かりになるかと」

男が恭しく、だがどこか慇懃無礼に低頭したのを視界の端に、蘇芳は緋雨を見下ろした。互いの漆黒の瞳が交錯する。直後、蘇芳は何の前触れも無く抜刀した。

「その通り、度胸も御座います」

「……ほう」

全ては一瞬の出来事であった。その首筋へと突きつけられるはずであった刃は、緋雨自身が抜き放った刃できっちりを受け止められていた。その間、緋雨は蘇芳から目を反らすどころか、瞬き一つしていない。一切の無駄を排した動作で、蘇芳の抜き打ちを危なげなく阻止したのだ。

「なるほど、確かにただの子供ではないな」

蘇芳が刀を納めると、緋雨もまたそれに従った。

「子供。何か言いたい事はあるか？」

蘇芳は緋雨に視線を合わせるように膝を折った。

「私の名は緋雨だ。子供子供と馬鹿にするな」

すると緋雨が間髪いれずに慥然と言い放った。筆頭に次ぐ地位を持つ一門の長子に対してこの態度である。思わず蘇芳は目を丸くした。

「なかなか言うな」

「少々気が強すぎるのが玉に瑕で御座いまして……」

「……構わん。気に入った」

男は頭痛をこらえるように額に手をやったが、蘇芳は噴出して大いに笑った。

「私の傍に置くならこれ位肝が据わっているほうが良い」

「まだ見慣れないな」

「陰陽眼これか？ 私自身もそうなのだから仕方ない」

霊廟からの帰り道、緋雨が少し背伸びをして覗き込むと、蘇芳は自らの瞳を示して苦笑した。前筆頭である父が没し、蘇芳が朱雀の称号と共に真紅の陰陽眼を継承したのはつい先日の事なのだから無理も無い。

「これから忙しくなるな」

「……不安か？」

「いや。私はこうなる事を前提に育てられたからな。とつくに覚悟は出来てるさ」

夕暮れの橙に染まりながら、蘇芳は足を止めた。

「だが、陰陽眼を受け継ぐのが私で無ければ良いと思った事もある」

蘇芳はふと寂しげに笑んだが、緋雨が不思議そうな顔をしている事に気付くと首を横に振った。

「……分らなくていいさ。それより、着いて来い。お前に渡したい物がある」

「これは？」

屋敷で最も広い蘇芳の私室に通された緋雨は、その部屋の主から

差し出された物に目を落とした。

「私が父上から譲り受けたこの朝風と夜風の兄弟刀だ。抜いて見る
といい」

向かいに座した蘇芳に促され、緋雨はその刀を手に取り鞘を引いた。鈴の音にも似た高い音が鳴り、一転の曇りも無く磨き上げられた鏡のような刀身が緋雨の姿を映し出す。

「……すごい」

絶妙な角度でゆるやかな曲線を描く切っ先は言うまでも無く業物のそれだ。緋雨は感嘆の息を漏らすとそっと鞘に収めた。

「銘は夕風。それはお前が使え」

「馬鹿な、そんな事出来るか！」

緋雨は驚いて夕風を元の場所に戻した。父親から譲り受けたというくらいなのだから、直系の血筋で受け継がれてきた大切な物なのだろう。

「紅の一門で私に指図出来る者は、もう誰もいなくなってしまった。
その私が良いと言っているんだ」

「しかし……」

分家出身の自分がその一端を扱うなどんでもない。どうせ緋雨はそんな事を言いたいのだろうと、蘇芳はわざと皮肉るように言った。

「夕風そいづと共に私の背中をお前に預ける。だから着いて来い」

すぐに意味を理解できなかったのか、蘇芳は瞬きをしている緋雨の頭に手をやった。

「今日から副官の任に着ける。不満か？」

「……いや。少し驚いただけだ」

「何故だ？」

「もっと適任の者がいるだろう」

「お前は、相変わらず自分をよく分かってないな」

蘇芳は苦笑しながら緋雨の髪をぐしゃぐしゃと掻き乱した。

「私が欲しいのは同じ場所で戦える片腕だ。形だけの参謀役などいらない」

最後にぽんと額を軽く小突いて、蘇芳は立ち上がった。

「言いたいことは分っただろう。さっさと受け取らないか馬鹿者」

「……御意、朱雀」

緋雨が夕風を手にして低頭すると、蘇芳は眉を寄せた。

「今まで通りで良い。堅苦しいのは御免だ」

蘇芳が肩を落とすと、緋雨はくすりと笑った。

死の淵に立たされた者は、生まれてからその時までの記憶を旅するのだという。ならば自分は今その旅路の途中なのだろうと意識の端で思ったが、蘇芳は急に景色が朧になっていくのを感じた。体が目覚めようとしている。

それは理解できたが、何処かこのまままどろむ様な世界にたゆたっていたいとも思えた。だが、遠く微かに自分の名を呼ぶ声が聞こえてくる。緋雨の声だ。

蘇芳は名残を惜しみながらも、記憶の旅路から離れた。

「……何て顔をしている」

呼び続けた相手がようやく目を覚ましたと言うのに、その本人からひどく掠れた声をかけられるまで緋雨は気付かなかったようだ。自室の床に伏した蘇芳は、その傍らに座した憔悴した様子の緋雨を見上げていた。

「あれから……どれくらい経った？」

蘇芳は水差しに手を伸ばした緋雨を首を小さく横に振って制した。

「もうすぐ一日だ」

「そんなものか」

「少し待て、すぐ医者を呼んで――」

「必要ない」

緋雨が立ち上がろうとすると、蘇芳はその袖を引いて留まらせた。

「徒花^{あだはな}も自分の散り際くらいは知っているものだ……このままで良い」

「蘇芳……」

蘇芳の傷を診た医者はまだ首を横に振るばかりであった。それが何を意味するのかは緋雨もわかっていたが、蘇芳自身もどこかで理解しているようだ。

「そんな顔をするな」

握った拳が衣に皺を作るのを見て、蘇芳は目を細めた。

「私は自分の意志で眞守に挑んだ。お前が気に病む必要は無い」

蘇芳は鉛のように重たい体に表情を歪めながら、自分の右手を眼前にかざした。

「だが、私は負けたんだな。眞守にも……私自身にも」

ほとんど独白のような蘇芳の言葉を、緋雨はただ黙したまま聞い

ていた。

「懐かしい夢を見ていた。まだ幼かった頃の夢だ。あの頃のお前は私に追いつこうと必死で追いかけて来たな。私にはそれが嬉しかったんだ」

蘇芳は手を伸ばすと、そっと緋雨の頬に触れた。

「真っ直ぐなお前の存在は私にとって眩しかった。いつからかはもう覚えていない。だが、気付けば私はお前に強く惹かれていた。だから叶わないとわかっていても……お前のその瞳に映るのが、ずっと私であってほしいと願ってしまったんだ」

「蘇芳、私は――」

「いい、何も言うな」

蘇芳は指先で緋雨の唇を塞ぐと自嘲した。

「眞守に言われた。自らの焰で身を焼いた事が私の敗因だと……悔しいがその通りだ。私は自分の嫉妬を殲滅戦の大義名分に隠そうとした卑怯者だ。あいつには見抜かれていた」

蘇芳は徐々に霞み始めた双眸に、ひどく複雑な表情をしている緋雨を映した。

「最近辛い顔しか見ていないな……」

蘇芳は滑らせた指先で緋雨を引き寄せ、自分の胸にそっと抱いた。

「もしも自惚れで無いなら、頼むから私のために泣いてくれるな。今は不思議なくらい穏やかなんだ」

顔を伏せた胸から弱っていく鼓動が伝わってくる。

「待て……蘇芳」

緋雨は思わず身を起こして蘇芳を見据え、強く首を振った。

「お前の心が手折られる事の無いよう……祈っている」

「蘇芳っ！ 駄目だ、逝くなっ！」

緋雨は蘇芳の頬を強く叩いたが、静かに目を閉じた蘇芳は弱く唇を動かしたただけだった。

「っ……聞こえない！ 何だ！？」

緋雨は声を荒げながら、たまらず蘇芳の体を乱暴に揺さぶった。

「あ……」

その振動で、抱きとめられていた蘇芳の腕が力なく床に落ちる。

「蘇……芳——っう……っ！」

その時、突然緋雨を強い頭痛が襲った。緋雨は締め付けられるような激痛に呻いてその場にうずくまったが、それは一瞬の出来事だった。そしてゆっくりと顔を上げると、床の脇に置かれた桶の水が自分の姿を映している事に気付く。

「……馬鹿な、陰陽眼の継承……だと……？」

そこにいたのは見慣れぬ真紅に瞳を染めた女だった。

緋雨は黒髪が水に浸るのも構わず限界まで水面に顔を近づけたが、微かな希望は脆くも打ち砕かれた。陰陽眼はその持ち主を失った時、最も相応しい者へと継承される。

「こんな……馬鹿な話があるか……蘇芳、私はお前から……こんな物を奪いたかったんじゃない……っ！」

それはつまり、明確な蘇芳の死を意味していた。緋雨は堰を切って溢れ出す熱い雫を拭う事もせず、ただ蘇芳の亡骸を前に嗚咽を漏らした。

いつの間にか暁に染まった東の空から強い風が吹き、蘇芳の亡骸を抱いて緋雨は顔を上げた。燃える様な空から、眩い朝日が昇っていく。

それは緋雨の慟哭すら飲み込んでなお、狂おしいほどに美しい朝焼けの空だった。

第十七話 末枯れの逢瀬

庭園の樹から乾いた葉がひらりひらりと散っていく。

その様子を真紅の瞳に映しながら、緋雨は時の流れに指を折った。それは蘇芳がこの世を去ってからの日数だ。葬儀が終ってから記憶は随分と曖昧だが、気付けばもう一月が過ぎようとしている。それが早いのか遅いのかは今の緋雨に判断する事は難しかった。

「また一口も召し上がられていないのですか？」

自室の柱にもたれるようにして外を眺めていた緋雨は、その声に緩慢な動きで振り返った。

「ずっとこのような状態では、さすがにお体に触りますよ」

部屋の入り口で手付かずのまま放置された膳の前に老女中が座している。それは彼女自身が数刻前に運んできた物だ。緋雨は黙って首を横に振る。

「……南の庭園に、月白様がお見えになっています」

いつもは口うるさい老女中も、小さく嘆息しただけで用件を口にしたのだった。

「少し見ない間に随分やつれたな、お嬢。ちゃんと食ってるか？」

物憂げに枯れ行く木々の中で白衣の長身はどこか異質な存在だ。自分自身でそれを感じているのか所在無げに佇んでいた月白は、緋雨の姿が見えるや否やすぐに声をかけた。

「死なない程度にはな」

「おいおい、勘弁しろよ」

わざと軽い態度をとった月白は、困ったように茶褐色の短髪に手をやった。本人は冗談のつもりだったのかもしれないが、今の緋雨の状態からしてあまり気が利いているとは思えない。

「無理も無いか」

「……私に何か用があったんじゃないのか？」

「まあ、そうなんだけどな。今のお前にとっちゃ、正直酷な話だぞ？」

「構わない、言ってくれ」

抑揚の無い緋雨の様子に、月白は眉間に皺を寄せながらも話し出した。

「お前が朱雀を継承する事が、筆頭の討議で正式に決まった」

「……そうか」

緋雨は無感動に頷いた。

通常ならば陰陽伍家の筆頭を決める際に討議などは行われない。

筆頭の絶対条件は陰陽眼を継承したか否かであるが、その者が直系の血筋である事もまた暗黙の了解の一つとされている。つまり分家の出身である緋雨がその座に着く事自体が異例なのだ。

「継承の儀は七日後。それが終り次第、殲滅戦も再開だ。悪いな。もう少し時間を空けるように掛け合ってみたんだが、朱雀の長期不在は痛手がでかすぎる……って事で押し切られた」

「それだけ、蘇芳の役割が大きかったと言う事なんだろうな」

「否定はしない。けどお嬢、あんまり根詰めるなよ？　じゃないとお前が参っちまう」

月白は緋雨の肩に手を置いた。

「当分は俺が補佐する。だからお前は体力だけつけててくれりゃ良い」

「すまないな……」

「相変わらずかったい奴だな、お前も」

亡き友の姿とかぶった緋雨の様子に、月白は気付かれぬように少しだけ寂しそうな笑顔を見せた。

「まあ、用事ってのはそれくらいだ。俺は帰るが、今日は天気も良いしお前も少しは外に出た方がいいぞ。どうせ部屋に籠りっきりなんだろ？」

緋雨は空を振り仰いで目を細めた。月白に言われるまで気付かな

かったが、本当に雲ひとつ無い澄み切った青が広がっている。

「……そうだな。少し出てくる」

「おう。散歩か？」

「いや……」

緋雨は首を横に振ると、自分にしか聞こえないような小さな声で
呟いた。

「一つ、やり残した事がある」

「悪いな。この時期に花を探すのは無謀だったらしい」

冷えた風が乾いた塚の表面をほんの僅かに削っていく。眞守は長
身を折り、土色の色彩の中に瑞々しい深緑を添えた。根源の泉の恩
恵を受けたぶなの葉は、一年を通してその若々しさを失う事は無い。

「まあ、お前の事だ。どっちもいらないと言いきりそうだがな」

丘の一部となった巳聖が応える事は無いが、妙にその想像が鮮明
で眞守は一人苦笑した。

妖にとって死は生命を終え土に還るといふあたりまえの事象に過

ぎず、誰かの骸に弔いの花を手向けるなどまず有り得ない事だ。二百年前に人間の娘にした事を、今になって同胞にする事になるとは眞守自身も考えていなかった。

「そうか、朱雀^{あいつ}は死んだんだな……」

近づいて来る気配に気付いていた眞守は、ゆっくりと立ち上がって振り返った。そこには、今までとは僅かに異なる気を纏った緋雨が佇んでいる。

「そして、お前が陰陽眼^{それ}を受け継いだ……か。皮肉な物だ」

その変化の正体が真紅に染まった緋雨の双眸とわかると、眞守は目を細めた。

「私と戦え。眞守」

「仇討ちに来たのか？」

緋雨の言葉は唐突だったが、眞守はとくに驚く事はしなかった。

「……けじめを付けに来た」

「良いだろう……だが一つ聞かせろ」

眞守が真っ直ぐに見据えると、緋雨は片眉を少し跳ね上げた。

「けじめを付けると言ったな。なら、考えたんだろう？ お前なりに、あの時の俺の言葉を」

「……私は紅の一門の緋雨」

朽葉を巻き上げる乾いた風が足元を吹き抜けていく間緋雨は黙っていたが、一度目を伏せてから言葉を紡いだ。

「朱雀の意志を継ぎ、妖を滅する者だ」

緋雨は静かに鞘から刀を引き抜いた。久方ぶりにその手に戻った夕風の刃は、真っ直ぐに眞守へと向けられている。

「眞守、私はお前を受け入れることは出来ない」

その姿が、初めてこの場所で出会った時のそれと重なった。だが、その切っ先に込められた意味合いは明確に違うのだろうと眞守は思う。

今向けられている刃の意味、それは恐らく決別。

「それがお前の答えか？ 人間の娘」

無言のまま緋雨が頷くと、眞守はふっと笑った。

「……そうか」

眞守は招くように腕を伸ばした。その指先には蘇芳を貫いた時と同じ鋭い爪がある。

「来い」

その声で、緋雨は眞守との距離を一気に詰めた。

一瞬で眞守の間合いへと入り込んだ緋雨は、刃を大きく横に薙いだ。

それが眞守の爪に阻まれると、立て続けに三度袈裟斬りを放つ。だがことごとくかわされ、刀を振り切った体に眞守が足払いをかけた。掬い上げられた緋雨の体が不安定に宙に浮く。緋雨は流れに逆らわず丸めた体で衝撃を防ぎ、地に着いた直後に転がって刀を一閃、追い討ちの突きをかける。

とんとんと、軽い足取りで後退した眞守に、立ち上がった緋雨が再接近。上、中、下段から断続的に切り込んだ緋雨は、背後に回りこんで大きく振りかぶった。残像を薙ぐ感覚と共に背後に気配が現れる。緋雨はそのまま地を蹴って宙を返り着地、正面から眞守と相対した。

緋雨は睨みあったまま刀を引き戻し、一度両手で握りなおすと右下に構え腰を低く落とす。

一呼吸の後、身を滑らすようにして一気に踏み込み低い位置から斬り上げた。間合い詰めと同時の斬撃は必殺の威力も高いが、隙も大きい。すれ違うようにかわした眞守と目が合って、がら空きの半身に緋雨は次の衝撃を覚悟した。だが、眞守はただ再び距離をおいただけだった。

「っ……戦うと言ったはずだ、眞守！」

今の隙は最大の好機に間違いなかったが、眞守は自らそれをふいにしたのだ。緋雨はその行動に苛立ちを感じた。

「ああ言った」

そんな緋雨を気にも止めず飄々と眞守が言うと、緋雨は奥歯を噛み締めて斬り掛かった。

「なら何故逃げる!？」

一向に攻撃を仕掛けてこない眞守を相手に緋雨はがむしゃらに刀を振るい続ける。

「逃げる? それはお前の方だろう緋雨」

「何?」

眞守はそこでたためな太刀筋を先ほどよりも容易にかわし続けていたが、突然緋雨の腕を掴みあげた。長身の眞守に利き腕を捕らわれれば、緋雨が自由に身動きをとることは出来ない。

「一太刀目でわかった。お前の刀に大した殺気を感じない。俺の傷がまだ癒えていない事位とくに気付いているだろう。だったら何故術を使わない? 今のお前なら十分俺に勝てるはずだ」

それでも無意味に身じろぎながら、緋雨は眞守を睨み上げた。

「答えられないか? ほら見ろ、それこそ逃げている証拠だ」

そこには対照的に冷えた宵色の双眸がある。

「っ……うるさい!」

その温度差が緋雨の感情を逆撫で、瞬間的に強い力を発揮した。

無理矢理身を捻った緋雨は勢いに任せ眞守を押し倒すと、馬乗りになつて首筋に刀を突きつけた。

「あいつを殺した俺が憎いか？」

刀越しに見上げた緋雨はぜえぜえと息を切らしている。眞守はされるがままに言葉を発した。

「……ああ」

「そうか。なら殺せ」

眞守は自らの手でさらに強く首元に刀を押し当てた。皮一枚斬らないぎりぎりの痛みがはしる。

「簡単だ。そのままほんの少し刃を押し込むだけで良い。そうすればいくら俺でも死ぬさ」

眞守がまるで自分の死に興味が無いように言うと、見下ろす緋雨の手が微かに震えた。

「憎んでいるんだろう？ 殺したいほどに」

「……っ」

その時緋雨の双眸が確かに揺れたのを、眞守は見逃さなかった。

「嘘が下手だなお前は……」

次の瞬間には緋雨が眞守に組み敷かれていた。

「何を――」

「俺を見る緋雨！」

一転して見下ろされる側になった緋雨は思わず目を反らそうとしたが、眞守に一喝されてびくりと目を見開いた。

「俺を……殺したいほど憎むなら、何故そんな顔をしている？」

緋雨は眞守に言われて初めて、自分の頬が濡れている事に気付いた。いつのまにか真紅の双眸から涙が伝い落ちている。

「……わからない」

そのことに自分自身で驚いたのか、緋雨は数度瞬きをして強く目を閉じた。必死で何かに耐えているようなその目尻には、止まらぬ涙が溢れている。

「わからないんじゃない、わかれうとししないで逃げているだけだ。自分自身からな」

眞守は逃れようと暴れる緋雨を押さえつけ声を荒げた。

「お前ははじめを付けに来たんじゃない、朱雀を殺した俺と戦う事で無理矢理自分を納得させようとしているだけだ。戦う理由が欲しいだけだ！」

激しい感情が言葉となって緋雨に降りかかる。それは確かな眞守の怒りだった。

「緋雨、お前は何のために生き、何のために戦う!？」

押さえつけられた緋雨の両手首が強まる力に悲鳴をあげたが、激昂した眞守は気付いていないようだ。

「お前はどこにいる!？ 答えろっ!!」

「私は……っう」

何とか目を反らさずにいた緋雨が痛みに表情を歪めた。その手首には血が滲んでいる。眞守ははっとして思わず手を離れた。

刹那。

自由になった緋雨の腕は反射的に刀を振るっていた。

「っ!!」

間一髪で飛び退いた眞守は、頬に鋭い痛みを感じた。

「私はここにいる! これは私の意志で決めた事……誰にも……誰にも文句は言わせないっ!」

溢れた涙を乱暴に拭い去って、緋雨が絶叫する。怒りか悲しみか怯えか。その表情を何と表現すればいいのだろうか。眞守は思う。

「お前は馬鹿だ……何故わかろうとしない?」

一筋の蜘蛛の糸で理性を繋ぎとめようとしても言うのだろうか。薄氷の泉の上に立つようなあまりにも脆い姿に、眞守は拳を握り荒ぶる心をなんとか静めた。

「馬鹿で構わない！ 私は私だ。戦う理由など……必要無いっ！」

緋雨は声の限りに一気にまくしたてた。そして乱れた呼吸を整えるように一度大きく息を吐くと、刀を納めて背を向けた。

「どうした……？」

「……以前の私はお前に一太刀すら浴びせられなかった」

緋雨は肩越しに振り返ると、真守の頬に目をやった。そこに残されているのは小さな傷だが、それは緋雨が真守に対して与えた初めての傷だった。

「今はそれだけで十分だ。次は……真守、お前を討つ」

視線を戻した緋雨は低く抑えた声で言った。その声と肩が小さく震えたように思えたのは真守の気のせいだろうか。真守はそれ以上何も言わず、緋雨が立ち去るのを見送った。

「本当に馬鹿な奴だ。緋雨、お前は……」

残された真守は頬に触れた。

「戦う事でしか己を証明出来ないと言うのなら、何故今俺を殺せない？ 何故矛盾に気付かない……？」

小さな、だが焼け付くような痛みを感じて目を閉じた。

「それでも、心を殺して生きて行くとやうんだなお前は……」

眞守は頬に触れていた手を眼前にかざした。

そこにあるのは紅。烏籠でもがく愛しい娘の瞳と同じ色をしていた。

第十八話 煽ち風の幕間

「また駄目だ……」

「教わった通りやってるんだけどなあ」

通り過ぎようとした建物の影から聞こえてきたそんな声に烏羽はふと足を止めた。

見れば簡素な衣の少年が二人、術の鍛錬に励んでいる。恐らく黄の一門の門下生だが、どうやら術が上手く発動せずに困っているようだ。

「何が悪いんだろ？」

「もう一度やって見るといい」

「え……わっ！ 烏羽様っ」

気配も無く背後に現れた烏羽にいきなり声をかけられて、少年二人は腰を抜かささんばかりの勢いで驚いた。

「どこが悪いのか位は見えてやれるぞ」

「あ……えっと」

「ほら、やって見ろ」

少年二人は思わず顔を見合わせたが、一人が正面の庭石に向かって手を伸ばした。

「急々如律令。打ち砕け、鋭牙土竜」
えいがどりゅう

おぼつかない手つきで印を斬ったが何事も起こらない。少年は緊張した面持ちで恐る恐る烏羽を見上げた。

「なるほど、印を斬る時の角度が浅いな。それに指が開き過ぎている」

冷静に動きを分析した烏羽は、抱えていた六壬式盤りくじんしきばん（吉凶を占うための四角い盤）をそっと置いて少年の背後に回り込むとその手を取った。

「指先はしっかり揃え……こうだ。印の動きにはそれぞれ意味があるんだ。斬り方一つで同じ術でも威力が格段に違ってくる」

一通り動きを反復させると、烏羽は立ち上がってもう一度試してみろと促した。少年はこくりと頷いて手を伸ばすと、すうっと大きく息を吸った。

「急々如律令。打ち砕け、鋭牙土竜」
えいがどりゅう

見違えるほど丁寧に印を斬った少年の足元が盛り上がり、地を裂いて突き進むとその先にあった庭石が粉々に砕け散った。

「で……出来た……?」

少年はぽかんと口を開けた。どうやらあまりの威力に自分がやった信じられないらしい。

「出来たな」

烏羽が頷くと、ようやく実感が湧いたのか少年二人はわっと声をあげて歓んだ。

「ありがとうございます、烏羽様！」

「お前は飲み込みが早そうだな。その調子で頑張ると良い」

無邪気な少年の笑顔に、烏羽からも自然と微笑がもれた。

「あの、烏羽様」

烏羽が踵を反そうとすると、横で見ていたもう一人の少年が呼び止めた。

「何だ？」

「烏羽様は藤黄様のお弟子様だと聞きました」

「そうだが？」

それがどうしたと言うのだろう、烏羽は紫紺の瞳を細めて少年を見下ろした。

「藤黄様に教えを乞うには、やはり家柄や才能が無いと駄目なのでしょうか？」

「直弟子になりたいのか？」

烏羽は無表情に戻って聞いた。

「いえっ、あの……その……」

少年は自分がとんでもない事を言って、烏羽を怒らせてしまったんじゃないかと慌てふためいている。その様子に烏羽はふっと表情を緩めた。

「それならば鍛錬に励む事だ。あの方は努力を惜しまない者に平等だ。家柄も才能も関係無い」

「は、はい！」

思いがけない言葉に少年が目を輝かせると、烏羽は頭を軽く撫でてその場を後にした。

少年達と別れ歩む烏羽は、穏やかな笑みを浮かべたままだ。その源は、あの少年達に重なって蘇る懐かしい記憶だった。

黒の一門の末息子として生まれた烏羽は幼い頃体が弱く、術の扱いても苦手で常に兄弟の中で劣等感を感じていた。それが悔しくてただ来る日も来る日も一人鍛錬を積んだが、一向に成果は上がらない。自分が情けなく、もう諦めようと思っていた時、そんな烏羽に手を差し伸べたのが藤黄だった。

黄龍は、いわば全ての陰陽師の長だ。黄の一門が姉の嫁ぎ先であるという微かな繋がりはあるものの、雲の上の存在でしかなかった藤黄が師となった事によって、烏羽は大きな転機を迎える事になった。術は元より長槍を使った武芸も全て藤黄から学んだ烏羽は劇的な成

長を遂げ、とうとう兄達を追い越して玄武の座に着いたのだ。

藤黄の存在が今の自分をつくった。

烏羽は決して大袈裟でなくそう思っている。時折、その心酔振りを陰で揶揄する者もあったが、烏羽がそれを気にした事など一度も無かった。

「烏羽です」

目的の場所へと辿りついた烏羽は入り口に座して一礼した。

「藤黄様？」

頼まれていた六壬式盤を届けに来たのだが、部屋の主から返事は無く、不思議に思っ中を覗き込んでみるとその姿は見当たらない。

「……失礼いたします」

烏羽は不在の主に律儀に断ってから部屋に踏み入れた。屋敷の離れにある執務部屋は藤黄の私室とも言えるが、烏羽は自由に出入りを許されている数少ない内の一人だ。届け物だけを置いて立ち去る事は気が咎めたので、せめて挨拶だけはしようと藤黄が戻るまで待つ事にした。

部屋の中を見回した烏羽の鼻腔をふわりと何かがくすぐる。藤黄が好んで使っている薰物の残り香だ。その香りに包まれて、几帳面な藤黄にしては非常に珍しく大量の書物が乱雑に散らばっていた。無理も無いと烏羽は思う。

新帝の即位に、凶暴化した妖の連続襲撃とその殲滅戦、迫る月蝕みへの対策と、さらに朱雀不在への対応。皇后が非業の死を遂げてから立て続けに起こった事態の收拾に奔走する中で、自分の身の周

りまで気を使うことなどいくら藤黄と言えど不可能だろう。

烏羽は文台に目をやった。無造作に置かれた筆から滴った墨が書きかけの書に染みを作っている。烏羽は筆を手にとって硯すずりに戻した。だが残念な事に複雑な結界図式の描かれた書は大部分が黒く塗り潰されている。烏羽に非は無いが何となく申し訳ない気分で嘆息すると、似たような犠牲を出さぬよう、文台の上を軽く整えようと重なりあった束を手にとった。

その時、束の間から何かが滑り落ちてからんと音をたてた。

「これは……」

拾い上げてみると、それは美しい細工の施された簪かんざしだった。見たところ若い娘が好みそうな淡い色合いだが、随分と年季が入っているようにも見える。

「何をしているのです」

眉を寄せて簪を眺めていた烏羽は、はっとして顔を上げた。その視線の先には険しい表情の藤黄が佇んでいる。

「申し訳ありません、墨が書を汚しておりましたので」

「……それをこちらへ」

藤黄が手を差し出すと、烏羽はすぐに簪を手渡した。

「後で双子にでも片付けさせます。そのような気遣いは不要ですよ」

「はい……差し出がましい真似をいたしました」

藤黄が受け取った簪を懷に仕舞う様子に、烏羽は見えてはいけなものを見てしまったと罪悪感に駆られた。

「いえ。仕舞うのを忘れていた私も悪いのです」

「大切な物なのですね」

藤黄は琥珀の瞳をほんの少しだけ不快そうに細めた。

「……六壬式盤を届けてくれたのですね。ではもう結構、下がらないさい」

だが烏羽に勘繰るような他意が無いとわかると目を反らす。

烏羽が黙って一礼して部屋を去ると、藤黄は嘆息してその場に腰を下ろし烏帽子を脱いだ。長い黒髪がさらりと顔にかかる。それによけると、藤黄は懷から簪を取り出した。しなやかな指先に収まるその姿に、柔らかな笑みが零れそつと両手で包み胸に抱いた。

「もう少しですよ……」

藤黄の呟きに答えるように、簪の細工がちりと小さな音を奏でた。

「そっちから出向かないなんて、随分とお偉くなったものね」

「青藍か」

「わざわざ人を呼付けておいてその態度は何？ 用が無いなら帰るわよ」

白の一門を訪れた青藍は、門下生達に指示を出していた月白を睨んで、余程機嫌が悪いのか仁王立ちになった。

「悪いな、ちよいと手が離せそうに無かったんだ」

「……分ってるわよ」

青藍は組んでいた腕を解くと腰に手をやった。二日後に緋雨が朱雀を継承する事は決まっているが、それでもすぐに務めを果たすのは難しい。特に戦における指揮など一朝一夕で覚えられるものではないのだ。結果的にその代役を務める事になった月白が、準備に忙殺されて身動きをとれないのは青藍も理解していた。

「それで、用件は？」

「ああ、これを見てくれ」

月白が投げて寄越した巻物を片手で受け取ると、青藍は素早く紐を解いて広げた。

「……かなり絞ったわね」

その内容が戦術案だとすぐに悟った青藍は、記されている人数に

眉を寄せた。

「次は羅喉の中に入るからな。初っ端から大人数で行っても意味が無い……って事で少数精鋭だ。なるべく腕のいい奴を集めてくれ」

「腕のいい奴って、弓兵の事を言ってるの？」

「ああ。遮蔽物が多いからな」

「舐められたものね。弓術は青の一門うちのお家芸よ」

「そりゃ頼もしいな」

顔をしかめて巻物を投げ返した青藍に、月白は歯を見せて笑った。

「緋雨はどうするの？」

「もちろん連れて行くさ。火術が無いと山を開いて進むのはきついからな」

「あの子、今度はちゃんと戦えるのかしら」

「正直あんまり戦わせたくないってのが本音だな」

青藍が最初の殲滅戦を思い出していると、月白は嘆息した。

「ねえ月白、変だと思わない？」

「ん？」

「覚えてるかしら？ 黎明の泉の水を持って鴉天狗が現れた時の事」

「ああ。殲滅戦が始まる前の事だろ？」

青藍は視線で頷くと話を続けた。

「あの時、真守って……屋根の上にいた妖の事を緋雨は確かにそう呼んだわ。そもそも何故、妖の名前を知ってたのかしら？」

青藍は思案するように碧の瞳を鋭く細めた。

「この前も最後に同じ妖が現れたわ。あいつが蘇芳と戦い始めた途端に緋雨が動いたでしょ？ まるで止めようとするみたいに」

「ああ」

「あの子……あの山狗の妖に特別な感情を持ってるんじゃないかしら」

青藍がそう締め括ると、聞き終えた月白は目を丸くして噴出した。

「随分と話が飛躍したな」

「だっておかしいじゃない。あなただって長い事緋雨を見てきてるでしょう。何の理由も無しに、あの子があんな馬鹿な真似すると思う？」

「そりゃあ女の勘ってやつか？ 怖いもんだな」

「ちやかさないで！」

月白が腹を抱えていると、青藍は眉間に皺を寄せて怒鳴った。

「さあ、そればかりは何とも言えないな。まあでも……お前の言う通りだとしたら一つだけ俺にも分かる事があるな」

「……何よ？」

馬鹿笑いを止めた月白は歩を進めると、懽然とした青藍を見下ろした。

「心を隠すってのは意外に難しいんだよ、青藍。割り切って生きるなんて若い内はなかなか出来るもんじゃない。それは俺自身がよく知ってるよ」

月白の大きな手が青藍の直毛をさらさらと梳いた。その言葉と月白の微笑に隠された意味に気付いた青藍は、頬を紅潮させてぱしりと振り払った。

「……とにかく、あなたがしっかり手綱を握ってなさいよ！ 朱雀を継承する以上、またあんな真似したら次は謹慎どころじゃ済まないわ」

「分かってるよ」

背を向けた青藍にはたかれた手を下ろして、月白は苦笑した。

強い風が纏う衣を引き剥がさんと吹き荒ぶ。宮廷の広場を向かい風の中一歩ずつ踏みしめて、緋雨が進む。その両脇には継承の儀を見届けるために計都中の陰陽師達がずらりと並んでいた。

朱雀の正装をなびかせながら進み出た緋雨は、佇む四人の筆頭の前で膝を折り頭を垂れた。その額に、まずは青藍の指先が触れる。

「木々芽吹きて花咲き乱れしは春の季。青き龍は空に昇りて風を送る。東方青龍、青藍の名において、しなやかなる草木の強さと疾風の速さを」

青藍の手が離れると、月白が同じように触れた。

「実りて葉を染めしは秋の季。白き虎は吼えて恵みの響きを揺り動かさん。西方白虎、月白の名において、堅固なる金剛の意志と^{あらがね}鉋の盾を」

月白が手を引くと、次は烏羽が触れた。

「雪舞い降りて命終えしは冬の季。黒き蛇と亀は絡みて静寂より再び生命の泉を湧き起こさん。北方玄武、烏羽の名において、研ぎ澄まされし氷の矛と冴える水の智を」

烏羽が手を離し一歩下がると、最後に藤黄が進み出て同じ場所に触れた。

「花は散り、空蟬鳴きて、葉は還り、雪を溶かすは移ろいの季。金色の龍は駆けて、命を育みまた奪わん。中央黄龍、藤黄の名において、大地の保護と恩恵を」

藤黄の手が離れると、緋雨は静かに立ち上がって聴衆へと向き直った。

「緑樹萌え灼熱を抱きしは夏の季。朱き雀は羽ばたきて陽炎を纏う。紅の一門が緋雨、今ここに第二百二十七代南方朱雀の名を賜らん」

喝采と歓声が大気を震わせる。緋雨はそっと遠い空を見やった。煽ち風に吹き散らされて薄雲が流されていく。それは止める事のできない時の流れに似ていた。

第十九話 彷徨の誠

「まだよ、十分引き付けて！」

「し……しかし青藍様——」

「あと少し持ちこたえなさいっ！」

情けない声に苛立った青藍は、薙刀の柄でぎりぎりしやうじやうと猩猩を押しながら兵達を一喝した。肉体的な強靱さで言えば青藍を遥かに凌ぐその巨体は、山中の足場の悪さも災いして普段以上に厄介なのだ。

「駄目です、もう突破されますっ！」

「この……っ!!」

青藍は押していた薙刀の柄を一瞬引き戻して素早く身を反らせると、前のめりに倒れこんだ猩猩の背後に回りこみ刃を突き刺した。その背を蹴りつけて跳躍すると、みしみしと音をたてる樹木の防護壁へと走る。

「他の隊は!？」

「まだ見えません！」

「っ……どきなさい!」

齒噛みした青藍は怯えた若い弓兵を押し退けて腕を突き出した。

同時に強度の限界を越えた防護壁が崩れ去り唸りを上げて猩々の大群が姿を現す。

「うわああああっ！」

「急々如律令、絡め取れ、縛戒木賊^{ばっかいとくさ}！」

誰のものか分らない悲鳴を耳にしながら、青藍は術を解き放つ。だが絡み合う茎が留めたのは僅か数体のみで、大多数はかまわずに突っ込んで来た。押し寄せる怒濤の如き勢いに、咄嗟に反応できなかった者達が飲み込まれ蹂躪されていく。

「矢を放ちなさい！ 何とか踏み留まるわよ！」

青藍は自らも弓に持ち替えて声をあげたが、普段どれほど優秀であろうと、混乱した兵達の矢はでたらめに飛び交うばかりで無駄に消費されていく。このまま戦い続ければ間違はなく壊滅するだろう。だが最悪な事に背後は崖なのだ、後退は出来ない。これにはさすがの青藍も焦りを隠しきれなかった。

予想外の場所から奇襲を受けたせいで他の隊から分断された青藍達は、絶対的な数の差にかなりの苦戦を強いられている。羅喉での本格的な殲滅戦が始まってからずっと善戦が続いていたため、このような窮地は初めてだった。

「っ……仕方ない中央突破するわ。固まりなさいっ！」

もはや犠牲を覚悟で血路を開くしか手段は無い。

「行くわ——」

「動くな青藍！」

覚悟を決めた青藍が身構えた時だった。月白の声と共に青藍と兵達を白亜の壁が覆い隠した。

「全員息を止めて伏せろ！」

次いで烏羽の声が飛んで来る。青藍は咄嗟に走り出そうとしていた兵達を制止させ、地に身を投げ出した。

直後。

「急々如律令。焼き尽くせ、煉獄れんごく業火！」

閃光が走り爆音と共に辺りが紅蓮に染まった。衝撃波が灼熱の風となって荒れ狂い、地に伏せた青藍は激しく体を揺さぶられ苦悶の呻きをもらす。

「大丈夫か？」

「……遅いのよ」

焰の嵐が治まったのを感じた青藍が耳鳴りに頭を押さえて毒づく
と、月白の姿がすぐ傍にあった。

「……嘘？」

そして青藍は驚愕した。月白の造り出した防護壁と、その付近を覆う烏羽の水の幕。その外側の光景が激変していたのだ。

立ち並んでいた無数の木々は根こそぎ薙ぎ払われ、猩々の大群と共に消し炭となって燻っている。息を白くする程冷えていたはずの
大気は陽炎のように揺らめき、未だその熱の持て余していた。

「これを一人でやったって言うの……？」

「これだけじゃない」

青藍が視線を移すと、兵達の中に佇んだ烏羽がずっと手を下ろした。途端に青藍や兵達を覆っていた水の幕が崩れ落ち、水滴となった直後に蒸発していく。

「ここまでの突破口を開いたのもあいつだ」

烏羽が顎先で示したその姿を青藍は改めて見やった。陰陽眼を解放しているのだろう、かつての蘇芳の様に朱雀の焰をその身に纏った緋雨が、焦土と化した爆心の地に一人佇んでいる。

——と。

焼け落ちた木々の合間から、何とか生き残っていた猩々が五体飛び出した。

「緋雨！」

月白は思わず声をあげる。

「——っあああ！」

だが、獣の咆哮のような低い気迫の声をあげて、すでに緋雨は動いていた。

紅時雨の一刀の下斬り捨てた猩々の体を払い退け、反す刃で次の腹を薙ぐ。噴きあがる血煙を浴びながら宙を舞い、刃で大きく弧を描いて着地、最後の一匹を貫き通すとうまく本体から滑り落ちた二匹分の首が地に転がった。遅れて降り注ぐ多量の血飛沫が、焰の衣を脱いだ緋雨の体を余す所無く汚していく。

それは刹那の出来事だった。

滴る返り血を拭いもせず無機質な動きで刃を引き抜く緋雨の様子は、その場の全員を凍りつかせる。焼き払われ死屍累々の大地に立つ凄惨なその姿に、兵の一人が思わず呟いた。まるで修羅だと。

その言葉が耳に入ったのか緋雨はゆっくり振り向いた。焰と同じ色をしながら冷たい光を宿した双眸に射抜かれて、声の主は戦慄して息を呑んだ。だが、緋雨はふいと視線を反らして紅時雨を鞘に収めただけだった。

「……撤退するぞ。光耀こうようの泉は制圧した。今日はここまでだ」

月白の声で、呪縛から解かれたように全ての者が動き出した。負傷した兵は無事な者に助け起こされ、互いの生存を喜び合う。烏羽に手を借りて立ち上がった青藍も、共に撤退の準備を始めた。

——だが、一人だけ動かぬ者がいた。月白は嘆息すると、相変わらず同じ場所に立って空を見上げている緋雨に寄り添った。

「月白」

「うん？」

「雪だ……」

緋雨はそっと手を伸ばした。血塗れの掌にふわりと舞い降りた不

香の花は、瞬く間に溶けて消えて行く。

「だな。積もりそうだ」

月白は空を見上げる。遮る木々がすっかり無くなった空はのしかかるように重く、淡雪ががちらちらと舞い始めていた。

「……帰るぞ。計都に」

「ああ」

緋雨は頷くと、下ろした掌を袖の中でそっと握る。まだ生温かい紅の中で、純白の余韻は身を貫くように冷たかった。

「お帰りなさいませ」

紅の一門に戻った緋雨を真っ先に迎えたのは真赭まさほだった。

「緋雨様、お疲れ様で御座います。湯の用意をしておりますのでとうぞお体をお清め下さい」

「……いや、いい」

黒紅から降りた緋雨が目を合わせることも無く通り過ぎようとする、真緒は慌ててその後を追う。

「あ、ではお召し替えをお持ちし——」

「いいと言っている、私に近づくな！」

「も……申し訳ありません」

だが急に一喝されてびくりと立ち止まる。その様子が背中越しに伝わった緋雨は、心中でしまったと毒づいた。

「……すまない、少し疲れているんだ」

自分自身に嘆息した緋雨は、振り返って握っていた黒紅の手綱を真緒に差し出した。

「黒紅を頼む。それと……悪いがしばらく私の部屋に誰も寄越さないようにしてくれ」

「はい、かしこまりました」

真緒が手綱を受け取ると、緋雨はもう何も言わず歩いて行ってしまった。

自室にたどり着いた緋雨は灯も点けずに、薄暗い空間の中でするすると壁際に座り込んだ。今の今まで気にも留めていなかったが、

体中があちこち酷く痛む。恐らく傷もあるのだろうが、もはやそこから流れた血が自分の物であったとして見分ける術は無いだろう。

緋雨はちらりと部屋の隅に目をやった。

十日前に殲滅戦に出た時と寸分違わぬその場所には、随分前から手にしてすらいなない漆塗りの手鏡が置いてある。指先を伸ばして飾り紐を引き寄せると、埃を払って手に取った。

「なるほど、修羅……か」

鏡面が映し出した自分の姿に緋雨は口端を歪める。随分と上手い表現をしたものだ、名も知らぬ兵の言葉を他人事のように評した。髪に顔に衣に指先。血に濡れていない部位を見つける方が難しい。まだ鮮やかなぬめりを残すものもあれば、随分前に乾いて黒く変色したものもある。染み付いた生臭い鉄臭は、いっそ芳しいほどに鼻を突き嗅覚を麻痺させていた。

鏡の中の双眸が、何かを言いたそうに自身を見返してくる。

「……そんな顔をするな」

緋雨はひりつく喉の奥で乾いた笑み漏らすと、手鏡を背後の壁に叩き付けた。

「もう、今さら遅い……」

玲瓏たる破壊の音が静寂の中に響き渡り、鏡片が砕け散る様を視界の端に映しながら緋雨は目を閉じた。底無しの泥沼に引きずり込まれる様な、抗い難い急激な睡魔が訪れる。緋雨は気絶するように深い眠りの淵へと落ちていった。

朱雀の継承の儀が終わり、殲滅戦が再開されてから一月半が経った。

「ふむ、此度の鳴雷なるかみと光耀を合わせると制圧の終った聖域はこれで六つ。残すは幽玄、黎明……そして根源ですか」

亡き蘇芳に代わって月白が指揮をとる殲滅部隊は既に四度の出陣を終え、中でも今度の十日間は目覚ましい戦果を挙げた。文台の前の藤黄は、報告のため執務部屋を訪れた月白の言葉を満足そうに書き記した。

「素晴らしいです月白。これは正直予想以上ですよ」

「俺じゃない。ほとんど緋雨の手柄だ」

「そうですか。それは安心しました」

「安心した？」

「ええ」

藤黄は手にした筆を硯に戻すと顔を上げ、訝しげに眉を寄せている月白を見やった。

「最初の殲滅戦と言い、蘇芳の一件と言い、正直なところ彼女は不

安要素でしたがどうやら心配は無用のようですね。朱雀を継承した事に対する責任の表れでしょう」

「それはお前が直接見てないから言える事だ」

どういう意味だと言いたそうに藤黄が眉を寄せると、月白はあぐらをかいた足の上で拳を握った。

「そりゃあ周りから見りゃ賞賛に値する英雄級の戦いぶりだ。だがな、緋雨の目はあんなに荒んでなかった。無理して平然と戦ってるように見せてるだけだ……痛々しくてこれ以上見てられないんだよ」

「……総指揮をとる者が私情を持ち込むのはいただけませんね」

「そんなのはどうでもいい！」

淡々とした藤黄の様子に苛立って、月白は強く床を叩いて乱暴に立ち上がった。

「藤黄、いつまでこんな無駄な戦いを続ける気だ？」

「今さら何を言うかと思えば……忘れたのですか？ 妖を一匹残らず殲滅するまでです」

「それに何の意味がある？」

「意味も何も、帝の勅命を果たすという大儀があるではないですか」

「その大儀とかいうものに何の疑問も持っていないのかって聞いているんだ！」

「……何が言いたいのです月白」

藤黄は嘆息して立ち上がると、口調を荒げる月白の前に進み出た。

「藤黄、俺は正直今のお前のやり方が気に喰わない。何で新帝に黙って従ってるんだ？ お前の立場なら、そもそも最初からこの馬鹿げた戦自体やめさせる事だって出来たはずだろう」

「黙って従う？ また随分な言い様ですね。私は私自身の信念に基づいて動いているにすぎません」

「だったらなおの事――」

「黙りなさい月白。私は黄龍の称号を持つ者。白虎のあなたに指図される筋合いはありません」

藤黄の冷やややかな言葉は、食い下がろうとした月白をぴしやりと打った。

「……やっぱりお前変わったな藤黄」

月白は思わず掴みかかりそうになった手を衣に皺を作ることと何とか抑えた。

「何の話をしているのです。生きている以上不変の者などあるはずがないでしょう」

「そういう意味じゃない。もういい気にするな……こっちの話だ」

「……月白、一つあなたの質問に答えておきましょう」

御簾を開いて外に出ようとした月白はその言葉に立ち止まって振り向いた。入り込んだ雪風が藤黄の髪を揺らす。

「いつまで続けるのかと聞きましたね、この殲滅戦を。恐らく次が最後です」

月白はその意味を察して白銀の瞳を細めた。

「……月蝕みか」

「ええ。ようやく正確な日が分りました。ちょうど二十日後です」

「そうか。ならそれまではゆっくりさせてもらう」

月白は潜り抜けた御簾の向こう側で軽く手を上げ立ち去ろうとしたが、一歩踏み出したところで立ち止まった。

「なあ藤黄」

「何です？」

藤黄はまだ何かあるのかと腕を組んだ。肩越しにこちらを見る月白の表情は、御簾に遮られ読むことは出来ない。

「皇后様が生きてたら、どう思うんだろうな。今のお前を……」

藤黄は目を見開いたが、月白は一方的に言い残すと返事を待たずに姿を消した。

「……あなたに何が分かると言うのです」

月白が招き入れた凍えた外気に吐息を白く染めながら、藤黄は小さく笑った。

無明の闇が広がっている。それとも自分の目が見えなくなっただけか。

緋雨はすぐに答えが前者だと分った。瞬く間に漆黒が禍々しい紅蓮に上塗りされていく。それは焰の色だった。だが不思議な事に熱さを感じない。ぱちぱちと弾ける火の粉が、唯一つの音となって何処かも分らない空間に広がっていく。一步踏み出そうとした途端、体がひどく重くなった。気付けば腰の辺りまで血の海に浸かっている。

その時、突然背後に何者かの気配が現れた。咄嗟に背の紅時雨を引き抜き振り返ると、そこには首の無い猩々が佇んでいる。緋雨は息を呑んだが、無意識に刃を振るっていた。耳障りな絶叫が鼓膜を震わせ、血と肉の破片を撒き散らしながら猩々の体はずぶずぶと血の海に沈んでいく。

その光景に言い様の無い恐怖を覚えた緋雨が後ずさると、また別の気配が現れた。

裂かれた腹から長い臓物を引き摺って、妖狐が近づいて来る。今度も自分の意志とは無関係に、紅時雨が銀光を描く。細切れになっ

た妖狐の体が先ほどと同じように血の中に消えて行った。

緋雨はどろどろとした粘りのある液体を掻き分けてもがいた。

だが、行く先もわからぬ体は、全くその場から動かずじわりじわりと沈んでいく。掴まる所を求めた指先は虚しく空を彷徨い、とうとう血の海へ飲み込まれた。そして息苦しさに喘ぐ緋雨の双眸は無数の骸を映した。ある者は腕を、またある者は足を。体の何処かを失った妖達が、淀んだ眼でこちらを見ている。緋雨は戦慄してがむしやらに手足を動かした。するとその腕が強く引かれる。

「蘇……芳？」

引き上げられた緋雨は目を見開いた。そこには死んだはずの蘇芳が立っている。思わず懐かしさがこみ上げた。だが、その直後に目の前で蘇芳の体が崩れ落ちる。その腹が刃に貫かれていた。他でもない、緋雨自身が握った紅時雨の切っ先で。蘇芳の腹から流れ出した血が両手を染めていく。

緋雨は全身が総毛立つのを感じた。

「——うあああああ……！？」

夢と現の境界を自らの声で破った緋雨は、急激に変わった光景に目を瞬かせた。そこには血の海も無数の骸も無く、ただ冷えた感触がある。いつ倒れこんだのか床の上で眠っていたようだ。

「夢……？」

自分に問うても、答えは分りきっている。ただの夢であることに

間違いは無いのだ。だが、ふと自分の眼前にかざした両手が血塗れである事は、夢の中と同じだった。

「うっ……っ」

その瞬間、緋雨は強烈な吐き気を感じた。

刃で肉を裂く生々しい湿った音と、骨を絶つ鈍い感触。冷えた体に降りかかる返り血の生温かい温もり。断末魔の悲鳴と憎悪に燃えた目。濃厚な血の匂いをさらに塗りつぶす、骸が焼ける胸の悪くなるような悪臭。何もかもを飲み込んで燃え盛る業火の爆ぜる音。それら全てが一瞬にして、あまりにも鮮明に蘇った。

「かはっ……はっ……！」

緋雨は激しくむせ返りながらうずくまった。せりあがって来る強い酸に喉を焼かれ、勝手に涙が滲み出る。掻き耖るように胸を強く押さえ、溢れようとするものを何とか押し戻すと荒く息を吐いた。

口端から零れた唾液を拭い身を起こそうとすると、きらりと輝く物が目に入った。それは自分の手で叩き割った手鏡の一部だ。碎かれてなお真の姿を反射するその破片は、片目だけを映していた。血のように紅い瞳がそこにある。

緋雨はそれを手に取ると自らの目に向けていた。真紅の陰陽眼。それは緋雨が朱雀である事の証だ。後ほんの僅かにでも動かせば、瞳を貫けるほどの距離に刃のような先端がある。見開いた瞳が乾き、ちりちりと痛んだ。

「……っく」

緋雨は強く目を閉じると、遠ざけた鏡の破片を握り締めた。瞳の代わりに傷付けられた掌から真新しい血が流れ出し、その痛みが発

作的な衝動を霧散させる。

一体何をしようというのだ。

緋雨は胸中で自嘲すると、破片を投げ捨てて立ち上がった。

ふらりと出た渡殿は、淡い雪明りで満たされていた。薄く雪の積もった高欄に手をかけ空を見上げれば、舞い遊ぶ無数の六花の向こうに青白い細月が見える。その寂しげな姿が、不意に夜色の妖を思い起こさせた。

『お前は何のために生き、何のために戦う？』

低く囁くように、夜風に似たその声が蘇る。

『お前は戦う理由が欲しいだけだ』

ただの幻聴でしかないと目を伏せたが、また耳元で眞守が囁く。まるですぐ傍に存在しているかのようだ。

「うるさい」

馬鹿らしいと分かってはいても、勝手に言葉が滑り落ちた。

『お前はどこにいる？』

「うるさいと言っている」

気付かぬうちに立てた爪が、高欄を小さく軋ませる。

『それがお前の答えか？』

「黙れ……っ！！」

緋雨は叫んで顔を上げた。途端に、眞守の声は聴こえなくなる。

「他にどうしろと言うんだ……」

薄雲に身を隠した月へと言葉を紡いだ。その問いに答える者は無く、ただ耳の痛くなるような静寂の中、しんと雪だけが舞い降りる。

「私はお前のように生きられない……」

裸の足先から伝わる雪の冷たさが、身も心も凍らせて行く。それは白銀に染まった美しい世界が、血に穢れた自分を拒絶しているように感じられた。

緋雨は顔を伏せた。

戦うと決めた。だから何も考えるな、流れに逆らうな。差し伸べられた温かな手を振り払い、あの誰よりも優しく美しい宵色の瞳を遠ざけたのはお前なのだ。緋雨は必死で自分に言い聞かせた。

「たとえ同じ魂を持って生まれても、私は……桜花にはなれないんだ……」

それでも頬に伝う涙を止める術を、緋雨は見つける事ができなかった。滴り落ちた熱い雫は、淡雪と共に消えていく。痛む胸を抱き鳴咽を押し殺しながら、緋雨は消え入りそうな声で心の底からその名を呼んだ。

「眞守……っ」

後はただ白く、世界は染められていくだけだった。

第二十話 雪花の言霊

凍てる風が雪を散らす。白の花卉をその身に浴びながら、青藍は手にした弓を静かに持ち上げた。肩より高い位置に掲げた矢をゆつくりと引きながら、両腕を徐々に下ろして行く。動かぬ瞳が見据えるのは、弱い月光と雪明りだけの薄暗い視界の先。不可視の的を捉える様に、張り詰めた弓弦と同調して精神を研ぎ澄ます。

開いた右の指先から放たれた矢は、迷うことなく一点に向かって突き進んだ。

弓の跳ね返る反動に髪だけをふわりと揺らした青藍は、琴の音に似た低い響きの余韻が消えるまで微動だにしない。そして風が止み、視界が開けた。庭木に括り付けた的の中央に突き立った矢が見える。それを確認すると、青藍は長く息を吐いてようやく腕を下ろした。

殲滅戦から戻り身を清めてからは、ずっと同じ場所で矢を射っていた。戦の後は少なからず心に乱れが生じる。それをそのまま放って置けば、いずれ致命的な歪を生んでしまうのだ。だからこれは鍛錬というわけではなく、心を鎮めるためのいわば儀式のようなものだった。

青藍は最後の一矢を射ようと矢を番えたが、顔をしかめて手を止めた。静寂を狂わせる声が聞こえる。それは屋敷の中からだった。仕方なく矢を収めると、青藍は声のする方へ踵を返した。

摺り足で進む渡殿は刺すように冷たい。精神統一をしている間は気にならなかったが、青藍は急激に体温が下がっていくのを感じ身震いして両手で体をさすった。

部屋の前まで来ると、中から若い女の声がした。ばたばたと争うような足音も聞こえてくる。どうやら女中同士が揉めている様だが、今は夜も深いのだ。本来身を休める時間に騒動を起こすなど、屋敷

に仕える者としての心得がなっていない。

これは文句を言ってやらなければならないと嘆息して、青藍は勢い良く御簾を開いて部屋に踏み込んだ。薄暗い部屋の中には向かい合うようにして二つの人影がある。想像に違わずやはり二人とも女中のようなのだ。

「……これは青藍様、どうなされましたか？」

青藍に気付いた一人がこちらを向いた。表情は分からないが、それは青藍にとって馴染み深い女中の声だ。

「それはこちらの台詞よ。何を騒いでいたの？」

「申し訳御座いません、この者は粗相が多いもので改めさせていたところで御座います」

「こんな時間に？」

「はい。昼の時間は務めが御座います故」

「そっちのお前、本当なの？」

青藍は訝しげに眉を寄せながら、もう一人の女中に問うた。

「はい、間違い御座いません」

「……そう。ならいいわ」

もしかしたら女中同士の派閥争いのようなものかもしれない。そういう類ものはどこの屋敷でもあるものだし、他の者の規律も乱す

のでいただけないが、この場で追求するのも面倒だ。そのため青藍はあえて納得しておく事にした。

「ただし大声を出すのは止めなさい。いいわね？」

「かしこまりました」

女中二人が思い出したように今さら膝をついて低頭する様子に、青藍は肩を落としながら部屋を出た。これは女中頭に言って一度屋敷内を引き締めた方がよさそうだと。

――その時。

青藍は強烈な殺気を感じた。直後、女中達のいた部屋の御簾を突き破って何者かが飛び出して来る。振り返って正体を確かめるより早く咄嗟に身を屈めた青藍は、その背に飛び掛ってきた勢いを利用して相手を前方へ投げ飛ばした。

「お前っ」

身を起こし柱へと叩きつけられたその相手を見た青藍は驚愕した。それはたった今話をしたばかりの女中の一人だ。

「何のつもり!？」

まさか説教をされた腹いせという訳でもあるまい。部屋からふらりと姿を現したもう一人の女中に向かって青藍は声を荒げた。だが、返事は別の形で返ってきた。

「けえっ!」

奇怪な声をあげて、女中が青藍へと突進する。

本能的な危険を感じた青藍は、すれ違うようにして身をかわすとその後ろ首に向かって手刀を繰り出した。だが、あっさりと身を捻った女中は後ろへと跳躍し、四つん這いになって着地するところらを睨んだ。

「な……っ!？」

明らかに人間の動きではない。その異様な光景に息を呑んだ青藍は、あまりの事に次の反応が遅れた。最初に投げ飛ばされた女中がやはり四つん這いになって立ち上がり、青藍へと襲い掛かった。受身を取れずに押し倒された青藍は後頭部を強打して表情を歪める。馬乗りになった女中の目は血走り、ぐるぐると獣のように喉を鳴らした。もはや正気の人間とはとても思えない。

青藍は逃れようと身を振るが、一体その細腕の何処にそんな力があるのか押さえつける女中はびくともしない。まさか自分の屋敷でこのような目に遭うとは思ってもおらず、最悪な事に青藍は丸腰なのだ。だが、こう密着しては術を使うわけにもいかない。

「っ……常盤^{とあわ}っ！」

離れた所にいるもう一人の女中が向かって来ようとするのを見て青藍は叫んだ。

「ぎゃうっ！」

声と同時に現れた颯の如き緑の光が青藍の上から女中を引き剥がし、渡殿へと叩き付けた。

「よう、うちのご主人に何してんだ？ 別嬪^{べっぴん}さん」

光から少年の姿になった式神は、その名の如く常盤色の髪を揺らし、呻いている女中を見下ろして挑発的な笑みを浮かべた。

「やっちゃっていいんだろ？ 青藍」

常盤は頭の後ろで腕を組みながら気楽に言ってくる。体勢を整えた青藍は、その様子を横目にもう一人の女中と対峙した。

「出来れば生け捕りにして」

「出来なかったら？」

「……始末しなさい」

「了解」

常盤はにっと笑うと女中へ飛び掛り、庭園へ降りて激しい攻防を始めた。

「さて、私の相手はあんたね」

青藍は身構えた。口端から唾液を漏らし喉を鳴らす姿は、既に人魔といっても過言ではない。馴染みの女中の姿をしているため多少やりにくくはあるが、そんな事を言っている場合ではなかった。相手の俊敏な動きは先ほど嫌と言うほど思い知っている。

「急々如律令。吹き抜けろ、緑青烈風」
ろくしょうれつぷう

青藍は手持ちの中で最も発動の早い術を放った。強烈な疾風が渡

殿にへばりつく女中をじりじりと後退させる。

「急々如律令……」

元から殺傷力よりも足止めする事を優先していた青藍は、その隙に乗じて数歩下がり次の術を放つ。

「乱れ舞え、瑠璃雷光」
るりらいこう

瑠璃色の稲光が幾重にも重なって走り、渡殿へと吹き込む雪を青く照らし出す。その綺羅の花弁の中高く跳躍した女中は、また一つ空中で奇怪な鳴き声をあげる。その様子に青藍は口端を吊り上げた。

「急々如律令。絡め取れ、縛戒木賊！」
ばくかいとくさく

女中の着地点を狙って伸び上がった茎がその体を見事に捕らえる。縛り上げられた女中は逃れようとひたすら暴れているが、動けば動くほどに蜘蛛の巣にかかった羽虫のようにその身の自由は奪われていく。

「観念しなさい、それだけ絡めば簡単には解けないわよ」

青藍は警戒を解かず ゆっくりと女中に歩み寄る。すると女中は突然表情を変え、さめざめと泣き出した。

「ど……どうか、お助け下さい青藍様。お慈悲を……お慈悲を……」

「お前一体——」

「騙されるな青藍、そいつの中身はもう人間じゃない！」

思わず青藍が憐憫の情を煽られそうになると、激闘中の常盤の声が飛んできた。

「ちっ、式神風情が余計な事を」

その瞬間、また女中の表情が禍々しいものへと変化し、耳障りな声をあげた。

「っ……急々如律令、狂い咲け、百花繚乱っ！」
ひゃっかりようらん

女中を縛る茎がみしみしと軋み始めたのを見て、青藍は片耳を塞ぎながら迷わず術を紡いだ。吹き荒れる花卉の中で女中が悶絶し、突然黒い霧のようなものが吹き上がった。

「青藍っ！」

それに気付いた常盤が、もう一人の女中を突き飛ばして飛び込んできく。青藍が右の腕に鋭い痛みを感じると、常盤がその身を抱え上げて部屋の中へ転がり込んだのはほぼ同時だった。その間に黒い霧は青藍の術から逃げ出すと、常盤と戦っていたもう一人の女中の元へ素早く動き、そしてそのまま姿を消した。

「腕やられたのか？」

「大丈夫ただのかすり傷よ」

常盤の腕に横抱きにされた青藍は、裂けた袖に目をやった。痛みはあるが出血量は大した事がない。

「それより早く降ろしなさい」

「なんだよ、相変わらずつれないな」

青藍に無然と睨まれて、常盤はぶつぶつと言いながらも青藍の両足を床に降ろした。

「それにしても……何だったのかしら今の」

青藍は傷口に手をやりながら女中達が消えた庭園へと目をやった。

「あれはたぶん羅娑らしやだな」

常盤はうーんと唸りながら腕を組んだ。

「羅娑？」

「異界でも指折りの魔物さ」

魔物とは本来、鬼族である式神と同じ異界の存在だ。式神が陰陽師と契約して霊力を対価に異界から具現化するのに対し、魔物は次元の歪みを無理矢理破って勝手にこの世に入り込んで来る。

「……詳しく聞かせなさい常盤」

「はいはい、仰せのままに」

ただならぬ様子の青藍に嘆息して、常盤は渋々と語り始めたのだ。
った。

「――いつまでそうしているつもりだ？」

耳の痛くなるような静寂の中、不意に聞こえた声に緋雨はゆっくり顔を上げた。冷え切った体から垂る雪が過ぎた時間を語っている。

「私はまだ夢を見ているのか……？」

泣き濡れてぼやけた緋雨の視界に、高欄の向こう側の人影が映った。

「いいや現^{うつ}だ」

「……消えろ」

庭園に佇んだ夜色の妖が言うと、緋雨は首を横に振って再び顔を伏せた。

「自分で呼んでおいて消えろとは随分だな」

「消えろ。これは私の幻覚だ」

「疑り深いな。俺はここにいるぞ」

「嘘だ」

「嘘じゃない。よく見ろ」

「そんな訳は——」

再び顔を上げた緋雨は、高欄を挟んですぐ真下から見上げる宵色の瞳と目が合って言葉を切った。

「血と雪の化粧^{けわい}か。似合わなくも無いがどちらか一つにすると良い」
それは紛れも無く真守だった。

「……なぜ、ここにいる？」

「言っただろう。お前に呼ばれたから来たんだ」

「呼んでなど——」

「呼んだだろう、俺の名を」

真紅の目を見開いている緋雨に真守は微笑んだ。

「真の言の葉は力を宿し言霊となる。お前は無意識に使ったんだ」
真守はすっと手を伸ばしたが、その指先は緋雨の頬に触れることなく通り過ぎる。

「残念ながらお前を温めてやれる体は無いがな」

どうやら今日の前にあるのは真守の幻影のようだ。月蝕みが近い
ためいつもの地脈渡りは使えなかったのだろう。

「何を想って泣いていたんだ？」

「泣いてなどいない」

「相変わらず嘘が下手な奴だな」

少しだけ腫れた目蓋と涙の痕を見た真守は苦笑して手を引いた。

「仕方ない。では望み通り消えてやろう」

「っ……待て！」

真守が背を向けて離れようとする、緋雨は咄嗟に高欄を飛び越
えてその後を追った。

「呼んでなどいないんじゃないのか？」

「あ……」

くすりと笑って振り返った真守を見て、緋雨は思わず棒立ちにな
った。

「雪花は散り逝く桜によく似ている。この世に留まる時は短いが、
それ故どちらも儚く美しい……そうしていると思い出すな、薄暮れ
の久遠桜の下でお前と出逢った時の事を」

眞守は再び緋雨のすぐ目の前まで歩み寄った。

「桜雨に佇むお前の姿もまた美しく、そして強かった。今のお前は触れれば消えてしまいそうだな。何故そんな脆くなった？」

「脆くなってなど……」

「まあ確かに。力だけなら格段に上がった……か」

頑なな緋雨の様子に肩を落しながら、眞守は雪の舞う夜空を見上げた。青と白の光の中、その身に触れる事の出来ない雪たちが通り過ぎていく。緋雨は見えぬ月の姿を捜す眞守の横顔を、素直に綺麗だと思った。

「実際お前達は、俺達の想像を遥かに超える打撃を与えたくれた。羅喉の長に止む無く全面对決を決意させるほどにな」

「羅喉の長……？」

「妖の長、邑夾……俺の父親だ」

眞守はすつと視線を戻すと、緋雨を見つめた。

「次は恐らく最初で最後の総力戦だ。負ければ妖は滅おれたちびる」

どくんと、緋雨の左胸が跳ね上がった。

「死闘になるぞ。本気で殺す気で来なければ生き残れない」

「お前だって……戦うのだろう？」

「俺には邑夾を護る義務がある。だがそれ以外は好きにするさ」

「死ぬ気なのか？」

「さあな。だがお前の手にかかって死ぬのならそれも良い」

「はぐらか——」

「緋雨」

緋雨は言葉を詰まらせる。目の前に眞守の顔があった。いつだったか久遠桜で眞守の想いを告げられた時のように、その瞳から目が離せなくなる。

「お前が心から望んで戦う道を選ぶのなら、俺はその矛先を甘んじて受け入れよう。だがそうでないなら、もういい加減に自分を封じ込めるのはやめろ」

実体ではないと分っていても、その息遣いが感じられそうなほどの距離に緋雨の鼓動が狂っていく。

「たとえ心を殺して羅刹になっても、魂までは殺せない。お前の魂の……悲鳴が聞こえる」

「眞——」

「考えろ。そして今度こそ本当の答えを見つけろ」

まるで唇同士が触れるようにして、すうっと真守の幻影が緋雨の体を通り抜けて消えて行った。

緋雨は瞬いてそしてがくりと膝を着いた。握り締めた雪にぼたぼたと、随分前に止まっただけの涙粒が染みをつくってはすぐに薄れていく。緋雨は空を振り仰ぎ、声無き声をあげて泣き叫んだ。張り裂ける胸の痛み、身を震わせ、搾り出され枯渇した酸素に喉が喘ぐ。だがそれでも、東の空が白むまで緋雨の静かな慟哭は続いていた。

第二十一話 月蝕みの乱

「人間に化ける魔物!？」

宮廷に集まった筆頭一同は、昨夜青藍の身に起こった事の一部始終を聞いて異口同音に驚きの声をあげた。

「常盤が言うには恐らく羅娑らしやと言う最上位の魔物だそうです。しかもただ化けるだけでなく、喰った数だけ増えていくと……」

「増えるって……じゃあまさか、既に計都の人間に紛れ込んでる奴が何匹もいるって事か？」

「ありえない話じゃないと思うわ」

「つたく、こんな時に……どう思う？ 藤黄」

いかにも面倒くさそうに顔をしかめた月白は黙したままの藤黄に目をやった。

「……危惧すべき事態ではありません」

険しく眉を寄せた藤黄は思案するように口元に手をやった。

「ですが、すぐに打てる手はありませんね」

「おいおい、まさか放っておくつもりか？」

「青藍の言う通りなのでしたら、余程上手く化けるのでしょうか。そ

れをどう見分けるのです？」

「そうだが……」

「魔物の活性化も月蝕みが終われば弱まります。それまで警戒を怠らないようにするしか無いでしょう」

藤黄は首を横に振って脇道に反れた話を強制的に軌道修正した。

「今私達はそれ以上にすべき事があります。烏羽、用意しなさい」

烏羽は黙って立ち上がると、全員に見えるように部屋の中央に巻物を広げた。

「藤黄様これは？」

緋雨は細かく墨で記された内容に身を乗り出した。

「月蝕みの夜に行う結界戦の陣形案です」

「日が分ったのですか？」

「ええ。ずっと星の動きから探っていましたが、ようやく割り出しました」

青藍の言葉に藤黄はすっと鋭く目を細めた。

「今から二十……いえ、もう十九日後ですか。この日は妖の力が最も弱まる時です。よって、この機に最大勢力を以って羅喉を討ちます」

「総力戦……」

「正にその通りですよ緋雨」

藤黄と烏羽以外の三人は思わず顔を見合わせた。

「藤黄、お前も出るのか？」

「ええ、要となる結界の発動には五人の筆頭の力が不可欠です。こちらを御覧なさい」

藤黄は懷から取り出した書を広げると、指先で示した。

「これは計都のものを応用した月蝕み用の結界図式です。月が欠け始めると同時に発動し、侵蝕が最大に達した時にその効力もまた最大になります。結界内に捕らわれた妖は妖力を完全に削がれ、ただの獣同然になるでしょう。そこを一気に叩くのです」

「……という事は、出陣は夕刻ですか」

藤黄は結界図式を脇に避けながら、青藍の言葉に頷いた。

「討伐部隊は……変形型の魚鱗ぎょりんってどこか」

記された陣形に月白は腕を組んだ。その形は攻防共に優秀な中央が張り出した三角状の陣形が元になっている。だが本来の形では側面からの攻撃に対して脆い一面があるのだ。そのため今回は藤黄が手を加え、三角形の左右を四角く広げてある。

「最前の頂点部分には緋雨の先陣、その後ろに月白の本陣、左翼に青藍、右翼に烏羽をそれぞれ配置します」

「指揮はどうする？ 黄龍が出陣するなら、わざわざ俺がやらんでも良い気がするが」

「結界を張り始める機宜を図らねばなりませんので、私はこちらでその準備をします。ですからそれまでは変わらずあなたにお任せしますよ月白」

藤黄は次々に図上の指先を滑らせ、最後に本陣最後方の中央に触れた。

「基本的には戦況が安定している限り私は手出しをしません。結界を張り始める日没直前に指揮する者が私に代わるとだけ覚えて置いてください」

四人が頷く様子を見回して、藤黄は離れた指先を膝の上に戻した。

「それでは詳細をお話しましょう」

「青藍」

二刻にも及んだ討議が終わり宮廷を出た烏羽は、真っ先に青藍の後を追った。

「どうしたの？」

珍しく駆けて来た烏羽の様子に青藍は目を丸くした。

「さっきの話を、もう一度詳しく教えてほしい」

「羅娑の事？」

「ああ」

青藍が訝りながらも話し出すと、その間烏羽はずっと難しい顔をして頷いていた。

「――で、こんな所よ。最初の時とあまり変わらなかったでしょう。何か引つかかる事でもあった？」

「いや……上手く思い出せないんだが、それに似た話を何処かで見聞きした覚えがある」

「それってどんな――」

「悪いが今はまだ言えない。手間を取らせたな、失礼する」

青藍が切り込もうとすると、烏羽は即座に踵を返した。

「ちょっと……もう、何なのよ！」

取り残された青藍は、両手を腰に当て酷く憤慨していた。

いざ決まってさえしまえば、十九日などという時間はあまりにも短い。

瞬く間に訪れたその日、計都は厚い白銀の衣を纏っていた。前夜までの猛吹雪は嘘のように静まり、冴えた空から降り注ぐ久方ぶりの陽光が樹枝の雪を垂らせる。

「緋雨様、そろそろお時間に御座います」

「……ああ、わかった」

薄い幕の向こう側から聞こえて来た女中の声に、緋雨は身を浸していた泉から立ち上がった。襖みぞぎに相応しく、澄んだ清水は体中が息を吹き返すように冷たい。濡れて艶めく黒髪を絞り、珠の雫を白磁の肌から払い落とした緋雨はその身に紅の衣をばさりと羽織った。

「黒紅は？」

「真赭まそぼが門前にご用意しております」

「そうか」

すっかり身支度を整えた緋雨が幕を捲って外に出て来ると、女中が一礼した。

「待たせたな」

真緒は正門前に緋雨が姿を現すとすぐに気付いて黒紅を引いて歩いて来る。緋雨は手綱を受け取ると愛馬の背へと跨りすぐに出立しようとしたが、ふと後方を振り返った。紅の一門の広大な敷地が見渡せる。一番奥には朱塗りの霊廟がちらりと伺えた。

「……真緒」

「何で御座いますよう？」

「これを頼む」

「え……あっ！」

緋雨は背負っていた紅時雨を手早く外すと真緒に投げ渡す。まさか一門の宝刀に触れるなど夢にも思っていなかった真緒は、緋雨の突然の行動に驚きながらも慌てて受け取った。

「戻しておいてくれ」

「ですが、緋雨様……」

「必要無い」

困ったような視線を受けた緋雨は左腰に帯びた夕風を示した。

「私にはこれがある」

そう言って微笑んだ緋雨は陽光の中で柔らかく輝き、その神秘的

な美しさに思わず真緒は頬を染めた。

「頼んだぞ」

「っ……緋雨様！」

「何だ？」

その様子に何故か言い知れぬ不安を感じた真緒は、黒紅に蹴り入れようとした緋雨を思わず引き止めた。

「どうか……ご無事でお戻り下さい」

追いつがるような真緒の様子に瞬きをすると、緋雨はまた一つただ柔らかに笑って、青毛の馬と共に開かれた門の先、白い光の中へと消えて行った。

それは羅喉が極彩色に身を染めていた最初の殲滅戦と似て非なる光景であった。

まだ誰にも踏み荒らす事を許さない純白の大地が見渡す限りに広がっている。茜色に染まり始めたその遙かな雪原を挟んで、異種族の陣は互いに存在していた。

「山狗に鴉天狗に妖猪……それから妖狐や猩々しやうじやうじやうの残党。ふむ、羅喉中の妖総出でお出ましですか、どうやら向こうも本気のようにですね」

陣営の最前列まで進み出た藤黄は、白馬の上から指先で敵影を追っていた。

「見えてるだけ約二千。大蛇おろちあたりの伏兵も含めりゃ、ざっと二千五百ってどこか。数の上なら五百程こっちに有利ってわけだ」

その脇に佇んだ月白は、額に手を当てて藤黄と同じ方向を見ている。

「それはどうでしょう。羅喉の長ならば一体でその五百分の数の利など簡単に覆してくれますよ」

「やっぱり根源の泉から下りて来てるか？」

「ええ」

藤黄はすつと琥珀色の瞳を細め、冷淡な笑みを浮かべた。

「同じ土行に属するものとして、真下の地脈から静かで荒々しい威圧感をはっきりと感じます。姿は見えませんが、間違い無く何処かに潜んでいますよ」

「……その時は頼む。悪いがそいつだけは、お前じゃなきゃ太刀打ち出来ない」

「承知しています。さて……そろそろ始めましょう」

藤黄は本陣の後方へと馬首を反した。

「刻限がありますので出し惜しみは不要、最初から全力で行きなさい」

「わかってるさ」

すれ違い様に月白は頷いた。

「……だそうだ。出れるか？ 緋雨」

「ああ、問題無い」

「お前、それだけでいいのか？」

「扱い慣れた物の方が良い」

「……そうか」

月白は黒紅から降りて夕風を引き抜いた緋雨の背に、紅時雨が無い事に気がついた。だが、迷い無い目で真っ直ぐ歩いて行く様子にそれ以上は聞かない事にする。

視界の中で夕陽を受けた雪原が淡く輝いている。緋雨は眩く霞むその先を真紅の瞳で見据えた。

「奴らは術を使わないが突破力が高い。乱戦になっても陣形を崩すな。こちらが散らなければ脅威ではない」

人間側で言えば緋雨と同じ先陣にあたる妖猪たちが、掻いた前足で雪煙を上げているのが見える。緋雨は背後に控える兵達を振り返って叫んだ。

「先陣突撃！」

黒髪と紅の衣をなびかせ、白き大地へと緋雨が駆けて行く。関とぎの声をあげた五百の先陣がその後続いた。

後の世に言う月蝕みの乱の幕開けである。

十六夜から二百年、その歴史を塗り替える合戦の火蓋はついに切って落とされた。

最初の激突は勢いで勝る妖猪の猛進により、やや計都の陣営に近い場所が始まった。

先陣の中央に突っ込んだ妖猪はその勢いのままに当たるを幸い、兵達を手当たり次第突き飛ばす。だが緋雨の指示通り密に詰めた陣形を崩さない兵達は、すぐに柔軟な動きで押し戻し始めた。

「急々如律令」

まとめて三体を捌きながら、緋雨は左手で印を斬る。

「駆けよ、爆炎烈波ばくえんれっぱ！」

直進する炎の渦が、妖猪の一団に風穴を空ける。

「進め、このまま押し返す！」

真っ先にそこへ走った緋雨は、炎に怯んだ数体を一闪。細道のよ
うなその突破口へ向け先陣が一斉に押し寄せると、圧倒された妖猪
は少しずつ後退する。

すると、一匹がけたたましい鳴き声をあげ、同時に全ての妖猪が
一斉に逃走を始めた。

「待て追うな！ 何か来る……」

すぐに追撃しようとした兵達を留め、緋雨は妖猪のさらに前方を
睥睨だ。ほどなくして雪原を黒く染めて、無数の何かが向かってく
る。

「っ……火術用意！ 急げっ！」

大地がそのまま蠢めづいているかのようなその正体が、大鼠の大群だ
と気付くと緋雨は急いで歩兵を下がらせた。

「っひい……！」

だが、術の完成を待たずして大鼠の波に飲まれた陰陽師やその背
後の歩兵は悲惨な運命に見舞われた。瞬く間に体中に這い上がった
大鼠の長い歯が、皮膚を破り骨を砕く。至る所で血飛沫と恐怖の悲
鳴があがった。

「ぎゃああっ——」

断末魔の悲鳴までも喰い尽した大鼠は、すぐ様次の獲物を求めて
突き進んでくる。

「急々如律令。爆ぜよ、煉獄焰陣！」
れんごくえんじん

まわりつく大鼠を剣圧で跳ね返し、緋雨は術を紡ぐ。膨れ上がった焰の舌が雪原を舐め、周囲の大鼠をまとめて焼き尽くした。その機に乗じて、次々と他の陰陽師達の術が完成する。混乱はすぐに沈静へと向かい始めた。

「よし、このまま一気に敵の本陣を引っ張り出す。右翼左翼突撃せよ！」

先陣が安定したのを確認すると、月白はすぐさま第二陣を送り出す。本来であれば増援を出すには早すぎるが、結界を張り始める日没までにある程度妖全体の戦力を削ぐ事が必要なのだ。藤黄の出し惜しみ不要という言葉通り、ここは型破りな短期決戦が望ましい。

「前方上空に新手！」

右翼隊を率いて走る烏羽の耳に、兵の声が飛んでくる。走りながら顔を上げると、夕暮れの空を覆うようにして近づいて来る黒雲の如き姿があった。

「陰陽師は先陣と合流後、即座に水簾円陣すいれんえんじんを発動せよ」

その光景には覚えがある。状況を判断した烏羽はすぐに指令を出す。先陣の頭上に鴉天狗の大群が到達する方が僅かに早い。

「散開っ！」

「焼き尽くすのじゃ！」

異変に気付いた緋雨と鴉天狗の長、六翔の声が重なった。降り注ぐ炎の雨に反応できず身を焼かれた先陣の兵が、黒焦げになってばたばたと地に倒れ伏す。

「跳ね返せ、水簾円陣」
すいれんえんじん

そこで完成した右翼隊の術が先陣に追いついた。灼熱の第一波を逃れた緋雨たちを覆うようにして現れた半球状の水幕が、炎の雨とぶつかって立ち昇る蒸気の中に虹を描く。

「放てっ！」

すかさず、やや遅れて到着した左翼隊から青藍の指令で矢が放たれた。水幕を突き破った鏃やじりは、飛び回る鴉天狗を混乱させ射抜かれた者が落下する。すると今度はぎゃあぎゃあと鳴き喚きながら、一斉に急降下を始めた。鋭い口ばしが無防備な頭上から兵を襲う。

「急々如律令」

刹那、大地に長槍を突き立てた烏羽がその勢いを利用して高く跳躍した。

「急々如律令。凍てろ、絶零霧氷！」
ぜつれいむひょう

烏羽の周囲に巻き起こった白霧に大気が軋み、包み込まれた鴉天狗が動きを止めた。凍りついた水分が微細な氷片となって降り注ぐ。

烏羽が着地すると、飛翔したまま氷の彫像となった鴉天狗が遅れて次々と地に叩きつけられた。歓声が沸きあがったが、烏羽はすでに一点へと視線を集中させている。

「ほう、お主が玄武か。面白い。小僧ながらやりおるやりおる」

最も高い位置にある六翔もまた、同胞を一瞬で壊滅近くまで追い込んだ黒衣の男へと興味を集中させていた。

「わしは黎明の六翔^{れいめいのりくしやう}。玄武よ、わしの炎を受けてみよ！」

六翔は空中で少年の姿へと変化すると、突然烏羽の目の前に降り立った。

「一人が怖くば、雑魚共に加勢させてもかまわぬがな」

一陣の風の如く右翼隊のど真ん中に現れた六翔は、黒い翼をばさりと羽ばたかせて取り囲む兵を威圧する。

「……緋雨、青藍ここは引き受ける」

烏羽は静かに長槍を引き抜くと、兵を制して二人に視線を送った。

「先陣、左翼隊、共に前進する。続け！」

青藍と目配せをした緋雨は、夕風を掲げて駆け出す。その背後で炎と水が激しいぶつかり合いを開始した。

烏羽の右翼隊と別れた緋雨と青藍の二隊は大分奥まった所まで逃げていた妖猪の追撃に入った。だが、先ほどより数を増した兵と、何より二人の筆頭格を相手にするにはその集団はあまりにも脆い。轟く雷鳴と、火炎の舞の中、唯一無二の武器である勢いを封じられた妖猪は瞬く間に駆逐されていく。

その時、薙刀の刃先を血色に染めた青藍は、ふと動きを止めた。

「どうした？」

背中越しに戦っていた緋雨は、溶けた雪の中へ妖猪を沈めながら振り返る。

「木気が急激に膨れ上がってる」

「大蛇か」

「ええ。でも……」

肝心のその姿が見えない。眉を寄せた緋雨は夕風血切りをして目を閉じた。すると、その身を振るわせる微細な振動が感じられる。

「来る、真下だ！」

「全員今すぐその場から離れなさい！」

それは踏みしめた足元からだ。異変に気付いた二人は同時に叫んで別方向へと飛び退いた。

直後。

雪煙を吹き上げ、雪原から緑青色の大蛇が次々と突き出した。

「っ……面倒なのが出てきたわね」

生きたまま丸飲みにされるというのは、一体どんな気分だろうか。運悪く高く跳ね上げられた兵が、その巨大な口の中へと落ちていく様子を青藍は顔をしかめた。

大人二人でも抱えきれそうに無い太さと、見上げるその巨体が至る所から顔を出し揺れる様は、さながら大樹の森だ。羅喉でもかなり奥まった所に棲む大蛇の姿を見る機会などこんな時でもなければまず無いが、ぬらぬらと光るその体表といい、正直あまり見ていて気分の良い物ではない。

そう思ったのは青藍だけでなく、その不気味な姿に恐怖した兵達が大蛇に矢を放ち始めた。だが、大蛇にとってそんな物は飛び回る羽虫程にも感じられていないようだ。煩わしそうに振り払われた尾が

鞭のようにしなり兵達をまとめて弾き飛ばす。

その衝撃は想像を絶するものだろう。十数名が体中のありとあらゆる関節をありえない方向に捻じ曲げながら宙を舞い、雪原へと叩きつけられると動かなくなった。それは分別つかぬ赤子が玩具を乱暴に振り回す様によく似ている。

「長引かせるとまずい」

「ええ。ここは一気に片付けるわよ」

互いに大蛇の合間を走りながら、緋雨と青藍は頷きあった。

「封解」
ふうかい

二人の双眸が輝き始める。

「奥義、炎帝飛翔！」
えんていひしやう

「奥義、青帝招来！」
せいいていしやうらい

茜色の空をさらに燃え立たせ朱雀が飛来し、雷鳴を轟かせ青龍が姿を現す。解き放った陰陽眼の持ち主と一体化した瞬間、紅と青の二色の渦が雪原を抉った。

青き稲光を伴い、青藍が走る。渾身の力で突き立てられた薙刀から伝わった強烈な雷撃が、内側から大蛇を攻め立てのたうちまわらせた。

闇雲に振り下ろされる槌の如き衝撃を身軽にかわした緋雨が、地に着いた刹那に大蛇の頭へと飛び乗る。その頂点へと夕風を突き刺し灼熱の炎を送り込めば、耳を劈くような悲鳴があがる。

びくりと波打つ感覚を感じた緋雨は、すぐさま刃を引き抜き眼前に迫った気配に身を反らす。別方向から伸ばされた大蛇の頭が猛然と通り過ぎていく。その牙に薙がれた黒髪が一房風に舞う様子を横目に、逆さの眼下をひた走る青藍に声をかける。

「足場を」

「任せなさい！ 急々如律令……」

雷風を巻き起こしながら青藍が印を斬る。

「萌え出でよ、常緑千樹！」
じょうりよくせんじゆ

「借りるぞ！」

不毛の地から伸び上がった若々しい緑林の壁を踏みつけて宙を返った緋雨は、さらに高い位置へと跳躍し、あろう事かぱっくりと開いた大蛇の口の中へ飛び込んだ。だが、口を閉じた直後に大蛇が悶絶する。そして痙攣によって直立したその腹を割いて、血飛沫と共に緋雨が姿を現した。

もちろん青藍も黙って見ていたわけではない。薙刀を使って器用には大蛇の頭上へと飛び乗った青藍は、次々と迫る牙をかわしつつ、ここぞと言う瞬間に術を放つ。

「戒めよ、蔓草縛輪」
つるくさばくりん

強靱な蔓の縄が重なり合った大蛇の体を縛り付ける。絡み合って倒れ身動きが取れなくなったその巨体へと、半ば蚊帳の外と化していた兵達が殺到し次々と刃を突き立てる。

青藍が捕縛し、緋雨が焼く。その絶妙な連携によって、大蛇の森は確実に切り倒されていった。

燃える夕陽が西の大地へ落ち始め、足元の影が長く延び始める頃には戦況が拮抗していた。だが、先攻し陰陽眼を解放した三人の筆頭の力が均衡を崩す傷口を徐々に広げつつある。それを確実な致命傷へと導くため、月白の率いる本陣が動いた。

「本陣突撃する！ 俺に続けえーっ！」

無数の人波に汚され水と泥に塗れた雪原をなおさら踏み荒らし、殲滅戦開始以来最大規模の本陣が月白の後を追って駆けて行く。そ

の勢いたるや正に怒濤の如し。飲み込まれた妖たちは蹴散らされ蹂躪され、荒れ狂う大波が通り過ぎるとそこには延々と骸が連なった。だが前線を押し上げる本陣は急激に失速する事になる。これ以上の進撃をなんとしても阻もうと、最後まで控えていた山狗たちが咆哮をあげながら一斉に向かってきたのだ。

「山狗には必ず正面からかかれ、背を見せた瞬間にやられるぞ！」

叫びながら、月白は大太刀を大きく振り上げた。

「かかれえーっ！」

雄叫びと共に月白は真っ向から山狗の群れへと飛び込んだ。一太刀で確実に一体を打ち倒し、先頭を切って一人ぐいぐいと奥へ奥へ押し込んでいく。続く兵達もたとえ隣で仲間の首が飛ぼうが腕が飛ぼうが、互いに鼓舞し合いただ前だけを向いて屍を踏み越えた。

だが山狗も然る者、群れの内部から食い荒らされる痛みを噛み殺し、一向に引く気配を見せない。それが徐々に本陣の士気を削いでいく。

「さすがは、長の一族ってわけだ」

これは簡単にといいわけには行かないようだ。大柄な灰色の山狗を貫き通しながら辺りを見回して、月白は胸中で舌打ちした。数の差から言っても壊滅する事はないが、このままでは消耗戦に突入する。それでは日没に間に合わない。

「一気に押し通る、援護しろっ！」

その声に月白を取り囲むようにぎっと集まった兵達が、前方に刃

を突き出した。

「走れ！」

一丸となつて突き進む月白達の頬や腕が、阻む山狗の爪に裂かれ血を流す。かまわずに突っ切った月白は、群れから抜け出ると同時に陰陽眼を解放した。

「封解。奥義、白帝疾駆！」
はくていしつぐ

大気を震わせ西の空から瞬時に駆け下りた白虎が月白と一体になり白銀の燐光を放つ。

「お前ら巻き込まれるなよ！」

獯猛に笑んで兵を下がらせた月白は、光の尾を引いて再び山狗の群れへと突進した。振りかざした大太刀やその体に触れた山狗は、その部分から硬直し水晶によって侵蝕されていく。

「急々如律令。打ち砕け、白鉾堅槍！」
びやっこうけんそう

生きながら輝ける彫像と化した山狗の彫像群を、地から突き出した白亜の槍が木っ端微塵に粉碎する。半壊した群れに煌めく同胞の破片が雪花のように降り注ぐと、さすがの山狗たちも低く唸って後ずさった。

——そこへ。

「我が一族の骸を人間どもの飾りとするのは腹立たしい」

夜闇よりもなお暗い漆黒の巨体と宵の双眸。泉にひとしずくを落とすような静けさで、羅喉の長、邑夾は突然現れた。

「ひ……っ！」

放たれる強大な威圧感は、かまいたちの如く皮膚を軋ませる。

「それは何に対する恐怖だ？」

腰を抜かして尻餅をついた兵の小さな悲鳴に邑夾の瞳が動いた。

「なるほど死が怖いのか小僧」

まさか注意を引くなどと思っていなかったその兵は、がたがたと震えながら半ば半狂乱で頷いた。

「くだらぬ」

途端に興味をなくした邑夾は、目にも留まらぬ速さで前足を一閃した。

「死への恐怖も、生への執着も私は遠の昔に忘れた」

肉塊へと成り下がった兵の体が薄汚れた雪原にびしゃびしゃと落ちる。その戦慄の光景の中でも誰一人悲鳴をあげる者がいなかったのは、同じ運命を辿りたくないという明確な意思表示だろう。

ただ息苦しいほどに緊張の糸が張り詰める。

「だが貴様ら人間は何も変わらぬ。己が欲望のために森羅を汚し蝕み、果ては同族同士で殺し合うこの世で最も卑しく愚かしい生き物

よ」

邑夾は月白に向け一歩踏み出した。

「白虎よ。眇^{びよう}たるその身に羅喉の怒りを受ける覚悟はあるか？」

「くっ……」

月白は体中から嫌な汗が吹き出るのを感じた。あまりにも格が違いすぎるのだ。圧倒され体が勝手に後ろに下がろうとする。押し留める事に耐え切れなくなったその時、ふと目の前に新たな気配が現れた。

「それは私がお受けしましょう」

月白と邑夾の間には遙か後陣から地脈を渡った藤黄の姿がある。静かに佇むその表情は、邑夾の威圧感を前にしても崩れる事のない微笑だが、どこか底冷えするような酷薄さを感じさせた。

「二百年前と似た忌々しい気配が地脈に満ちているかと思えば、わざわざ出てきおったか黄龍よ」

「七代前の黄龍はあなたの前に倒れたと聞き及んでいます。子孫である私が再びこうしてあなたと合間見えるとはなんと光栄な事でしよう」

「若造がいっぱしの口を利く。よかろう来るが良い」

「月白、これより指揮権を貰い受けます。他三隊と共に掃討に向かいなさい」

ずっと笑みを消した藤黄はちらりと肩越しに月白を見やった。

「刻限が迫っておりますので早く」

「ああ」

藤黄が出て来た以上ここで無理に踏みとどまる理由はない。

「本陣は速やかにこの場を離脱、他三隊と合流する！」

「とうとう出てきたか……」

妖狐を斬り伏せた緋雨は強大な力の奔流を感じた。羅喉の長と陰陽伍家の長。頂点に君臨する者同士の戦いは想像に反して静と静のぶつかり合いだ。

朱雀のように焰を噴き上げる事もなければ、青龍のように稲妻を走らせるわけでもない。視覚的な激しさは一切無く、ただ互いに一撃でも受ければそのまま死へと繋がる極限のやりとりを繰り返している。それは正に死闘だった。

緋雨は羅喉の向こう側へ沈もうとする夕陽を見上げた。弱まる残光が空を茜から薄紫へと塗り替えつつあった。間もなくその時が訪れようとしている。

そう察した緋雨は感覚を研ぎ澄ませた。敵味方入り乱れる戦場にあっても、その存在を見紛う事は無い。

「気をつけろ、そいつ術を使うっ！」

兵達の叫びが飛び込んでくる。土煙舞うその場所へ緋雨は走った。

「うわああっ！」

「急々如律令。駆けよ、爆炎烈波^{ばくえんれつぱ}！」

焰が風を巻き起こし、倒れた兵と飛び掛ろうとした山狗を切り離す。

「緋雨様……っ」

「こいつは私が引き受ける。お前達は他に加勢しろ」

艶やかな夜色の毛並みを持つ山狗と対峙した緋雨は、背後の兵達を下がらせた。

「……それが本来の姿か」

「この姿でお前に会うのは初めてだったな」

言いながら、勇壮な山狗の肢体は見慣れた美しい男の姿へと変わる。

「瞳から迷いが消えた。やはり立ち塞がるか、緋雨」

言い終わらぬうちに、緋雨が眞守との距離を詰める。夕風と眞守の爪が競り合い、二人の視線が絡み合った。

「眞守」

「なんだ？」

緋雨は後方に飛び退き、ずっと真紅の双眸を細めた。

「お前に伝えたい事がある」

「急々如律令。葬れ、ならくてん奈落転」

藤黄の声に呼応し、大地から地獄の亡者の如く無数の手が伸び上がる。

「効かぬ」

邑夾が後ろ足で大地を叩けば、その足元は即座に沈静化した。だが、その周囲の山狗は成す続べなく捕らえられ、地中へと引きずり込まれる。這い出してくる事は二度と無いだろう。

「ふむ、さすがに一筋縄では行きませんね」

「怖気づいたか」

「いいえ。このように戦うのは本当に久しぶりなのでそれなりに楽しませていただいてますよ。ですが……どうやらここまでのようです」

ちょうどその時、完全に没した夕陽に気付いて藤黄はくすりと笑って動きを止めた。

「急々如律令。巡れ、るてんちりゅう流転地龍」

「何!？」

そしてその姿は、地脈渡りの術によって邑夾の目の前から掻き消える。その行動の真意を図りかねた邑夾はふと東の空を仰ぎ見た。まだ僅かに暮れきらぬ瑠璃色の空に煌々と昇った満月が、端から徐々に闇へと飲まれていく。月蝕が始まったのだ。そして微かに鏗の音が風に乗って流れてきた。

「黄龍め……謀りおったな。今まではただの時間稼ぎか!」

そこで初めて邑夾は焦りを感じ、長い遠吠えをあげた。

「今さら気付いても手遅れです。羅喉の長も随分と落ちたものですね」

後陣へと渡った藤黄は、自らの指令で放たせた鎬矢と邑夾の遠吠えが奏でる不協の音に、耳を澄ませながら印を斬る。その瞳が輝き始めた。

「黄龍の名において急ぎ命ずる。濁し、吸い取り、せき止めよ。弱き水を剋せ、縛水黄陣！」

水行を封じる第一の結界が完成する。天高く伸びる金色の光の壁が、藤黄の目の前に現れた。

「白虎の名において急ぎ命ずる。抉り、傷つけ、打ち倒せ。弱き木を剋せ、縛木白陣！」

遠くから金色の光を確認した月白が、第二の結界を作り出す。白い光の壁が木行を封じると、下位の妖たちに変化が訪れた。皆立ち止まり、苦しそうに喘ぎだす。

「玄武の名において急ぎ命ずる。沈め、洗いて、消し止めよ。弱き火を剋せ、縛火黒陣！」

「ぐうっ……！」

鳥羽による第三の結界で火行が封じられると、黒い光の向こうで片翼を失った六翺が呻いて地に伏した。

「青龍の名において急ぎ命ずる。軋み、縛りて、根を下ろせ。弱き土を剋せ、縛土青陣！」

青藍の第四の結界が青き光と共に土行を封じると、残す結界は後一つだけになった。

「がっ……ああ……っ！」

弱まる月光の代わりに、四色の結界の光が戦場を照らし出す。もはや立っていることすらままならない真守は、地に伏して荒い息を繰り返している。大地を抉るその指先から血が滲んでいた。

「私が金行を封じれば、五行の結界は完成する」

緋雨は真っ直ぐに手を伸ばし、眼下を見やった。苦痛に歪む宵色の瞳がこちらを見つめている。

「……悪いな」

緋雨は空を仰いだ。月を蝕む闇は、今正にその最後の一片を喰らい尽くした。

「ぐあああっ！！」

最大に達した月蝕みが、妖たちに想像を絶する激痛をもたらす。その瞬間、緋雨は印を斬り術を紡いだ。

「急々如律令。撃ち抜け、えんねつれっそう炎熱烈槍！」

封じるためではなく、解き放つための紅蓮の焰が、西側の白き結界を打ち壊す。すると残りの三つの結界も即座に光を失った。そして痛みを堪え立ち上がった眞守が声を張り上げる。

「月が満ちるまで筆頭共は術を使えない！ 動ける者は今すぐ羅喉に撤退しろっ！！」

「舞え！
閃光紅燕せんこうべにつばめ」

緋雨は術を紡ぎひた走る。

「緋雨様何を……っ！」

もちろん牽制のために威力を落としてあるが、兵の目には十分脅威に映るだろう。彼らからすれば既に緋雨は紅の一門の朱雀ではなく、計都に反旗を翻し妖側へと寝返った逆賊なのだ。その後を追う人数は、徐々に増えていく。だが緋雨はこの逆境にあって笑みすら浮かべていた。

一度発動させた結界が故意であろうと無かろうと解除された場合、その反動で力が相殺され月蝕みが終るまで術を使う事ができない。結界戦の討議の際、失敗は許されないと藤黄が何度も注意を促したその現象を眞守に伝えたのは緋雨自身だ。自分以外の四人の筆頭の力を押さえ込み、隙を突くとしたらこれ以外に方法が無い。月蝕みまでにかんりの妖を殺める事は避けられなかったが、それでも一網打尽にされるはずの大多数は逃走に成功している。

緋雨は足元が徐々に明るくなるのを感じた。月が満ちようとしてい

る。

「時間が無い。眞守！」

「粗方逃げ切った。後は俺と邑夾だけだ！」

「急げ！」

山狗の姿に戻った眞守と邑夾を術で援護しながら緋雨は背後を振り返った。無数の篝火が近づいて来るのが見える。

——その時。

「くっ……！」

飛来した水の刃に肩を薙がれ、緋雨は地に転げる。確かめずとも分る、鳥羽だ。どうやら力が戻ったらしい。

「緋雨！」

「来るな！」

緋雨は身を起こしながら掲げた腕で眞守を制する。

「手助けできるのはここまでだ。早く行け！」

「緋雨、お前も共に来いっ！」

「……馬鹿言うな」

緋雨はほんの僅かに笑んで眞守を振り返った。

「眞守、お前に出逢えてよかった」

『眞守、あなたに出逢えてよかった』

その姿が、二百年前の桜花と重なる。

「緋――」

「急げ、眞守！ 黄龍が来る！！」

駆け寄りそうになった眞守の耳に、邑夾の声が飛んで来る。

「行け、眞守！ 私の願いだ、生き延びろ！」

「っ………！」

眞守は迷いを見せたが、緋雨が前方へと視線を戻すと、ぎりつと奥歯を噛み締め背を向けた。

「………すまない。だが必ず………迎えに行く！ それまで死ぬな緋雨！！」

その叫びを残し、眞守は邑夾と共に羅喉の山中へと消えて行った。

刹那。

残された緋雨の四肢を、激痛が襲った。地に叩きつけられた衝撃で息を詰まらせるよりも早く、その首にずっと冷たく鋭い感触があらがわれる。

「動くな。抵抗すれば即座に首を落とす」

妖の血に汚れた烏羽の長槍が突きつけられていた。緋雨は瞳だけを動かす。怒り、困惑、哀れみ。何色にも塗り別けられた幾多の視線が、自分に向けられている。

「逃亡しなかったあなたの潔さに敬意を表し、申し開きの機会を与えましょう。何か言いたい事がありますか？ 緋雨」

何の感情も感じさせない藤黄の声が降って来る。緋雨は小さく首を横に振った。

「それは結構。気でもふれたと言うのなら、まだ救いようもありますが……どうやら自分が犯した過ちの意味をきちんと理解しているようですね」

藤黄はすっと指先を伸ばし、冷めた目で緋雨を見下ろした。

「今この場で朱雀の称号を剥奪し、反逆の罪で拘束します。その娘を捕らえなさい」

複数の手が体の自由を奪い、後ろに組まされた両手首に縄がかけられる。

そして後頭部に鈍い痛みが走ると、緋雨は流れに逆らわず冷たい雪の上で意識を手放した。

第二十二話 鎮守の戒

「様子はいかがですか？」

薄暗い空間へと踏み入れた藤黄の声は、石壁に吸い込まれる事無く静謐の帳を粛々と震わせる。水上に建てられた黒の一間の屋敷の中でも、一つだけ離れた中島に設えられたこの場所はひどく異質な存在だ。一切の飾り気を廃した石室は、堅牢さだけを追求した造りになっている。

「恐らくまだ気を失ったままかと」

藤黄は先客である烏羽から受け取った灯火を掲げ辺りを見渡した。揺らめく小さな火に照らされた室内は決して狭くは無い。だが、圧し掛かるような独特の空気が息苦しさを感じさせ、実際よりも窮屈に感じられる。藤黄と烏羽の足元には円形の床へと降りる石段があり、そこには水が満ちていた。床の表面に刻まれた五芒星の結界の中央で立ったままうなだれる緋雨は、突き立てられた支柱から伸びる漆黒の鉄枷によって四肢を戒められていた。

「……そのようですね」

目隠しをされているため表情はうかがえないが、ぴくりとも動かないあたり烏羽の言う通り意識は無いのだろう。

「目覚めたらお知らせいたしますか？」

「いえ結構です。これ以上緋雨から何かを聞く必要もありませんので」

藤黄は灯火を烏羽に反すとそのまま踵を返して石室を出た。

「彼女の処遇は後ほど考えます。ただし、不可能だとは思いますが、万に一つでも逃亡を企てるような事があればその場で処刑して構いません」

「御意」

雪の舞う中、帰途に着く藤黄の後ろに烏羽が続く。夜半の庭園は他に歩く者が無く、橋の上を歩く二人の声は遮られる事無くどこまでも染み渡っていくようだ。

「結界戦はあの通りでしたが、羅喉に逃げた妖はどうされるのですか？」

「既に月白と青藍の隊に追撃を命じました。五行の結界は確かに失敗に終わりましたが、それでも四段階目まで効果はまだ持続しています。妖の力が戻る前の状態なら打つ手はありますよ。屋敷に戻って準備が終り次第私も出ます」

「随分と急がれるんですね」

「当たり前ではないですか。この機を逃せば次は数百年、あるいは数千年待たねばなくなるのですよ？」

藤黄はふと足を止め振り返った。

「ここで躊躇する理由がどこにあるのです。それとも何か疑問があ

りますか？」

「……いえ、出すぎた事を申し上げました」

藤黄に合わせ歩を止めた烏羽は首を横に振った。

「ならばあなたは余計な事を考えず、私達が戻るまでしっかりと緋雨を見張っておきなさい」

「はい」

「燐玉と燕玉が待っていますので、見送りはここままで結構ですよ」

「かしこまりました」

烏羽は歩き出した藤黄の背に向かって一礼して顔を上げた。その視線の先で見分けがつかぬほどそっくりな双子の小姓が、待ちわびた主の帰りに嬉しそうに駆け寄って行くのが見える。久方ぶりに見る甥と姪の無邪気な姿は心安らぐものであったが、不意に駆け抜けた風が雪雲を散らし、その合間から満月が顔を覗かせると烏羽を思わず目を見開いた。

遠ざかって行く三人が淡い月光の中に霞んでいく。そしてその姿を映す鏡のような水面では、藤黄と琥珀の月が揺れていた。

「結局、私の言った通りだったじゃない」

雪深い夜の山中を歩く青藍の手元で揺れる篝火が、隣を歩く月白の横顔を橙色に照らし出す。

「何がだ？」

「……緋雨よ」

わかっているくせにとごちて、青藍は前方に視線を戻した。

「特別な感情なんて曖昧なものじゃなかったわね。妖に恋をするなんて……本当に、馬鹿な子……」

呟くような声が白い息と共に消えて行く。聞こえて来るのは青藍と月白、その背後を歩む追撃部隊が雪を踏みしめる足音と、時折吹く雪風が耳元で唸る音だけだ。

「緋雨の奴、藤黄から結界戦の話をされた時点で、こうなる覚悟をしていたのかもしれないねえな」

月白は篝火がもたらす極僅かな熱に目を細める。

「正直、前にお前が言ってた話は今日の今日まで半信半疑だった。だが、先陣が突撃する直前に、ああ本当にそうなのかもしれないって感じたよ。それくらい、何かが吹っ切れたみたいな清々しい顔をしてた」

「あの妖が助かったって、自分が捕まったら意味が無いじゃない」

「そこが、あまりにも緋雨らしいんだよ」

「どういう意味？」

「頑固で融通が利かないわりに、たまにとんでもない事をやらかして周りを驚かせる。だが、肝心なところで妙に責任感が強い。逃げられなかったんじゃないじゃなくて逃げなかったんだろ。そう言う所、本当に蘇芳そっくりだ」

「だけど反逆は死罪よ……斬首刑は免れないでしょうね」

「それでも譲れないものを、命を懸けても守りたい唯一無二のものを見つけたんだろうな緋雨は……。こんな事言うのもあれだが、俺は少し羨ましいよ」

「羨ましい？」

「ああ」

青藍に訝しげな視線を向けられて、月白は自嘲するように笑った。

「陰陽伍家の筆頭として、計都に生きる人間として……流れに逆らうことなく生きて来た俺達が出来なかった事をあいつはやってみせたんだ」

その足がふと止まる。見れば足元から先は雪が途絶え、代わりに真冬では考えられないはずの深い苔色と、背の高いぶな林が続いていた。

「そして俺達は流されるままに、もしかしたら取り返しをつかない所まで行こうとしているのかも知れねえな」

その先は今まで人間が誰一人として踏み入れた事のない、根源の泉へと続く入り口だ。文字通り、追い詰められた妖たちにとって最後の聖域とも言える。

「……それでも進むしかないのよ。私はね」

意味深い月白の視線をかわした青藍は目尻を吊り上げると、躊躇無く柔らかい土へと踏み出した。

「さすが度胸が据わってやがる」

勇ましいその様子に破顔した月白は少し後ろで静止した追撃部隊を振り返った。

「行くぞ。気を抜くな、ここから先は何が起こってもおかしくない」

石壁から滴った雫が水面に落ちる微かな音が、囁くように長く長く尾を引いてこだまする。規則正しい円を描きながら広がっていく

波紋が石室の端に消える頃、緋雨は薄く目蓋を開いた。

視界が何も映さないのは、目元に当てられた布のせいだろう。結び目のある後頭部は、氣絶させられた時の鈍い痛みの余韻が残っている。冷え切った四肢の感覚は無く、どれくらいの間気を失っていたのかは想像もつかなかった。五感の麻痺した体では、仮に一月以上が経っていたとしても疑問を感じないかもしれない。

ただ自分がどこかに幽閉されているのだという事だけは想像がついた。吊り上げられた両手首に無機質な感触がある。無駄だと分つていても小さく身じろいでみれば、硬質な鋼の鎖が愛想の無い音色を奏でた。そしてその数瞬後に襲った経験の無い強烈な激痛に、緋雨の体が水飛沫を上げ大きく跳ね上がった。

「っああ……っ！」

たと言って言うのなら頭から指先まで全身のありとあらゆる神経を、内側から鋭い刃物で削ぎ落とされるようなその痛みに悲鳴が迸る。だが叫びかけたその喉の奥が、今度は業火に焼かれるような灼熱を感じて息が詰まる。

「がっ……！」

その痛みに身悶えれば、再び全身に痛みが走り、悲鳴をあげればまた喉を焼かれる。無限に繰り返される地獄の責め苦のような螺旋の中で、必死で体を押さえ込み悲鳴を飲み下した緋雨の奥歯が噛み締められる力で軋む。徐々に沈静化していく苦痛に身を揺らさぬよう、折れそうになる氣力を総動員した。

（……玄武の鎮守の戒か）

痛みのせいで冴え渡った意識が、自分の居る場所を知らしめた。

鎮守の戒。それは重罪人が刑を待つ間繋がる計都最高の牢獄だ。

身じろぎ一つで始まり休み無く続く耐え難い激痛は、屈強な男でも数日ともたずに狂わせる。ここに入れられる者は大抵死罪となるが、むしろこの世の地獄の中では誰もが自らそれを望むと言う。処刑場に引き出されるまで正気を保った者も、逃亡に成功した者も存在しないその恐るべき空間を自ら体験する事になるとは考えた事もなかった。

緋雨は心中で笑う。

『その考えはあまりにも危険だ。いつか身を滅ぼす事になる』

望月の夜の蘇芳の言葉が思い出された。

(全くその通りだ。すまないな蘇芳、お前の忠告を守れなかった)

黄泉の蘇芳が今の自分の姿を見たらどう思うのだろうか。そんな意味の無い想像を緋雨は自ら掻き消した。

(これで良かったんだ……)

その口元が弱く弧を描く。自分を解き放つという事の真の意味は想像がつかない。だが、この状況において一寸の後悔も無いという事は、自分にとって恐らくこれがその意味なのだろう。それは自嘲では無く、心の底から沸き起こった笑みだ。

藤黄があのまま逃げた妖達を放って置くとも思えなかった。後は眞守の悪運の強さに賭けるしかないが、あの不適な夜色の妖であれば、窮地を乗り越えられるかもしれない。不思議と自然にそう思えてしまう程、いつしか心の中で大きくなっていった眞守の存在に気付き、緋雨は目を伏せた。

（お前もこうしてあいつを見つめていたのか？）

二百年の時を経て緋雨として生まれ変わった桜花の魂に問いかける。顔も知らぬ同じ魂の持ち主が言葉を返すことは無いが、体の奥底で息づく穏やかな温もりがその答えなのかもしれない。

（……私にもこんな感情があったんだな）

十七年生きて来た中で、無関係だと思っていたそれを今頃になって気付くとはなんとも奇妙なものである。だが、甘く疼く痛みにも似たそれが今ではとても愛おしい。もはや自分には何も残っていないが、この想いだけは最後まで手放す事無く持つて行こう。後はもうただ静かに、その時が来るのを待てば良いのだ。そこまで考えて、心を無に還した緋雨は再びうなだれた。

——その時。

何の前触れも無く、目を覆っていた布が取り払われ視界が開けた。暗闇に慣れていた真紅の双眸には、石室を弱く照らす灯火も閃光のように感じられる。緋雨は眩しさに表情を歪めたが、光に慣れるとその瞳が大きく見開かれた。

「お前……」

思わず言葉が零れ落ちた。

「何故……？」

だが、訪れるはずの痛みはいつまでたってもやって来ない。瞬きを繰り返す緋雨の目の前には、思いもよらぬ人物が佇んでいた。

第二十三話 黒の水鏡

「私はしっかり見張るようにと言っただけですが」

立ったまま古びた書物に目を走らせていた藤黄は、足音一つたてずに執務部屋を訪れた人物に目をやった。先ほど黒の一門の屋敷で会ったばかりの烏羽がそこに佇んでいる。

「腕の立つ者を付けておりますのでご心配には及びません」

会釈して室内に踏み入れた烏羽は、部屋の隅に並んで座している双子の小姓と目が合ったが、きよとんとしたその視線をふいっとかわした。

「では何か改まった話でも？」

「はい。とても重要なお話をしに参りました」

烏羽は藤黄の目の前まで進み出ると、その琥珀色の双眸を正面から見据えた。

「藤黄様。燐玉りんぎよくと燕玉えんぎよくはどこです？」

「何を言うかと思えば……二人ならそこに居るではありませんか」

藤黄はあきれたように双子へと視線を送った。

「では言い方を変えましょう」

だが烏羽は横目でちらりとそちらを見ただけで真顔を崩さない。

「本物の、燐玉と燕玉はどこです？」

その言葉に藤黄はくすりと笑った。

「……これは驚きましたね。いつ気付いたのです？」

「確証を得たのはつい先ほどです」

動じない藤黄の様子に、烏羽は無表情のまま淡々と話始めた。

「双子と共に屋敷からお帰りになられた際、水面が映し出した光景に私はある感覚を思い出しました。それは名月の宴の夜、同じく屋敷で帝の臣下とすれ違った時の違和感と同一のものです」

藤黄の琥珀と烏羽の紫紺。異なる色合いは互いを捉え合ったまま動こうとしない。

「二十日前、青藍を襲った羅娑らしゃと言う魔物が化けた人間を、どうやって見分けるのかとおっしゃいましたね。確かに、見た目では全く判断が出来ないのでしょう。ですが……ごく限られた状況下であれば、確実に見抜く術が存在しているようです」

烏羽は一呼吸置いてから次の言葉を紡いだ。

「お忘れでしょうか？ 満月の夜の黒の一門は、屋敷に満ちる水が魂ある者の真実の姿を映し出します。そして先ほどは藤黄様、あなたお一人の姿しか映っておりませんでした。つまりそこに居る燐玉と燕玉は既に魂無き者……羅娑の化けた偽者です」

心情を読み取る事の出来ない藤黄の微笑に烏羽は目を細めた。

「以前、私は藤黄様のご指示で黄の一門の蔵から月蝕みに関する古い書物をお探ししております。その中の一つに千二百年前の月蝕みに計都に現れ、封印された人に化ける魔物の記述がありました。

元々月蝕みで凶暴化していた妖が、突然極端に増えて計都を襲うようになったのも、殲滅戦が始まったのも、そして羅娑が復活したのも……全ては皇后様がお亡くなりになられた直後からです」

「なるほど、黒の水鏡ですか。私とした事が、そのような単純な見落としをするとは……」

今までただ黙って聞いていた藤黄は苦笑して肩を落とした。

「やれやれ、あなたには参りましたよ烏羽。やはり、物事を急ぐとこののはあまりよろしくありませんね」

「一体、何をなさろうと言うのですか藤黄様」

「あえて聞かずとも気付いているのではないですか？」

藤黄は懷に手を入れると、見覚えのある簪かんざしを取り出して見せた。

「二十四年前に私は誓ったのですよ。あなたのある限り、私はあなたのためにこの都を護りましょうと……この簪の持ち主にね」

「やはりそれは皇后様の？」

「ええ。先帝に嫁ぐ事が決まった日に頂いた物です」

藤黄がそつと握り締めると、簪の細工がちりと鳴った。

「ですが、あの方はもう……いなくなってしまうわれた」

簪を胸に抱いた藤黄は、目を伏せて語り始めた。

「艶珠えんじゆと帝弟が密通を重ねていた事は気付いていました。艶珠は元々帝弟が差し向けた娘です。彼女を使って好色な先帝を墮落させ、不満を持った重鎮達を離反させ引き込み、いずれ帝位を狙うためにね。実際に当時の帝弟派の勢力は先帝を凌ぐものになりつつありました。何かのきっかけさえあれば、もはや帝位を覆せるほどに」

「では艶珠の死は……」

「ええ。直接手は下していないでしょうが、帝弟の計らいでしょう。彼を慕うあまり、その野望のため政敵である兄の元に側室として嫁ぎ、子を成してまでも愛し続けた一途な娘をあつさりと切り捨てたのですよ。廉栄れんえいとはそういう男です」

「そして皇后様にその罪を？」

簪を握り締めた藤黄の手が怒りに震えるのが分った。

「……子のできない皇后が、帝の子を身籠った寵姫に嫉妬して殺害した。数少ない先帝派の者の心を引き剥がし、帝位を奪う理屈としては十分すぎました。密通の事実を公にし、その謀略を暴く事に集中していた私は先手を打たれたのです。そしてその事が、あの方を死に追いやってしまった……お側にありながら私が至らなかったせいでね」

「殲滅戦に拘るのも、全ては皇后様のためなのですか？」

烏羽は自らの声が掠れている事に気付いた。

「これはあくまで私の想像の域ですが……人に化ける事のできる羅娑に新帝を喰わせて、あたかも生きているかのように振舞わせ、その勅命という形で妖を殲滅させる。私が屋敷ですれ違った者のように側近達を襲わせたのは、新帝一人が殲滅戦を指示したとしても、穏健派の老臣達が反対するのが分かっていたから。そして羅娑が復活した事で、その強力な瘴気が妖の凶暴化に拍車をかけた。それは殲滅戦を行うにはうってつけの理由だったはずです」

無意識に握り締めた拳が、烏羽の黒衣に皺を作る。

「羅喉の長を討った後に、根源の泉の水を手に入れるおつもりだったのですか？ 皇后様を蘇らせるために」

「ほぼ正解ですが、あなたは一つ勘違いをしていますよ烏羽。根源の泉は不老不死をもたらすと言われていますが、それはただの噂に過ぎません」

藤黄は若干の称賛を含めた視線を烏羽に送った。

「あれは生命の根源にある、生きようとする力を高めるもの。だから傷を癒し病を治すのです。泉自体に死を取り去ったり、人を蘇らせる力はありませんよ。ただ特殊な条件が揃えば、あの泉の水を使って死者を蘇らせる事が可能となります」

「まさか……！」

「ええ。陽の力が強くなる月蝕みの期と、生命の根源である泉の水、そして黄泉の道を開くための対価となる複数の人間の魂。この三つが揃えば死返まかるかえしの術によって黄泉から現へと死者を呼び戻す事ができます」

想像と違わぬ言葉に、烏羽は初めて藤黄に対して声を荒げた。

「それは……輪廻の理を狂わせるため禁忌とされた邪術のはずです！ あなたは羅娑を使って思うままに計都を動かしただけでなく、皇后様お一人のために無関係な人間をも殺めたと言うのですかっ！？」

「言ったでしょう。私はあの方のある限り、この都を護ると。あの方亡き今、私にとって計都も人も、既に護るべき存在ではないのですよ」

珍しく怒りをあらわにする烏羽に、藤黄はさらりと言い捨てた。

「いずれどこかで露見するというのは、最初から分かっていた事です。私の手を離れ羅娑が勝手に青藍を襲った事で、その時期がだいぶ早まりましたがね。ただ、死返の術さえ成功させてしまえば、その後この身がどうなろうと別に構わないのですよ」

言い切った藤黄は再び簪を懐へ仕舞い込んだ。

「さて烏羽。ここまで知ってしまったて、あなたはどうするつもりなのですか？」

「藤黄様……私は今日まで師としてあなたを尊敬し、慕ってまいり

ました。それは今も変わりません」

烏羽は複雑に入り混じる感情を押さえ込み、低く声を発した。

「ですが、あなたのやっている事を……見逃す事は出来ません。計都を護る者として、あなたは致命的な過ちを犯された。私は弟子として……藤黄様、あなたを弾劾せねばなりません」

「真つ当な意見ですね。逆の立場なら私も同じ事を言うでしょう。ですが、察しの良いあなたならお分かりですね？ 全てを話した以上、私があなたをどうするつもりなのか……」

刹那。

藤黄は懷に差し入れたままの手を引き抜いた。握られた小刀が、烏羽の首筋を正確に捉える。だが、噴き上がるはずの紅の代わりに盛大な水飛沫が上がった。小刀を振り切った体勢のまま黒髪から滴る水に瞬いた藤黄は、目の前で掻き消えた烏羽の正体に気付いてふっと笑みを漏らした。

「なるほど水影の術ですか。さすがは私の愛弟子……触れるまで見破らせないとはい随分と腕を上げたものですね」

湿って額に張り付く髪をかき上げた藤黄は、小刀を納めて相変わらず同じ場所に座したままの双子へと目をやった。

「いらっしやい燐玉、燕玉。どうやら羅喉に赴く前に一仕事片付けねばならないようです」

「烏羽何を……」

「黙っている。まずはここを出る」

取り去った目隠し布を払い落とすと、烏羽は鉄枷から手早く緋雨を解放した。

「急げ、時間が無い」

「っ……っ！」

急に支えを失った緋雨は勢い余って水中に膝を着いたが、踵を返した烏羽はさっさと石室の出口へ向かってしまう。緋雨はなんとか立ち上がろうと支柱にしがみつくが、足がもつれて水中へと返り咲き派手に水飛沫を上げた。長時間自由を奪われていた体は完全に麻痺しており、思うように力が入らない。

石段を昇りかけていた烏羽はその光景に小さく嘆息したものの、すぐに引き返すと緋雨の傍らに屈みこんだ。

「なっ――」

「暴れるな、この方が早い。言っただ時間が無いと」

そして細身の体からはあまり想像できないほど容易く緋雨を抱き上げる。慣れない扱いに緋雨は思わず抵抗しそうになったが、状況を理解して大人しく従った。

「――藤黄様が？」

「ああ。全ての黒幕は……あの方だ」

走りながら烏羽が事の真相を簡潔に話すと、その腕に抱えられた
緋雨は息を呑んだ。

「間違いでは――」

「私とて出来る事ならそう思いたい！　だがそれが真実だ。今のあ
の方にとって人も妖も魔物も、皇后様を蘇らせるためのただの駒に
過ぎない」

荒げた声が烏羽の腕に力を込めさせる。その叫びはあまりにも悲
痛だった。烏羽が師である藤黄をどれだけ慕っていたかは緋雨もよ
く知っている。その存在が裏で行っていた事に自ら気付いてしまっ
た衝撃は計り知れないだろう。だが烏羽は気丈であった。

「お前は羅喉に赴き、月白と青藍の追撃部隊を大至急呼び戻せ」

「いいのか……？」

「これは藤黄様お一人によって仕組まれた事だ。それが分かった今、
これ以上あの方の勝手で誰かの犠牲を強いる事は出来ない」

唇を噛み締めた烏羽は、降り積もった雪を蹴り上げてひたすら走
る。

「行けるか緋雨？」

「ああ。やってみる」

ようやく体の感覚が戻り始めたのを感じ、緋雨は力強く頷いた。

「ならば屋敷の裏に馬を用意してあ——」

烏羽は不意に立ち止まった。風の唸りとは違う何かが微かに聞こえてくる。

「これは……」

二度目のそれは緋雨の耳にもしつかりと届いた。雪の舞う夜闇を裂いて、長い長い遠吠えが徐々にこの屋敷へと近づいてくるのが感じられる。

「……馬より速そうなのが来たな」

屋敷の裏門へと向かっていた烏羽は、即座に遠吠えの聞こえた方向へと駆け出した。

その遠吠えに誰よりも狼狽したのは黒の入門の門番達である。あの意味最大の敵と言える寒さと睡魔を相手に戦っていた彼らは、篝火を掲げて驚愕した。見れば弱く照らし出された闇の向こうから、一匹の山狗が猛然と突き進んでくるのではないか。しかも近づくほどに徐々に明らかになる巨体が高位の妖のそれであると、陰陽師でない彼らとて容易く理解できる。

「つ……突っ込んで来るぞ！」

そしてその山狗が硬く閉じられた門の直前まで迫ると、門番達は役目も忘れて散り散りになった。直後、夜色の毛並みをなびかせながら、山狗——眞守は頑強な門を頭から突き破り屋敷の内部へと飛び込んだ。

喚き散らす門番達を無視して破壊した門の破片を振り落とした眞守は、自らの存在を知らせるかのように長く咆哮し、そのまま奥へと走り出した。

屋敷中が騒ぎになったのは言うまでもない。女中達は悲鳴をあげて逃げ惑い、侍従や門下生達は眞守の行く手を阻もうと慌てて飛び出してくる。

「どけっ！」

「うわあああ……っ！」

だが、屋敷の中まで妖が進入して来る事態など想定もしていない彼らは正に烏合の衆であった。走る勢いを全く落とさない眞守に怯んだ瞬間、何もできぬままその四肢に蹴散らされていく。勢い余って暗い水面に落ちた者が水飛沫を上げる様子になど目もくれず、眞守は一陣の風の如く駆け抜けて行った。

暗闇でも衰えを知らぬ宵色の双眸が離れた中島を走る人影を捉えると、眞守は驚異的な跳躍力で一気にその場所まで跳び移る。

「玄武、頭を噛み砕かれなくなかったら今すぐ緋雨そいつを離せ」

烏羽の進路を塞いだ眞守は低く唸りをあげる。

「……もう立てるだろう」

牙を剥きだしにする真守の様子に、元からそのつもりだと顔をしかめた烏羽は腕の中の緋雨をそっと地面に降ろす。それでも地に着いた緋雨の足取りはまだ危うく、一步踏み出しただけでその体がぐらりと揺らいだ。

「くっ……」

「緋雨！」

一瞬で人型へと姿を変えた真守は、咄嗟にその体を抱きとめる。

「ばっ……離——」

「一体どう言う風の吹き回しだ？」

驚いた緋雨の抗議を強く抱きしめる事で強制的に遮った真守は、眉を寄せて烏羽を見下ろした。

「こちらも少々事情が変わった。殲滅戦を止めたくば、そいつを羅喉まで連れて行け」

「……良いだろう」

真守は真意を探ろうと烏羽を見据えたが、その瞳に嘘偽りが無い事が分ると、緋雨の体をしっかりと立たせてやり再び山狗の姿に戻った。

「乗れ、緋雨」

この暗がりで分るはずのない頬の紅潮を、無意味な咳払いで吹き飛ばし、緋雨は眞守の背へ跨った。黒紅に乗る感覚とは異なり視界はやや低い。躊躇いがちに触れた長い毛並みは、思いの他柔らかく夜露の匂いがした。

「これを持って行け」

烏羽は思い出したように腰に帯びていた黒鞘の刀を外すと、緋雨に投げ渡した。

「夕風には負けるがそれなりの業物だ」

「色々とすまない。恩に着る」

伸ばした右手でしっかりと受け取った緋雨は、それを左の小脇に抱えた。

「そんなものは不要だ」

烏羽はいかにも彼らしくつつけんどんに言い捨てると、くるりと背を向けた。

「お前は どうするつもりだ？」

「……師弟には師弟なりのけじめのつけ方がある」

歩き出そうとした烏羽は足を止めて肩越しに緋雨を振り返った。

「私は弟子としてあの方を止めるまでだ。いらぬ気をまわさずさっさと行け！」

紫紺の双眸に確かな意志の炎が揺れている。

「……わかった」

それが烏羽の覚悟と悟った緋雨がもう何も言わずに促すと、眞守の俊足によって二人は瞬く間に姿を消した。風に巻き上げられた雪花が、名残のようにひらひらと舞い遊ぶ。

「罪人の逃亡に加担するのは重罪です」

その花卉がすっかり散り落ちてしまう頃、現れた気配に烏羽は振り向いた。

「あなたの事ですから当然理解しているのでしょ

驚きもせず長く一礼した烏羽は、術で地脈を渡ってきた藤黄を見やった。幼少の頃から慕い続けたその男は、今までと何ら変わらぬ穏やかな微笑をたたえ、双子の小姓を従えて静かに佇んでいる。知らぬ者から見れば、その光景に何の疑問も持たないだろう。

だが、烏羽は知ってしまった。

藤黄がその微笑の奥に秘めていた皇后紫苑に対する深い情愛。そしてそれを失ったあまりにも大きな悲しみと怒り。それらが羅娑かいらいしと言う名の魔物を呼び起こし、藤黄を狡猾な傀儡師へと変貌させたのだった。

「どうあってもこの私と敵対するつもりなのですね、烏羽」

「無論で御座います。我が師、藤黄様」

「……仕方ありませんね」

迷い無く見返してくる弟子の姿に肩を落とした藤黄は、双子に似せた羅娑を自らの背後に下がらせた。

「先に言っておきますが手加減はしません」

「承知しております」

相對する二人は、軽く開いた両足にずっと重心をかけて身構えた。まるで合わせ鏡の如く、その姿は何処までも似ている。思わず藤黄の唇からくすつと笑みが漏れた。

「まったく……。日ごろの所作まで同じにしくとも良いと言うのに」

「それだけ私はあなたに追いつきたかったです。藤黄様」

「……そうですか。ならばなおの事、最後に身をもって土剋水どくすいを教えねばならぬとは、なんとも皮肉な話ですね」

「基礎は何より大切です。初心に還る事が出来ます故」

「あの病弱な子供が、随分と言う様になったものです」

「恐れ入ります」

そこで、師弟としての最後の会話が途切れ、短い沈黙が訪れた。

「さて、あまり時間ありませんので始めましょう」

表情から笑みを消し去った藤黄が、手招くようにすつと腕を伸ばした。

「来なさい、北方玄武烏羽。その力どれ程のものか見て差し上げます」

第二十四話 凶魔の牙

その昔、太極を創り出した夫婦神の娘である姫神が、東の天から降り立った事がこの世の始まりと言われている。黒き巨狼に乗り、光と共に雲海を駆け下りた道筋が峰となり、走り抜けた跡は広大な平野となった。峰には妖が、平野には人が住み、今日の羅喉と計都として存在している。

雲の切れ間から注ぐ月光に照らされた仄暗い雪原を、夜色の山狗に跨り駆けて行く娘の姿を見る者がいたとすれば、その姫神が再び遙かな天へと帰って行くのだと思ったかもしれない。だが、眞守と共に羅喉へ急ぐ緋雨の目的は、そんな新たな神話を紡ぐためではなかった。

「具合はどうだ？」

「戦える程度には回復した」

低く微かに甘いその声が、自分を乗せて駆ける山狗から発せられるのはなんとも不思議な感覚だ。眞守の背に揺られながら、緋雨はそう思った。

「お前は大丈夫なのか？」

「俺は怪我などしていない。もっとも、弱まった力はどうにもできないがな」

「……すまなかったな」

「何を謝る？」

「私はお前の同胞を数え切れぬほど殺めてしまった」

「それはこっちも同じだ。だが、最終的に俺達はお前によって救われたんだ。もしあの結界が完成していればどうにも出来なかった」

全力で走りながら息一つ切らさぬ眞守は、横目で緋雨の様子をちらりと伺った。

「感謝している。そうでなければこうやってお前を迎えに来ることも叶わなかっただろう。遅くなって悪かったな。お前が生きてくれていて……本当に良かった」

「安堵するにはまだ早いんじゃないか？」

「ああわかってる。ここからが正念場だな」

眞守は前方へ向き直り、突き進む宵闇を睨んだ。

「俺が出るのと入れ違いに、多くの人間が羅喉に入る気配を感じた。生き残った妖は全員最奥の根源の泉に逃げ込んでからすぐに全滅する事はないだろうが、まだ月蝕みと結界の影響は残ってる。いくら邑夾がいても長引けば危ない」

「指揮を執ってるのは白虎の月白だ。あいつなら話せば分ってくれる」

「無理だったらどうする？」

「その時は刃を交えてでも止めるさ」

「いいのか？」

「元より一度計都に背いた身だ。今さら退きはしない」

緋雨は自らを皮肉るようにふっと笑った。

「私はずっと、私の生き方に疑問を持ったことは無かった。計都のために戦い、その中で散るのであれば本望だと思っていた……」

緋雨は掴まる夜色の毛並みを撫でて、そっと真守の首筋へ身を寄せた。

「だがお前と出逢って、私は私自身の中にあつたもの知った……。だから今は、命じられたからではなく、私が護りたいと思うものために戦える。……まだお前の言う答えとやらには、ならないかもしれないがな」

「いや……十分だ」

「そうか」

緋雨は身を起こすと、口元を引き締め烏羽から渡された刀を握り締めた。

「とにかく、何があっても殲滅戦を止める。そうでなければ藤黄様に刃向かってまで私を送り出してくれた烏羽に顔向けできない」

「玄武は事情が変わったと言っていたが、一体何があった？」

「私も全て知っているわけではないが……」

緋雨は烏羽から聞いた内容を、さらに簡単にまとめて眞守に伝えた。

「死返の術……。なるほど、それで黄龍は急いでいたのか」

「ああ、月蝕みの期が終われば、根源の泉を手に入れても意味が無いからな」

「計都の陰陽師の頂点に立つ男が、一人の女のために……か。やり方は気に喰わんが、気持ちは分らないでもないな」

「そうなのか？」

「今のお前なら、少しだけ理解できるんじゃないか？ 緋雨」

緋雨は眞守の声が柔らかくなったのに気付いた。

「全てを投げ打って命を懸けても誰かを護りたい……根底にある気持ちは、藤黄^{あいつ}も同じなのかも知れんな」

「……そうだな」

「だが、決定的に違うのは奴が自分だけでなく俺達妖や、同胞である人間をも犠牲にした事だ」

眞守の声が鋭さを取り戻すと、緋雨の目に前方にそそり立つ巨大な影が飛び込んできた。

「羅喉に入るぞ。少々荒くなるがとばす。振り落とされないように
しがみついてろ！」

「ああ」

緋雨が首にぎゅっと掴まると、眞守は後ろ足で大きく跳躍する。
二人の姿は、闇に沈む羅喉の中へと吸い込まれていった。

「沈めよ、永葬流砂」
えいほうりゅうさ

「貫け、鋭氷水刃」

雪煙を巻き上げ足元から湧き上がる砂の渦と、水の刃が衝突した。
だが勢いを殺された水は砂の中へ飲み込まれていく。後方へ飛び退
いた烏羽の軌跡をさらに伸び上がった流砂が追撃し、彼の纏う水の
鎧に阻まれようやく動きを止める。地に落ちる砂粒の様子に、息を
切らした烏羽は熱くもないのに額から汗が伝うのを感じた。

「随分と辛そうですね」

対照的に余裕の声が飛んできた。

「その状態を維持し続けるというのは、予想以上に苦しいものでし
よう」

「ええ……全くです」

紫紺の瞳を伏せながら、烏羽は拳を握った。微笑を浮かべた藤黄は、戦いが始まった直後に陰陽眼から玄武を解放した烏羽を相手にしながらも、最初の場所からほとんど動いていない。むしろ動けば動くほどに消耗を重ねていくのは烏羽自身だった。

「陰陽眼は切り札に成り得ますが、諸刃の剣なのだと昔教えたはずですよ」

言いながら印を斬る藤黄に、烏羽は齒噛みした。

「急々如律令。凍てろ、絶零霧氷」

「っ……封還！」

その手の動きには覚えがある。烏羽は急ぎ陰陽眼を封じたが、藤黄の術の完成のほうが早い。白霧に包まれた水の鎧が凍りつき、烏羽は身動きを封じられた。

「急々如律令。打ち砕け、鋭牙土竜」

「くっ……あ！」

地中から突き上げる衝撃が氷の鎧を砕き、その破片に体中を貫かれた烏羽は、放り出された雪の表面を紅く染めた。

「我が師ながら……やはり正面から戦うとなると恐ろしいものですね、黄龍の力というものは……」

血塗れの体をやっとの思いで起こしながら、烏羽は藤黄を仰ぎ見た。

黄の一門が司るのは土行の術だが、陰陽伍家を束ねる黄龍だけは、五行の術全てを自在に操る事ができる唯一の存在なのだ。水行を操る烏羽が藤黄の弟子となれたのもそのためである。

「今さらではないですか」

藤黄は歩を進めると、烏羽の目の前で立ち止まり見下ろした。

「あなたの力では私には勝てない。わかっていて挑んだのでしょう？」

「その通りです、藤黄様」

烏羽が苦笑すると、藤黄は視線を合わせるように身を屈めた。

「その体ではもう一度陰陽眼を解放するのは不可能です。烏羽、一応聞いておきましょう。私に与するつもりはありませんか？」

烏羽は目を見開いた。

「あなたは私の愛弟子。出来れば殺したくはありません」

藤黄がすつと手を差し伸べる。

「ありがたきお言葉ですが、それは出来ません藤黄様」

だが、烏羽は弱く笑んで首を横に振った。

「あなたを師と仰げた事が私の誇りでした。最後までそれを……失いたくはありません」

「……残念です」

藤黄は嘆息して立ち上がったが、その表情は烏羽がそう言うとうわかっていたように見える。

「急々如律令。押さえ込め、岩硬呪縛」
がんこうじゅばく

藤黄は印を斬った。眼下の烏羽の手足が、地中から突き出した岩の枷によって戒められる。

「さらばです、我が弟子烏羽」

藤黄は静かに言い放つと烏羽に背を向け、双子の元へ歩み寄った。

「やりなさい燐玉、燕玉」

頭に手を触れられた二人は、藤黄の手を離れて嬉しそうに捕縛された烏羽の元へ走り寄って行く。そして無邪気な幼子の姿をした羅娑に、魂を喰らい尽くされる烏羽の絶叫が響く間、藤黄はただ降り注ぐ雪を見上げていた。

「……玄武の魂は、少しあなた達には過ぎた力であったのかもしれない
「……」

やがて静寂が訪れると、藤黄は再び双子の元へ歩を進めた。この世から消え去った主の最後の姿を残したまま、烏羽の黒衣が雪の上

に転がっている。藤黄は少しの間それを眺めていたが、目を反らし
て双子を見下ろした。

「ですが、もうこれ以上の魂を集める必要は無さそうです。燐……
いえ羅娑よ。主として命じます、私の元に集いなさい」

その瞬間、双子の姿は崩れ去り、黒くわだかまる二つの闇が現れ
る。

そこへ、計都中から似たようないくつもの闇が飛来し、最終的に
一つになった。

藤黄は漆黒の玉のようなそれを掌に収め、大きく息を吸う。そし
て。

「ぐっ……!」

勢い良く胸に押し付けると、それは少しずつ体の中に入り込んで
いく。藤黄は苦痛に表情を歪めて膝を着いたが、何とか全てを押し
込んだ。

「……さあ、行きましようか」

荒く息を吐いた藤黄は滲み出た脂汗を拭い、ふらりと立ち上がつ
た。

「何だここは？」

急激に様子を変えた辺りの景色に緋雨は瞬いた。

「常若とこわかの森、根源の泉の入り口だ。この辺りの地下には泉の水が染み出してる。おかげでこいつらは一年中枯れる事がない」

「すごいな……」

恐らく羅喉でも最も古い部類に入る森なのだろう。霧の合間から見上げててもその先端が分からぬほどの大樹の集まりに、緋雨は思わず感嘆の声を漏らした。

「ふむ……どうやらまだ、白虎共は邑夾げんめいの元へ辿りつけてないらしい」

「なぜわかる？」

「この霧は幻迷げんめいの霧と言って邑夾が使う妖術の一つだ。これが出ている間は、正しい道順を知っている者以外、半永久的に根源の泉にはたどり着けない」

「じゃあ月白たちはどこかで迷ってるって事か」

「ああ。恐らく同じ場所ですつと足踏みさせられてるはずだ。好都合だな。争いが始まる前なら妨害もしやすい」

「そうだな。どこにいるか分かるか？」

「お安い御用だ」

眞守は耳をぴんと立ててしばし沈黙した。

「こっちだ」

そして密集するぶなの中を危なげなくすり抜けていく。程なくして、霧の向こうに大勢の人影が見えてきた。その先頭には見慣れた二人の姿がある。

「月白、青藍！」

「緋雨!？」

霧の中から飛び出してきた存在に、驚愕の声が重なった。

「お前どうやって鎮守の戒から……」

「烏羽から二人を計都に呼び戻すよう頼まれた」

緋雨が背から降りると同時に眞守が人型に戻る。二人の筆頭の背後で兵達が身構えたが、月白は後ろ手にやんわりと制した。

「どういう事だ？」

「この殲滅戦は藤黄様によって仕組まれたていたんだ。あの方は、羅娑が化けた偽者の帝を使って計都を動かしている」

「藤黄様が!？ 何でそんな……」

「根源の泉を利用して死返の術を行い、皇后様を蘇らせるためだ」

「あいつ……」

青藍は信じられないといった様子だが、どこか思い当たる節のある月白はぎりっと奥歯を噛み締めた。

「藤黄は今どうしてるんだ？」

「烏羽が足止めをしているはずだが、急がねば手遅れになるかもしれない」

緋雨の言わんとする事を察して、月白と青藍は思わず顔を見合わせた。

「その話を信じるに足る証拠は何かあるか？ 緋雨」

月白の問いは当然だった。この話が全て緋雨の作り話という可能性も捨てきれないのだ。

「悪いが直接見て判断して貰うしかない」

緋雨はきっぱりと言い切った。

「……分かったと言ってやりたい所だが、こっちから吹っかけた喧嘩をそちらさんが見逃してくれんのか？」

緋雨が曇りの無い強い目で見返してくると、月白は牽制するように佇んでいる眞守を見やった。

「無論だ」

眞守は視線に気付いて頷いた。

「お前達が引くと言うのなら、後は俺が納得させるさ」

「眞守とか言ったな。本気か？ 背後から騙まし討ちなんてされたら、こっちは一たまりも無いんだがな」

「妖は約束を違える事はしない。第一こっちもこれ以上無駄な犠牲は出したくないんでな」

眞守と月白の間でぴんと空気が張り詰める。それは見ようによつては一触即発とも言えるかもしれない。

「……いいだろう」

二人にとっては短く、それ以外にとっては長い沈黙の後、月白はくつと喉の奥で笑った。

「聞いている通りだ。撤退するぞ青藍」

「つ……ちよつと月白！ そんな勝手な真似してもし——」

「黙っとけ。その時は俺が全て責任とりやいいだけの話だ」

青藍の反対を遮った月白は、固唾を吞んでこのやり取りを見守っていた追撃部隊を見渡して高々と宣言した。

「全員聞け。戦は終わりだ、計都に撤退する！ ただし全て俺の独

断だ。万一のことがあってもお前らに罪は無い、いいな!？」

青藍は額に手をやって盛大に毒づいたが、おおよその兵達は安堵の声を漏らす。その瞬間、三月に渡った殲滅戦は誰もが予期せぬ形で突然の終息を迎えたのだ。

「お前はこれからどうするんだ？ 緋雨」

手早く撤退準備を指示した月白は、改めて緋雨と向き合った。捕らえられた時のまま、纏う衣はあちこちが裂けて今も痛々しい傷跡が見える。事の真相がどうであれ、もはや彼女が今まで通り計都で暮らすのは難しいだろう。

「そうだな……私は――」

自嘲の笑みを漏らした緋雨はそこで違和感を感じ、言葉を切って自分の体を見下ろした。

そこは左胸の少し下だった。まるで樹木が芽吹くかのように、いつの間にか鋭い土色の杭が突き出している。その根元から染み出した血が、衣を瞬く間にどす黒く湿らせていく。

「あ……」

緋雨が発する事のできた言葉は僅かそれだけであった。ぐらりと前のめりになった体が杭から抜け落ち、支えを失って地へと崩れる。

「緋雨!」

「おいっ!？」

異変に気付いた月白が叫び、眞守が咄嗟に緋雨を抱え込んだ。その腕の中で激しく咳き込んだ緋雨の唇からおびただしい量の鮮血が迸り、覗き込んだ眞守の頬を汚した。元々白い緋雨の肌が急激に色を失っていく。だがそれは青白い月光に照らされているからではない。焦点が合わずに虚空を映す緋雨の双眸が眞守にとって最悪の記憶を蘇らせ、心の臓を引き絞られるような感覚に襲われた。

「駄目だ、気を失うな！」

眞守は緋雨の傷口を手で押さえつけたが、湧き水のように次から次へと溢れ出す血は止まる気配を全く見せない。そしてふっと、緋雨の体から力が抜けた。

「緋雨っ!!」

眞守の叫びを聞く間もなく、緋雨の意識は闇に飲まれた。

「あまり勝手な真似をされては困りますね」

「……藤黄」

月白は追撃部隊の後方から響いた声の主を苦々しく見つめた。

「何故緋雨を……？」

「逃亡した罪人を粛清したまでの事です」

藤黄は微笑していたがそこから滲み出すただならぬ気配に、撤退準備を始めていた兵達が誰からともなく道を空ける。おかげで藤黄

は何者にも遮られる事なく悠々と歩みながら月白と言葉を交わす事ができた。

「烏羽はどうしたんだ？」

「どうしたとは？」

「殺したのか？」

「……罪人の逃亡に加担するのも重罪です」

藤黄は一瞬意味深い間をつくって立ち止まった。

「それより、誰が引き上げろなどと命じたのです？」

いつに無く鋭い藤黄の眼光に照らされて、兵達や青藍までもが息を呑むのが伝わってきた。

「俺だ」

月白はさりげなく一歩進み出て、青藍を自らの背後に下がらせた。

「もうこんな戦いは必要無い。帝の勅命なんて……最初から無かったんだからな」

「ほう」

藤黄は目を細めると、屈みこんだ眞守の腕にもたれる緋雨に目をやった。

「なるほど、先に話を聞いてしまいましたか。まったく何処までも邪魔してくれる娘ですね」

藤黄は特に驚いた様子も無く睨みつける真守の視線を軽くかわすと、大げさに肩を落として見せた。

「もう止める藤黄。こんな事で生き返って皇后様が喜ぶと本気で思ってたのか？」

「それはあなたの与り知るところではありませんよ」

「……そうか。だがいずれにせよ、もう俺達がこの戦いを続ける理由は何もない」

「そうでしょうね。まあ、私も今さら無意味な弁明をするほど酔狂にはなれませんが……」

月白の声が少し低くなったが、藤黄は相変わらず余裕を崩さない。

「どうやらあなた方にとっても戦わざるを得ない理由が出来たようですよ？」

ゆっくりと周囲を見渡した藤黄がくすりと笑みを漏らすと、低い唸りが幾重にも重なって聞こえてきた。

「つ……なんでいきなり!？」

ざわついた兵達の心境を代弁するように青藍が声をあげた。

「魔物の発する瘴気が妖を狂わせる事はご存知でしょう？」

「くそっ、羅娑を連れて来たのか!？」

「いや……違う」

緋雨を腕に抱いた眞守が顔を上げた。

「この瘴気の源は……藤黄そいつ自身だ」

気を抜けば眞守ですら自我をもっていかれそうな程強力な瘴気に、その奥歯はぎりぎりど噛み締められている。

「何ですって!？」

「お前、まさか……」

驚愕した青藍と月白の声が重なる。

「ええ、その通りです」

藤黄は見せ付けるように自らの胸に手を当てた。

「羅娑はここに居ます」

狂気じみた藤黄の声と同時に霧の幕を引き裂いて、牙をむき出しにした妖の残党が群れを成して姿を現した。

「完全に囲まれてる……」

「ちっ」

「生き残りたいのでしたら戦う事ですね」

藤黄の双眸が光を帯びている。

「申し訳ありませんが私は一気に片を付けさせていただきます。巻き込まれても命の保障は出来ませんので」

月白は一瞬息を詰まらせた。

「封解。奥義、おうていらいりん黄帝来臨」

逃げろと言う叫びは、天を貫く咆哮によって掻き消された。

苔生す大地を引き裂いて現れた黄金の龍と藤黄が一体となる瞬間の衝撃は、巻き込んだ者を容赦なく叩き伏せる。

「急々如律令。打ちのめせ、せいがんだてん星岩墮天」

もはや人も妖も関係なく、ただ藤黄の前にあるもの全てが標的とみなされた。僅かな間でも戦いから遠ざかっていた意志が、兵達の反応を鈍くさせている。虚空に現れた大小さまざまな岩塊が雨あられのように無差別に降り注ぎ、逃げ遅れた者が押しつぶされて血飛沫を上げた。

「っ……！ 封解。奥義、はくていしゅく白帝疾駆！」

月白はやむなく自らも陰陽眼を解放した。

「止めろ、藤黄っ！」

白銀の光をなびかせ月白が跳躍する。迫るその大太刀に気付いた藤黄は、素早く足元の骸から拾い上げた刀で迎え撃った。力で勝る月白の全体重を受けた藤黄の刀はみるみるうちに刃こぼれを起こし、白虎の光によって結晶化していく。

「邪魔しないでいただきますよう」

下方に受け流した刀をそのまま手放した藤黄は印を斬った。

「急々如律令。爆ぜよ、煉獄焰陣」
れんごくえんじん

「つく！」

月白は不安定な体勢から無理矢理体を捻って前方へと転がり込んだ。直後、今まで居た場所を焰の舌が舐め取って行く。

「急々如律令。捕らえよ、縄索堅樹！」
じょうさくけんじゆ

月白との攻防で生まれた一瞬の隙を突いて、青藍の術が藤黄の左腕を捕らえる。

「無駄です。私を足止めしても妖の暴走は止まりませんよ」

絡みついた縄目のような樹枝を一瞥して、藤黄はまた別の印を斬った。

「急々如律令。舞い飛べ、晶刃乱舞」
しょうじんらんぶ

輝く細かな水晶の刃が、かまいたちのように吹き荒れすぐさま藤黄を解放する。二人の筆頭を容易く突破した藤黄は、走りながらさ

らなる術を放った。

「急々如律令。葬れ、奈落^{ならくてん}転」

月蝕みの乱でも脅威の片鱗を垣間見せたその術が、解放された陰陽眼によって増幅され悪夢のような威力を発揮した。大地から生まれた巨大な手が、その一帯に存在していた妖と人をまとめて地中に引きずり込む。その数は軽く百を超えた。緋雨を抱き上げた眞守は間一髪で後方へ飛び退き難を逃れたが、その表情には確実な焦りが見える。

「あなたにも散々邪魔をされましたね。緋雨と共に早々にご退場願いますようか」

完全な力の戻らない今、藤黄との力の差は大きい。その上緋雨を抱えていては動きがかなり制限される。それを理解している藤黄の攻撃は容赦が無い。猛攻はさらに激化し、ついにその狂気の刃が眞守を捉えた。

「っ……！」

追撃をかわして着地した眞守は低く苦悶の呻きをもらす。その腹部から血が滴り落ちていた。

そこへ。

「許さぬ」

背後に現れた気配に気付き、藤黄はさっと身を翻す。漆黒の巨体から繰り出される一撃をかわすと、距離をおいてその相手と対峙し

た。

「そちらから出向いてくださるとは手間が省けましたね」

「この森へ汚らしいものを持ち込みおったな。黄龍」

眞守との間を裂くように立ち塞がった邑夾は、その宵色の瞳を怒りに燃え立たせていた。

「邑夾！ 何で出て来た！？」

「黙らぬかこの愚か者。私が止めるのも聞かず勝手に飛び出して行ってにおいて、挙句小娘共々その様か。お前には失望したぞ眞守よ」

振り返りもせず辛辣な言葉を放った邑夾は前足で大地を叩く。衝撃波が土塊を跳ね上げ殺到するが、難なくかわした藤黄は失笑した。

「妖の長が随分と粗末な手を使いますね」

報復とばかりに今度は藤黄が術を放つ。先と同じあの巨大な手が、邑夾を掠めて行く。

「邑夾っ……くそっ！」

力が戻っていないのは邑夾とて同じなのだ。このままでは確実に邑夾が負ける。だが瀕死の重傷を負った緋雨を、この混乱の中で放り出すわけにはいかなかった。その間にも攻防は続いている。防戦へと傾いた邑夾が体勢を崩し僅かな隙が生まれた。そこへ藤黄が走りこむ。恐らくこの好機を逃さぬための大技が、今にも放たれようとしていた。

——その時。

「っ……あああああっ!!」

突如絶叫した藤黄が地に膝を着いた。握り締めた両の手が土を抉る。

「何のっ……つもりです……」

藤黄は苦痛に表情を歪ませながら、後ろを、正確には亀裂の入った自らの背へと視線を向けた。

「何のつもりとは笑わせる」

その問いに答えたのは人でも妖でもない。

「人間風情が本当に我らを使役できると思っていたのか？」

声の主は今正に、生まれ出でようとしている。

まるで蛹から羽化する蝶のように、黒い霧と血飛沫を吹き上げて割れた藤黄の背から、蝙蝠に似た漆黒の翼が伸びた。次いで蛇の尾が跳ね上がり、虎に似た胴体が起き上がる。そして最後に、もたげられた双頭の一方は見るに耐えぬほどの醜男、もう一方は絶世の美女の面をしていた。この怪鳥こそが藤黄によって秘密裏に解き放たれ、人に紛れてその魂を喰らっていた魔物、羅娑の本来の姿である。

「始めから……こうするつもりだったのですか……」

「体よく利用されてやったふりをしていれば、貴様は上物の魂を与

えてくれたからな」

地に伏した藤黄が息も絶え絶えに聞くと、醜男の面が答えた。

「とくにさっきの烏羽とか言う男は最高だった。おかげで忌々しい貴様の呪縛からようやく逃れる事ができた」

その極上の味を思い出したかのように、美女の面は舌なめずりをした。

「貴様には感謝しているぞ藤黄。褒美にその魂も我らの一部に加えてやろう」

「なっ……!!」

藤黄は目を見開いた。それはつまり、羅娑が藤黄自身を喰うと言うことだ。

「光栄に思——」

「放てっ！」

言葉を切った羅娑は面倒くさそうに身を震わせた。青藍の機転で弓兵達が一斉に放った矢が風を切って向かってくる。

「邪魔をするな！」

重なった双頭の声は、強烈な波動となって吹き荒れた。矢は落とされ、人は耐え難い頭痛に頭を抱え込んで呻き、狂った妖ですら耳を引き裂かれるような苦痛に身を伏せる。その中で、もはや立ち上

がることの出来ない藤黄に成す術は無かった。羅娑の波動と、魂を喰われる藤黄の悲鳴が重なる。その苦痛に苛まれながらも、藤黄は必死に手を伸ばした。

「私はっ、まだ……あの方との約束が……」

倒れた時に懷から転がり落ちた簪に、指先はほんの僅かに届かない。そして無情にもその瞬間は訪れた。

「つぐ……あああああ——」

一際大きな断末魔の叫びがあがる。やがてそれも途切れると、魂を失った藤黄の肉体は砂のように脆く崩れ去り、世闇の中に消えて行った。そこに存在したという唯一の証として残された衣が、巻き上げられた風の余韻に虚しくはためいている。それが計都最高の陰陽師の、あまりにも悲惨で唐突な最後であった。だが、それで全てが終息したわけではない。

「藤黄を……喰いやがっただと……?」

月白は満足そうに喉を鳴らす羅娑の様子を、ただ立ち尽くして見ているしかできなかった。魔物が力を得るために人間の魂を喰う事は誰でも知っている。そして得る力が、喰われる人間の能力に比例する事もまたしかり。つまり、藤黄の力がそのまま羅娑に吸収されたと言う事だ。しかも、羅娑の話では既に烏羽の魂も喰われている。筆頭格を二人も喰った今の羅娑が、どれほどの力を持っているかなど想像するまでもない。

羅娑が、再び奇怪な声で鳴くと、その四肢から黒い霧——濃縮された瘴気が勢い良く噴出す。それはまだ微かな自我を保っていた高

位の妖ですら、完全なる狂気の僕へと変貌させた。

「冗談じゃねえぞ……」

月白は背筋が冷たくなるのを感じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7331y/>

紅御伽草子

2011年12月5日21時50分発行